
啓輔の場合は

藤沙良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

啓輔の場合は

【Nコード】

N7734T

【作者名】

藤沙良

【あらすじ】

転移魔法陣の誤作動で召喚されてしまった。加害者は貴族らしいです。後見を得てオケアノス学院に合格する事が出来ました。現在は存在しないという元の世界に戻るための方法を調べ始めたけど、何だか面倒な事に巻き込まれている気が……。まだ、自分が若ければ、気持ちは違ったのかもしれないが。社会人4年目には、対人？ 関係を円滑に進めるのは今後のために必要な処世術だと思います。

最終章に突入しました。完結まで、もうしばらくお付き合いください。

始まりは駅のホームで（前書き）

初投稿になります。

書き慣れないので、いろいろと教えていただけると、嬉しいです。

始まりは駅のホームで

会社帰りの駅のホームで、電車を待っていた。

就職難だ、なんだと世間では騒がれながらも、割とすんなり地元のシステム会社に就職できた俺はあたりがよかったのだろう。

それももう、4年も前のことで、去年あたりから後輩指導なんてものもやっっている。

今年はランクが上がるだろうと、上司に言われながらも、まだまだ実感がわかなかった。

皆井 みない 啓輔 けいすけ、今年で24歳。彼女ない歴、2年3ヶ月。

別れた理由は、今ではよく思い出せないが、仕事のことで些細なすれ違いがあつたのだろう。中学の同級生だつた元カノとは、5年ほど付き合つて、実は結婚も考えていただけに、振られたときはショックが大きかった。

しかも、不運は重なるもので、仕事でミスはするわ、上司や取引先に怒られて頭下げて回るわ、残業で終電がなくなるわ。

日々の忙しさの所為で、感傷に浸る暇もなかったけど、以外と早く立ち直れたし、今ではいい酒の肴になる。

そもそも、なぜ、システム会社に入社したのか、自分で就活中の自分の心理がわからない。

学校は短大の文学部で、日本の歴史とか専門に勉強をしていた。パソコンなんて、ネットしたりレポートまとめたりはしても、それ自体を仕事にしようなんて夢にも思っていなかった。

それも今では、まったくの初心者がプログラマーやシステムエンジニアになれるものだな、って思う。

様々なプログラミング言語を触るようになってから、ニュースでシステムトラブルとか聞くと、処理的な問題点を考えているときが

あるのは、職業病だろうか。

「……で。今、何が起こっているのか」

啓輔は出そうになる溜息を寸前のところで飲み込んで、パニックに陥りそうな感情を何とか押しとめてその言葉をつぶやいた。

会社帰りの駅のホームで、電車を待っていた。いつも通りの時間にやってきた電車に乗ろうとした時だった。

突然、ホームと電車の間から光があふれ出し、まるで光の壁のように啓輔の前に現れた。

一瞬で視界を覆い尽くした白い光に、固く目をつむった。電車に乗ろうとした足は、そのまま、前に一歩踏み出して。

光の壁を通り抜けていた。

瞼を閉じていても感じる強い光が、だんだんと収まるのを感じて、ゆっくりと目を開けると、そこにあつたのはいつも通りの電車の車内ではなかった。

少しくたびれた木の部屋、ところ狭しと並べられた本の数々。本棚に収まりきらない分は、床に積み上げられている。

足元に描かれた、ゲームなどという魔法陣と思わしきものと、床に尻餅をついてこちらを茫然と見上げる少年。

服装は魔法使いのローブのようなものを着ていて、彼の近くには杖らしきものが転がっている。

どう考えても、原因は彼であろう。

いまだ、一言もしゃべらず、ただ大口を開けてこちらを見つめている彼をどうしようかと、啓輔は何とか飲み込んでいた溜息をもらしてしまった。

取引先からの苦情電話や、営業のありえない仕様より厄介かもしれない。

始まりは駅のホームで（後書き）

初回はここまでとなります。

執筆は遅いかもしれませんが、今後ともおつきあいいただけると喜びます。

よろしくお願いいたします。

「本当に、申し訳ありませんでした」

部屋の床に頭突きをする勢いで頭を下げた、彼、ネモア・グリサラーサ。

鈍い音がしたことからネモアは頭をぶつけたのだろう。それでもまだ頭を下げようと、床に額をこすり付けるものだからたまっていた埃が舞い上がる。

魔法陣から出ることの危険性がわからなかったので、原因である彼の意識を戻すために根気強く呼びかけた。

時間になると2、3分だっただろうが、中々反応しない彼が気絶しているのではないかと、疑うほど長く感じられた。

理解できない現状に気持ちの余裕がなかった所為だろうが、最後の方は怒鳴っていたと思う。

社会人になってから、……いや、学生時代でもこれほど声を荒げたことはなかった。

その甲斐あって、意識を取り戻した彼だが、今度は錯乱した。

「師匠の馬鹿野郎！ 約束が違うだろうが！ ……否、あの馬鹿を信じた俺か？ 俺が大馬鹿なのか？」

師匠とやらに一通りの文句を叫び終わると、頂垂れながら自己嫌悪を始める。

終いには、床に「の」の字を書き始めた彼の錯乱落ち込み具合に、自分の感情を吐き出すタイミングを失った啓輔は、頭の中が冴えて

いくのを感じた。

ぶつぶつと話す内容から、自分が何かの目的、例えば勇者とか御子とかの召喚物でよくある、押しつけのようなモノで喚ばれた訳でないことにひとまず安心した。

半分倦怠化した日常は平和で、それを奪われてまで関係ない世界の安全とか言われても、可能な限り拒否する。

労働基準法とか考えてほしい、日本人のサービス残業精神でもついでいけないだろう。

体か心が、世界を救う前に病気になる。

過って召喚されてしまったのであれば、情報が必要だ。

自分の殻に閉じ籠り始めている彼に営業で鍛えた笑顔を向けながらできるだけ優しく話しかけ、しばらく正気に戻った彼からネモアという名前と、この魔法陣は師匠の仕業だという話を聞くことができた。

ならば、師匠を呼んでほしいとお願いすると、顔を真っ青にして床にめり込むような土下座だ。

何とか落ち着いてもらわないと話にならないと、故意じゃないのだから、どうしたの？ と聞いた俺にやっと顔を上げたネモアは、視線を何度も彷徨わせながら小さく呟いた。

「……居ないんです」

重い沈黙が部屋を包み込む。

情報をまとめるためにいろいろな事が回っていた頭は、真っ白になる。

「居ないって……、誰が？」

思わず出た疑問の答えはわかっていたが、冴えて冷静だと思っていた自分は、逆にひどく混乱していたのかもしれない。

「師匠です」

師匠が居ない。

告げられた事実には、目の前にあった希望を取り上げられた気持ち
は中々上昇しない。

一番有力な情報を持っている人が居ないとなると、俺はいつた
いどうすればいいのか、明日も会社なのに、洗濯物も干したままにな
っている。

言葉もなく、今考えても仕方のないことばかりが頭の中を駆け回
り、考えがまとまらなくなってきた。

会社に行くために整えていた髪をぐしゃぐしゃと掻き毟ると、そ
の場にしゃがみ込む。

非日常すぎて、今までの経験では答えが浮かんでこない。

「……あの、大丈夫ですか」

心配そうに尋ねてくるネモアに、お前の所為だと当り散らせたら
どれほど楽だろうか。

今にも泣きだしそうな少年に、そんなことができるほど俺はガキ
じゃない。

「とりあえず、いろいろ質問させてもらってもいい？」

力なく尋ねる啓輔に、ネモアは強く頷いた。

今、情報を得られるのはネモアからだけで、それに、事故であれ
故意であれ責任を取れるのはネモアだけだ。

「まず、俺は皆井啓輔。啓輔が名前ね」

「ミニヤイ・ケースケ様……ですか？」

「様はいいよ。啓輔……ケースケかケースケさんでお願い」

「はい、ケースケさん」

ネモアという洋風な響きの名前に、自分の名前は呼びにくいだろうと思ったが正解だったようだ。

それに何故かはわからないが、話している言葉が日本語でないことに気が付いた。

耳に届く言葉は理解できるのだが、注意深く聞くと遠くで翻訳機を通したように理解できない音が流れていた。ネモアと話しているということはあの音で話しているのだろうが、今のところ無意識で日本語になるのは名前だけのようだ。

「師匠は居ない。って話だけど、えっと、もうお亡くなりになったとか……？」

「いえ！ あれは殺しても死にません！ あの、えっと、師匠は少々放浪癖がありました」

ネモアの師匠は魔法使いの中では相当な実力者で、相当な変わり者として有名らしい。

数々の属性を習得しそのどれもが最上級であるのに、自由に旅行がしたいからと魔法使いの中でも最高の階級にあたる国家魔法士を断り、王様からの呼び出しも届くことがないほど姿を隠しているらしい。

そこで面倒事を押し付けられるのが、唯一の弟子のネモア。

国家召集の令状やら、重要書類やらを託され、師匠に届けなければならぬのだが、中々つかまらない。

弟子といってもネモアはまだ15歳で、気まぐれで弟子をとった

師匠は旅行ばかりでまともに指導をしてきているわけもなく。

国家魔法士達に頭を下げて転移の魔法陣を作ってもらい、必死に説得して師匠に転移の魔法陣との繋がりを作って貰った。

苦勞の甲斐あって放浪癖の師匠を用事があることに呼び戻していたのだが、それが駄目だったのだらう。

一度は弟子の説得に応じたものの何かと呼び出される現状に満足できるはずもなく、転移の魔法陣との繋がりを切るために陣を書き換えてしまったのだという。

それに気づかず、ネモアが転移の魔法を発動すると、空間が歪み啓輔が現れたという事だ。

異世界人というもので

質問に答えているうちに落ち着きを取り戻してきたネモアから、こちらを観察するような視線を感じる。

頭から服、靴の先まで見ながら何かを考えている様子で、確認するようにつぶやいた。

「失礼ですが、イエルザの方ですか？」

何故、そのような質問をするのだろうか。

啓輔は思考を巡らせ、いまだ足元にある魔法陣を見た。

そこでネモアが大きな勘違いをしている事に気づいた。

転移の魔法陣から本来呼び出す人と別の人が現れたのだから、そう思うのが自然だと考えるのがあたりまえかもしれない。

逆に啓輔がファンタジー小説なんて読んでいて、変に予備知識があつたせいで失念してしまっていたに他ならない。

「先にここはなんという場所ですか？」

「あ、すみません。ノシルフィのアニユキスです」

地球にイエルザやノシルフィという大陸も国もない。

「この星……世界の名前は？」

「エルコティアソフィアですが？」

なぜそんなことを聞くのだろうか、とネモアの首は不思議そうに傾げられている。

実は知らないだけで地球でも魔法が存在したとかいう事ではなく、

自分が異世界に召喚されたという事実だけが残った。

それを今からネモアに説明するということを考えると口が重い。

まともな答えじゃない、非日常的過ぎて、精神を病んでいる人と思われないか心配だ。

「地球という星の日本という国から来ました」

いつまでも引き伸ばしても意味がないと、できるだけ完結に言った言葉にネモアはじつとこちらを見つめてくる。

頭の中で言葉の意味を理解しようとしているのか、そのまましばらく固まり口を小さく開閉して啞然としている。

「チキユウという星……のニホンという国」

小さく繰り返すネモアに頷くことで答える。

温度を取り戻していた顔は、青を通り越して白くさえなっていた。首まで白く、ローブから見える手は小刻みに震えている。

「ケースケさんは……別の世界の人という事ですか……？」

「そうですね」

しっかりと肯定した啓輔にネモアは声にならない悲鳴を上げて、その数秒後には土下座が再開したのだった。

異なる世界から何かを召喚する魔法は、エルコティアソフィアでは存在しないらしい。

召喚とはあくまでこの世界で生きる精霊や魔獣と契約を結び、転移の魔法陣との繋がりを作り呼び出す事で、呼び出す場合の転移の魔法陣にはその対象との繋がりが必要不可欠という事だ。

逆に自ら転移する場合にもその原理は当てはまり、繋がりをつけた転移の魔法陣を対象となる場所に描き込んでおく必要がある。

そのため呼び出すための転移の魔法陣には、その呼び出し元に一時的に転移の魔法陣が描き込まれることとなる。召喚した精霊や魔獣などは役目が終わると、この描き込まれた転移の魔法陣に自ら転移しているに過ぎない。

ネモアが今にも死にそうな顔でひたすら謝り続けていたのにはこの原理が原因である。

過去にも転移の魔法陣の誤作動で、本来繋がりがない人を呼び出したという事故が何度か存在する。

その場合、呼び出し元に転移の魔法陣は描き込まれず、戻ることができない。

繋がりと違うものを呼び出す事による誤作動だと、魔法を使う者の間では考えられている。

すぐに帰せないという事は、その人の日常生活を崩壊させたも同じ。

いずれは送り届けることができるだろうが、そのためには元の場所と繋がりのある人を探して転移するか、陸や海や空を旅していくしかない。

つまり、異世界などという繋がりもなく、陸も海も空も離れている場所にはどうしようにも行きようがない。

帰れない。家族も友人も仕事も。突然喚び出されたから、別れの挨拶をする時間もなかった。

両親とは仕事を始めてから一人暮らしをしていたので、今年の正月にあつたきりで5ヶ月も前のことだ。

友人たちとは頻繁に集まっていたが、再来週の合コンはどうなるのだろう。

引き継ぎも何もせずにこちらに来たから、上司は相当怒るだろう。連絡もなく会社を無断で休んだら、心配ぐらいはしてくれるかもしれない。

「本当に、帰れないのか？」

さすがのような気持ちでネモアを見つめる。その声が震えていることで、涙を流しているのに気が付いた。

「この魔法陣で帰るとか、お前の師匠とか！ 凄い人なんだろう！」

必死に足元を指出して声を荒げるが、ネモアは哀しそうに首を振るだけ。

どうして帰れないかは理解はできる、が、納得なんてできない。心が悔しさややるせなさで押しつぶされそうだった。

今後の事についての話で

啓輔が喚び出された転移の魔法陣は、出口の役割しか果たさないため、ここから帰るのは不可能だという話だ。

また、魔法陣の上においても空間や空気というものはこの部屋そのものなので、陣から外に出たことによる体の不調や変化はないものだというネモアの説明で、別の部屋に移動することになった。

机と椅子だけが置かれてある簡素な部屋。

キッチンと思わしき台などがあることから、リビングのようなものらしい事がわかる。

師匠の家という話だが、本来の主である家主は常に旅行に出かけているので滅多にここで過ごすことはなく、戻ってもたまった荷物を置きに来る程度らしい。

他にも部屋があるみたいだが、強力な侵入防止等の魔法がかけてあって弟子のネモアですら入ったことのない地下室もあるという。

一度吐き出すように泣いた所為か、喉は少しひりひりするし目元は熱いが、何とか冷静さを取り戻すことができた。

泣き疲れただけ、とも思わないでもないが。

「これからのことだけだ」

啓輔の言葉に大げさに肩を震わせたネモアは、死刑執行の宣告を待つ罪人のようだ。

事故とはいえ、日常生活を突然狂わせたこと、更にまったくの異なる世界への召喚をってしまったことへの罪悪感はぬぐえない。

異世界人ということ、何をされるかもわからないという恐怖心もあるのかもしれない。

まだ、少年と呼べる彼にその責任を負えというのは少々大人気ない気もするが、この世界での地位も人権もなにもない俺には仕方がないことだ。

「この世界のこと教えてくれるか？ 話はそれからだ」

「……はい」

小さく頷いたネモアは最初の部屋からいくつかの書類を持ってくと、その中から地図を広げた。

地図には対角線上に4つの大陸が描かれている。

左上と右上の大陸の間、ちょうど地図の北と思われる場所は山脈らしきもので隔てられ、それ以外の場所は川のような海で分かっていた。

中央は楕円形に海が広がり縮尺的にそれぞれの川のような場所の距離が離れている事が読み取れる。

その一つ、右下の大陸のちょうど中央につけられた記号を指さしてネモアがいう。

「ここが今いる大陸、ノシルフィのアニキス国です。ノシルフィの首都になります。そして左回りに、シンフォア、イエルザ、アポテメタンと大陸が続きます」

「この地図は距離的にどれぐらいの大きさなの？」

「アニキスからシンフォアとの境の海までが馬で60日前後です」

幅30?程度の地図の中で2?にも満たない距離の話をしているのだから、結構な広さなのだろうという事はわかる。

実際に馬で移動なんてしたことがないから、大体でしかわからないが。

種族は人、亜人、魔人などがおり、そのどれもが共生していること。

ただ体質的なものがあるようで、ノシルフィやシンフォアには人イエルザには亜人、アポテメタンには魔人の割合が多い。

亜人や魔人は別名獣人とも言われ、体の一部が獣化したものや、人から獣に変化できるもの達の事を指す。亜人と魔人の区別は闇の力に強いかどうかで判断されるため、総じて獣人と言う人も多い。

精霊や魔獣は家畜などの動物とは少し違ったもので、自然のエネルギーが半実体化したものが精霊、動物が魔力を取り込んだものが魔獣という。実体化した精霊が動物と融合して高位の力を得て、聖獣と呼ばれるものもいるという。

魔法は自然エネルギーそのものや精霊から力を借りることで、それ自体を具体化する事で放出している。

火、水、風、地の属性は魔法の中でも基本と呼ばれるもので、他の属性はこの基本を応用したものになる。

魔法陣はその魔法のエネルギーを効率的に具体化、発動するための媒体となり、様々な構成要素と順序からその数は何万通りとも何億通りともいわれる。

魔法陣の開発を専門とする魔法技師と呼ばれる職業があるほどだ。

そこまでの説明で、啓輔は一つの可能性に至った。

魔法技師という職業が定着しているという事は、まだまだ未発見の魔法陣が存在するという事であると。

そして、今の転移の魔法陣では繋がりを持った人を呼び寄せるか転移するしか方法がないという事実。

「今後、別の場所に転移させる魔法陣ができることは？」
「……それは」

啓輔の質問にネモアが机の上で視線を彷徨わせる。

しばらく考えたのち、一冊の本を取り出すと最後の方のページを開く。

床に描かれた転移の魔法陣がそこにあった。

「これは、世界の魔法陣が描かれた本です。基本的に開発や発見された順に記載されていて、この数字が魔法陣として使えると認定された日になります。今は1702年2月12日です」

「10年前……」

「移動系の魔法はかなり昔から研究されていましたが、10年前に認定された転移の魔法陣は画期的でした。認定の際に誤作動の問題が大きな波紋を呼びましたがそれを引いても大きな成果だったんです」

世界の魔法陣が描かれた本と差し出されたそれは、想像以上に薄いもので。

いくつか見せ貰ったものも同一系統の魔法がほとんどで、効率化のために少しの反応や魔力の違いでも登録されているようだ。

現代のゲームや小説で見ていた魔法とは、予想が離れすぎている。

「魔法陣のない場所や繋がりのない人を転移させる魔法陣の開発は、それこそ何十年前から続けられています……。まぐれでも成功したという話は聞いたことがないのです」

転移させる魔法陣が自分の生きているうちにできる確率は、考えれば考えるほど小さく感じる。

今までにできていなかったものが、数年で急にできるとは思えない。

それこそ、現在ある転移の魔法陣の誤作動が中々なくならないのも、転移の魔法陣自体が不完全であるからと言えるだろう。

何もせずにただその奇跡が起こる事を待っているのか。

そう考えたときに、背中を冷たいものが走った。

その間の衣食住はどうする？ 最初のうちはネモアが罪の意識でかつてにやってくれるだろうが、魔法も何も使えない世界から来た自分は無力だ。

それこそ、今ここで攻撃でもされたら生き延びる自信はない。それに何年も罪の意識が風化せずに続くものであるのか。

こたえは、否、だった。

この世界では人権すらない啓輔が帰る方法を探すにしろ、こちらで生活するにしろ、今のままではどうにもならないのは目に見えた。生きるための知識と力をつける必要がある。

ネモアという少年が、自分を厄介ごとだと思いつつ放棄される前に。そのためには、少々の嘘や大げさな誇張は、彼に必死になってもらうためには必要だ。

そう思い、ネモアの瞳を真剣に見つめながら言葉を続ける。

「……………俺には、向こうに家族も友人もいたし、仕事もしていた。それに……………、妻や子供も……………」

悲痛に眉を寄せ、苦しそうに顔をゆがめる。

実際演技というよりは、家族に、友人に会えないと少しでも考えたと、また泣いてしまっそうだ。

「っ、本当にすみません、俺、俺……なんてことをっ！」

「帰れないんだよな」

「俺、探しますっ！ 時間はかかるかも知れないけど、でもっ、方法は俺が！」

罪悪感をあおりにあおりまくり、その上、使命感のようなもので発生させ始めたネモアに、今度は申し訳なさそうな顔を見せる。

「でも、ネモアの所為じゃないんだ。君ひとりに背負わせるなんて、俺にはできないよ」

「ケースさん……」

「俺も、探したい、自分の帰る方法。だけど、俺には知識がなさすぎる。この世界の常識も魔法の事も」

見つめていた視線には強い意志がにじんでいる。生きたい、自分の場所がほしい、帰りたい。

何かいい方法はないものか。最後にそう呟いて、ネモアの反応をうかがう。

ネモアはしばらく考えた後、提案するように言葉をつづけた。

「俺の通っている学院で、学んではどうでしょう？」

「学院……、学生になるといっ事？」

「はい。魔法の事だけでなく、薬草学や古代学、各種民俗学と幅広く教えている学院です。学ぶ環境としては最適の場所と言われます」

「だけど、学ぶということは基本的に金銭が発生するだろう。俺は身一つだからな、身分を証明することもできない」

続けた言葉に、ネモアは自分の胸を力強く叩く。

「ご安心ください。グリサラーサが後見という形をとれば、身分とかは関係ありません」

「グリサラーサ、ネモアの家名だよね？」

「はい」

しっかりと頷いて、椅子から立ち上がると優雅に跪き宗元に手を当て、スツと頭を下げた。

「改めて自己紹介させていただきます。国より伯爵を賜っておりま
す、グリサラーサ家の三男。ネモア・グルサラーサの命に誓って、
ケースケさんの意思にこたえることを宣言します」

堂々としたその動作と高らかに宣言するネモアは、生まれながらの上流階級を感じさせた。

入学準備

ノシルフィの首都アニキスには、オケアノス学院という世界最高峰の学び舎と呼ばれる学院が存在する。

知識は国のためになると、第14代カフォス王が法を制定し、それまで貴族や商家などの金持ちの子供しか学ぶことができなかった学問を身分に関係なくその機会が与えられるようにした。

その一つが、後見人制度。

貴族などが後見となり学業についての援助をする代わりに、将来はその後見人に仕えるというものだ。元は平民であれ、学業で成績をあげたものにはそれなりの地位が与えられ、その後見人にも褒美が渡される。

しかし、いくら後見を持った将来有望であると判断された子であれ、元は平民。貴族側の差別意識は少なくなき、同じ学び舎内であるといろいろと問題が発生した。

そこで国営として作られたのが、オケアノス学院。

各地の優秀な人材を身分問わず指導者として集め、学院長には王の側近であったヒュペリオンがなった。

後見を得た平民の学び舎として開校されたオケアノス学院であったが、指導者や設備の充実、様々な分野の学問を学べる場としてその後貴族の入学も増え続けた。

身分を一切意識しない実力主義の学院は、オケアノスに入学すれば間違いないとまで言われる程となった。

『オケアノス学院の歴史』と書かれた本を閉じると、疲れた目を指でもみほぐしながら近くのテーブルに置かれた水に口をつける。

召喚されてから5日。

ネモアは俺を外部との交流が少ない小さな村から転移の魔法陣の誤作動で呼び出された者として、グリサラーサ家に紹介した。

異世界人として報告しないのはネモアと話し合った結果だ。

「突然現れた異なる世界の人という異質に誰もかれもが友好的とは言えない」

という啓輔の言葉に、

「協力者は多い方がよい」

というネモアとの話し合いは長く続いたが、

「信頼できる人には自分から話したい」

という啓輔の意志をネモアが納得した形になった。

幸い言葉も字も日本語ではないのに読み書きはできたので、そう簡単に異世界の住人だとばれないだろうという結論だ。また、黒髪黒目や少し黄色がかった肌は珍しくはあるが、最初ネモアが勘違いしたようにイエルザの地方には近い人がいるという。

交流が少ない小さな村としたのも、世界の常識を知らないという先入観をつけ、また帰ろうにもどのあたりなのかわからないとするためだ。

転移の魔法陣の誤作動による転移者は、それだけで憐みの対象になるようで、グリサラーサの当主とその妻にまで深く頭を下げられた。そして、すぐに帰れないなら学びたいという啓輔の意思を快く受け入れてくれた。

ここまで順調に事が運ぶと後が怖い気がしたが、今は身を任せるしかない。

また、魔法が思ったほど万能でないという事で、帰れないという点以外では啓輔の現状を良い方に向けていた。

人の心を読んだり操ったりという魔法は存在しない。その人の使える魔法の属性や、どれくらい魔法量を保持しているかを知る方法がないという事。

使える魔法や魔法量はその人の経験により知るのもで、基本手の

内を見せるものではないという事だ。

魔力が個人情報として使用されることもなく、国や町によって住民という考え方も様々だ。身分というものは存在するがそれも国の間で決められたもので、貴族や商人以外にはあまり関係がないものが多い。

そのおかげで後見という形の学院入学は、グリサラーサ家の身分がはっきりしているため啓輔の身分は問われなかったのである。

ただ、後見人となったグリサラーサ家には啓輔が起こした事に対する責任が良い方でも悪い方でもついて回る。

「ケースケさん、そろそろ学院が見えますよ」

「ネモア、学院に入るならケースケじゃないのか？」

後見者は基本後見人に仕える立場だ。

使えられる対象のネモアが敬称付けでよぶのはどうなのかと思つての啓輔の発言だったが。

「転移の魔法陣の誤作動という事を前面に出すので、逆にこのままの方がいいでしょう」

というネモアの言葉に、それもそうかと考えた。

入学準備（後書き）

2011/9/7 誤字修正

オケアノス学院はアニユキスの中心より少し離れた位置に建っている。

建物は通常の学び舎のほかに、剣や魔法の実習をするための広場、調薬や鍛冶を実習するための棟、職員及び学生の両などを含めるため広大な土地が必要なためだ。

食堂や日用品などは寮で支給されるため、この学院の建物内で生活できるといっても過言ではない。

ネモアも普段はこの学院の寮で生活していて、師匠を呼び出すという仕事さえなければ遊びに行くぐらいしか外に出ないという話だ。その呼び出すという仕事も、陣の描き換えによる転移の魔法陣の誤作動により、しばらくは呼び出される心配はなくなったという。「ケーリスさんのために頑張りますね！」という発言に、少し胸が痛んだのは内緒だ。

「学院長、ネモア・グリサラーサです」
校舎の最上階にある大きな扉をたたいたネモアは、中に呼びかける。

しばらくすると落ち着いた大人の男性が扉を開いた。

「新生お件ですね。お待ちしておりました。グリサラーサ様」

そういつて頭を下げて中に案内されると、部屋の奥の重厚な机に若い男性が座っていた。

社長室を思わせる雰囲気のある部屋に、学院長と思われる若い男性が座っていることに違和感もあるが、何より啓輔が気になったのはその男性の耳だ。

亜人や魔人がいることは聞いていたが、移動は馬車がほとんどでグリサラーサ家の使用人たちもみんな人だったため、ここにきて初

めて耳が尖っている人を見たのだ。

本当に、異世界なのだと、改めて実感させられた瞬間でもある。

「エルフを見るのは初めてかい？」

「は？ あ、すみません。じろじろと見てしまっ……」

あわてて視線を外して頭を下げながら謝ると、学院長は柔らかく微笑みながら中央のソファに座るよう勧めた。

すぐに案内してくれた男性がお茶を入れてテーブルに並べ、啓輔は落ち着くためにそれを口に含んだ。

口の中に広がる甘い香りに、ふうっと小さく声が漏れる。

「学院長を務めている、ヘリオス・ジン・キュクロプスだ」

「ケースケ・ク・グリサラーサです。よろしくお願いします」

ク・グリサラーサはグリサラーサの被後見人という意味がある。

一般的に家名は爵位や商家のものが広く使っており、後見人を持った場合はその後見人の家名を名乗るのがマナーとされている。

皆井も啓輔はどうしても日本語の発言になってしまったため、自己紹介はそのマナーに従う事にした。

「今回は災難だったね、転移の魔法陣の誤作動なんだって」

「はい……。でも、グリサラーサ家の方々には感謝しています。後見にまでなって貰い、学院にまで通えるようにしていただいたので」

困ったように頷き、すぐに柔らかい笑みを浮かべるとネモアに軽く視線を向けながら言葉を続ける。

ネモアはいたく感動したように目元を緩ませ、ヘリオス学院長はその様子に「ほお」と息をついた。

「まだ、若いのにすっかりしておるのだな」

その言葉に啓輔の思考が一瞬止まる。

日本人は若く見られがちというが、それが当てはまっているのではないかと。

しかし、ここで否定して変に思われると元も子もないので、ありがとございます。と小さくお礼を言うだけにとどめる。

「学院の生活の事は、ネモア君に聞いた方が早いだろうから、今は割愛させていただくよ。それで、学年の話だけど、通常入学は1年からになるんだけどね」

「はい」

「ネモア君は4年だったよね？ できるだけ一緒の方がよいかと思つてね。編入試験受けてみるつもりはないかい？」

「編入試験、ですか？」

ネモアから学院に入学する年代は様々だと聞いて、1年からといつてもあまり目立たないという話だった。

だから特に気にしてはいなかったが、ネモアと一緒にの方が心強いことは確かだ。

オケアノス学院は初等学の6年、中等学の3年、高等学の3年と分けられている。日本でいうところの小学校が初等学3年までに当たり、初等学6年までが中学校、中等学3年が高校、高等学3年が大学となる。

一般的には初等学の6年で卒業するものがほとんどで、被後見人などは中等学や高等学まで進み学者やその道のプロを目指す形が多い。

2 (後書き)

2011/7/23 誤字修正

1年から3年は主に文字の読み書きと簡単な計算、あとは礼儀作法や基礎体力作りがほとんどの話だ。

魔法や薬草学、民族学は4年以降に授業の割合が増えるようで、今年は始まってまだ一ヶ月しかたっていないので授業の遅れもすぐに取り戻せるだろうとの事。

ヘリオス学院長が編入試験を進めたのは、啓輔の受け答えがしっかりしているため、ある程度の知識はあるのではないかと思つての事らしい。

「……あまり、人と比べたことがないので自分がどれほどできるかわかりませんが」

「なに、気楽に受けなさい。礼儀作法などの試験があるわけではないから、文字の読み書きや計算の筆記を受けてもらう形になるだけだから」

「はい」

計算については、グリサラーサ家にいたときに調べた本で日本とさほど変わりが無いことはわかっている。

文字については自動翻訳機能が働いているので、ある程度は大丈夫だと思つている。

授業で習えない常識については、図書室やメモアを頼りにすればよいかと思ひ、啓輔は編入試験を受けることにした。

そして、筆記の問題を見ながら、こちらの世界ではあまり公式などは進んでいないのかもしれないと思つていた。

初めは2桁か3桁の計算問題がほとんどで、掛け算や割り算はそのあとだった。分数らしき問題が数問あり、面積や体積を求める問

題は出てこなかった。小学校低学年か中学年程度の知識である。

文字の方も自動翻訳でほとんどは問題なく、ことわざのような問題がよくわからなかった以外は問題がなかった。

しかし中にはほかの問題に比べ明らかにレベルがおかしいものが数問入っていて、それについては回答しないかあえて間違えた。

もともと、そういう問題なのかわざわざ仕掛けたのかはわからないが、なんとなく解かない方が賢明な気がしたためだ。

試験自体は45分で終わり、すぐに採点をしてもらえたので全部で1時間もかからなかったと思う。

無事、ヘリオス学院長から4年生の編入許可をもらい、寮に移動することとなった。

寮は4階建ての建物で1部屋が2人部屋になっている。ネモアは師匠の関係で何かと面倒事があったので、今まで2人部屋を1人で使っていた。被後見人という事と同じ学年という事で、同室になることになった。

寮の管理人は亜人の狼の耳を持ったタルタさんで、白い髭を生やしたおじいちゃんだった。

生徒からはタルタ爺と呼ばれていて、普段はとても優しく温厚な人だけど、一度怒るとすごいらしい。その怒りを目の当たりにした生徒が一時期、タルタ様と言っていたことがあるほどだ。

「1205室。ケースさんの名札も後でタルタ爺が用意してくれるはずなので、夕食の帰りにでも取りに行きましょう」
「そうだな」

部屋には2段ベッドと勉強机が2つ、服を入れるタンスが2つに共有の棚が1つ置かれていた。

台所はないが、トイレと風呂は小さいながらもついでいて、この世界に風呂の文化があつてよかったと内心で喜んでいた。

「ネモア、いまさらなんだけど」

「はい」

「ネモアって何歳なんだ？」

ヘリオス学院長に言われてから気になっていたこと。もしかして、この世界の人は見た目より若いのもかもしれないと感じたのだ。それか、見た目より大人か。

「歳ですか？ 今年で15歳になります」

「ヘリオス学院長は？」

「ヘリオス学院長は、確か45歳だったと思います」

ネモアの年齢が予想通りだったので、そのままヘリオス学院長の年齢を聞いたのだが、その違いに驚いた。

20代前半と言われてもおかしくないあの外見で、45歳。

「じゃあ、学院長室案内してくれた、あの、秘書？ の人は？」

「セイルさんですか？ 30代ぐらいだと思いますよ」

「タルタ爺さんは？」

「タルタ爺は82歳です」

人はだいたい思っていた通りの年代だが、亜人の場合は20歳は年上のような。もしかしたら、人より老化が始まるのが遅いのかも。しれない。

「じゃあ、俺って何歳に見える？」

「ケースケさんですか？」

啓輔の言葉に、ネモアはじつとこちらを見つめてくる。

しばらく考えたあと。

「18歳ぐらいですか？」

6歳もサバを読むんだと、思いました。

3 (後書き)

2011/7/23 誤字修正

おやじの境界線

就職して4年。

最初の1年は学生気分も抜けず、スーツに着られているという形でそれこそ、就活中の学生と見分けがつかないくらいだ。面接を受けにきた子に突然話しかけられるくらいには、あか抜けていなかった。

それが2年、3年と上司から絞られ、客先から絞られると、パリパリだった就活スーツはいい具合によれよれに。ボーナスで買ったどこかのブランドのスーツも、社会人を思わせるには良いくたびれようだ。

同期の飲み会では、今、若者にお金を要求されたら、それは「カツアゲ」か「おやじ狩り」かで盛り上がっていた。

最終的に若者目線では「おやじ狩り」だという話で落ち着いたが、その後何度か開かれる飲み会でも話に上がり、回を重ねることに「おやじ狩り」派が増えていった。

自分は最初から「おやじ狩り」派だったな、とくだらない思考を現実に戻す。

「18歳か……」

ネモアの顔を視界にとらえて改めて言われた言葉を繰り返す。

十代。成人式を終えた自分が十代ですよ。

でも、今は髪もセットしていないし、横に流しているからなおのこと若く見えていたのかもしれない。髪を上げると、それだけで大人びた気がしたときもあった。

正当な理由を求めるように、いくつか屁理屈を考えていた。

しかし、ネモアにはそうは見えていなかったようだ。小さくつぶやいた後若く見えることについて悩んでいた啓輔に対して、逆の意味で落ち込んでいると思ったのだろう。

「あつ、やっぱり違いますよね！ ケースケさんが18歳なんて……。すみません、あまりにしっかりされているので、見た目より年上なんだろうなって思ってしまったので」

「ストップ」

「すと……?」

自動翻訳機はところどころ、うまく翻訳されないようだ。

結果的にネモアの言葉が止まったので、翻訳できない言葉については後回しにすることとして。

「……俺の見た目って、何歳ぐらいに見えるの?」

事は思っていたより重大かもしれないと、ネモアにと問いかける。年下という方がいいのか年上という方がいいのか、落ち込ませないようにしばらく考えていたネモアだが、啓輔の真剣な目に表情を引き締めると、本当の事を言う事に決めたようだ。

「顔だけで言えば16歳、身長がある程度あるので後ろから見れば17歳。でも、成長の速い人はいるので16歳と言われても違和感はないです」

異世界人と呼ばれる最有力候補は、身体的特徴だという。

グリサラーサ家の人も今思えば高身長だったと、なぜ気が付かなかったのか、状況を判断する力のなさに自信で呆れた。

よく、周りを見ると怒られたな、と上司の顔が浮かぶ。

「……24歳」

信じられないといった表情で、こちらをじっと見つめてくるネモアに小さく溜息をつく。

あのまま、18歳で通してもよかったのだが、今後の事を考えるとこの世界の常識を知っているネモアに何かいい案はないかと、実年齢を告げた。

「16歳の子供が仕事して、妻子がいるって変だと思わなかったか？」

「仕事はこちらでは12歳ぐらいの子もできますし、結婚は14歳からですので早くされたのだとしか……」

最初に付けた設定をさりりと持ち出したのに、ネモアは動揺もせずにそう答えた。

しっかりと覚えている様子を確認すると、あまり一貫性のない設定は追加すると自分の首を絞めるなと考えていた。

「まあ、もともと日本人は童顔が多いから若く見られるのは仕方ないんだろうけど。このまま、身長が伸びないのはこっちの人的にはよろしくないんだろう？」

「そうですね……。16歳にしてしまうと成長期ですし、たとえ18歳としてもまだまだ伸び盛りです。卒業するまで身長が変わらないというのは目立ちます」

「……どうするかな」

身長伸びない違和感に気づかれる前に、学院を去るか。

だが、その後の生活はどうする？ どこに行っても長期間生活することができないのであれば、いずれ居場所がなくなってしまう。

来て早々、異世界という大きな壁が立ちふさがったような気がした。

食事の席で

結果を先に述べるなら、身体の件については一時保留する事になった。

理由は、良い案が浮かばなかつたのと、寮についてから大分時間があったからだ。部屋の窓から入る光は赤く染まり始めたため、夕食を食べに行く事になった。

最悪、一年ぐらいは身長が変わらなくても、気づくほどではないだろうという事もある。

一年あれば、それなりの案ができていくかもしれない。

寮には食堂が用意されている。

基本的に朝と夜は寮の食堂で食事をする事になり、昼は校舎の方にある食堂で食べるか、購買のような場所で買って食べる事になる。食事についてだが、グリサラーサ家について初めて出された料理が見たことも聞いたこともないものだったため、最初は手をつけられなかった。

いくら同じ人と言え、異世界の食べ物。自分にとって毒かもしれないと思うと、慎重になるのは仕方がなかった。

食べようか食べないかで悩んでいたが、会社帰りに突然喚ばれたため、夕食もまだだったことから空腹がだんだん進んでいく。意を決して、一つ一つ口に運び、その味が問題ないこととしばらくしても体に異変がないことを確認して、それでもいつもより少ない量の食事で済ませた。

それも3日目を過ぎたあたりから、蓄積系の毒であれ、長期的にこちらで生活するのだから避けては通れない事と深く考えないようにした。

どうせ、食べても食べなくても危険なことに変わりはないのだから。

食材は今のところ生では見ていないが、出来上がりの料理自体の見た目は特に問題なく、お金持ちの家の食事という事で、至極美味しいことから楽しまないと損だと思ったからだ。

「ケースケさん、食堂にいたら俺の友達紹介しますね」

「……ネモア、俺の事は」

「わかっていきます。ケースケさんが言いたいと思うまで俺とだけの秘密にします。命に誓いましたからね、意思に背くことはしないで
す」

笑顔の中にも真剣な瞳で伝えてくるネモアに、啓輔は疑いすぎだよな、と自分の心の狭さに苦笑いする。

15歳のネモアはこの世界ではすでに結婚ができる年だ。

学院の子供たちも、このように大人びているのかと思うと、気を引き締めなおす必要がある。

今日は明日の良い予行演習だと思うことにした啓輔は、寮の中を案内しながら進むネモアについて行った。

食堂には6人か8人掛けの長方形の机がいくつも並べられていた。すでに寮で暮らしている生徒が何人も座って食事をとっていて、大学の食堂をイメージしていた啓輔はあまりの人の多さに一瞬足を止める。

それに気づいたネモアがすぐに先導してくれたが、入口で止まっ
てしまったために、下手をすると後ろが渋滞する可能性もあった。

種族も様々で、見える範囲では全身毛でおおわれた熊が直立で歩いていたり、身長が腰のあたりまでしかない髭を生やしたおっさん顔が横を通り過ぎたり、耳が魚の鰭のようになった人もいた。

寮に来るときは授業中であつたためか、ほとんど人に会わなかったが、こんなに生活しているとは思わなかった。

ざっと見ただけで机が50程埋まっていることから、最低でも3

00人はここに在る事になるだろう。

最初に初等学寮だという説明があったことから、学院の全校生徒を足すとどれほどの規模になるのか。あまりの人の多さに人酔いしそうだ。

食事はカウンターでもらうらしく、日替わりで10種類の中から選ぶことができるようだ。

これは様々な種族が集まっている事を考慮したため、肉中心のものや野菜中心のもの、肉と野菜をバランスよく含んだものと後は民族料理風のもの置いてあった。

ネモアと同じものを注文すると、魚を炊いたものとパン、それに野菜のスープがついてきた。品数は少ないが量が結構あり、おかわりも自由なようだ。

「ネモアー！ こっちだ！」

「ウイズ！」

右の奥からネモアに向けて手を振る少年がいた。

椅子に座ったまま少し背を伸ばしているのだろうが、それでもまわりより背が高いことがわかる。

「ケースケさん、行きましょう」

「ああ」

ネモアの後ろについていきながら、近づいてきた机に座っている人を確認する。

6人掛けの机に座っているのは3人で、先ほど手を振っていたウイズという少年は耳が黒く尖っている。よく見ると椅子の後ろで同じ色の尻尾がゆるゆると揺れていた。

その隣に座ってこちらを見ているのが、薄い桃色の髪をした少女

だ。目が金色で瞳孔は爬虫類を思わせる。

その向かいに座っているのが、線の細い少年だ。顔からはみ出しそうなくらい大きな丸いメガネをかけていて、髪を横に流して紐でまとめてある。

3人ともネモアの友人のようで、ネモアの後ろをついて歩く俺を見ているのがわかった。

こちらも見ているわけだし、特別不快といったことはないので、気にしないことにした。

食事の席で（後書き）

毎回読んでくださっている方もはじめましての方も、ここまで読んでくださいますして本当にありがとうございます。

何人かはお気に入りにも登録していただいているようで、嬉しくて画面の前でにやにやしております。

なかなか、初めてのことでどうやったなら楽しく読んでもらえるかな？ と頭を悩ませながら進めておりますが、読んでくださる方がいる事で勇気をもらっています。

また、感想やご指摘などいただけると、嬉しいです。

今後もゆっくりですが書き続けていきますので、よろしく願いいたします。

友達の友達は

席についてすぐに始まると思っていた友達紹介は、俺とネモアが食事を食べ終わるまで待つてくれるらしい。

湯気の上がる食事を前にすると、今まで気づいていなかった空腹で我慢が出来なかったため、ありがたい。

すでに席についていたウイズたちは食べ終わっていたが、せかされているわけではないので、じっくりと魚を味わう。

箸がなくてフォークとナイフで食べるのに少し慣れが必要だったが、パンとスープによくあっていた。日替わりでメニューが違ったりするので、明日の献立が楽しみだ。

「……美味しそうに食べるな」

自然と口元が緩んでいたらしい。

ちょうどななめ向かいになっていたウイズに見られていたようで、聞こえてきた声に視線を上げる。

無意識だったのか、目があったとたん慌ててそらされた。

「わるい、つい」

「いえ、気にしてないです」

言っつて、大分おなかも落ち着いたのでお茶を飲んで一息つく。

ネモアを確認すると、軽く頷いてくれた。

「ケースケさん、紹介しますね。俺の友達で同級生のウイズとミリイとファンです」

順番に指さしながら、そう言ったネモアに小さく苦笑いをする。

さすがに、簡潔すぎじゃないですか。
そう思っていたのは俺だけじゃなかったようで。

「ネモア、紹介するならちゃんとしてくれよ」

すかさず、ウイズの声が上がっていた。

「ああ、忘れていました。同じクラスです」
「違うだろ」

どうやらノリのようなものみたいだ。

仕方がないなあと、わざとらしく溜息をついて見せたウイズは、俺が正面に見えるように座りなおすと小さく咳払いをした。

「じゃ、俺から。ウイズスタン・ストハサム。得意な事は剣術、苦手なのは座学、実験とかは好きだけだな。ウイズって呼んでくれ」

差し出された手を握りながら、よろしくと頭を下げた。

手を放すと直ぐ隣から次の手に握られる。

「ファミリア・シルファナーン。魔術学に興味があつて、一年前に編入してきたの。ミリイでいいわ」

ニコリと微笑みながらの挨拶は、細くなつた事により鋭く見える蛇のような瞳孔の所為か。少し強めに握られた手に一瞬反応が遅れた。

笑い返している間に、隣からスツと手が伸びてくる。

「座学は全体的に得意です。シイスファ・グラヴィスタ、ファンと呼ばれています。趣味は読書なので、興味があつたら聞いてくだ

さい。よろしくお願いします」

きつちりと頭を下げたファンは、少しずれた眼鏡を押し上げていた。笑顔はないが、全体的に柔らかい雰囲気がある。

「こちらこそ、よろしく。ケース・ク・グリサラーサ、明日から編入することになってるので、色々教えてもらえると助かる。ケースケと呼んでくれると嬉しい」

ニコリと笑顔でしめると、腰を落ち着ける。

ウィズはみたままのスポーツ少年で、ミリイには警戒されているようだ。後でおすすめの歴史書でもないかファンに聞いてみよう。

「グリサラーサ家の後見なの？」

ミリイがこちらを見つめながら、ネモアに問いかける。少し目を細められているだけで、どこか睨みつけられたように感じるは気のせいなのか。

ネモアが転移の魔法陣の描き換えによる誤作動の話と、啓輔が住んでいたところが交流少ない小さな村であったことなどを説明する。ネモアの師匠の変わり者具合は有名らしく、さっそくその魔法陣についてネモアに問い詰め始めたミリイにウィズが苦笑いした。

「災難だったな」

「まあ、突然で驚いたけど……。学院にも通えるようになったし、ネモアが良い人だからそれほど悪いことばかりではないよ」

「ケースケさんは、編入試験を通ったのですよね。どこかで勉強されていたのですか？」

「読み書きと計算とかは教えてもらったかな。逆に常識的な事が抜けているというのは、転移してから気づいた」

ミリイにいろいろ質問されているネモアを横目に、できるだけ言葉を選びながらウイズとファンに授業について確認した。

授業は1日4教科ほどで、50分の座学授業と120分の実技・実習の授業とに分かれている。

実技は主に剣術と魔法で基礎的な事を学んでいるとのこと、実習は日本であった化学実験や、魔法陣の作成、鍛冶などが行われるらしい。

初等学5年からは選択制が始まるようで、6年の中ごろまでに大体の進路を決めるのがほとんどのようだ。

初等学4年はいわばその準備期間のようなもので、幅広く色々と学べるのがこの学年らしい。

既に経過した1ヶ月の授業内容はオリエンテーションのようなものがあつたのと、4日前にやっと4年の内に学ぶ教科を一巡したという。

幅広く基礎を学ぶため、ほとんどの教科が週に1度か少なければ2週に1度の割合で行われるみたいだ。

ミリイに質問攻めにされてぐったりしているネモアは、友達と過ごす彼は年相応なのだと中々面白かった。

友達の友達は（後書き）

2011/9/7 誤字修正

夜

一通り聞きたいことが聞けて満足したミリイに解放されて、疲れ果てたネモア。

ミリイはただ人見知りしていただけのようで、転移した時はどんな感じだったとか、何をしていたかとか、身を乗り出す勢いで質問された。

家に帰る途中で目の前に光の壁が現れたとだけ答えた。

「災難だったわね」

その言葉に苦笑いをする、すかさずウィズが。

「もう、俺が言ったよ」

と飽きた感じで返した。

「あら、そう？」と特に気にした様子もなく、「編入試験を通ったのよね、誰に教えてもらったの？」の言葉に、今度はファンがウィズと同じ言葉をミリイに返した。

さすがに言葉がなかったのか、少し頬を赤くしてうつむいたが、すぐに気持ちを切り替えていた。

まだまだ聞き足りないのか、俺に突っ込んで質問してこようとしたが、ネモアがミリイを止める。

「明日が編入初日なのに、寝坊で遅刻とかなったら困るでしょう。ねえ、ケースケさん」

「ん……？ ああ、そうだな。今日は移動で疲れたし、早く休みたいかも」

名前を呼ばれると思っていなかったから、少し考えてしまった。朝は8時半に職員室に行くといいと言われていたから、少しぐら

い夜更かししても十分起きれるが。

今日は移動に試験といろんな人とはなしたためか、横になればすぐに寝れそうなくらい、疲れていると感じた。

エルフとか獣耳とか異世界を改めて突きつけられた日でもあったから、脳が睡眠を求めているみたいだ。

「明日から一緒に勉強するわけだし、よろしくな」

まだ不満げなミリイにそういいながら笑顔を向けると、暫く呆けたあと慌てて首を縦に振って肯定した。

親戚の女の子とかも、渋っけていても笑顔でお願いすると大体聞いてくれるが、それは彼女にも有効みたいだ。

頭を撫でるのはまずいか、と自嘲したが、5歳以上も離れていてまだ十代と思うとどうしても子供扱いしてしまいそうになる。

これから同級生なんだよなと思いつながら、食堂を後にする。

しばらく使っていないかった風呂を今から洗うというネモアに、体を洗うだけにするからと断り先に入らせてもらった。

濡れた髪をふきながら、自分の寝床となった二段ベッドの下に腰掛ける。

小さいころは二段ベッドの上の段って憧れはあったけど、今となつては毎日梯子を上るのは疲れるのだ。

ネモアがしつかり者の片付け好きだったのとで、下の段を譲ってもらった。

窓から見える空には、地球では見ることがなかったものが浮かんでいる。

召喚されたその夜に見たロアとムアと呼ばれる、2つの満月。

ロアは白く光り輝き、ムアは黒く浮かび上がる。

すぐ隣に並んで見えるのに、ムアにはロアの光が反射することな

く、ロアはムアの影に隠れることはない。

ロアとムアを囲むように輝く星が、日本で見た星空とまったく違ったことから、ここは太陽系ですらないのかもしれない。

知らない世界に一人だ。

考えないようにしようとするほど、いつの間にか日本の家族や友人や会社のことばかり浮かんでくる。

悔しくて、悲しくて、必死で目にたまる水を落とさないように上を向くことしかできなくて。

現実から目を背けるように、寝ることしかできなかった。

夢じゃないから覚めないけど。

風呂場のドアが開く音がして、見つめていた窓から目をそらした。

「先に寝ててもよかったですよ？」

「いや、ちょっと考え事をしていて。明日もあるし、すぐ寝るよ」

「……そうですね、灯りけしますね」

言ってランプの火を消したネモアは、ベッドの上に登っていく。

「ネモア」

「はい？」

「明日からも、よろしくな」

「……はい！」

嬉しそうに答える声に、「おやすみ」と返しながら目を閉じた。窓から差し込むロアの淡い光が差し込んでいるだけで、それも、カーテンを引と真っ暗になる。

「おやすみない」というネモアの控え目な声を聞きながら、眠りの中に落ちていった。

朝

窓から差し込む朝日で、自然と目が覚める。

今の時期は大体6時半ごろに日が昇るので、まだ十分と時間がある。二度寝してもよかったが、すっきりと目覚めたため顔を洗う事にする。

洗面台の蛇口の上には湯沸かし器のようなものが設置されている。ネモアの話では火の魔法陣が内部に埋め込まれていて、溜められた水を温めているのだという。

蛇口は2つついていて、お湯と温度調整のために水が出るようになっていて。お風呂も同じようなものがついていた。

洗面台に設置されている鏡を見ると、目が赤く、少しむくんでいるのに気付いた。

水の蛇口を回して出すと、目元を冷やすように顔を洗う。そばに置いてあったタオルで拭いて確認するとましになっていた。

ついでに跳ねた髪を水に濡らして整えると、部屋に戻る。

「おはよう、ネモア」

「おはよう……ございます、ケースケさん」

起きてベッドの上で座っていたネモアに挨拶をすると、まだ眠いのかあくび混じりの返事が返ってくる。

グリサラーサ家にいたときは部屋が別々だったため、寝起きのネモアを見る機会がなかったが、ぼうつとしているネモアは普段のしつかりした彼より15歳に見えた。

寝癖で鳥の巣のようになっていて頭を見て、顔を洗ってくるように勧めると、のろのろとベッドの上段から降りて洗面所に向かった。

「おはようございます。ケースケさん」

しばらくしてすっきりとした顔で帰ってきたネモアは、いつものきちつと整えられた髪の彼だった。

笑顔で返事を返すと、学校へ行く準備を始める。

制服は一番上に羽織るブレザーのようなものだけで、中に着る服や下に穿くものの指定はないらしい。

正式な会などでは正装が暗黙の了解となっているが、普段の授業などでは皆、思い思いの格好をしている。

様々な種族が集まっているために、制服として一式作るのが大変なのだ、ネモアが教えてくれた。

革のカバンにインクとペン、茶色がかった紙の束を入れると、食堂に降りて朝食をとった。

朝食を食べ終わってもまだ8時前と職員室に向かうには早かったため、ネモアに簡単に校舎の案内をしてもらいながら登校した。

授業自体は9時からなので、生徒の姿は少なかった。寮と校舎が近いので、結構ギリギリに来る人も多いらしい。

「ここが、職員室です。各担当ごとの部屋も準備されているので、ここにいないときはそちらですね。また、案内します」

「ありがとう」

「じゃあ、担任呼びますね。失礼します。エレイ先生いますか？」

ドアを開けて中に呼びかけたネモアの声に、すぐに返事が返ってくる。

入口まで来たエレイ先生らしき人は、肩のあたりまで伸びた髪を後ろで結んだ、大人の女性だった。

多分、歳は自分と同じくらいだが、その身長は頭一つ分見上げなければいけない。

改めて自分が子供身長なのだと、内心深く溜息をついたが、それを表情には出さずに笑顔で会釈をする。

「学院長から話は聞いてるわ、君がケース君？」

「はい、ケース・ク・グリサラースです。よろしくお願いします」「うん、礼儀正しくては良いわ。担任になるエレイよ。何か困ったことがあったらすぐに言ってね」

差し出された手を握り返すと、包み込まれるような感触に身長だけではなく、全体的に大きさが違うのだと現実を突きつけられる。

近いうちにネモアにも抜かれるのだろう。

説明があるからと、ネモアは先に教室に行き、俺はエレイ先生と職員室の一角に設けられたソファのある場所に案内される。

授業の準備をしている他の先生たちも、優秀な者を種族問わず集めているためか、多岐にわたっていた。

「はい、これが今日使う分の教科書よ。残りは放課後に取りに来てもらえる？」

「わかりました。ありがとうございます」

受け取った教科書は4冊で、今日は実技や実習の授業はないようだ。

今までの授業内容については他の生徒に聞くか、各担当に質問すれば良いとの事。

エレイ先生は語学と数学の授業と魔法の基礎を教えているとのこと。

「すみません、俺、今まで魔法ってあまり見たことがなかったの。誰にでも使えるものなんですか？」

「ああ、あまり浸透していない土地にいたのね。まだ時間はあるし、簡単に説明するわね」

魔法は魔法陣を使用することで、体内エネルギーと自然エネルギーを混ぜ合わせ、具体化する事で放出している。

混ぜ合わせた状態が魔力で、混ぜ合わせる場所が魔法陣である。魔法陣は魔結晶と呼ばれる鉱物から抽出したもので描かれることが多く、より効率的に魔力を循環させることができる。

体内エネルギーはすべてのものが持つていて、魔法陣には自然エネルギーと混ぜ合わせる手順と発動方法が描かれている。

「魔法陣がないと魔法は使えないのですか？」

「使えない、というわけではないけど、難しいわね。魔力を自分の中で練り上げないといけないし、発動するための魔法陣を頭の中で正確に構成しないといけない。基本の魔法ですら、国家魔法士の中で使えるのは一握りね」

火を燃やしたり、水を出したり、簡単に思える魔法ですらゲームのようにはいかないのだ。

そのために魔法陣が開発され、お湯を沸かすための道具が作れているのだという。

朝（後書き）

投稿し忘れていたのに、起きてから気が付きました……。
しばらくは1日1話ずつ進んでいく形になりますので、よろしく
お願いします。

教室にて

「そろそろ、良い時間ね」

エレイ先生の言葉で、教室に向かう事になった。時間は9時少し前で廊下には、慌てて登校してくる生徒の姿があった。

そんな人たちの視線を軽く感じながら、教室の前に着くと、少し待つように言われる。

どの世界も、転入生の自己紹介はあるようだ。

「ケースケ君、入って」

中から聞こえたエレイ先生の声に、小さく深呼吸を繰り返すと、ゆっくりとドアを開けて中に入る。

これからクラスメイトとなる何人もの視線が、肌に突き刺さるのを感じる。

少し、緊張はするが、好奇心で興味津々です、といった子供の分かりやすい視線に小さく口元が緩む。

エレイ先生の横に並んで、教室内を見渡すと、生徒数は40人くらいなのと人と他の種族が半分づつくらいなのがわかる。

「編入生のケースケ君よ。ケースケ君、自己紹介」

「ケースケ・ク・グリサラーサです。わからないことも多いので、色々教えていただけると嬉しいです。よろしくお願いします」

笑顔を作って、軽く頭を下げると、パラパラと小さな拍手が返ってくる。

中には「よろしく」という声や、「グリサラーサ？」とネモアを見ている者もいるが、おおむね友好的な反応と言って良いだろう。

「はいはい、ちょっと聞いてね」

ざわざわとしていた教室内に、エレイ先生の手を叩く音と声が響く。

すぐに静かになった生徒たちに満足そうな顔でエレイ先生は頷く。

「ケース君は、今まで、小さな村にいたらしいの。だからちょっと、一般常識の部分を心配しているから皆、助けてあげてね」

「エレイ先生！　じゃあ、なんで編入試験に受かったのですか？」

勢いよく手を挙げた一人の生徒が、教室に響く声で質問する。

どうやら編入試験には、一般常識の分野も含まれるようで、他の生徒もその疑問に啓輔を怪しむような視線を向けている。

「それについては、俺が説明します」

そういつて立ち上がったネモアは、こちらについてから何度目かになる、師匠の描き変えによる転移の魔法陣の誤作動のことや、俺が自分の住んでいた場所もよくわからない交流の少ない場所から来たこと、学院長の計らいでネモアと同じクラスが良いとの判断で編入試験を受けたことなどをわかりやすく説明していく。

転移の魔法陣の誤作動の話の部分で、生徒の憐れむような視線に苦笑いで返すと、「なんでも聞いてくれよ！」「いろいろ教えるから」という声が上がったのは正直ありがたかった。

その上、ネモアの席の近くが良いだろうと、隣に座っていた生徒がわざわざ席を替わってくれた。

席を替わってくれた猫耳の生えたその生徒にお礼を言うと、「困ったときはお互い様」という何とも言い難い言葉が返ってきた。

「一時間目は薬草学だから、みんな遅れないようにね」

そういつて別のクラスに行くエレイ先生。

薬草学は別教室でやるみたいで、ネモアに聞いた必要なものだけを持って、自分のクラスを後にする。

移動する際にネモアに聞いた話だと、語学や数学、民族学などの一般教養の部分にあたる授業以外は、ほとんどが移動教室で1日に4教科程度しか授業が組み立てられないのはこの移動時間も含まれるからのようだ。

教室にて（後書き）

土日はお昼までに更新する形になりそうです。
平日は頑張って日付変わる時を目指します。

授業中

オケアノス学院における薬草学とは、薬用植物に分類される植物の知識を学べる授業だ。

薬用植物の「分類」「生息地」「調合法」「効果」で分類され、「貴重度」や「価値」などもこの薬草学の授業に含まれる。

将来的に調剤師や医者を目指す者のため、実際の仕事にした際の部分に重点が置かれている。

隣接する畑や学院の中にある森で実際に栽培したり、採取したりする授業もあるようで、他の授業の生徒が調合中の薬品が教室の一角にまとめられていた。

教室の壁には大量の本が並べられ、そのどれもが薬用植物に関する資料であったり、薬品の調合法であったりした。

前回の授業はちょうど1ヶ月前。ネモア達の進級直後で、今日が2度目の授業になるらしい。

初回の授業では、先に述べた薬草学の概要と効果についてと、一般的に使われている薬品とその元となる薬用植物を見せてもらったらしい。

薬品の種類を聞くと、頭痛や腹痛、解熱といった薬と、あとは傷薬や火傷に効く薬など、漢方薬や塗り薬といった感じだ。

棚に並べられている器具も、すり鉢や秤、薬匙、試験管など、化学室といったイメージが強い。

「魔法で回復とかはできないのか？」

小声でネモアに確認すると。

「考えたこともないですし、魔法は万能ではないので、できるとし

たら神様が奇跡じゃないかと」と、返された。

確かに言われてみれば、何もないとところから肉体を再生させるなど現実的ではないし、この世界の魔法とやらがそうそうなんでもできるとは思えないが。

基本の属性として火、水、風、地があり、その魔法を動力にしたものがあるのだから、できるのではないかと夢を見てしまう。

「魔法で治療ができるなら、素晴らしいことね」

小声で話していたのに、ミリイには聞かれていたのか、ずいっと乗り出すように話に参加してきた。

どうしてもファンタジーという概念がゲームや小説に偏る啓輔の単なる疑問だったのだが、ミリイは大変興味を持ったらしい。

「回復となると、ネモアが言っているように神様しかできない奇跡のような事だと思うわ」

「……治療だとは違うの?」

「魔法を使って、治療の部分を手助けすることは夢物語ではないと思うの」

そういつてミリイは目を輝かせる。

「生活に使用できる道具だけが現在魔道具として主流だけど、医術の面で役立つ魔道具があっても良いはずよ」

「たとえば?」

「う、それは、まだわからないけど。そのための知識を学びに来たのよ! 私は!」

そう宣言するミリイに、教室の前から何かが飛んできた。

軽く興奮していたミリイはそれをよけることができず、額のあたりに命中し、机にカラッと小さな音を立てて転がる。

痛かったのか、声もなくうずくまるミリイに、落ち着いた声がかかる。

「知識を学びに来たのなら、授業は真面目に受けるんだな。ファミリア・シルフアナン」

「っ、すみません」

「あと、ケースケ・ク・グリサラーサ」

「はい」

「前回の授業の復習までは良いが、別なおしゃべりに発展するのはいただけないな」

「はい、すみません」

授業が始まっていたのに、いつまでもメモアに質問していたのは、自分の落ち度なものでしっかりと頭を下げる。

黒板にはすでにいくつか板書がされていて、明らかに聞き漏らした。

書かれている内容から察するに、薬草の調合方法を説明しているようだった。

「まあ、初回だから大目に見るが。ケースケ君。薬草を薬にする方法を一つ答えなさい」

言われて再度黒板を確認すると、乾燥させて粉末にする方法とすり潰してペースト状にする方法が書かれている。

それ以外の方法となると、咄嗟に頭に浮かんだのは小さい頃に飲んだ、液体の風邪薬だった。

大人になってからは錠剤しか飲まなかったが、あの苦味はいつま

でたっても忘れなかった。

「煮る、でしようか？」

液体の薬がどうやってできているかはわからないが、昆布や削り節みたいには、煮たら成分が溶け出るのではないか。と思ったからだ。

「煮てどうする？」

「煮て薬草から溶け出した汁を使うのかと。料理などでは煮てだしをとるので、同じような事ができるかと」

「なかなか面白い考え方だ」

「どうやら正解だったらしい。」

黒板に向きなおり、授業を再開した先生に、今度は怒られないようにしっかりとノートを取り始める。

特にお咎めもなかったため、額を痛めたミリィに軽く睨まれたが、彼女も授業に集中する事に決めたようだ。

授業中（後書き）

2011/9/7 誤字修正

昼食

薬草学の授業が終わると、エレイ先生の数学の授業だった。

内容は小学校6年生の計算問題といったところだろうか。分数という考え方があつらしく、袋詰めされた小麦を分けて売る場合の値段のつけ方といった、商売に近い教え方をしている。

売る物によつての標準的な利益額などが説明の中に入ってくるので、数学というよりは商売学といったところだろう。

単に数字の計算をするよりは、こちらの方が将来的に役に立つだろうし、今後何かを買う時の基準になるので面白い。

2時間目の数学の授業が終わると、お昼休みになった。

大体が午前中は座学が多く、午後に実習や実技といった形になるようだ。

「ケースケさん、どうでした初授業？ 何か不明な事とかありましたか？」

ネモアとウィズたちと食堂に着くと、昨日の寮の食堂以上のにぎわいだつた。

いくらかは購買で買って教室や中庭で食べているみたいだが、それでも生徒のほとんどがこの食堂に集まっている。

何とか6人掛けのテーブルに着くが、周りはずでに食べ始めている生徒で埋まっている。

「今のところ困つたこととかはないよ。薬草学も数学も面白いし、ネモアがいろいろ教えてくれるから助かつてる」

「そうですね、よかったです」

笑顔で答えると、安心したように息をつくネモア。
そのやり取りを見ていたミリイが、わかりやすく喉を鳴らす。

「ケースケ、私にいう事があるんじゃないかって？」

スツと縦長に伸びた瞳孔が、こちらをじつと見つめてくる。
不機嫌です、を体全体で表現しているのか、背筋はぴんっと伸び
目線は上から見下ろすようにしている。

薬草学の授業での事だろう。

次の授業が移動だったことと、ミリイ自身が別の女の子に話し
けられていた事もあり、タイミングを失っていた。

「おでこ、痛かっただろ？ ごめんな」

かすかに赤くなっている額を撫でながら、謝る。

実際授業中に自分の世界に入ってしまったのはミリイなのだから、
半分自業自得な感じはしなくてはなかったが。

必死に不機嫌を表す彼女がとても幼く見えて、つい、隣に座って
いたミリイの額を撫でてしまったのだが。

「そ、そんなに、いたくないわよ！」

首元から赤くなつたミリイは、上体を後ろにそらすと撫でていた
手を避けた。

子供扱いしたのが、悪かったか。

勢いのままミリイの隣に座っていたウイズの右頬に後頭部をぶつ
ける。

「いつっ！」

ちょうど重いパンチを入れられた形になったウィズは、持っていたスプーンを皿に落とし頬を押さえ立ち上がり、ミリイも後頭部を押さえて前かがみになった。

「…………えつと、ごめん」

とっさに睨みつけてくるウィズに謝りながら、自分が悪いのか？と、問いかけたくなった。

ミリイがあんな反応を見せるとは思っていなかったわけだし。慌てて離れようとするほど、嫌われているのかと少し悲しくなった。

「わざとじゃないのは、わかったが。午後の剣術、相手してもらっからな」

「俺、初心者ですけど」

「相手してくれるよな、ケースケ」

「…………お手柔らかにお願いします」

剣術が剣道と似ている事を祈りながら、鶏肉の塩焼きらしきものを味わった。

24歳の体力

24歳の体力を侮ってはいけない。

仕事はパソコンの前にほぼ一日中座っているし、客先に行くときは社用車か電車だ。週末は仲間と飲み歩いて、下腹が気になり始めたジム通いは半年しかたっていないかった。

「ケースケ、ふざけてる？」

「お、大まじめ、です」

とぎれとぎれに答える俺に、ウィズは苦笑いを浮かべる。

剣道の竹刀なんて子供だました。

何を当たり前と思うかもしれないが、本物の剣は鉄でできません。木や竹の棒を振り回すのと訳が違う。

ウィズに言われるまま、剣術の授業で手合せをすることになっていたのだが。

両方に刃のついた長さ50?の剣が持ち上がりません。

その時点で呆れていたウィズだったが、30?にしたとしても状況が変わらない現状に、やりたくなくてわざと持ち上げないのかと疑われたのだ。

かろうじて両手で持ち上げてはいるものの、腕は震え、足元も覚束ない。

女子のミリイでさえ、30?の剣を振り回しているのに、情けないといしか言いようがない。

剣術が苦手だと言っていたファンも、苦手というだけで剣を振ることはできる。

あまりの状況に、ウィズだけでなく担当教師も眉を寄せている。

「ケースケ・ク・グリサラーサ。お前はしばらく基礎体力作りだ」
「……はい」

元騎士の隊長であった教師にそういわれると、素直に頷くしかない。

その基礎体力作りでさえ、何とか言われて事をやっているという状態なのだから、他の生徒と同じように剣を振るえるのはいつになることだろう。

ないとは思いつつも、転生ものでよくある身体能力の向上とかほんとうに、ほんのちよつとだけ期待してしまったためにちよつと落ち込む。

24歳の良い年したおっさんが、運動万能とかそれの方がおかしいか。

内心で愚痴りながら、10回の腹筋で汗だくになっています。
ネモアに足首を押さえてもらっているのだけど、その表情は心配そうだ。

「ケースケさん、無理しないでくださいね」
「……、男には、やらねばならない時がある」

とぎれとぎれに言いながら何とか上体を起こす。

ジムではランニングマシンとかボクシングマシンとかいろいろやってたはずだったが、週に1度という回数か、機械に頼ったからか。どちらにしる、あまり筋力がついていなかったみたいだ。

「ケースケって、編入試験受かるぐらい頭が良いのに、体力はないのね」

ウィズと打ち合っていたミリィは、うっすらと額に浮かぶ汗を手

ぬぐいで拭きながら、こちらに歩いてくる。

啓輔の代わりに、直接頭をぶつけたミリィが相手をする事になった。
つていた。

「勉強してたから、体力がないのではないですか？」

フアンの言葉にミリィはなるほど、と頷く。

体力的に言うとは、少ないといえジムに通っていたので、結構自身があつたのだが。気にしていた下腹も出ていないので、勝手に体力がついたと思っていたのに。

現実はその、甘くないという事だ。

「結構体格良いから、期待していたんだけどな」

「見かけ倒して悪かつたな……」

「いや、そうじゃないけど」

本気で楽しみにしていたのか、ウィズという言葉に言い返すと、慌てて頭を下げられた。

一日でも早く筋力をつけようと、明日から朝に走り込みでもするか、と心に決めていた俺だったが筋肉痛で起き上がることにすらできなかつたのは、別の話だ。

自動翻訳機能

この世界に転移してから30日がたった。

一年は12ヶ月で、一ヶ月は32日。今月は5月であと3日で6月になる。

5月と言っているが、自動翻訳機能のおかげでそう認識しているだけで、本質は違うのだろう。

毎日、生活に慣れる事と、忙しくしていないといけない気がして、深く考えないようにしていたが、意識して聞いてみると意味の分からない音だけが聞こえた。

自分が話している言葉は何なのだろう。

当然、日本語だと思っていたが、口から出る声はやっぱり意味の分からない音で、本気で焦った。

日本語が、自分が地球にいたという事実が、なくなってしまいう気がして。

ネモアに色々な言葉で話しかけるといふ実験をして気づいたことが3つある。

1つ目は声として音になるときに翻訳されている事。

2つ目は意識すれば日本語が話せる事。

3つ目はこちらにない物や動作の名前や意味は上手く翻訳できない事。

この3つは言葉だけでなく文字も同じだった。

授業で使われているのは当たり前だがこちらの文字で、俺はその意味を理解できているし、授業のノートにはこちらの文字が書かれている。

意識をして書いている訳ではないので、勝手に変換されているようだ。

その事に気づいてからは、毎日寝る前に日本語で日記をつけるようにしている。

少しでも文字を覚えておくために。

たまに意識して日本語で読み返したりもしている。

ネモア曰く、転移の魔法陣の誤作動で違う国の言語や文字が理解できるようになった、という事例はないらしい。

前例がない、他に自分の体にどんな変化があるのか、わからないことが怖い。

「ケースケ、次の授業移動だぞ？」

ウィズに肩を叩かれながら声をかけられて、自分が考え込んでいたことがわかる。

確か化学の授業だったはずだが、ほとんど覚えていない。

周りに生徒の姿は少なく、ネモアが心配そうにこちらを見ている。

「声をかけたのですが、反応がなかったの？」

「ごめん、聞こえなかったみたい」

「いえ、それは、良いのですが」

ネモアは俺が毎日、地球を忘れないように、日本語を思い出そうとしているのを知っている。

最近は寝つきが悪く、夜中に何度も目が覚める。

考えないようにしようとするほど、考える時間が増えていく気がする。

「ケースケさん、大丈夫ですか？」

ネモアの言葉に、苦笑いを返す。

ネモアは良くしてくれている。

寮の生活は基本的に自主性が求められるが、選択や掃除はほとんどネモアがやってくれている。

勉強もネモアが押してくれるし、必要なものはすぐに用意してくれる。

ネモアは良くしてくれている。

だけど、でも。

あの時魔法陣の描き変えに気づけなかったのか。

誤作動があるとわかっていいる魔法陣を何故使うのか。
なんで俺はここにいるんだ。

「ケースケさん？」

立ち止まっていた俺に、ネモアが手を伸ばす。

お前の所為で。

パシッ。

「あ、わるい……」

「……いえ」

肩に触れようと伸ばされて手を、気づいたら払っていた。

軽い音だったが、ネモアの表情は、固い。

「最近、眠れなくて」

だからなんだというんだ。

自分で言っている言葉の意味がおかしいことはわかるのに、それ以外言えなかった。
気まずくて、話せなかった。

大人気ない

謝るのはタイミングが非常に難しい。

後になればなるほど言い出しにくくなるし、大したことなかったことがいつの間にか埋められない溝ができてしまう事もある。

ちよつとした事こそ、すぐに謝った方がいい。

報告とかと同じだ。

仕事でミスをした時もそうだった。分の作ったプログラムですぐに直せる程度のバグが見つかって、何も言わずに修正した。

動作確認もしたし、退行テストもして問題なかったから、そのまま報告しなかったのだが。既にソースはリリースされた後だった。

当然、本番環境のプログラムはバグが出る状態。試用期間中にその問題が発覚したため、重大な事態が起こることはなかったが、上司にはしつかり絞られた。

すぐに報告していれば、よかったのだと、何度も言われた。

仕事でミスをすれば謝れるようになった。自分がやった事だから。でも、今回ののは？

思わず叩いてしまった事に対しては、謝った。気持ちに余裕がなかったからと言って、無意識で手を払ってしまったのは悪いと思っただから。

他に何を謝る？

夕食を食べているときも部屋に帰ってからも、寝る前も。ネモアとの間に会話がなかった。

俺が話しかけないんじゃない、ネモアも話しかけてこないんだ。

「ケースケさん、ネモアと喧嘩したのですか？」

放課後、民族学の時間に気になった事があったので、ファンに頼

んで図書室でわかりやすい本を探しに来ていた。

いつもついてくるネモアは、担任に呼ばれていてついてきていない。

ウィズは図書室という場所が苦手のようで、ミリィは女友達と楽しく話していたので声をかけていない。

「喧嘩……なのかな」

実際問題、よくわからない。

ネモアだけが俺が異世界から転移してきた事を知っている。彼自身が転移の魔法を発動したために、責任を感じているのも知っていた。

ネモアなら、こちらでの俺の生活を保障してくれるだろう、絶対に放り出さないだろう事はわかっていた。

それはネモアの生真面目すぎる性格と、こちらの世界での転移の魔法陣の誤作動という事故の認知度がある。

遊んで暮らしても、俺の意思に逆らわないだろうと一緒に生活して思っようになった。

「ファンは、俺の事ケースさんって呼ぶよな。ネモアとかは呼び捨てなのに」

ファンは基本丁寧語で、ネモアやウィズたちにも少し砕けてはいるが丁寧語だ。

最初に比べて俺にも多少砕けた丁寧語になってきているが、呼び方だけは常にさん付けだった。

よく聞いているとクラス同級生も、よほど年が離れていない限り呼び捨てだった。

「何故、と聞かれると深い理由はないのですが。あえて理由をあげ

るなら、ネモアがそう呼んでいたからですね」

「転移の魔法陣の誤作動に巻き込まれた哀れな奴だから？」

「違いますよ」

思わず出た皮肉に、ファンはすぐに否定の言葉を返す。

真剣な目でじっと見つめてくるその瞳に、自然とこちらも真剣に見つめ返してしまう。

「ネモアが尊敬していたから、大切にしようとしているのがわかったから、僕も敬意を持つと思うんです」

「ネモアは責任を感じて、敬っているだけだろう」

「それだけだったら、僕はネモアをケースさんから遠ざけます」

何故？

そう聞き返そうとして、ネモアとファンたちを思い出す。

最初に食堂で会ったときに感じた、ミリイの視線。人見知りだあの時は言われたが、クラスメイトとも仲が良く、社交性の強い彼女が人見知りだとは今になると思えない。

ウイズやファンも色々と質問してきながら、何かを確認しているようだった。

「ネモアは責任を感じてはいますが、どこか、ケースさんを兄のように慕っているように感じます」

ネモアは兄弟いるだろう。その言葉は言わなかった。

明日は週末で授業は休みだ。

今日はネモアと話そうと、寮に帰りながら思った。

異世界人？

ネモアと話そう。

その勢いは、今はない。ないというより、勢いを向ける対象が居ない。

「……帰ってこないとは」

ファンが探してくれた本を読みながら、窓の外を確認する。

2つの月がもうそろそろ真上に来ようというところだ。今日が終わる。

寮についてしばらくしても帰ってこないネモア。

心配になって探しに行こうと外に出ようとした時に、タルタ爺に呼び止められた。

「急用ができたので、先に休んでいてください」

几帳面な丁寧な文字のメモを渡された。

急用とは多分、放課後の呼び出しのことだろう。あの後から会っていないから、すぐに出たのかもしれない。

話し合う気満々でいたために、出ばなをくじかれ結局すつきりせずに、胸のあたりが気持ち悪い。

「急用ってなんだ」

メモに書かれていたのは急用とだけ。

先に休んでいてくださいという事は、今日中に帰ってくるのか。

そう思っ、借りた本を読んで待っていたのだが、一向に帰ってくる気配がない。それなりに分厚かった本はすでに終盤に差し掛かっている。

今日中に話をしたかったのにな。

そう思いながらも、日々の生活の疲れか、おっさんが学生に交じって授業をしているためか、眠気がやってくるのが早くなっていた。授業での運動量は高校時代に部活で汗を流していたより多いかもしれない。

真面目に勉強しているためか、頭を使う事による疲労もたまっていた。

「日記……書かないとな」

机の引き出しから一冊のノートを取り出すと、使い慣れてきたペンにインクを付ける。

今日の授業の事、図書室でのファンとの話、ネモアの急用。

日記というより作業報告書に近くなってきているが、懐かしい日本語で書かれたそれを一通り書き終わると満足気に読み返す。

書きはじめてから気づいたことだが、仕事でパソコンばかり使っていたためか、簡単な漢字もすぐに思い出せないときがある。できるだけ漢字を使うようにしているが、明らかにひらがなの比率が多かった。

カタン。

後ろから聞こえた小さな音に、日記に落としていた顔を上げて振り返る。

「あ、お帰り」

「……ただいま戻りました」

最初に会ったときのように、魔法使いのローブと杖を持ったネモ

アが入口に立っていた。

「急用って、転移の魔法陣の事？」

思わず浮かんだこちらに来たときの情景に、聞いてしまう。
小さく目を見開いたネモアは、申し訳なさそうに眉を寄せた。

「今日、師匠が陛下に会いに来ていたんです。まあ、会いに言っても、街を歩いていた師匠を騎士が見つけて連行したようなものな
のですが」

「師匠……」

「転移の魔法陣の描き変えの事を聞きに行っていました」

師匠に聞きに行った。

その一言に、ぴくりつと体が震える。

師匠に俺が異世界人だと、否、陛下にも言ったのか。事情を話さなければいけないとはわかっているが、それがすごくいやだと感じた。

段々と顔がこわばっているのが、自分でもわかる。

「師匠は、転移の魔法陣を無効化したのだと。自分ではわからない
と言われました」

「そうか」

「殴り飛ばしましたけど」

「そう……は？ 殴り飛ばした？」

淡々と告げられた言葉に、相槌を返そうとして聞こえた言葉の意
味が分からずに顔を上げる。

申し訳なさそうな顔から、苦々しい顔に変わっていたネモア。

「今回ほど、師匠……いや、あれが役立たずと感じたことはないです」

「ネモア？」

「ああ、安心してください。ケースさんが異世界から来られたこととは言っていないです。あの馬鹿に言っても仕方がないですしね。変に興味を持たれてもいやですし」

相当、師匠とのやり取り苛立っているのか、握り絞められた拳は震えていた。

「俺が頑張ります。俺がなんとしても、ケースさんを異世界に帰れるように頑張るんで、ケースさん、俺に時間をください」

しっかりと頭を下げるネモアに、スツと胸の曇りが晴れたような気がした。

彼はこんなに誠実に、俺に向き合ってくれているじゃないか。

「……一緒にだろ？俺とネモアで頑張るんだ」

熱くなる目元に、上手く笑えていただろうか、そう思う。

安心したように嬉しそうに笑うネモアがいるのだから、多少変でも、俺は笑えているのだろう。

休日

昨日の夜、俺はネモアに最近の寝付けない理由と、自分の中にある暗い感情について話した。

考えないようにすればするほど、地球に帰りたいたいのだと、その原因になったネモアがとても憎く感じてしまつのだと。

ネモアは悲しそうな顔をしたが、それは俺がネモアに対して憎く感じた事ではなく、それを今まで心の内にとどめさせてしまった事についての後悔だという。

24歳という年齢と、しっかりと自分の考えを述べる俺に、頼ってしまっていた。そう言つて頭を下げるネモアに、言えなかった俺も悪いと謝る。

単に自分を守るために、弱い部分を見せなくなつた。変に大人なために、帰れないという事は理解できて、帰りたいたいという気持ちを抑え込もうとしていた。

「最初にネモアに聞いた話と、この学院で1ヶ月学んできて、帰れないとわかつているんだ」

「それは、俺が……」

「うん。俺もネモアと一緒に。帰れないと理解していても、可能性があるのならばがりつきたい。可能性が実現するのがいつかわからないし、その時本当に帰りたいのか今の俺じゃわからないけど」

本当にいつになるかわからない。

一生、帰る方法は見つからないかもしれない。見つかつてもよぼよぼのじいさんになっていたら帰らないかもしれない。

どちらにしても、何もなくて過ごすよりは、充実した日々を過ごしたい。

「頑張りたい」

オケアノス学院は週に1度休みがある。一週間は6日で、地球でいう土曜日にあたる日が休みだ。

休みと言っても全寮制の学校のため、寮の食堂は開いているし、校舎で勉強や実習をしている生徒や先生もいる。

俺の休日は、ネモアに勉強を教えてもらう事か、図書室で借りてきた本を読み事がほとんどだった。

「街で買い物でもしませんか？」

夜遅くまで話していたため、ネモアと俺は昼頃に目が覚めた。

昨日の内に借りてきていた本は読んでしまったし、何をしようかというところでのネモアの提案だ。

街と聞いて、最初学院に来た時に見た通りを思い出していた。

「買い物か」

「ケースケさんに言われた物は俺が用意していますけど。買い物に行くことってまだないですね。今日は一緒にどうですか？」

言われて、確かにこちらに来てから自分で買い物などした事なかったな、と思う。

授業で物の値段や貨幣価値などはなんとなくわかっているが、実際にそれを使った買い物はしたことがない。

いまだに料理で出てくる食材がどういったものなのか曖昧なのだ。

昨日の話もあり、ネモアは息抜きに誘ってくれているのもあるのだからと、今日の予定は買い物に決まった。

日用品の買い出しもあるらしいので、それは最後に行くことにして、まずはお昼ご飯を外で食べようとさっそく街にくりだした。

「多いな人」

「休日ですからね。俺たちと同じで学院の生徒もいますよ」

歩けないほど人が密集しているわけではないが、気を抜くとすれ違う時に肩がぶつかりそうな程には人がいる。

店からは元気な呼び声と、人々の話し声が聞こえる。

はぐれたら大変だな、とネモアを常に視界の端に入れながら、周りを観察する。

感じとしては、昔ながらの商店街といった感じであろうか。

「ケースケさんここにしましょう」

言われるまま一件の食べ物屋に入った。

中は昼時とあってか人は多いが、どこか全体的に気品が漂う雰囲気であった。

他にもちらほらと見える食べ物屋がファーストフード店とするならば、この店はレストランといったところだろう。

メニューを見てもどういった料理かわからないので、ネモアにお願いし、窓から見える景色を楽しんだ。

「店を見ていて思ったんだけど、機械とかがってあまりおいていないのか？」

「機械ですか？」

「湯沸かし器とか洗濯機とか、学院でよく見かけるものが並んでないなと」

「ああ、魔道具の事ですね。あれはそれなりに値の張る物なので、露天には並べられてないですね。工房とか取扱店に行けばあります

「よ」

魔法陣、授業で簡単に説明された内容だと、魔法陣に魔力を流す事で動く道具。

魔法陣の部分が動かすためのモーターの役割をしている。

「魔法陣じゃない湯沸かし器とかって、どこで見れるんだ？」

「……えっと、湯沸かし器は魔法陣ですよ？」

俺の問いかけに、ネモアは不思議そうに首を傾げる。

もしかして、魔法があるためにあまり科学の部分が発達しなかったのか？ 授業でも確かに科学や化学について詳しくやっていた授業はなかったなと改めて思う。

魔法の基礎の授業も、基本要素とは言っているが、それを化学的に説明している部分はなかった。

専門店

昼食をとったあと、ネモアの要望もあり魔道具を取り扱っている店に行くことになった。

食事中に話した、魔法を使わない道具という俺の話に興味を持ったからだ。

ネモア自身は小さい頃から家庭に魔道具があり、今のオケアノス学院にも普通に魔道具が使われていたので、一般家庭にはどういうものがあるという事までわからないらしい。

ならば、実際に取り扱っている店で確かめてみるのが早いだろう、という俺の案だ。

「いらっしやいませ。何をお探すで」

にっこりと営業スマイルで話しかけてくる、少し小太りの男性。

店に入った瞬間にこちらをちらりつと確認し、俺たちの服の質を上から下まで見たのに気付いた。

ネモアに連れられて、この街で一番有名な魔道具を専門に取り扱っている店らしい。

店内には魔道具がディスプレイされていて、奥には倉庫も用意されているようだ。ネモアの魔道具が少し値を張るといっても、この男性店員。いや、店主の態度からも理解できた。

「えっと、魔道具について聞きたいのですが」

「はい、何でございましょう？」

「魔法を使わずに魔道具と同じような動きをするものってありますか？」

「は？」

ネモアの質問に、男性の眉が顰められる。

本の一瞬のことだったので、ネモアが話している後ろから男性を観察していた俺が、何とか気づいた程度だったが、明らかに男性の雰囲気は怠慢な物になっているのを感じた。

「魔法を使わないですか？　ここは魔道具専門店です、そういうたものは、ちよつと」

「あ……、そうですか」

「はい、申し訳ありません」

にこやかに返事をしているが、どこか見下したような態度が気に障る。

店で人を接客するものの態度か、と内心で毒づく。

どうでしょう？　とこちらを見てくるネモアに、小さく笑みを返す。

「すみません。私たち、オケアノス学院に通っている者です」

「ああ、あの学院の生徒さんですか」

「寮などにつけられている湯沸かし器、とてもよい品で。もしかして、こちらで取り扱っている物ですか？」

「はい。当店で納品させていただいています。当店の品は一級品ばかりで、そりゃ、良い品ですよ」

寮や校舎内にも設置されているので、そこそこ大きな店が納品しているだろうと思つての発言だが、気を良くした男性は嬉しそうに店内を案内する。

店内には様々な道具が並べられているが、ほとんどが箱型で一見するとそれが何だかわからない。

寮で見た湯沸かし器と同じような道具の前に連れて来られるが、箱型の上に水をためるべき場所とそれを出す蛇口を取り付けるよう

な場所が作られたすごくシンプルな物だった。

「こちらは最新型でして、熱効率を上げたものになっております」

「熱効率とは具体的にはどういった形で？」

「はい、中に描かれている魔法陣が最新式でして、今までの倍のスピードで温度が上がります」

「魔法陣以外の部分は何が変わっているのですか？」

「魔法陣以外ですか？ いえ、特に違いはございませんよ」

俺の質問に不思議そうに答える男性に、こちら営業スマイルを作りながらそうですか。と返す。

ネモアも不思議そうにしていたが、俺と男性のやり取りを見守っているようだ。

「この最新式と一つ前の型とでは、どれぐらいの値段に差があるのでしょうか？」

「そうですね、一つ前が2万円です、こちらの最新式が10万円になります」

「え？ 魔法陣が違うだけでそれだけ値段が違うのですか？」

「ええ。何せ最新式の魔法陣は使える魔術技師が限られていますからね。生徒さんと言えど、魔法陣を専門で勉強していないと解説などできないでしょう？ そのせいです」

つづけられた言葉に、俺の頭の中に最近やった授業の話が浮かぶ。魔法陣には描き順があり、描き順が異なっていると魔法は発動しない。それを聞いたときに思ったのは、電気機器などの回路だ。

描き順が違うという事は、回路が異なるという事。プラスの端子にマイナスの電気を流したらショートする。回路によって、明るさも違えば使用する電力量も違う。

この男性のいう解説とは、ただ魔法陣を描き写しても効果はない

ですよ。と、言いたいわけだ。

そして、その方法はこの店が握っているのだと。

ヘラント

湯沸かし器の後も、いくつか魔道具について説明を受ける。

そのどれもが魔法陣の出来の良さで性能が決まっっていて、周りの部分はほとんどが木などで作られている。

自慢げに話す男性に、適度に相槌を打ちながら聞き手に回る。

「どれも素晴らしいですね」

「貴方は価値をわかってらっしゃる」

「もう一つだけ、質問しても良いですか？」

「はい。私にこたえられる事なら何なりと」

「この街で一番性能の低い物を扱っている店はどこですか？」

「は？ 性能の低い物ですか？」

何を言われたのか分からないといった顔で、不思議そうな顔でこちらを見返してくる男性。

申し訳なさそうに苦笑いを浮かべながら、俺は次の言葉を続けた。

「ええ。間違えて入って無駄な時間を過ごすことがないようにと、参考までにお聞きしたいと思ひまして」

「ああ、なるほど。それでしたら、街の南にある店ですね。店名までは覚えていませんが、店というよりは露天で倉庫みたいな場所に魔道具が積んであるので見ただけでわかりますよ。お抱えの魔術技師もいないようですし、一般的な魔法陣ぐらいいしか扱えないでしょうね」

「そうですか。お忙しい中、色々教えていただきありがとうございます」

「いえいえ、魔道具をお求めの際はぜひいらしてください。多少なら安くして差し上げますよ」

「ありがとうございます、その時はよろしくお願いします」

機嫌よく手を振って見送ってくれた男性。

しばらく歩くと、一度振り返って小さく会釈をし、横道に入る。

店内で俺と男性が話し始めてから一言も会話に参加してきていなかったネモアが、少し不機嫌な顔でそっぽを向いている。

男性を持ち上げるようなしゃべり方をしていた俺に、何度が不満気な視線を向けてきていたが、その時は男性の相手で手がいっぱいだった。

「欲しいなら俺があのお店で買いますよ」

いつもの落ち着いたネモアの声ではなく、とげとげしい感じを隠しもせずに、じとつとこちらを睨みながら言うってくる。

それに苦笑いをしながら、放っておいて本当にあのお店で買われては困るので首を振る。

「あのお店の魔道具はいらないな。大した魅力もなかったし」

「……興味深々だったじゃないですか」

「興味があるのは、今から行く方の店だな」

言いながら先ほど男性に教えてもらった店を目指す。

街には道のところどころに、通りの名前が書かれた板が立っている、その上に方角の描かれた札がのっている。

ネモアは意味が分からないといった形で黙っていたが、俺が南に向かっているのに気付いたのか、不思議そうに首を傾げる。

「露天……に行くのですか？」

「ああ。多分、さっきの店よりは面白いと思うよ」

自然とはやる気持ちから、歩みがいつもより早い。

店にいた時間が長かったためか、昼前に出たというのに、3時ぐらいになつていた。もう少し早く出てもよかったのだが、中々最後の質問をするタイミングが掴めなかった。

話の腰を折るのは中々難しいものである。

しばらくしてついた街の南は、街の中心より離れているためか人通りは少なく、見える露天もどこか暗い。

南と言つても建物は街の中心に向けて建っているため、影になり並べられた商品を照らす領域が少ない。

ただ日の当たる場所より、本屋や雑貨屋といった、太陽の光で色変わりするのを嫌うものが店の外に並べられていた。

その中でも暗く、一件ガラクタが置いてあるのかと思われる店が、奥の方にあつた。

「ヘランド？」

ネモアの声の通り、店の屋根には大分かすれて草臥れた癖のある文字で書かれた看板があつた。

外から見る限りでは、店主は居ないようで、周りに人の気配もない。

「……ここ、魔道具の店ですよね」

「たぶんね。でも、どちらかと言えば、機械に近い」

様々な大きさの乱雑に積み上げられたそれらを見ながら、地球にあつたものと近い物があるのに気付いた。

洗濯機というものだが。

ただ、よく見てみると、二層式で昭和といった雰囲気だろうか。

中を見てみると左側にはプロペラのような物が置いてあり、もう

片方には側面や底に複数穴があげられている。

ボタンなどはついていないから、多分魔力を注いで使うのだから、
けど、どのように動くのかわからない。

店主

洗濯機の周りをまわりながら、いろんな角度から観察していると、店内を見回していたネモアが近くに来た。

「なんですかそれ？」

「んー？ 洗濯機、多分」

「洗濯機ですか？ これが？ 何故、2つもいれるところがあるのですか？」

ネモアの疑問に、専門店で紹介された洗濯機を思い出す。

他の魔道具同様少し大きめの木の箱で、上部が取り外し可能になっている物だった。

中には魔法陣が書かれているだけのただの箱で、俺としてはあちらの方が洗濯機と言われてもいまいちぴんと来なかった。

ただ、学院などでよく見られるのはどれも箱型で、中の魔法陣が違っただけのため、見分けは大きさとか周りについている部品ぐらいだろう。

「俺の良そうだと、左側で洗濯して、右側で脱水や乾燥ができるんだと思う」

「乾燥ですか？ 洗濯機なのに？」

「ああ、よくある洗濯機はそうじゃないのか？」

「えっと、乾燥機はありますが。どうしても水と火の要素を組み合わせるのは上手くいかないようで」

「一相剋>そうこくく<の作用があるからな」

最後の呟きはネモアにはよく聞こえなかったみたいで、首を傾げている。

どうやら相性が悪いというのは分かっているが、それがどうして
というところまで行っていないようだ。

日常生活で考えれば、水は火を消し、火は水を蒸発させるのだから
対立しているのはわかりそうなものだけだ。

魔法となると普段の法則は無視されている感じがある。

「うーん、多分底の方に何か仕掛けがあるんだろうけど」

「見ているだけですな？」

「もし触って壊れたら困るだろう。今日、完成したところ、とかだ
ったら俺は後悔しきれん」

授業で魔力は使おうという意思がなければ、無暗に魔法陣が発動
する事はないとは教えられたが、動いているところを見たいと思っ
ている時点で触れない。

動かす前に何をするのが分からないため、壊れる可能性が高い。
それでも日本を思い出させる洗濯機に、自然と気持ちは高揚する。

「誰かいるのか？」

飽きもせず洗濯機の周りを色々とみていた俺に、店の外から声
が聞こえる。

目を向けると、通りの方に柔道部やレスリング部を思わせる体格
の良い、男がいた。手には食材らしきものを持っていて、買い物帰
りなのが見える。

「この店の方ですか？」

「そうだが、何か用か？」

どこか不機嫌なその男に、ネモアは少し腰が引けているが。

この人が、この洗濯機を！

そう思うと自然と駆け寄っていた。

「ああ！ 帰ってきてくれてよかった！ さっそくで申し訳ないんですけど、あの洗濯機を動かしてください」

「は？ お、おい、ちよつとまで」

抱きつかん勢いで詰め寄ってしまい、男の腕をとっていた。

驚いた、というよりは若干ひかかれているのに気付いて、慌てて手を放す。

「すみません。突然……。あ、俺、オケアノス学院で学生をしていますケースケです」

「あ、ああ。オケアノスの学生さんか。珍しいな」

軽く頭を下げながら手を差し出すと、戸惑いながらも握り返してくれた。

近づいてわかったが、男はとても大きい。俺と並ぶと大人の子供。握手をする手は彼の手の平に完全に隠れてしまっている。

その手の平はがさついていて、所どころ豆がある。

「えっと、貴方の名前をお聞きしても？」

「ん？ 俺のか？」

不思議そうに首をひねる男は、じっと見ていた俺に苦笑いを返す。流石に見つめすぎたようだ。

「このヘランドの店主兼魔道具の作成をしている。マルクだ」

「マルクさん」

「さん？ いやいや、マルクか店長ぐらいにしといてくれ。てれくせえ」

「では、マルク店長。あの洗濯機はあなたの作品ですか？」

先ほどまで飽きもせずに見ていた洗濯機を指しながら、問いかける。

指す先を見たマルクは、ああ、と頷く。

やっぱりこの手が！ とまた変にテンションが上がりがけた俺の肩を遠慮がちに叩く手があった。

振り返ると申し訳なさそうに眉を下げたネモアの姿。

「すみません、ケースさん。そろそろ帰らないと」

「え？ もうそんな時間か？」

外を見ると空は紅く染まり始めていた。

日用品もまだ買ってないし、そう考えると少し遅いぐらいだ。

「あの店で、無駄な時間を過ごしすぎたか……」

小さく毒づくくとネモアが苦笑いする。

「あの、マルク店長。来週も来て良いですか？」

「ああ、別に構わんが。変わった奴だな……」

「あつ、俺はネモアって言います。よろしくお願いします」

自分だけ名前を言っていなかったのに気付いたネモアが、丁寧に頭を下げながら挨拶をする。

マルクは一瞬固まりながらも、「変わった奴らだ」と言いなおしていた。

実習

魔法陣の授業は基本的に実習になる。

実際に魔法陣を描いて発動するかどうかを確認する。化学の実験に近い。

授業で教えてもらえるのは、魔法陣の描き順とその効果。最初に教師が黒板に魔法陣を描き、各自が魔晶石を溶かした液体で木版に描き込む。

魔晶石を溶かした液体は、魔法液ともマジックインクなどと呼ばれている。

俺はマジックインクと呼んでいる。

今までの授業では教えられるままに魔法陣を描いていた。

先生もそういうものだという教え方しかしなかったし、授業数が多すぎて考える余力がなかったと、言い訳してみた事を考える。

よくよく考えると、描き順や描くモノが決まっているのだから、そこには法則があるはずだ。

早々にこの授業の分の魔法陣を描いて確認を終えると、今までに教えてもらった魔法陣を見返す。

魔法陣はほとんどが円で囲まれている。

最初に円を描き、内側に色々な模様を描き加えていく。

模様と言っているが、文字や記号らしきものが崩れて繋がったようなもので、自動翻訳機を通してても翻訳されないという事で、模様と呼んでいる。

簡単なものであれば、小さな火を起こす魔法陣で、円の中に三角形を描き上から水滴を落としたようなものだ。

一瞬しか火は発動しないが、魔法陣の実習ではじめに習うのがこれだ。

威力や強く、効果が複雑になるにしたがって、魔法陣の様子は複雑になっていく。その上描き順を一つでも間違うと、魔法が発動しないのだから覚えるだけでも大仕事だ。

まずは法則性を探するために、似ている部分を順に分解していく。円、四角形、三角形、文字とノートに分解前の魔法陣と効果、効果が近いもの、分解後の各部分が近いものと表を作っていく。もくもくとその作業を続けていっていたが、隣から視線を感じて頭を上げた。

「……何か用事か？」

「何しているのかなって思ったのよ」

いつの間に来たのか、隣の席に座っていたミリィは、俺のノートを覗き込んできた。

「魔法陣よね？ バラバラだけど」

「ああ、それぞれの意味が分かったら、理解もしやすいんじゃないかと思って」

「意味って、魔法陣の効果の事？」

「魔法陣を組み立てているそれぞれの模様の意味」

どう説明して以下わからずに、簡潔に述べると、ミリィは眉を寄せ、首を傾げる。

何をどうしたいかと言われると、今まで魔法陣に法則性を求めた人がいたのか、そういう考え方があるのかが分からない。

今やっている作業をそのまま伝えると、ミリィは再度いろんな表の描いたノートを覗き込んだ。

「法則ね。面白いこと考えるわね」

「そういった考え方ってないのか？」

「魔法技師とかならそういった事を研究しているかもしれないけど、一般ではすでにできた魔法陣を使うから構造的な事とかは考えないのよ」

授業で説明がないのもそのためだという。

もっと学年が上がれば魔法技師を目指す生徒も出てくるから、そういう事を教える授業もあるらしいが、中等学が上がってからだという。

ミリイはそれ以上興味がないのか、自分の課題に戻っていった。

実験

実習授業を魔法陣の分解と表づくりで終えた俺は、もっとも形式が多い火属性の魔法陣について重点的に調べる事にした。

座学の合間を見つけては、自分なりに資料を作成していく。

火属性の魔法陣には、必ずと言って良いほど火種になる部分がある。

水滴のようなものだったり、渦を巻いている物だったり、文字らしき物もある。発動時の威力が強い物から並べると、文字、渦、水滴といったところだろう。

ただあくまで火種であり、マッチかライターかバーナーかといったところだ。

燃えている時間や、炎の大きさ、熱量などは可燃性の要素によって異なっている。

火を燃やすという点で、一番最初に思いついたのは木だった。

初級の火の魔法がマッチで火をつけたような感じだったので、三角形の部分は木を表しているのではないかと考えた。

しかし、基本と呼ばれる魔法の属性は、火、水、風、地で。木を扱う魔法は複合魔法と呼ばれる属性であり、高度な魔法陣が必要だった。

火種となる部分が簡単であるために、可燃性の要素の属性が複雑とは到底思えず、次に考えたのが空気だ。

基本の属性の中に風が含まれるため、風属性の魔法陣についても表をまとめる。

風属性の魔法陣には、二通りの構成方法がある事がわかった。風を起こすものと、留まらせるものだ。

起こすものの多くは、風が流れる方向を記号であらわしているものだった。緩やかな曲線はそよ風、唐草模様が複雑に組み合わさっているのは強風。

留まらせるものは、起こすものに加え遮るべき境界線が描かれている。境界線と言っても起こす風の強さによって、ただの一本線であつたり、複雑な文字であつたりする。

初級の火の魔法陣の三角形の部分を、風を留まらせる境界線と考えるとする。

境界線で区切られた空白の部分に空気があると仮定すると、火種はその中の空気を使い切る間燃えることになる。

という事は、この空間が広ければ広いほど、火の燃える時間は長くなるか、炎が大きくなるはずだ。

「ネモア、準備は良いか？」

「はい、こちらは大丈夫です」

授業を終えた俺とネモアは、考えた仮説を証明するために、寮の自習室に来ていた。

自習室は魔法の練習をするために用意された部屋で、何も無い広く他より頑丈に作られた部屋だ。

広い床に魔法陣を描く用の大きな紙を広げて、火の魔法陣を描いた。

もし炎が大きすぎて火事になると困るので、ネモアにはすぐに消せるように効果の強い水の魔法陣を前にスタンバイしてもらっている。

自習室は申請を出せばだれでも使えるので、今はネモアと俺の二人だけだ。

長く深呼吸をすると、気持ち落ち着ける。

魔法陣に魔力を注ぐ場合、杖などを使って体内エネルギーを一点に集中させる事から始める。

体の中を循環させる感じで集中すると熱のようなものがだんだんと手のひらから杖に集まっていくのがわかる。

実際魔法が使えるのか最初は不安だったが、魔道具が使えている時点で魔法は使えると知ったのは魔法陣の実習が始まってからだ。

魔道具に使われる魔法陣に求められるのは、普段無意識に体の周りにある体内エネルギーで無理なく使える事らしい。

それを意図的に杖に循環させる感覚に慣れるまでは大変だったが、何度か練習するうちにこちらでいう普通程度には使えるようになっていた。

魔法陣に杖を向けると、一気に放出する。

ポ　　ッ。

音にするとそうだった形だった。時間になると一瞬。

2人しかない室内では音がなくなった。

あれだ、実験には失敗が付きものだ。

検証

あの後大きな違う火の魔法陣を描いて、魔法を発動させてみた。その結果、火の魔法陣だと視覚的に判断できればかなり小さい物まで魔法は発動し、効果もマッチの火程度だった。

魔力量も調整してみたが、量による効果の差はなく、変わりに最低限必要な魔力量があることが分かった。

「ケースケさん、顔色が悪いですよ」

ネモアが水を差しだしながら、心配そうに眉を寄せる。

受け取るうと腕を伸ばすが、思ったよりゆっくりと上がっていくそれに、自分が想像以上に疲れている事に気づいた。

魔力は体内エネルギーを使用する。

実際、この体内エネルギーが何を指しているのか、詳しいところはわからないが、魔法を使うたび、体の中から何かが抜けていく感じがする。

使い続けると運動をした後のように、体が重くなっていく。

今はその疲労がピークに達する寸前のようで、ネモアが言つとおり顔色は相当悪いのだろう。

「ちよつと、一気に確認しすぎたな」

「あれだけ魔法を使えば、こうなることを予想できたのに。止めずにすみません」

「いや、離れていたし。気付かなくてもおかしくない」

自分の体のことだから疲れたと感じたときに、適度に休憩をはさめばよかったのだ。

普段授業でもここまで魔法を駆使することはないので、この充電

切れの状態になった体内エネルギーはどうすれば元に戻るのだろう。

「ネモア、体内エネルギーってなんだ？」

「……えっと、体内エネルギーは体内エネルギーですよね？」

「言い方が悪かった、体内エネルギーってどうやったら回復するんだ？」

問い直すとネモアは難しい顔をする。

「休息をとってしっかり体を休めると回復しています」

「体力と同じようなものか？ だったらマツサージとかすれば早く回復するとか？」

「そこまで、考えた事がなかったので。ただ、人によって回復にかかる時間が違う事は確かです」

人によって回復にかかる時間が違う。

魔力量も人によって違う。

記録していた実験のノートを開く。

火の魔法陣に最低限必要な魔力量を1とすると、俺がこの実験で使用した魔力量は大体60だ。

この数字が大きいか小さいかはわからないが、何度か充電切れまで魔法を使い続けると、自分の魔力量がある程度正確にわかるだろう。

ただ怖いのは、体内エネルギーが体力と同じようなものだとすると、人は疲れていると病気になるやすい。

免疫力の低下や体力良し悪しで、病気に対抗できるかどうかに差が出る。

体内エネルギーと言われているが、これが生命エネルギーならば今の俺はギリギリ生きている状況になる。

「魔法の使い過ぎで死んだ人とかいるのか？」
「……死んだ、とは聞いたことがあります」

一瞬言葉につまったネモアに視線を向ける。
次を言うのをためらっているネモアに、目で続きを促すと、口をしばらく開閉させた後小さく息をついていた。

「魔力が中々回復せずに、寝たきりなどは年に1人か2人はいると聞いています」

という事は、今の俺の状態は結構死活問題だ。
このまま回復しないと、一生ベッドから起き上がれなくなるかもしれない。

「ケースさんは、とりあえず休まれた方が良いかと」
「そうだな……。ひとまず部屋に戻って……」

さらに青くなっただのであろう自分の顔に、ネモアの言葉を聞き部屋に帰ろうとしたのだが。

立ち上がるうと力を入れた足は、情けないぐらいいい震え、一歩踏み出そうものなら前方に倒れる映像が容易にイメージできた。

歩けない様子の俺に、ネモアが背負って部屋まで運んでくれたのだが。

この年になって、年下におんぶをされるとは夢にも思わなかった。

検証（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます。

お気に入りもだんだんと増え、日々見に来て頂いている方には嬉しくて、続きを書く原動力となっております。

自分で読み直して、誤字・脱字が目立っているところもあり、読みにくい部分もあります。

ある程度区切りがつけたいら、修正したいと思しますので、お気づきの点がありましたらご指摘いただけるとありがたいです。

今後ともよろしく願います。

休息

魔力切れを起こした次の日、俺は授業を休むこととなった。

寮に運び込まれた後、保険医に一通り体の異常を確認してもらい、数日休んで魔力が回復するかどうかの経過を見てみないとわからないとのことだ。

自分でまっすぐ歩けはしないにしても、立ったり座ったりといった動作はできているので、様子見だそうだ。

ネモアも休んで看病をしてくれると言ってくれたが、変わりに授業を聞いて後で説明してくれるようお願いすることで何とか納得してもらった。

ベッドから届く位置に置かれた水差しと、お腹がすいたときにいつでも食べられるように用意された果物類。

重たく感じる体をベッドの背にもたれかけながら、水を飲む。

昨日に比べると幾分か動くのが楽になってきたようだが、壁を支えにしないと一人で歩くことができない。

熱や喉の痛みはないが、風邪のひどい症状に似ている。

最悪の事態に陥っていなかったことを、ただ喜び、十分な休息をとって回復に努めるしかない。

改めて思ったがこの世界の魔法は、今まで俺の中にあつた魔法の幻想をどンドン崩していく。

呪文を唱えて簡単に発動するわけではないし、下手をすると後遺症になりかねない。

今まで魔法というものと無縁だった俺が、魔法が使えると少しはしゃぎすぎた結果ではあるが、魔法とは何かを知らないと本当に命の危機になってもおかしくない。

ネモアが魔力切れを起こしたら、体に異変がでる事を知っていた

という事は、こちらの常識的なものなのかもしれない。ネモアが勤勉だという事かもしれない。

どちらにせよ、使う方を色々と調べる前に、使つたの方を調べないといけない。

「ケースさん、お昼用意しました」

「あ、ああ。ありがとう」

考えに没頭してしまっていたためか、ネモアが部屋に入ってきた事に気づかなかつた。

お盆には野菜と肉をドロドロに溶けるまで煮込んだスープのようなものが乗っている。こちらでいうお粥のような物みたいだ。

病気ではないので普通の食事でも良いと思っていたのだが、保険医のすすめらしい。

味付けはほとんどされていないが、様々な野菜と数種類の肉が煮込まれているためか、栄養はとても高いらしい。

「これが、午前中のノートです」

「ありがとう」

「俺は午後も出ますけど、少し動けるようになったからと言って無理しないでくださいね」

「わかつた。助かるよ」

パラパラと受け取つたノートを見ると、きれいにまとめられていた。

先生の話もメモとしてとられているようで、たまに書き方の違う文字がいくつかがあつた。

多分、ファンたちだろう。

また会つたらお礼を言わないと思ひながら、ネモアに言われた通り今日は一日寝る事にした。

編入生（前書き）

本日分を投稿するのを忘れていました。
何とか日付が変わる前に投稿できて、一安心しております。

編入生

「ケース君、調子はどう？」

そういいながら入ってきたのは、エレイ先生だった。

手には果物の入った籠を持っていて、世界は違うのにお見舞いの品は同じなのか、一瞬凝視してしまった。

大分動けるようになったからだを自力で起こすと、途中でエレイ先生が手を添えてくれる。

「ありがとうございます」

「いえいえ、それより私、謝らないといけないの」

そういうとエレイ先生は暗い顔でうつむいた。

言いつらい事なのか、手を前で組むと指を忙しなく動かし、目はちらちらとこちらを伺うように何度も向けられる。

お茶を入れにいていたネモアが部屋に帰ってきてても、何も言い出せないエレイ先生。

「……あの、謝るって何をですか？」

だんだんと待っているのが疲れてきたので、声をかけるとびくつと跳ね上がる肩。

何かわからないが、とてもまずいことなのだろう。

聞きたくないような気はするが、このタイミングで謝るという事は、今回の魔力切れに関する事なのだろう。

エレイ先生は俺の担任で、授業は語学と数学と、魔法の基礎。

「ごめんなさいっ！ 私が、しっかり教えていればこんなことには

ならなかったのに！」

この世界に来てからよく見ている気がする。

床に土下座をするエレイ先生。

建前上、年上で先生に土下座をされるというものは、すごく居心地が悪いわけで。

隣でネモアもどうしてよいのかわからず、呆然としている。

「……エレイ先生、一先ず落ち着いてください。話をしましょう」

優しく言ったつもりだったが、中々頭を上げてもらえなかった。

「ごめんなさいを繰り返し、私が、私の所為で、教師失格、などという言葉を不安定な音程で言う姿は呪いでもかけられているのかと思ってしまうた。」

とにかく不気味だ。

ネモアも俺と同じなのか、何とか話をしようと慰めながら、お茶を差し出したりしている。

流石に俺はまだベッドから降りれないので、言葉で慰める。

「1時間ぐらいに感じたが、実際は30分も経っていなかったのが不思議だ。」

何とか顔を上げたエレイ先生は、目に涙をいっぱいためていて、ただ大人としてのプライドなのか、それを何とかこぼさないように頑張っていた。

鼻の頭が赤くなっているので、土下座をしている間は泣いていたのかもしれない。

「ごめんなさい。感情的になってしまって……」

「いえ、大丈夫です。あの、それで、今回の魔力切れの事をエレイ

先生は謝っているのですよね？ でも、これは俺の自業自得というものではないかと思っっているのですが？」

「自業自得と言っってしまうばそうかもしれないけど、ケース君は魔法を知らなかったのよ。私は理事長から常識の面も注意してほしと言われていたのに、それを真剣に考えていなかった」

真剣に考えていなかった。

俺が編入生で、授業にも問題なくついてこれて、教科によっては成績優秀と呼べるだろう。

普段の生活でも突飛して非常識な事をしているわけでもなく、礼儀作法も申し分ない。

だから忘れていたのだと。

問題ないと思っってしまったのだと。

「ケース君は、魔法を知らなかったのに。私はそれも知っていたのに、本当にごめんなさい」

土下座ではないが、深く頭を下げるエレイ先生。

確かに、エレイ先生の言っっている通りかもしれない。

だけど、魔法が使えることに浮かれていたのは俺だし、魔力を消費するたびに疲れは感じていた。

ゲームや小説などと同じように感じていた自分。

「エレイ先生、魔法の基礎や常識を教えてください」

エレイ先生の目をしっかりと見つめた。

一瞬たじろいだ彼女だったが、力強く頷き返してくれた。

補習

魔力切れを起こしたのが月曜日、それから丸3日、ベッドの住人となった。

やっと保険医の許可も下りて、今日から授業を受けれるようになったのだが、体を動かす実技は見学だし、少し無理をすると貧血のようになる。

無理をしないように、と言われていたのと、それを確実に遂行しようとしているネモアがいるおかげで何とか授業に参加できている。

「ケースケ、魔力切れで休んでいたのよね？ 大丈夫なの？」

「何とか……。あ、授業のノート一緒に取ってくれたんだよな。ありがとう」

「困ったときはお互い様ですから、無理しないでくださいね」

「そうだぞ、ケースケただでさえ細いんだから」

剣術の時間などで、高校時代より運動量が増えたため、多少は筋肉も持久力もついてきたが。

ウィズの言うとおり、まだまだ細い。

ウィズと比べると丸太と棒で、ファンと比べても一回りは細い。

もともとの骨格の違いもあるだろうが、もう少し体力をつけないと今後の授業についていけるかが心配だ。

放課後、エレイ先生のもとでさっそく常識について学ぶこととなった。

まず広げられたのはこの世界に初めて来たときに見た、地図だった。

ただ大きさは壁一面を覆うほどで、天井からぶら下げている。

常識の部分の大半は入学して1、2年で学習することになるようだ。

大陸、種族、礼儀作法、魔法。

編入生として入ってくる生徒は、あるていどこのあたりを自分で学んでからやってくる。

普段は編入試験にそういった一般常識のテストが含まれるのだが、今回の俺の場合は特異な状況であったため、環境を優先するために一般常識の部分を省くという理事長の好意だ。

そのため、エレイ先生には気を付けるようにという指示があったのだが、何せ初めてのことで、彼女が不慣れな事も重なったことが原因にあげられる。

「では、まずエルコティアソフィアについて話していきます」

エルコティアソフィアの大陸はその昔、一つの大陸だった。

あるとき天から一筋の雷鳴が響き、大地は2つに割れた。今でいう、ノシルフィとアポテメタン、シンフォアとイエルザの元となった大陸。

その頃の大陸に名前はないが、今はノシルフィ側がロア大陸、シンフォア側がムア大陸と呼ばれている。

これは空に浮かぶロアとムアからなぞられたもので、太陽がロア大陸から登り、ムア大陸へと沈み行くからだ。

大陸が2つに割れたことにより、海流が生まれ気候が変わった。

そして、ロア大陸は大津波によって、ムア大陸は大規模な地割れによって、今のノシルフィ、シンフォア、イエルザ、アポテメタンの4大陸に分かれた。

さらに割れた海流はそれぞれの大陸を、まったく違う個の大陸として成長させていった。

いつしか生き物は自然に順応し、人、亜人、魔人とう種へと異なる進化を遂げる。

異なる種は異なる能力を持ち、互いを尊重しあう事で、エルコティアソフィアは繁栄しえていくのである。

エルコティアソフィアの歴史。と書かれた本をエレイ先生が閉じる。

幼い子用にまとめられた本なのか、挿絵なども結構あり、絵本と
いった印象が強い。

わかりやすく、きれいにまとめられた話、だと思った。

魔法

エルコティアソフィアでの魔法の起源は意外と浅い。

魔道具などが一般的に普及してきたのは80年前のことで、オケアノス学院ができたのがその10年前だ。

魔法技師と呼ばれる魔法陣の開発を専門とする職業もこの前後から一般に認知されるようになった。

この原因の一つとして、魔法使いと弟子という関係でしか魔法が受け継がれず、大衆の目の前で魔法が使用されることがなかったためである。

魔法という技術が世間に認知されることとなったのは、ある国の王の発言だった。

アニユキス国の第14代カフォス王、オケアノス学院の創設者である。

カフォス王は大変勤勉な王で、幼き頃より様々な師に学び、魔法という技術があることを知ると魔法使いに弟子入りした。

そこでカフォス王は知る。

木も火種もなくとも火を起こせる術、川が無くとも水を出せる術。カフォス王は勤勉で、そしてとても国民を思う王だった。

魔法という技術が一般的に使用できるようになれば、国民は今よりもっと過ごしやすい生活を送ることができるのではないかと。魔法を広めようと、考えた。

それと共に、今まで一部の人しか学ぶことができなかった学問を学ぶ機会を与え、知識を広めようと。

カフォス王は知っていた、王になり、より良い国を作るためには、知識が必要だと。知識は国のためになると。

側近で幼馴染でもあったヒュペリオンと、各大臣と何度も会議を

重ね。オケアノス学院を創設し、国家魔法士という位、魔法技師という職種を新たに作った。

オケアノス学院の初代理事長にはヒュペリオンが就き、各国の優秀な人材を教師として雇い、彼自身も教育者として魔法を教えた。

ヒュペリオンはオケアノス学院の理事長であり、魔法使いであり、教育者であり、魔法技師であった。

彼は魔法についての数々の本をのちに執筆する。

代表的なものとして、『魔法の基礎』『世界の魔法陣』『魔力について』などがあげられる。

ヒュペリオンの執筆した本は、オケアノス学院で魔法の基礎を学習するための学術書として今でも使用されている。

特に『魔力について』は彼の研究の中で最も力を注いでいた部分で、内容はほとんど仮説でしかなく、彼独自の考えしか書かれていないが、様々な視点から魔力を観察している。

魔法とは？

そう初めに疑問を思い、解明しようと研究し続けたのは彼が最初だろう。

いまだに『魔力について』で述べられている仮説の全てを証明することも、明らかに否定することも、現在の魔法使いの中にできる者はいないが、そのいくつかは証明され、また残りのいくつかは否定された。

放課後の補習で、「魔力とはなんですか？」と聞いた俺に、エレイ先生が答えてくれた話だ。

「決して無理をしないように」という言葉と共に渡されたのは、ヒュペリオン著の『魔法の基礎』『世界の魔法陣』『魔力について』の3冊。

無理をさせないというネモアの監視のもと、受け取った本を順番

に進み進めていく。

『魔法の基礎』は補習の時に聞いた内容と変わるところがあまりなく、『世界の魔法陣』様々な魔法陣が効果と共に書かれていた。個人的に一番気になっていたのは『魔力について』だったが、エレイ先生のすすめで先の順番で読むことにした。

基礎と世界の魔法陣の知識が、『魔力について』では、説明もなしに出てくるからだそうだ。

魔力

魔力とは自然エネルギーと体内エネルギーを混ぜ合わせた状態の事を言う。

では自然エネルギーと体内エネルギーとはどういうものなのか。

この世界には精霊や聖獣と呼ばれる自然の流れを感じ、自らの栄養として使用できる存在がある。

彼らは自然と共に生き、自然と共に暮らしているため、風景と同化してしまうほど自然に近い存在だ。

また、精霊と同じく自然の流れを感じ、自らの栄養とする魔物や魔獣といった存在がある。

精霊と魔物といった彼らの明確な違いはない。人や家畜を襲うものが魔物、以外が精霊という何とも曖昧なものだ。

言わば、精霊だったとしても、人を襲えば魔物と呼べるだろうし。魔物だったとしても、人を助けるかもしれない。

現にある地方では精霊と呼ばれているものが、べつの地方では魔物と呼ばれているなんてことは少なくない。

そして彼らはどちらとも自然エネルギーの扱いに長けている。

体内での魔力を生成する構造ができていいのか、魔法陣を使用せずに魔法を使用することができるものが多い。

つまりは彼らの生体を調べれば、魔力というものに近づけるのだと思う。

ただ彼らは特殊で、死ぬという状態がない。彼らは世界でその個を維持できなくなると、消える。

消えるといっても、消滅しているのか、何かに吸収されているのか、それを確認する方法はまだない。

もし何か、自然エネルギーとして消滅と共にエネルギーになっているのだとすれば、彼らそのものが自然エネルギーという事になる。

そうなる。魔力は自然エネルギーだけで構成され、それを使うと魔法は彼らのように魔法陣なしで使用できることになるだろう。

『魔力について』には、こういった仮説がいくつも書かれている。中にはヒュペリオン自身が仮説を証明したものと、否定したもの。また、ヒュペリオンの死後、彼の弟子や彼の仮説に興味を持った者たちが証明、否定したものが追記されていた。

何年かごとで改定されているようで、本の裏に年月とナンバーが書かれている。

周期は不定期で、ここ三年は更新されていないか、エレイ先生から借りた本が古い物かのどちらかだろう。

最高峰の学び舎と呼ばれているぐらいだから、こういった資料も新しい物だろう。

「精霊と魔物ね、ネモアは会ったことある？ 精霊や魔物」

「師匠に連れられて、何度か見に行ったことはあります。魔物は危険が多いので、精霊がほとんどでした」

「やっぱり、違いとかがあってあるのか？」

「俺はちよつと疎いのか、違いがあんまり……。精霊だと言われても、恐怖感は消えませんでした」

苦笑いをしながら少し恥ずかしそうに答えるネモア。

「精霊とか魔物と聞くと、見た目をまったく違うものを創造してしまふ。人型と獣型とか。」

「精霊とか魔物ってどういった形なんだ？」

「俺が見たのは犬とか馬とかに近いものと、固体を持たない不安定な物体でした」

「不安定？」

「はつきりというよりは、そこに何かがあるといった形でし

よ
う
か？
「？」

何かある、って、幽霊じゃあるまいし。

日記

精霊や魔物について気になった俺は、ネモアとファンと共に図書室にやってきた。

ネモアは俺が無理をしないための監視が目的で、ファンには参考となる資料と一緒に探してもらっている。

ファンにもネモアと同じように精霊や魔物を会ったことがあるか聞いてみた。

「会ったことはないです。精霊も魔物も普段は人里に来ることがないので、普通に生活している人は会わないですね」

ヒュペリオンと同じく、精霊や魔物を研究としている人や、人を襲ってきた魔物の退治といったことでもない限り一生会わずに過ごすことも少なくないという。

ファンも一時は精霊や魔物関連の資料を読んでいたことはあるらしいが、その危険度から会いに行こうとは思わなかったらしい。

図書室にはそれ関連の本がたくさん保管されていた。

ただ、図鑑のようなものや生態や属性別に分けられた資料のようなものを想像していたが、実際はスケッチブックのようなものだった。

ひたすら絵が描かれていて、稀に説明書きがされている物がある。詳しい生態は分からず、これらの資料に関しても、見つかったものから絵にしてまとめられているようだ。

写真というものはないみたいで、様々な人が描いた絵のため、その精度も様々だ。

「獣系が多いのか……」

「形を成しているのは、そうですね。形のない物は中々表現できな

いですし」

「なるほど。形のない方の資料とかは？」

「これが一番わかりやすいかと」

渡されたのは分厚い本。

中を見ると今までの資料とは違い、ページが黒くなるくらいに細かい文字が書き込まれていた。

各ページの書き出しには日時と天気、気温などが書かれていて。その内容は日記といった感じだろうか。

観察記録というには別の情報が多い。

「『ティアの旅行記』？」

「はい、旅の途中で会った精霊や魔物のことが書かれています。全体の半分以下ですが、観察力と表現力が良く僕としてはとても読みやすかったです」

「へえ」

分厚い本は、最初の日付が今から10年前、最後の日付がその2年後になっていた。

何日か日付が飛んでいることもあるので、書かなかったのか、必要なところだけ本にしたのかのどちらかだろう。

日記と言えば、日本語を忘れないために書き始めたものが、すでにノートに半分になっている。

前までなら三日坊主で終わるところだが、これほど続いたのは初めてだ。

無意識に夜になるとノートを開いている。

忘れてしまうという恐怖感が、刷り込みのように行動に移させている。

一度、日本語で読み返しているときに、ネモアに心配された。

意味の不明な音を途切れることなく紡ぐ俺が、何かに憑りつかれ

たのかと思っただらしい。俺にこちらの言葉がただの音に聞こえるのだから、そう思われても仕方がない。

故郷の言葉だとちゃんと説明すると、逆に謝られた。

一週間

今週は魔力切れややりたいことが多すぎて、気が付けば一週間がたっていた。

そのせいか、ネモアに言われるまでヘランドに洗濯機を見に行く事を忘れていた。

「明日どうしますか？」

その質問に「何が？」と返してしまっただけくらいに。

今週は色々とあって、疲れも出ている事だし、来週にしたかどうかと言われたが。ただ見せてもらうだけにするから、と押し切った。すっかりと忘れてはいたが、思い出すと気になって仕方がない。

ネモアと話し合い、先週と同じく昼頃に出かけて、外食をしてからヘランドに向かう事にした。

今回はあまり興味の持てなかった高級店による必要もないし、日用品の買い出しを含めても洗濯機を見るには十分な時間が取れる予定だ。

幼い頃の遠足に行く前日のようなドキドキで、寝付けないかもしれない。

ネモアにそういつた俺だったが、横になって数分で夢の住人となった。

ぐっすりと寝た俺は、いつもより早く目が覚めた。

どうやら俺は寝付けないタイプではなく、早く起きてしまうタイプだったみたいだ。

ネモアはまだ起きる気配がなく、暫くすることもなく寝顔を見ていたが、少し疲労が浮かんでいた。

今週はいつも以上に迷惑をかけたからな。別の日にした方が良かったかもしれない。

「ん……」

「あ、わり、起こしたか？」

「……、おはよ　ございます　」

「おはよう」

寝起きのぼんやりとした顔で、掠れ間延びした声であいさつが来る。

まだまだ時間に余裕があったので、二度寝する事に決めたらしいネモアを横目に、図書室から借りてきた『テイアの旅行記』を開く。昨夜は寝るために、本棚に入れたままにしていた。

しばらく朝の鳥の声とネモアの寝息をバックに、本の文字に目を滑らせた。

精霊と魔獣について読み始めた俺だったが、『テイアの旅行記』にはそれ以外にもさまざまな事が書かれている。

旅行記なのだから、基本的には旅をした場所の事。

ただ、内容は濃く、地形であったり気候であったり、生えている植物であったりと、テイアが見て感じた様々な事が書かれている。

中には種族の掟だとか、それを知らなくてひどい目にあいかけたとか。テイアの文章は俺にとって感情移入しやすく、すぐにその世界に入り込んでいった。

テイアの世界にどっぷりと浸りきっていた俺は、ネモアが起きていた事にも気づいていなかった。

そろそろ良い時間だと声をかけてきたネモアに、驚いて思わず変な声を上げてしまったぐらいだ。

「あれ？ ファン？」

「おはようございます。結構前に来ていたんですけど」

部屋の中には居ないはずのファンがいた。

どうやらネモアはファンのノックの音で起きたようだが、俺はどれだけ集中していたんだと苦笑いをしてしまった。

「悪い、気づいていなくて。おはよう」

「いえ、それで、ネモアには話したのですが。俺も一緒にヘラントに行っても良いですか？」

「ヘラントに？」

なんでその話を知っているんだろう？

疑問に思った俺の表情がわかったのか、ネモアが説明してくれた。ファンが今はまっけているのが、魔道具の資料を探す事らしい。それを聞いて知っていたネモアが、ファンに声をかけたのだそうだ。

相談をするのを忘れていたと謝るネモアに、謝られることでもないからと止める。

ファンには度々資料を探すのを手伝ってもらっているし、いずれお礼でもしないといけないと考えていたので、こんなことがお礼になるかは分からないが。

それでも、機械よりの魔道具に興味を持ってくれる人が増えることは単純にうれしい。

一週間（後書き）

遅くなりましたが、本日分を投稿いたします。
明日は昼過ぎ頃に投稿する予定です。

洗濯

今回はファンのおすすめの店で昼食を食べた。

食べている間も洗濯機の話が中心で、つい出てしまった機械という言葉に、ファンは興味津々だった。

ファンによるとこちらの世界でいう機械は、水車や風車など、大型で自然の力を利用するものとの事。

湯沸かし器や洗濯機などは、魔法技術者などが世に出だしてから、魔道具として作られたのが初めてで、それまでは火を起こして湯を沸かし、洗濯板で洗濯をしていたらしい。

風車とかがあったのだから、機械作りの技術が進歩してそうな気がするのだけど。

そこまで考えて、こちらの世界では電気をいまだに見ていない事を思い出した。

変わりとなる物が魔力で、動力部が魔法陣なのだろう。

しゃべりながらだったので、思ったよりゆっくりと食事を終えたが、ヘラントに着いたのは1時を少し過ぎたところだった。

店主も昼食を食べる時間は必要だろうから、ちょうどよかったのかもしれない。

「マルク店長、いますか？」

入口からは前回と同様人の姿は見えなかった。

ネモアは俺の横に立ち、ファンは興味深そうにまわりを見回している。

カウンターの奥にあるドアからくぐもった声が聞こえたかと思うと、少しして中から作業着姿のマルクが姿を現せた。

「本当に来たのか？」

「え？ 来ちゃまずかったですか？」

「いや、まずい事はないが。こんな寂れた店に来るとは、変わり者だな」

豪快に笑いながら汚れたエプロンを脱ぎ、手を洗っている。

さっきの部屋は作業部屋なのだろう。

「そんなことないです」と否定しながらも、視線は奥の部屋に向いてしまっている。気になる、どういったところなのか。

ファンが自己紹介を済ますと、さっそく洗濯機を見せてもらう事にした。

持ってきた汚れのついた服を渡すと、準備が良いなと笑いながら言われた。

それを左側に入れたマルクは、透明の四角い板を取り出しふたをするように上に置いた。

板の中心には、魔法陣が描かれていて、どうやら初級の風の魔法陣のようだ。

その周りに本体に流れるように、魔力を流す溝が掘られている。本体側にも魔法陣が描かれているのだろう。

「このレバーを先に下げて、こいつに触れて動かすんだ。やってみるか？」

「えっと、触っても大丈夫ですか？」

「ああ、そう簡単には壊れないさ」

笑顔で答えるマルクを見て、俺ははやる心臓を沈めて少し息をつき、まずはレバーを下げる。

ガコンッ。

音と共に中に開いていた穴をふさがれた。どうやら、二重になっ

ていたみたいで、外側の板か何かが下に下がった音のようだ。

底の部分の穴もふさがれていて、どういっ仕掛けなのか気になる。

次に板の魔法陣に手を触れる。

風が水槽の中を回り、洗濯物を回転させる。

上の方から水が流れ、水槽の5分の1程度で止まり、風によって渦潮のようにかきまぜられる。

よく知っている洗濯機の動きだ。

しばらくすると風が収まり、中には水につかった洗濯物があった。

「次はレバーを上げて、もう一回動かしてみろ」

マルクの言葉にさっそく動かす。

この洗濯機は思った以上にすごい。

脱水もできる。

たまっていた水は、無数に開いた穴から下へ流れ出て、洗濯機の後ろに取り付けられた排水口から外の溝に流れ出る。

また風が回り、今度は中の洗濯物の水分を飛ばしていく。

しばらくして止まると、マルクは板をどけ中の洗濯物を取り出し、俺に渡してくる。

日本にいたときに使っていた洗濯機の脱水とまではいかないが、水浸しというほどではなく水は垂れない。

言われる前に右側に入れた俺に、マルクは先ほどと同じ板でふたをした。

手を触れると左側と同じように洗濯物が回る。違っのは洗濯機の周りの温度が少し上がった事だろっ。

よく見ると上の方で火の魔法陣が起こされていて温められた空気を循環させているようだ。

同じように止まった風に、マルクが板をどけ、洗濯物を取り出す。

湿ってはいるが、何度か乾燥をさせると、しっかり乾くだろう。

技術者（前書き）

遅くなりましたが、本日分投稿です。

いつの間にか総合評価が、3桁です。ありがとうございます。

今後も頑張って更新していきますので、よろしくお願いします。

技術者

「これが、魔道具？」

少し濡れている洗濯物を、もう一度乾燥させてもいいかマルクに聞いていた俺はその呟きに振り返る。

後ろから聞こえた疑問を含んだ声色に、眉間に深く皺を寄せたファンが腕を組んで考えこんでいた。

ネモアもファン程ではないが、難しい表情をしている。

俺としては、魔法で動く道具。イコール、魔道具という考えのため、ファンが何を悩んでいるかわからない。

まあ、心の中では、マルクの作っている物は機械だと思っているけど。

専門店にあった魔道具と比べると、確かに違うが、こういったものは今までなかったのか？

「マルクさん、これは魔道具ですか？」

「魔道具のつもりで俺は作ってたけどな」

どうしても納得できないのか、製作者であるマルクに尋ねたファンが、その答えにさらに眉間の皺を深くした。

何か問題でもあるのだろうか。

魔道具についての専門的な授業が始まるのは中等学からで、今の時点の俺に魔道具の知識はない。

勉強家のファンが魔道具について調べていて、それでもマルクが作ったものが魔道具か疑うとなると。

「こついった魔道具って、ないのか？」

「……僕が探した資料にはなかったです。それに、一つの魔道具の中に複数の魔法陣が使用されているなんて……」

「前に話しましたが、火と水の魔法とかは相性が悪いので、魔法陣を複数使用しようとする魔法使い自体が少ないです。だから、魔道具の製作者はより良い魔法陣を開発するのですが」

どこか遠くを見るように呟くファンに代わって、理由をネモアが続ける。

確かに火と水は相性が悪いが、マルクの作った洗濯機は火と水の魔法陣自体は分かれているわけで特に問題がないだろう。

というより、よくある魔道具の洗濯機は、いったい何の魔法陣を使っているんだ。

そのままネモアに聞くと、水の魔法陣だけだと答えられた。

どうやって、かき回すんだよ。

率直な感想だった。

機械の洗濯機を知っている事と、マルクの作った洗濯機が風で回転させていた事から、出た感想だったが。

水の魔法陣自体に、回転の要素が入っているらしい。

ただ水を出すだけなら簡単だが、回転となると、難しいのではないだろうか。

「うちはそんな高価な魔法陣なんてかえないからな。一般に知られているやつとなると、組み合わせるしか思いつかなかったな」

マルクの言葉にファンとネモアは開いた口がふさがらない、といった形だ。

俺としては、魔法陣の改良に力を注いだ、マルク以外の技術者達の感情の方が不明だったが。

この世界にいる大多数は、魔法陣を改良する派らしい。

魔道具という世間一般での固定概念というものが出来上がっているために、良い魔法具は良い魔法陣という図式ができているようで、マルクの魔道具は、中々売れないのだとか。

一般的な魔法陣を使っている割に、値段が高いというのも原因のようだ。

高いといっても、専門店で売っていた最新の洗濯機の魔道具よりは、大分安い。

その上、乾燥機までついているのだから、かなりお得な気がするのだが。

「一部の知り合い以外には売れていなくて、毎月赤字だけどな」

と、豪快に笑うマルクがいた。

趣味

「ケースケさんの言っていた、機械という意味が分かった気がします」

ファンの言葉に、ネモアも頷く。

ヘランドで他にも、熱伝導部分を改良した湯沸かし器に、洗濯機を小型かした食器洗い機など、マルクが開発した様々な魔道具を見せてもらった。

どれも発想が地球と近く、改めてマルクと固く握手を交わす程に感動した。

今度行くときは工房の様子も見せてくれるらしく、汚れても大丈夫な恰好で来るようにと言われて店を後にした。

ファンは洗濯機が気に入ったらしく、寮の自室に置くために一台買おうとしていた。

部屋の大きさに少し大型のため断念していたが、実家に送るらしい。ネモアも洗濯機と湯沸かし器、食器洗い機を購入し、実家に送っていた。

マルクは満面の笑顔で他の品物も宣伝していたが、時間が遅くなってきていたので、次回に持ち越す事にした。

「魔法の力を最大限に利用する魔道具の開発技術。マルクさんはすごいですね」

「なんであんなに良い物が、世に広まらなかったんだろうな」

「ケースケさんに連れて行かれなかったら、俺にはあそこが魔道具を扱っている店には到底見えなかったです」

「そういうものなのか……」

マルク自身が半分趣味のように開発をしているので、あまり宣伝活動とかはしていなかった所為もあるだろう。

しかし、今回のことで、異なる魔法陣を組み合わせるという考え方自体は、小数ではあるがある事がわかった。

マルクも、化学反応とかそういったものを考えた訳ではなく、試行錯誤を繰り返して、洗濯機を開発したと言っていたため、化学が発展していないことが浮き彫りになったが。

となると、今教わっている魔法陣の考え方も、少し違うのかもしれない。

寮に戻った俺は、調べていた魔法陣の表を取り出す。

実験で、魔法の効果は魔法陣の大きさや魔力に関係ないことは分かっている。

それは初級の火の魔法陣の、三角形の部分が空気を意味しているからと考えていて、空気の量だけ燃えると思ったからだ。

じゃあ、風の魔法陣を大きく書けばどうなるのか？

さっそく自習室に行こうとした俺は、ネモアに止められた。

「魔力切れを起こしたばかりじゃないですか」

「頼む、今知りたいんだ。無理はしない、少しでも疲れたらすぐにやめるから」

「……俺が、止めても、やめてくれますか？」

「誓う。絶対にやめる」

即答した俺に小さく溜息をつくとき、何とか自習室に行くことができた。

前回同様、部屋いっぱい風に魔法陣を描く。

描いた魔法陣自体は一瞬小さく風が舞うぐらいで、上に紙を置くと少し飛ぶ程度だ。

中央に紙を置くと、魔法が発動する量の魔力を込める。

フワッ。

火の魔法陣と同じなら、そういった感じの風が吹くはずだった。しかし、予想は外れ、魔法陣全体から小さい風が舞い、それが大きな風となる。

風自体はそんなに強くないが、それが広範囲ともなれば、中々の威力だ。

向かい側に立っていたネモアの方に向けて風が吹いたため、足元を直撃した。

「うわっ！」

バランスを崩したネモアだったが、すぐに治まった風に、体勢を立て直す。

「大丈夫か？」

「何とか……。けど、今は？ 風の初級の魔法陣ですよね」

火の魔法陣の時にはなかった現象に、ネモアは首を傾げる。

まだ確証はないが、もしかしたら、風の魔法陣はそれ自体が風の発生源になっているのかもしれない。

魔力によって異なるか、他の属性の魔法陣ではどうなるのか。

調べなくてはいけないことばかりなのに、一つ道を見つけたみたいで、気付は自然と笑みを浮かべていた。

読書

日本にいたときは本など、漫画や雑誌しか読まなかったのに、こちらに来てから活字を良く読んでいる。

読書が趣味のファンにはまだかなわないが、それでもクラスで2番目に本を読んでいるだろう。

図書館なんて、小学校の読書感想文を書くために借りに行った以降だったのに。

「ケースさん、次移動ですよ」

授業のあいまや休み時間、移動中まで。

ひたすら本を読む俺に、ネモアは苦笑いしながらも、止めはしなかった。

ほどほどにすることと、ご飯はしっかり食べること、夜は寝ること。それを条件に本を読むのを許容してくれている。

つい読み始めると周りが見えなくなる俺を適度に休憩に誘い、今も休み時間になりさっそく本を取り出した俺をたしなめてくれる。

まだ本を読みなれていない俺だから、一冊を読むのに時間がかかる。

ファンは一日に3、4冊読むこともあるらしい。

慣れれば早く読めるようになるとのことなので、今は気になった本から順に読んでいっている。

「ケースケ、何でそんなに本ばっか読んでんだ」

久しぶりに寮に来た日の夜のメンバーで昼食を食べる事になった。ミリイは女友達といることが多いし、ウィズは昼食をさっさと済

ませて体を鍛えに行く。大体がネモアとファンか、用事があるときはどちらかとだ。

そつえば、一人で食べに来たことがないな。

「ちょっと気になることがあって」

「魔法陣の事？ 法則が何とか言っていたけど」

「あの魔力切れ起こした日か」

ミリーの疑問に、ウイズがなるほどといった声を上げる。

どうやらミリーから聞いていたようだ。

「ちょっと、魔法陣の成り立ちとか魔力とか、何なのかな？ と気になってな」

「すごい魔道具見つけたんだって？」

「ファンから教えてもらって、私も実家に送ったわ。あれはすごいわね」

興奮気味に続けるミリー。見つけたという言い方はどうなんだ、ウイズ。

苦笑いしながら、実家に送ったという事はすでにヘランドには行ったのだろうか。

「魔道具も魔法陣で動いてるだろ？ そもそも魔法陣ってどういったものなんだろうな」

俺の呟きにウイズは首を傾げる。逆にミリーは目を輝かせていた。ファンは俺と同じく魔道具の観点から魔法陣について調べている。

俺は気になった本を片っ端から読んでいる。

『ティアの旅行記』はいいきっかけとなった。

最初は魔力の事が知りたくて、精霊や魔物の部分を中心に読んで

いたが、それらがその土地に古くから関わり言い伝え的な話がい
つか出てきた。

話が読みやすく、内容自体も面白いので、深く読み進めることが
できた。

その中で土地や民俗の伝統や古くからの伝えというものは、魔法
陣や魔力と少なからず結びついていた。

それから気になった事についての本を探すようになった。

ファンが集中型だとすると、俺は分散型だろうか。

四方八方に手を伸ばしすぎて読んでいる本は専門書から入門書、
絵本まで様々だ。

絵本を侮ってはいけない。子供は絵本から常識などを学ぶのだから、魔法陣や魔法についてもわかりやすく物語となっていた。

「ケース、今度自習室使うときは私も呼んで！」

「は？」

突然のミリイの言葉に驚いていると、深く頭を下げるミリイ。

変な声が出てしまったし、いつの間にかこんな状況になっていたの
か。

風物詩

窓から入る光は夜空に浮かぶロアの光だけで、部屋の中は薄暗く窓から離れた場所の様子は目で見る事が出来ない。

その暗闇に浮かぶ、二つの光。

淡く光る二つの円は、ゆらゆらと揺れ動き、黄金色の光の線を残した。

幼い頃に母親の実家で見た、ホタルのようだった。

ぼうつと眺めていると、だんだんと大きくなる光。

「ケースケ、どうしたのぼあつとして？ また、魔力切れ？」

「……ミリイか」

「何？ 本当に大丈夫？」

手の届く距離まで近づいてきていた二つの光は、ミリイの瞳だった。

わずかな光を取り込むように広がった瞳孔が、いつもは鋭さを感じさせる瞳を柔らかく浮き上がらせていた。

眼自体が光っているわけではないだろうが、ロアの光を反射するように暗闇に浮かび上がる様は幻想的だ。

ミリイの縦長の瞳孔は猫を思わせたが、獣人であればウイズのように耳や尻尾があるのが一般的だ。

彼女のように瞳だけが違い、他は人と変わらない種族を俺は学院で見たことがなかった。

そんな事を考えていると、返事をするのを忘れてしまい、再度ミリイに覗き込まれる。

桃色の髪も珍しいな。

ふわりと揺れる細く柔らかそうな髪に思わず手を伸ばした。

「え？ 何？」

「綺麗な髪だね。それに瞳も、とても綺麗な」

驚いて声を上げたミリイに、どこか夢見心地だった俺は気づかず、するりつと流れる髪を撫でた。

途中、瞳を良く見るために、無意識に頬を撫でながら。

じつと瞳を合わせたままの俺。

ぽかんと口を開いたままのミリイの姿が、とても可愛らしくて、小さく笑みをこぼしていた。

「っ！ わ、あ……なっ！」

突然、ボンツと音が聞こえたかと錯覚するほどに真っ赤に染まったミリイの顔。薄い桃色の髪がかすんでしまうほど、赤く染まった肌は首元まで及んでいた。

続いて小刻みに震えながら口を何度も開閉させ、言葉にならない音が聞こえる。

そこにきてやっと、幻想的な夢の気分から帰ってきた俺は、自分のとった行動に過去の自分を殴りたくなかった。

可哀そうなぐらい全身を真っ赤に染め、動揺するミリイに苦笑いを向ける。

「えっと、ごめん。勝手に触って」

「っい、いえ……」

頭を下げる俺にまだ動揺したままのミリイはいつもの威勢もなかった。

しばらくどちらとも話さなかったが、気まずかったのだろう。用事がある、と言い残して先に部屋を出て行った。

悪い事をしてしまった。

「ケースケ、やるな」

「え？ ああ、ウイズ」

「ケースケさんって、ミリイの事……」

「いや、違うぞ。ネモア」

「ミリイの感じからしていいのでは？」

「ファン、だから違うって」

あの日から自習室で作業するときには俺とネモアとウイズたちになったのだった。

魔法や魔法陣について実験と検証をするときもあれば、自習室の名の通り、机や椅子もあるので課題をやることもある。

今日は魔法陣をいくつか試して、夢中になっていたらいつの間にか夜になっていたんだ。

部屋が暗くなってきたから、帰ろうと言っていたような気がする。見ていたなら声をかけてくれていたら、良かったんだ。

嫉妬

あの後さんざんウイズにからかわれ、ファンにアドバイスをされるのがいたたまれなくなり、早々に部屋に帰ってきた。

最初はファンもからかっているのだろうと思ったが、『恋愛必勝法』という本を進められたときは本気で焦った。

ウイズが苦笑いしていたぐらいだから、ファンは応援しようとしていたのだろう。

「ああ、参った。あんなにからかわれるとは」

否定しても無駄だと思い、最初は適当に受け流していたため、ファンの勘違いは進むし。

ウイズは解っていてやっている感じだったが、それでも若い頃は他人の恋愛事情は面白い物だ。

友達に彼女ができる、からかいに行く方だった自分もあの気持ちには判らなくはない。

ベッドに倒れるように座り、大きく伸びをする。

いくらぼうつとしていたからと言っても、女性に軽はずみに触れていいものじゃない。

今回は、ミリイも良い方に動揺してくれたので、何もなかったがピンタやパンチをお見舞いされていても決して、おかしい事ではなかった。

ミリイは女性ながらもウイズと剣術の授業でやり合うほどなので、俺のまだまだ細い体は打ち身ぐらいでは済まなかったかもしれない。そう考えると、結構危険な状況だったな、と深いため息が出た。

「疲れましたか？ お茶どうぞ」

「ありがとう。からかわれるのは仕方ないけど、ファンにはもう一度否定しておかないとな」

「……ミリイの事、本当に好きじゃないんですか」

受けとったお茶を口に含む直前に、ネモアのいつもより少し低い声が部屋を包む。

視線をネモアに向けると、顔が少しうつむいていてその表情をはつきりと読み取ることができなかった。

だが、どこか全身から重い空気を漂わせて立っている姿は、二人しかいない部屋の中に緊張感を張り巡らせる。

そういえば、ウイズやファンは何かと言ってきていたのに、ネモアは最初の一言以外、口を開いていなかった。

ウイズたちを相手にするのに気持ちに向いていたため、その時のネモアの表情や雰囲気は思い出せないが。

もしかして、ネモアはミリイの事が好きなのだろうか？

確かに彼女は可愛いし、少し優しすぎるネモアに対して、どんな時も物怖じしないはつきりした性格のミリイとはとてもお似合いだと思う。

友達と紹介された中で、女の子はミリイだけだし、俺の軽率な行動に対して怒っているのかもしれない。

もし、そうだとすると、ファンより先にネモアの誤解を解く必要がある。

「好きじゃない。俺には、向こうに好きな人がいるからな」

息を吸い込み、できるだけ悲しさを押し殺したような声が出るように頑張った。

演劇部だったとかじゃないから、上手くできているか自信はないが、それでも深刻そうな顔で謝ることは社会に出てから何度もやっ

てきた。

俺の言葉をしばらく考えていたネモアは、何かに気づくとさっと顔を悪くする。

「あ……っ、すみません。俺……」

「いいさ。気にしてない。だけど、そういう事だからこの気持ちが消えない限りないな」

「……すみません」

「そんなに、落ち込むなよ。もとはと言えば、俺の行動の所為だし。ミリイの瞳を暗いところで見たのが初めてでさ。ちよっと、幻想的だった」

「そう、ですか……。確かにミリイの瞳は竜人の血が濃く反映されていますからね。綺麗ですよね」

竜人？

うつとりと呟くネモアの言葉に、俺は首を傾げる。

授業で民族学をやった時に、色々な種族について気になったので調べた事があった。

改めて、ファンタジーだったこの世界は、狼や虎といった獣人や、空を飛ぶことのできる有翼人、エルフやドワーフなどの亜人など、様々な種類の種族があった。

その中でほとんど資料がなかったのが竜人についてだ。

もともと種族としての数が少なく、また、独自の価値観と世界観を持っている竜人は他の種族との交流を拒み、どこに住んでいるのかわからない。という記述しか書かれていなかった。

だから、ミリイの瞳を見て猫か何かだと思っていたのだが。

こちらで竜という言葉の持つ意味がどれほどのものかは分からないが、ミリイには俺の想像するドラゴンの力強く気高いイメージがぴったりだと思った。

竜人

ミリイが竜人だと聞いて、つい最近みた精霊と魔物の図鑑を思い出した。

ドラゴンというものを見ていない。

実際に会うのは遠慮したいが、男心としてファンタジーと言うとドラゴンには一度は憧れを抱くものではないだろうか。

何冊か資料を探してみたが、トカゲやワニみたいなのは見つかったが、俺の想像しているドラゴンは見つけられなかった。

ファンに質問しようかと考えたが、資料にないなら存在しない可能性もあり、質問内容自体が不自然な気がしたので、その時は止めたのだ。

帰ってからネモアに聞こうと考えていたのに、今まで忘れていた。

「竜人の竜って、ドラゴンの事か？」

俺の質問に、ネモアは少しの間きよとした顔でこちらを見ていた。

急に話し始めたから聞こえなかったのかと思い、改めて言い直そうと俺の口に、ネモアの手が押し当てられる。

驚いて目を軽く見開くと、どこか焦った顔のネモアが押さえた手越しに、目と鼻の先にあつて思わず体を後ろに引いてしまう。

逃げる俺を追いかけるように口を塞ぐネモア。

「ケースケさん、その言葉は言うてはダメです」

その言葉がどの言葉を指しているかわからない。

しかし、ネモア自身が竜人という言葉を使っていたため、禁句なのはドラゴンか、先ほどの質問そのものの事だろう。

しばらく考えた後、一つ頷くとネモアの手が離れていく。

「確認が一つ、さっきの質問が駄目なのか、固有名詞が駄目なのか？」

「質問です。ドラゴンという言葉については、特に問題はないです」

竜人とドラゴンを結び付けてはいけない。

そういう事だろう。

おかしい話だ、竜もドラゴンも同じような意味ではないのか？

誰でも結び付けるのではないかと思う。

それとも、竜の持つ意味と、ドラゴンの持つ意味は、こちらの世界では大きく違う意味を持つのか。

「竜人って、何なんだ？ 後、ドラゴンってどういったもの？」

結び付けて質問しなければいい、と、別々に質問を投げてみた。

ただの屁理屈だから、怒られるかと思ったが、どうやら本当に関連付けをしてしまう事がまずいみたいで、ネモアは苦笑いしながらも口を塞ぐことはなかった。

言いつらい事なのか、何度も唇を指でなぞっては、難しそうな顔で眉間に皺を寄せる。

好奇心は猫をも殺す。

頭の中で思い浮かんだ言葉に自然と顔がこわばる。

中々話はじめないネモアの真剣な顔を見ると、背筋に何か走るようだ。

「ネモア、聞かない方がいいなら、さっきの質問はなかったことにしてくれ」

「……はい」

話さないことに決めたネモアに、ほつとしながらも本や資料になつていないことは気になつても他人に聞けないなと今後は気を付ける事にした。

ネモアは俺が異世界人だと知っているから、ある程度常識はずれな質問や、こちらでの禁句を言つても教えてくれるが。

他の人に同じようにした場合、最悪罰せられる事があるかもしれない。

「ケースケさんの世界には竜人やドラゴンっていたんですか？」

この時になつてはじめて、ネモアに人族しかいなかったと答えた。獣人や亜人、魔人などは小説やゲームといった空想世界の話で、精霊や魔物などもない。

こちらの世界の事を覚えるので一生懸命で、あまりむこうの世界の話をしていなかった。

俺の話に、こちらでは考えられない常識に、話すたびにネモアの表情は変わった。

ネモアが真剣に聞いてくれているので、懐かしさもあつていろいろな事を話していた。

魔法陣

魔法陣について、一週間の内に1、2回の頻度で自習室を借りて実験を繰り返し、実験結果をノートにまとめていく。

俺とネモア、ウイズ達を含めた5人での作業になったため、あの初回以降魔力切れを起こすことはなかった。

人数が増えたおかげで、色々な意見も聞けて、おおむね順調だ。3ヶ月かけてわかったことは5つ。

1つめは、魔法陣の大きさを変えると威力が変わるものがあること。

威力が変わる属性は、水と風の魔法陣。

どちらも初級の魔法陣が水と風の一要素しか、描かれていないためだろう。風の魔法陣の中でも留まらせる構成の魔法陣についての威力はあまり変わらなかった。

2つめは、魔力の量によつての魔法の威力は関係ないこと。

各魔法陣には発動に必要な最低の魔力量がある。それ以下だと魔法は発動しないが、それ以上でも威力は変わらない。

これは魔法陣の大きさを変えた場合も同じで、小さい魔法陣でも大きい魔法陣でも必要な魔力量は一定だった。

まあ、魔力量を完全に数値化して使用はできていないので、多少前後するだろうが。大体は同じだろう。

3つめは、使用する場所によつて威力が変わること。

地属性の初級の魔法陣は小さな土の壁ができるもの。

普段の授業や自習室は、基本的に室内で行われるが、室内で土の壁が出現することに少し違和感を覚えた。

まだ、水は空気中の水分がとか考えていたが、土はどこからやっ

てきたのか。

ためしに地面に魔法陣を描いて発動すると、室内で行うよりスムーズにより頑丈なものが出現する。

これは他の火、水、風の属性に対しては直接描くことができなかったが。それでも、近い場所に置いておくと多少発動が楽になった。

4つめは、複雑な魔法陣には繰り返し要素が含まれている事。

繰り返しといっても、同じ模様が繰り返されているとか、そういうわけではないが。

例えば中級の風の魔法陣で言うと、風を起こす要素と風を回転させる要素が、徐々に複雑になりながら構成されている。

効果は小さな竜巻が起こる。

発動された時の動きも、よくよく見ると起こして回転させてといった形になっている事に気づいたのは何十回と行った観察のおかげだろう。

5つめは、基本と呼ばれる属性の魔法は火、水、風、地と木でないかという事。

これはまだ仮説でしかないが、火の魔法陣の大きさを変えたときに、威力が変わらなかつたことと、ヘラントでの洗濯機でもあつたこちらの考え方について思うところがあつた。

火を燃やすといった点で、可燃性の物として最初に考えていた木風を留める魔法陣の境界線部分。

木を扱う魔法が複合魔法と呼ばれる、高度な魔法陣だということからの常識。

まずは同じものと考えていた、初級の火の魔法陣の三角形の部分と、風の魔法陣の留まらせる境界線、これがまったく別のものだった場合。

火の属性の魔法陣に使われている三角形の部分が木の要素で、そ

れは魔法陣の複雑さによって燃える時間や炎の大きさが違う場合。

火の魔法陣をいくら大きくしても、可燃性部分の性能は変わらないので、同じ威力の魔法が発動された。

また、木を構成させようとする魔法陣は、植物を実際に実装しなくてはいけないため高度な魔法陣になっているのではないか。

そう考えると基本と呼ばれる属性に、木はもともと入っているのではないかと考えた。

最後のものについては、俺の思いつきで確証もないのでまだ誰にも言っていない。

風の魔法陣の留まらせる境界線が何かと、他の火の魔法陣についても色々と観察していくのが当面の目標だ。

試験週間

「試験？」

最近、日の落ちる時間が遅くなってきた。

日本で言うところの夏が近づいてきているらしいが、湿度はそんなに高くなく、ノシルフィには梅雨は存在しないらしい。

逆にイエルザは一年中湿気に覆われていて、この時期は地獄だといふのはウイズから聞いた話だ。

いつも通り授業を受けていて、担当教師のここまでが今回の範囲だとかなんとかという話に俺はしばらく固まった。

すぐに隣にいたファンに確認しに行くと、一週間後が試験だといふ話。

授業は基本休まずに出ていたし、朝に言われる先生の話もちゃんと聞いていた。

聞き漏らしたのか？ と確認すると、毎学年恒例なので、事前にお知らせはないとのこと。

いやいや、試験勉強とかどうするんだよ。

「試験といっても、普段授業でやっている事の確認ですから、特に気を張る必要はないですよ」

「そうなのか？」

「そんなわけあるか」

ファンの言葉にそう難しい物でもないのかと納得しかけた俺を、ウイズが素晴らしい速さで突っ込む。

隣でミリイもかすかに苦笑いしていることから、どうやら中学や高校の中間考査みたいなものなのだろうと当たりをつける。

今まで授業中に小テストとかがなかったから、定期考査とかないのかと思っていたが。

以外にすっかりしているみたいだ。

ネモアに目を向けると、彼はどこか青い顔をしていた。

「どうかしたのか？」

「……試験？」

「え？ ネモア、もしかして忘れていたの？」

ミリイの言葉に、顔色の悪いネモアは緩く首を縦に振る。

普段のネモアを見ている限り、勉強ができないようには見えないが、何かまずい事でもあったのか。

首を傾げていると、こちらの視線に気づいたネモアが、何度か口を開閉して結局何も言わずに黙り込んだ。

事情を知っているのかと他に目を向けるが、気まずげに目をそらすウイズとミリイ、何の事かわからないといった感じのファンがいるだけだった。

ウイズ達と分かれて、部屋でネモアと二人になった俺は、未だに顔色の冴えないネモアが心配になる。

定期考査のようなものだと考えていたから、単純に筆記だと思っていたが。

もしかして、事前に用意しないといけないものでもあるのだろうか。

「ネモア、試験の事なんだけど」

「はい……」

「筆記じゃないのか？」

恐るおそるネモアに質問すると、暫くまばたきしたあと、ゆるゆ

ると首を振る。

それじゃ、どちらの意味か解らないんだが。

小さく首を傾げると、少し悩んだネモアは大きく息を吐いてから、こちらを向き直った。

「試験は基本的に筆記です。剣術とかの実技は通常授業の評価点で使用されるので試験自体はないです。実習は実際に作った課題を提出するものがあるので、来週提出の薬草学の課題がそれ試験に当たります」

「そんなに難しいものなのか？」

「筆記試験は、ケースケさんの普段の学力を見るとしっかり復讐さえしていれば問題ないかと」

「ネモアはなんで落ち込んでいたんだ？」

「それは……」

視線を左右させた後に、心を決めたのか、じっとこちらを見つめてくる。

それほど意気込まなくてはいけないことなのだろうか。

「今まで隠してましたけど、俺　っ」

そこでまた言葉を切ったネモア。

そのまま、何度か、俺、俺と繰り返すネモアによほどの事なのか、と緊張が漂う。

俺に関係あることか？ いや、それならミリイ達が知っている風なのかわからない。

いったい何が。そうぐるぐると思考を飛ばし始めていた俺をネモアは強い視線で半ば睨みつけてきた。

「俺、数学ができないんです！」

「……へ？」

「毎回追試なんです、だから、試験はいつも一ヶ月前から勉強していたのに。忘れてるし、その上、ケースケさんにも言っていないとか。本当、すみません」

頭を下げるネモアに、あまりに想像と違った内容に、しばらく頭が真っ白になっていた。

何とか回転したした頭で、ネモアを再度見ると、この世の終わりのような顔をして数学が試験かと繰り返し返している。

言っているのはなんだが、いまやっている数学は小学生高学年で覚える内容だ。

薬草学や民族学、魔法学などが充実している一方。数学や語学といった学習があまり発達していないここでは、確かに教えられる内容は回りくどくわかりにくい。

既に勉強しているから俺には問題ないが、確かに他のクラスメイトなどは、必死に授業の内容をメモしていた記憶がある。

ネモアもそうなのだろう。

確かにあの授業内容じゃ、わかるものもわかり辛くなっているよな。

「俺でよかつたら、教えようか？」

あまりにも落ち込むネモアに、つついそんな言葉をかけていた。何気に親戚の子の家庭教師とかしていた時期があるし、教えれないことはないだろう。そうも思っていた。

勉強会

さつそく次の日からネモアに数学を教える事になった。

最初は二人のため部屋でやる予定だったが、ウィズ達もテスト勉強をするらしく、それなら自習室でやろうという事になった。

発案者はミリィだ。

午前中は授業で、夕方からは自習室で勉強会、寮の部屋には寝に帰っているようなものだ、と最近感じる。

ファンは早々に課題を終わらせて、本を読んでいる。

たまにウィズやミリィの質問に答えているが、基本的には読書が中心だ。

記憶力が良いらしく授業中にしっかりと聞いてさえいけば、直前に確認する程度で大丈夫なのだという。

本人曰く、本を読む時間が欲しかったらしい。

逆にウィズは典型的な体育会系で、ネモアと同じく一ヶ月程前から勉強を始めていたようだ。

勉強方法はひたすら書いて覚える。

授業中に取ったノートを別の紙に書いては消しての繰り返しをやっているようだ。

今は詰め段階のようで、覚えた内容であっているか、順に問題を解いている。

暗記が一番苦手なのがミリィだ。

文章などから問題の答えを読み解くことは得意のようだが、歴史や種族の特性とかとなると中々覚えられないらしい。

何とか覚えようと紙を紐で束ねた、手作りの暗記帳を見たときは、そういう商品はないのか？ と聞いてしまった。

ネモアは、なんと言うか。

「ケースケさん、何で3分の1掛ける2分の1が6分の1なんですか？」

納得できないと覚えられない分類だろう。

ちなみに、これを授業でやった時は、下の部分は下の部分で、上の部分は上の部分で掛けるという簡単な説明だった。

まあ、確かに解き方はそうなんだけど。

教科書にも解き方は書いてあるが、その説明は良くわからなかった。

分数自体の説明は、3等分したうちの1つとか、リンゴに似たクアの絵とかで書かれていたのに、計算問題になると途端にこういった説明が多い。

「まず、クアを3等分するとするだろ。その一切れずつを今度は2等分するんだ。これで、3分の1にしたものをさらに2分の1にした」

実際に持ってきていたクアを目の前で切り分けながら、説明する。

こういったものは、実際にそうなったところを見た方が早い。

「3等分した内の1つの中の2等分した内の1つだから。6等分した内の1つになる、と」

「あ、なるほど……」

「それで、3分の2掛ける2分の1の場合は、最初に3等分したやつ内2つと、それぞれを2等分したやつ内1つってことで、6等分した内の2つってことになるよな」

「はい」

「でもって、この2つをくつつけると、3等分した内の1つと大きさが同じになる」

「確かに……」

「これが約分な」

切り分けたククアをかじりながら、言うとな納得できたのか、早速問題を解き始めている。

もっとわかりやすい説明の方法もあるのだろうが、ネモアが納得するためには事細かに難しい事を言うよりは視覚的にわかりやすいのだろう。

家庭教師をしていた親戚がこういったタイプだったので、思った以上に教えやすい。

たまに説明を始めると、ウィズも聞きに来るので、評判は上々のようだ。

俺自身は、学生時代は公式をひたすら覚えるだけだったので、何でそうなるのか、について深く考えていなかった。

日本の教科書は公式の成り立ちの部分まで細かく説明が書かれているので、そういうものなのだ。という認識しかなかった所為かもしれない。

いまさら大学で覚えた数学の公式とか思い出そうとしても、少し難しいが、小学校から高校ぐらいの間までのものなら大まかであるならばなんとかなるだろう。

問題が解けて年相応に喜んでいるネモアを見ながら、教師になるのも悪くないかもな。とか思ってしまった。

試験とチーム

一週間はあっという間に過ぎ、勉強会をすることで良い復習になった。

仕事をしていた時は中々覚えられなくて、歳かな？ と思っていたが。単に興味がわいていなかったただけみたいだ。

試験はどれも45分で一日3教科から4教科。

4日間かけて行われた筆記試験の後、実技試験が2日間。

筆記はどれも問題なく、実技については必修ではないので評価が悪くても進級には問題ないらしい。

高等学が上がってからの選択の道が一つ減るようなものらしいが、もともと体力に自信がある若者でもないので、できればのんびり過ごしたい。

剣筋は良いらしく、筋力と体力をつける、と言われた。

ネモアは勉強会の成果か、数学の手ごたえがいつもよりあったと喜んでいた。数学の勉強ばかりしていたから、他は大丈夫なのか聞くと、数学だけが駄目なのだと答えられた。

逆に数学以外の筆記が全体的に駄目なウイズは、筆記試験の1日目からやつれていた。日に日に生気の薄くなっていたウイズだったが、筆記が終わり実技が始まると嘘のように生き返っていた。ミリイも、今回は自信があるようで、彼女の場合は筆記も実技も問題ないので、学年でも上位に入り込むだろう。

ファンは相変わらず試験の合間に本を広げていて、いつも通りでした、との感想を貰った。ネモア曰く、毎回筆記では上位十位以内に入っているとのこと。

無事終わった試験の結果が出るのは1週間後で、明日から6日間は試験後休みと呼ばれるものようだ。

6日間も休みがあることに驚いた俺だったが、初等学から高等学までの全ての学年でこの時期試験が行われ、先生方はその解答に追われるらしい。

掛け持ちの少ない先生や手の速い先生なら2日ぐらいで終わるよ
うだが、ほぼ全学年見えていますといった先生になつてくると助っ人
を頼んでやっとな終わるようだ。

「学習発表のチームと一緒に組みたいんだけど、ケースは問題ない？」

試験も終わり、寮に帰るだけと鞆に荷物を入れていたら、ミリイに話掛けられた。

生徒はすでにまばらで、ミリイ自身も帰る用意を済ませてきているよ
うで、右肩に鞆が掛けられている。

「学習発表って？」

「学年末に一年間の学習成果を色々な形で発表するんです。初等学
は1年と4年と6年、中等学が1年と3年、高等学が3年の生徒が
全学年の前で発表もしくは成果を資料にして配ります」

「試験が帰ってきたら、多分二時間程チーム分けに使われるん
ですけど。やりたい人同士で先に申請してもいいんですよ」

ファンの言葉を引き継ぐ形でネモアが俺の疑問に答える。

いつの間に来たのか、ウィズもとなりについて、とりあえず歩きな
がら話す事にした。

「チームって何人ぐらいなんだ？」

「一人からでも学習発表は問題ないわ。あまり多すぎると、物によ
っては個別の評価が下がることはあるけど」

「出来る奴に押し付けて、自分の手柄にしようって卑怯な奴らな」

「ウイズ、間違っではないけど。もう少し言い方ないの？」

笑いながら言うウイズをミリイが力いっぱい殴りつける。

俺としてはなるほどな。と納得してしまったために、笑って流すしかない。

内容を聞く限り、高校時代の卒業制作に近いのだろう。あの時もクラスでチームを作って、一つの課題に取り組んで発表した。確か俺は平社員Aとかって役職を貰っていたような気がする。あとは社長に課長、係長に係長補佐、平社員Bってノリでつけていた。

「俺は別にかまわないけど。というか、むしろ他のクラスメイトとやるよりは、気持ち的にもうれしいけど」

「じゃあ、問題ないわね。ネモアとウイズとファンもそれでいいわよね」

「俺は、ケースケさんと一緒なら」

ネモアのどこの恋人のようなセリフが聞こえた気がしたが、ウイズとファンも問題ないと答えた。

申請をしておく、ミリイはそのまま職員室に行き、俺たちは久しぶりに自習室によらずに部屋へ帰った。

流石に試験の後まで、自習室で頭を使う気は誰もなかった。読みかけの本も残っていたしな。

後見

寮の食堂は試験休みという事で、初日の今日から実家に帰っている生徒も多くいつもよりすいていた。

ウィズとミリイも今日の午後に出るようで、帰り支度をしている。俺は考えるまでもなく、ネモアもやることがあるらしいので寮ですぐす。寮の食堂は休暇中も開いているらしいので安心だ。

ファンは寮に残って最近古本屋で見つけた掘り出し物を制覇するらしい。読み終わったら借りる約束をしている。

「ケースケさん、ヘランドへの資金提供の話ですけど」「資金提供って、結局、販売権買うのか？」

この世界での商売の方法は、基本は貴族が資金を提供してその店の販売権を保有する。

投資した店が儲かるほど貴族の名も売れ、投資する事で店の一切の販売権はその貴族のものとなる。

貴族のみならず、販売権を买える資金を持っている人間ならだれでもでき、成功した商家が別の販売権を手にする事で権力を身に付け、貴族になることもある。

洗濯機的一件から、ヘランドの魔道具の評価はうなぎのぼりだ。

ネモア達の実家に送ったことから、貴族の間でその性能の良さが噂になっている。

「そうなんですけど。俺とファンが同時期に実家に送ったことで、ちよつと問題がありました」

「問題？」

「グリサラーサ家とグラヴィスタ家の両家が同時に話を持ちかけてしまつて」

「すみません。僕の方から父には言ったのですが、元々商家の出のためか、中々諦めきれないらしくて」

聞くところによると、資金提供は早い者勝ちのようだ。

話はグラヴィスタ家の使者の方が早く行っただけだが、突然の貴族の訪問に混乱したマルクが悩んでいる間にグリサーサ家の使者もついてしまった。

今まで個人でやってきたマルクは、資金提供と言われても何の事かわからず、「勝手にしてくれ」と言ったのがまずかったらしい。

最初にヘランドの魔道具を見つけたのは俺とネモアになるのでグリサーサ家だが、商売人のグラヴィスタ家の使者が先についたから。と、どちらも譲らないようだ。

中々前に進まない攻防に他の貴族も名乗りを上げだして、一層厄介になってきているらしい。

「連日ヘランドに貴族の使者が押し掛けるもので、マルクさんも我慢の限界だったようで、遂には店を閉めてしまって」

「ちよつと待て、それっていつからだ？」

「俺が聞いたのは3日前です。店を閉めたのは二週間前になるようです」

閉めたという事は、商品開発はどうなっているんだ。

マルクの作る魔道具は俺の世界に近いし、マルクの技術者としての腕も相当のものだ。

それが貴族の押し売りの所為でなくなるなんて。

「それで、マルクさんからケースケさんに伝言がありました」

「なんだ？」

「代わりに決めてくれ。だ、そうです」

「はあ？」

代わりにって、販売権を譲る貴族をか？

眉間に深く皺が刻まれている事がわかる。

その上、申し訳なさそうな顔をしているネモアとファンが目の前にいて、まだ何か言いたそうな顔をしているものだから。

いやな予感しかない。

「……一般的に考えれば、俺はグリサラーサ家が後見しているんだから。グリサラーサ家だよな」

「グラヴィスタ家がケースさんの後見も、と言われてきているんです」

「後見って何人も受けられるものなのか？」

「いえ、グラヴィスタ家の後見を受けた場合、グリサラーサ家の後見はなくなります。それで、ケースさんが魔法陣の誤作動でグリサラーサ家が後見してるのを知って。父が、選ばせる権利があると行ってひかないんです」

すみません。と頭を下げるファン。

このままグリサラーサ家の後見だからと、推し進めても良いと思うが、なんとなくそれだとグラヴィスタ家に角が立ちそうだ。

それがあるからネモアも困っているのだろう。

グラヴィスタ家を納得させるには、一度ファンの父親と話をする必要はあるかもしれない。

その時はグリサラーサ家、ネモアの父親も一緒にいる方が好ましいだろう。

他の貴族は後出しという事で、諦めてもらおう。

試験期間中にネモアがこの話をしなかったのは、休暇に合わせたためか、単に試験中だからか。

早速話し合いの場を設けられないか確認して、2日後にヘランド

に集まることになった。

会談

販売権とは資金提供者と、物品・技術などの製作の責任者との書面で交わされた契約により成り立つ。

学業で功績をあげるのと同じく、新たな技術を生み出し世の中を豊かにした者にはそれなりの地位が与えられる。

彼の作る魔道具の製作方法は、新たな技術を生み出したと十分に言え、その魔道具の性能の良さは、使ったものなら誰でも納得するものなので、世の中を豊かにすることは確実だろう。

その上、販売権を得るという事は、その技術を管理する事が出来、技術を使用する際には相応のお願いが必要になる。

また、類似の技術が出てきた際には、正式な手続きを行う事でその一切の販売を辞めさせることができ、または、多額の使用料の請求を行う事が出来る。

ノートに資金提供と販売権についてまとめた俺は、何度もそれを読み直す。

ネモアとファンに資料となる本を探してきてもらい、寝る時間も惜しんで隅々まで読み込んだ。

どの資料にも一番初めに書かれているのが、「販売権とは」で始まる一文だ。

次に続くのが正式な販売権の取得と資金提供についての書類の書き方。

そして、まとめた内容がもっと専門的な言葉で書かれている。

販売権について書かれた本自体はあまりなかったが、どれも商売や流通、技術の事を知っている前提で書かれているので最初は何の事かわからなかった。

最終的にまとめると、特許権のようなもので、思った以上に販売

権という効力が強いという事だ。

類似だというだけで手続きさえ行えば、完全に違うと立証されない限り、裁判に勝ったようなものだからである。

マルクの作る魔道具は確実に新しい技術と言え、また確実に売れ今後伸びると予想されるものなので販売権を求める人が多いのは必然だった。

マルク自身にも貴族の地位が与えられるかもしれない程らしい。

会談の前に少しでも情報を得ておこうと考えてまとめてみたが、わかったのはこの問題が厄介だということだ。

最悪、グリサラーサ家が後見人だからとグラヴィスタ家に言おうと考えていたが、本気で納得させないと後が怖い。

夜道で人知れず、なんて光景が脳裏に浮かんでは消える。

ネモアとファンと俺で馬車に揺られながら、話し合いの行われる場所へと向かっているのだが、会話は一切ない。

重苦しい空気の中、何事もなく馬車は進み、予定の時間より早くかすかな横揺れをして馬車は目的地の建物の前で止まった。

「城……」

思わずつぶやいた俺は、目の前に悠然と建つ高い壁を見上げていた。

場所を詳しく聞いていなくて、迎に来たグリサラーサ家の使いだという人の馬車に乗り込んだが。

まさか城に連れてこられるとは思っていなかった。

精々、グリサラーサ家がグラヴィスタ家の屋敷で行うのだと思っ
ていたために、格好は小奇麗とはいえ正装ではない。

それは一緒に来たネモアとファンも同じで、呆然と城を見ている。

「王家が介入する程に、凄い技術という事ですか」

「介入って……」
「マルクさんに何らかの地位が与えられるのは、确实という事ですね」

馬車を降りてすぐにやってきた、案内役の人に連れられて城の中を歩く。

ネモアとファンの話によると、国の名だたる貴族が販売権を求め、ヘランドに押し寄せていたらしい。

考えられる事としては。

どうにも収集がつかなくなりそうになった時に、マルクの俺に—
任するという言葉。

当然、後見人であるグリサラーサ家に話がまとまるかと思えば、
転移の魔法陣の誤作動による事が知れ、話がややこしくなった。

そこに俺がグリサラーサ家とグラヴィスタ家にしか話し合いを持ちかけなかったので、他の貴族の心は穏やかではなかったのではな
いか。

「ケースケ・ク・グリサラーサ様、ならびにネモア・グリサラーサ
様、シイスファ・グラヴィスタ様がおつきです」

両側に鎧を着た兵士が対面する大きな扉の前で、案内役の人の声
が響き渡る。

しばらくして内側から開けられた扉の中は会議室のようで、すで
に集まっていた二十人程の人の視線が一斉にこちらへと向けられて
いた。

その中にファンの父親を見つけるが、安心などできない。今すぐ、
ここから立ち去りたい。

「入れ」

一番奥に座っていた人の声で、軽く頭を一度下げ、中に入る。案内されるままその人と正面から向き合う形で、入口に近い場所の席の横に立った。

「カルディナだ。現在、この国の王をやっている。貴殿がヘランドの店主の代理か？」

「はい。ケースケ・ク・グリサラーサです」

「グリサラーサ家とグラヴィスタ家に話し合いをと持ちかけたそうだが、貴殿はグリサラーサ家の後見であつたな。それは何故だ？」

「ヘランドの店主、マルクさんに私は代理を頼まれました。頼まれたという事は、信頼されたという事でしょう。なれば、少しでも彼のためになるようになるうと思つた次第です」

実際に信頼されているかどうかは別問題だが、マルクの制作意欲をそぐ今の状態ははつきり言っていただけない。

この状況をどうにかするためには、一刻も早く資金提供者を決めればいい。

「では、他の貴族を呼ばなかったのは何故だ？」

「販売権の契約についてはどなたにもできる事は解っております。ですが、早い者に譲られるのが、暗黙の了解と聞いております。ヘランドの技術に気づいたのは私なので技術を発見したのはグリサラーサ家が先です。しかし、実際に契約を持ちかけたのはグラヴィスタ家です。そして、話が広まってから動いたという事で、申し訳ないですが他の方は候補から外させていただきました」

言い切ると室内に集まっていた貴族がかすかにざわめく。ただ、販売権の契約について早い者勝ちと言うのは誰もが知っていて半ば常識のようなものになっているらしく、渋い顔をしながらも反論の声は上がってこなかった。

カルディナ王が顎に手を当ててしばらく考えると、再度こちらを見てくる。

「ケースケといったな、貴殿は転移の魔法陣による誤作動でこちらに来て、グリサラーサ家が後見していると言っているが間違いないか」

「間違いありません」

「では、グラヴィスタ家の後見を受けるつもりか？」

「受けるつもりはありません」

「では、グリサラーサ家とグランヴィスタ家に話し合いを持ちかけた真意は？」

息つく暇もなく問いかけられるカルディナ王からの質問。

間を開けずに答えていた俺だったが、最後の質問については三人で話し合いながら解決しようとしていたので、真意などあるはずがない。

しかし、それをないと答えていいものか、カルディナ王の探るような視線に小さく息をつく、一つまばたきをして見つめ返した。

「それを話し合うために、です」

嘘を言っても仕方がない。

その場しのぎの言葉はすぐに崩れるものだ。

それも一国の王に対して、嘘をつきとおす事なんてできる技量が自分にあるとは到底思えなかった。

しばらく見つめ合った後、「うむ」と満足そうに頷いたカルディナ王は、グリサラーサ家とグランヴィスタ家以外の貴族に退室を命じた。

大人しく部屋を出ていく彼らに、少し安心しながら、話し合いをするためにまだ一度も座っていない席に腰を下ろす事になった。

会談（後書き）

2011/7/23 誤字修正

危険性

楕円形の大きな机と周りに並べられた十数もの椅子。

部屋の入口の角の方に、四角い机が一つずつ置かれ、ペンとインクが机の上に配置されている事から議事録を書く場所なのだろう。

右側の壁には黒板が、左側の壁には材質の違う板が張られていてよく見るとところどころ穴が開いている。

会議室と思われる部屋の中は、机などをどければ100人ぐらいなら何とか入りそうな程広い。

メインとなる中央の机も今は十ちよつとしか椅子が置かれていないが、その間隔は広く、間に2、3個並べられそうだ。

そんな中残っているのは、カルディナ王、グリサラーサ家当主ダングル、グラヴィスタ家当主ジードン、ネモア、ファン、俺の6人と、従者数名。

カルディナ王の左右には騎士が立っていて、各当主の斜め後ろには従者が立っている。

ネモアとファンはそれぞれ父親に呼ばれて、隣に座っているから俺のそばにいるのはここまで案内してくれた人だけだ。

すぐ後ろに入ってきた扉がある。

今なら逃げられるだろうか。

「さて、今回のヘランドの販売権の件だが。代理人である貴殿の考えをまず述べてもらおうか」

いきなり始まったカルディナ王の言葉に、どうやって逃げようか現実逃避を初めていた俺は改めて会議の席に着いた人たちを見つめる。

グリサラーサ家の当主、ネモアの父のダングルには学院に来る前に会っていたが、こういう場で会うのとは雰囲気が違う。優しく物

腰柔らかかな感じだったのに、今は貴族の当主らしく威厳たっぷりで真一文字に結ばれた口に変なプレッシャーを感じる。

対するグラヴィスタ家の当主、ファンの父のジーダンだが、インドアで丁寧な委員長系のファンに対して、肌は健康的に焼けてがっしりとした太い腕が服の上からでもわかる姿は、海の男を思い起こさせた。

目の前に座るカルディナ王は、意思の強い瞳をまっすぐにこちら向け続けている。質問一つにしても、嘘をつけない鋭い目に見つめられると、睨まれているわけでもないのに固まってしまふ。

3対6つの強い視線がこちらに向けられ、なおかつこちら側にいってほしかったネモアとファンの4つが加わるとちょうど10の目。企画会議などでも向けられた事のない、真剣なその視線にゆっくりと深呼吸をして心を落ち着かせる。

「まず、こういった場とでの礼儀などの勉強不足で、至らないところがあるかと思いますが、お許しください」

「そうかしこまらずでもよい、貴殿の事情はグリサラーサとオケアノス学院の方からも聞いておる」

「ありがとうございます。それでは、私の考えを述べる前にいくつか質問をさせていただきます。販売権については、本で得た知識しかないのです」

カルディナ王と、ダンガル、ジーダンの同意を受けヘランドの技術と販売権についての確認を行う。

まずは、マルクの作った魔道具についてだが、彼に聞いた話では、3年ほど前から開発を始めていたと聞いていたので何故、今まで公に出でこなかったのかと言う疑問。

ジーダン曰く、使用している魔法陣が最低ランクであることと、一見魔道具に見えないためガラクタと思われる。

貴族はより良い魔道具はより良い魔法陣という意識が強いため、マルクの魔道具を買う事はなく、逆に一般家庭においていくら最低ランクと言え、魔道具はそう簡単に手が出るほど安いものではない。今までの良く言えばシンプルな見た目の魔道具しかなかったため、同業者からはガラクタと呼ばれる始末。

何故、あれほど素晴らしい魔道具だと分かったのか。ジーダンの言葉に事情を知るネモア以外の視線が問いかける。

「私は、転移の魔法陣で喚び寄せられるまで、魔法を見たことがなかった。魔道具がただの箱だった事の方が不思議でした」

授業で魔法陣を作るのが難しく、魔法が複雑だと思っていたので、余計に他で工夫した方が良いのではないのかと思った。と、付け加える。

それに対してはマルクの技術を目の当たりにした後なので、言われてみれば、といった形なのだろう。

その後も魔道具についていくつか質問をし、わかった事はマルクの技術がどれほど現在の常識の枠を超えていたかと言う事。

青天霹靂、コペルニクスの転回。

衝撃的でかつ今までの常識をひっくり返した。

「ヘランドの店主には、相応の地位が必要だろう。既に国も動き始めておる」

「ならば、マルクさん自身が販売権を所有することは可能でしょうか？」

「販売権という原理的には問題ないが、いつ他の者に乗っ取られるかわからん。そうなれば彼自身が危険になるだろうな」

販売権は、有能な者を守る防壁になっているようだ。

名のある貴族であればあるほど、その防壁は確固たるものになる

のだろう。

だが、今回の場合は、今までにない技術、誰もが欲しがる技術。最初集まっていた貴族たちもそれぞれがグリサラーサ家やグラヴィスタ家に並ぶか、それ以上の家だろう。

「グリサラーサ家にしても、グランヴィスタ家にしても、今回の販売権を得るという事は大変危険な事ではないのですか？」

俺の言葉に、解ってはいたのだろう。両家の当主と、カルディナ王の表情が固いものとなる。

ネモアとファンも気づいたのか、顔色が悪い。

「販売権について確認なのですが」

重苦しい空気に包まれた中、俺はここまでのやり取りで思いついた事を頭の中でまとめ始めた。

「販売権をグリサラーサ家とグラヴィスタ家で持つ事は出来ないのですか？」

結論

いろいろと調べているときも、現在の話し合いでも、販売権というものの所持者の危うさを感じていた。

所持者が亡くなりその後継者がいない場合、別のものが販売権を得る事が可能だったからだ。

集まっていた貴族があっさり引いたのは、何とかすれば、後からでも手に入れる事が出来ると考えての事だろう。

グリサラーサ家もグラヴィスタ家も権力を持つ貴族、といえど、多勢に無勢となる。

ならば、その狙われるリスクを分散してしまえばいいのではないか。

一人をどうにかすることは簡単でも、それが二人となると話はややこしくなる。片方の権利を奪っても、もう片方が中に浮いた権利を使用することができる。

まあ、奪う側が両方同時や複数人で来るという可能性もあるが、それでも一人で管理しているよりは、危険性は下がるはずだ。

仮にもし権利が奪われたとしても、分散して持たないといけないと最初に決めておけば、以降も力が集中する事を防げるだろう。

そして、今後同じようなケースの問題が発生する事を考慮して、販売権を分散する場合は王家が立ち会うという決まりを作る。

勝手に分散契約して、貴族同士の問題が出る可能性があるからだ。王家はあくまで監視者としての位置づけで、あえて販売権を保有しないことで貴族からの反発を防ぐ。

「なるほどな、「面白い考えだ」

ただの案なので、それに付随する問題点は多々出てくるだろうが。

販売権を得るための資金提供と聞いて、一時期興味を持っていた株のことを思い出したのだ。

大学時代に先輩が株で大儲けした。という話を聞いて、色々調べては見たが、結局面倒になり行動に移すことはなかったが。

こちらの世界では、販売権についても後見人制度についても、何らかの投資をするのは貴族だ。

「資金の提供額や利益の分配については、マルクさんと権利保有者のグリサラーサ家とグラヴィスタ家で話し合って決めてください」

「代理人の貴殿が今決めたらよいのではないのか？」

「私はあくまでも、販売権についての代理だと思っているので。それ以上について、決めるつもりはありません」

本音は、お金の話をされてもどれほどが妥当かもわからないし、これ以上厄介ごとにかかわりたくないといったところだ。

王様と貴族という、国の役員と呼ばれるべき方々と対峙するというのは、精神的にとっても疲れる。

その上、こちらの常識はまだ勉強中だし、どこで勘違い非常識を出してしまわないかと話す内容に気を使うため、常に話すだけで頭は処理能力過多で壊れそうだ。

資金や利益については、マルクと権利者とで後日話し合いの場が設けられることになった。

つづけて始まった分散についての書類や、販売権の新たな規則についての内容に、カルディナ王の許可を得て退室させてもらう事となった。

流石に国の事に参加したいわけではない。

精神的疲労で今すぐにもベッドに入って寝てしまいたい。

部屋から出てきたネモアとファンと共に、行きと同じく馬車に揺られながら、俺はいつの間にか寝てしまっていた。

夢

俺は小さい頃からあまり夢を見たことがなかった。

実際に夢を見る時も、起きたときには楽しかったとか悲しかったとかそういった漠然とした記憶しかなく、夢自体の内容を覚えている事は無いに等しい。

「皆井、遅れるぞ」

「課長……？」

机と椅子しかない、窓の外はビル壁に囲まれた殺風景な室内。

せめてもの癒しにと観葉植物が壁際に飾られているが、あれは作り物だと入社後すぐに教えてもらった。

ちよつと型の古いパソコンの画面を眺めていたら、後ろから掛けられた声。

「何呆けてるんだ。先方さん、お待ちだぞ」

言いながら資料を渡され、今提案中の案件名がそこに書かれていた。

慌てて自分のカバンを持って、ネクタイを軽くしめなおす。

室内に残る同僚や先輩後輩に軽く挨拶をして、先に外に出た課長の後を追いかける。

「お前もそろそろお得意先ぐらい作らないとな。今回はいい機会だ、リーダーとして色々やってもらうからな」

「はい」

「たく、返事だけは良いんだからな」

笑いながら言う課長は、俺がまだ新人だった頃から、何度も怒鳴られた怖い先輩だ。それは今でも変わらないが、落ち込むと飲みに連れて行ってくれたし、大きなミスをした時は一緒に頭を下げて回ってくれた。

いつか、こんな人生の先輩に俺もなりたい。

それほどには憧れを持つ人だ。本人には言ったことはないけど。

今日行くお客さんは会社から二駅のところにある中堅企業だ。

コストカットを目指して、一部紙媒体で行われている業務をシステム化する事になっている。

その提案を前から続けていて、打ち合わせもすでに何度か行っている。

駅のホームで課長とたわいない話をしながら、俺は電車が来るのを待っていた。

「皆井、お前に言っておかなくちゃいけない事がある」

「なんですか？」

突然フランクだった話し方から、真剣な話をする時特有の少し低い落ち着いた声になった課長に顔を向ける。

じつと向かいのホームを見つめている課長の横顔には、渋い皺が刻まれていて、でも仕事のできる男と言った後ろに撫でつけられた髪が年齢を若く見せている。

こんな距離で課長の真剣な横顔を見る事なんてめつたにないな。

そんな事を考えながらも、声と共に真剣な顔の課長の次の言葉を黙って待つ。

「今の若いやつはすぐにあきらめて辞めてしまう。でも、お前は俺の古臭い説教もしっかり聞いて、自分で判断したうえで行動できるやつだ。たまに間違える事もあるが、次に生かせるやつだ。だ

けどな、俺は少し聞き分けが良すぎると思っている」

「……なんですか、突然」

「いまだき珍しく、素直なやつだぞ皆井は。だけど、少しは我を通してもいいんじゃないか？」

そういつて振り返った課長の顔には、滅多に見せない笑顔が浮かんでいた。

目元を少し下げ、口元が緩やかに上がっているだけだったが、普段難しい顔をしている事が多い課長にとってはとても柔らかい微笑だった。

その瞬間、俺は思い出す。

これは、入社一年目の忘年会に課長に言われたことだと。

あの時に初めて俺は課長のこの微笑を見たのだと。

ホームで人の行き交う雑音や、鮮やかだった周りの景色がだんだんと遠ざかっていく。

滑り込んできた電車のドアが開き、課長が乗り込む。俺はただそれを眺めていた。

閉まったドアを見つめっていると、電車が発車するとともに、景色はタイヤが一枚ずつ剥がれ落ちるように崩れていく。

ある程度小さくなると最後はガラスが割れたように崩壊し、視界は黒一色で埋め尽くされた。

なんでいまさら、日常の夢なんて見たんだろう。

なんでいまさら、課長の言葉なんて思い出したんだろう。

「ケースケさん？」

ゆっくりと開けた目の前には、ネモアの不思議そうに首を傾げた姿が映った。

いまだ馬車は揺れていて、来たときと同じ時間で帰りも着くのな

ら、俺が寝ていたのは20分から30分ぐらいだろう。

そんな短時間で夢など見れただろうか、と思考を飛ばしながら、頬を何か伝うのを感じた。

何かではなく涙なのだろうか。

驚いた顔で一瞬固まるネモアに、隣に座っていたファンも息を呑んでいた。

子供の前でいい大人が情けない。

そう思うのに、嗚咽もなく流れ続ける涙の止め方がわからないまま、また瞼を閉じた。

もう一度、夢を見れるだろうか、そう思いながら。

夢（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

この話で【啓輔の場合は】の第一章が終わりました。次話からは、第二章になっていきます。

今後も楽しんでいただけるよう頑張りますのでよろしくお願います。

試験結果

休み明けの一日は試験結果の発表に追われる。

筆記試験は採点結果が、実技は帯状の紙に評価と順位が書かれたものが配られる。提出課題関係もこの形式だ。

基本的に試験結果の返却は担任が行う事になっていて、採点間違いないなどは午前中に報告しなくてはいけないため、午前の授業は自習となる。

学生番号順に結構な束になった結果を返してもらっているので、俺はつい最近編入してきたので最後となる。

既に受け取った生徒がそれぞれの表情や声を上げる教室内を、肩肘をつけてぼんやりと眺めていた。

オケアノス学院には各地から様々な種族が集まっている。教室内をざっと見るだけでも、人、獣人、亜人、魔人と、見た目で判断できる違う種族が目に入る。

オケアノス学院自体が人族の多いノシルフィに位置するためか、割合的には人とそれ以外で5対5と言ったところだろうか。

それ以外の中で言うと、獣人が多く、次に亜人と魔人が同程度だ。人にしても肌や目、髪の色で言うとカラフルだ。

ファンタジーだよな。

頭の中で呟きながら、名前が呼ばれたので席を立った。

途中でウィズが机に突っ伏す姿が目に入り、成績が悪かった場合はどうなるのだろうと、追試でもあるのか？ という考えが浮かんだ。

実技については必修ではないという話だったので良いが、詳しい話はネモアやファンに確認しないといけないな、と視線を前に移し

た。

「ケース君、初めての試験はお疲れ様」

エレイ先生に言われながら渡された束を受け取る。

筆記試験自体は平均4教科で4日だったので16教科分。実技試験と提出課題については結果だけが書かれているのでそれほど量はないが。

一教科毎に返されず、受けてもの全てが返される状況と言うのは、見た目的にも気持ち的にも重い。

解説の書かれた模範解答が黒板に張られていて、既に数名の生徒が自分の答案と見比べている。

俺はいったん机に置きなすと、上から順番に見ていくことにした。

「ケースさん、こちらで、一緒に確認作業しませんか？」

それも途中、フアンの呼びかけに足を止め、いつの間集まったのかネモアやミリーの居る方へと足を向けた。

ウィズはまだ立ち直れていないらしく、近くにはいるものの机に突っ伏したままだ。

「ウィズ、そんなに悪かったのか？」

「いつものことよ。それより、ケースはどうなのよ？」

「さっきもらったところだから、まだ確認してないさ」

ミリーの言葉に答えながら、既にネモア達が借りていた席に座る。本来の住人は、友達のところに行っているらしく、一つ頭を下げて借りるなど声を掛ける。

今まではあまり試験の結果とか見えるようなことはなかったが、

他の生徒もネモア達も無造作に点数や順位を広げている事から、あまり気にしないのだろうと。自分だけ隠すのも変なので、普通に開いていく。

試験結果は、試験後に自己採点した点数とほぼ差異はなかった。実技の点数が思っていたより少し高かったのは素直に嬉しい。

体力はないと言われたが、基本の型を忠実に守っていたためだろう。実践は低いが、型についてはそこそ良い点数がもらえている。筆記だけで言えば平均80点、実技を入れると70点あたりだろう。

「数学が、満点って……」

隣から覗き込んできていたミリイの言葉に、彼女の手元を見ると85点の文字。

悪いわけではないみたいだが。

「僕も満点は難しいです」

そういつて見せられたファンの答えは96点だった。

2問間違いだから、それほど差が開いているようには思えないけど。

思ったままに伝えると、まだ勉強していない範囲との話。実力試しのために、まだ習っていない範囲を出すのはどこの先生も同じで。数学に関しては難しいと評判らしい。

通りで他の筆記も、聞いた事がない問題が混じっていたわけだ。

リーダー

試験結果の平均点が一番高かったのは、ファンだった。

俺と同じで実技が足を引っ張っているものの、割合的には筆記と課題の点数の方が高く、筆記だけで言えば平均95点で学年首位だという。

次がミリイで、全体平均で82点だ。同じ学年で平均88点の人がいるらしく、惜しくも次席だけど、相手は獣人の男らしく実技で差が出るのは仕方がない事だろう。

ネモアと俺は同じぐらいで、学年で言うと上位20番以内。

逆にウイズは下から数えた方が早いようで、あまりの落ち込みように平均点を聞く気にはならなかった。

追試があるのかどうかの話をネモアに小声で確認したが、ウイズの居る前では気にするだろうという事で、部屋に帰ってから教えてもらう事になった。

一通り確認をしたが、特に採点間違いもなかった。

一名、諦めきれずに、答案を穴が開きそうな程見ている奴はいるが。

「そつえば、午後の学習発表のチーム分けの間って、俺たちどうするんだ？」

朝の連絡の時に、エレイ先生が言っていた事を思い出して聞いてみる。

確か、ミリイが既に申請を出しているはずだから、時間としては暇になってしまっんじゃないかと思ったのだ。

既にチーム組んでいる場合は先に帰るとかだったら、良いなと思いながら訪ねる。

「申請は通っているから、何を発表するかを話し合う時間になるわ」
「チーム分けに二時間とってありますけど、実際、一時間は発表内容を決める時間なんです」

ミリイとフアンの説明になるほどな。と、納得する。

確かにチームを分けるだけで、二時間もかかるとか、時間をかけすぎている気もする。

「俺たちみたいにチーム申請出している人は、今の時間で話し合いもしてますね」

ネモアがあそことか、と言いながら指をさした方を見ると、確かに試験結果の確認をしている風ではない。

教室を見回すと、既にいくつかまとまりができていて、討論をしているところもあった。

初等学の1年で初めての学習発表をしているためか、ある程度自然にチーム分けができていようだ。

「俺たちも話し合った方がいいのか？」

「それはリーダーが決めてよ」

そういいながらこちらを見つめてくるミリイに、嫌な予感がした。ネモア達を見回すと、それぞれ、頭の上にクエッションマークを出していて、視線で知らないかと訴えている。

それぞれが首を横に振るものだから、再度ミリイに視線を戻すと、逆に首を傾げられてしまった。

「え？ ケースケじゃないの？ 私、それで申請出したけど……」

いつ決まったんだよ。

思わず漏れた言葉に、ミリイは俺が一番リーダーっぽかったから、
と言いにくそうに答える。

どうやら話し合いも了承も取っていなかった事に気づいて、気ま
ずいようだ。

最後には自習室を使うときも俺の指示のもと行っているとか、一
番落ち着いているとか、頼りになるとか、色々言われて。

結局、ネモアやファンにウイズまで頷くものだから、多数決で俺
がリーダーをする事になった。

学習発表初心者なんだけど、と反論はしたのだが、全力でサポー
トしますとネモアが言うものだから、副リーダーも決まってしまう
た。

確かに魔法陣の実験でも上手くやっているから、纏める事につい
ては問題はないろうけど。

なんだか少し納得がいかなかったが、リーダーを請ける事自体に
異論はないので、深く考えない事にした。

午後から時間があるんだからと、この時間は各自で発表したい事
を考えるだけとした。

最低一人一つ、意見を出してもらってからと押し切って、持ってき
ていた本に視線を落とした時だった。

「シルファナン、チーム申請を出したって本当か！」

俺のすぐ後ろで響いた大声に、耳鳴りがした。

鼓膜の奥からキーンとなる感覚に眉を寄せながら、何事かと振り
返ると顔を真っ赤にした男が立っていた。

貴族

男はぱつと見ただけでも高級とわかる布地を身に纏い、服の上からでもわかるほど良い体格をしていた。

固い胸板にしっかりとした腕、身長も高く、光に透ける金色の髪は丁寧に流されている。

顔も今は興奮で真っ赤になっているが、男前と言えるだろう。

すぐ後ろに立っていた男を見てそんな事を考えた後、視線をまた前に戻す。

ファミリア・シルファナン。ミリイは嫌そうな気持を隠しもせず、むしろ気付けと言わんばかりに顔に出していた。

寄せられた眉は拒絶を意味し、下げられた口は面倒臭そうで、無意識に体を擦っている手は不快感を露わにしていた。

ミリイの視線は俺の後ろの男には向けられておらず、斜めにそらされている。視界にも入れたくない程、と言うことだろう。

同じく周りに座っていたネモア達の表情を伺うと、みんな嫌そうな顔をしていて、雰囲気から関わりたくない人間だと言っている。

ネモアに至っては、苦笑いをしているものの、目は笑っておらず、背後が若干黒く見える気がするのは気のせいか。

「聞いているのか！ シルファナンっ！」

この距離で叫ぶとかどういう神経をしているんだ。

俺は予想外の二度目の襲撃に耳を押さえながら、顔をしかめる。

「最悪……」

ぼそりつと呟いたミリイの声は、後ろの男には聞こえなかったみたいで、尚も叫んでいる。

今回の試験結果の筆記がミリイより上の事、実技試験でも上位5位以内だという事、自分が貴族である事。

どれほど自分が優れているかを一通り述べた後、女ながらその自分に迫る勢いのミリイは、自分とチームを組む事こそ正しい。

自分以外にミリイの実力を活かせるものはない、才能を溝に捨てるつもりか！ 君は知性も品格も身に着けている女性だろう！

延々と続けられる言葉だが、耳をきつく抑えているのにしつかり聞こえるのは、ただ男が俺の後ろに立っているという事実だけではない。

教室中に響き渡る音量で、先ほどの事をつらつらと述べていたのだ。

「そうね」

しばらく響いていた男に、ミリイは眉間の皺を右手の親指で軽く押しながら口を動かした。

俺は今も耳を塞いでいるから、聞こえた訳ではないが、口の形でなんとなくわかった。

「では……！」

「他人を怒鳴りながら貶す知性も品格も生憎持ち合わせておりませんので、ご遠慮させていただきますわ」

ミリイの周りに花が咲いたかと思うほど可憐に微笑みながら、その口調は冷ややかだった。

体感温度が一気に下がったように感じた。

貼り付けた笑顔を崩すことなくそれ以上何も言わないミリイに、クラス中がただ沈黙する。

しかしそこは空気を読まない男。

「グリサラーサ、貴様！ シルフアナーンを唆したな！」

ネモアに掴み掛らん勢いで再度文句が飛び出す。

こちらもまた黒い笑顔で対応するものだから、体感温度は下がる一方だ。

ミリィに言われたにも関わらず、変わらない大声で叫ぶものだから、俺の耳が限界に近い。

「エリオット君、何事なの？」

流石に授業中。

いくら自習のようなものとっても、これほど叫んでいると他のクラスの迷惑になりかねない。

エレイ先生の声に、やっと後ろの音量が少し下がるのを感じた。

「先生、シルフアナーンとは僕がチームを組みます」

「私はお断りしたはずよ、アロディーン」

「シルフアナーン、君は騙されているんだ。グリサラーサなんかと一緒にいる必要はないんだよ」

どれだけ都合の良い耳の作りをしているのか。

ミリィが小さく暴言をつぶやいているのが一つも聞こえないらしい。あとは目も悪いようだ、あれほど近くにいて嫌悪感むき出しの顔が見えないなんて。

エレイ先生も頭痛がするのか、こめかみを押さえている。

関わらずに傍観を決め込もうとしていた俺に、エレイ先生の困ったような視線が向けられる。

クリーム対応は苦手なだけだな。

仲裁

エレイ先生の視線に耐えられなくなった俺は、未だ後ろに立つ男を振り返る。

彼の視線はミリイに注がれており、すぐ眼の下にいるというのに意識すら向けられていない。

「あの、アロディーン君？ アロディーンさん？」

エレイ達とのやり取りから、彼がエリオット・アロディーンであろうと当たりをつけて呼んでみる。

君かさんで悩んだのは、いきなり呼び捨てはまずいだらうと思っ
ての事だ。

遠慮がちな俺の声が聞こえたのか、ちらりと向けられる視線。

「お前……、ケースケ・ク・グリサラーサだな。事故者の」

転移の魔法陣の誤作動の話をしているのだらう。

別に隠しているわけでもないのに、エリオットが知っているのは問題ないが、事故者とは言い方としてどうなのだらう。

向けられた視線もどこか見下したように感じる。

クラスから注がれる視線も、どこか遠慮がちだ。

視界の端に移ったネモアの顔がこわばっていることから、あまり良い表現ではないのだらう。

グリサラーサ家の後見を受けているというだけで、エリオットにとっては敵意を向ける対象なのかもしれない。

「まず、チームの事だけど。実は俺がリーダーなんだ」

「はっ！ 編入したばかりの奴がリーダーとはな」

「本当にそうだよ。君に比べると俺なんて、何も知らなくてさ」
「当然だ！俺は成績上位者でかつアロディーン家だぞ。一緒にされては困るな」

「すごいですね」と、できるだけ、「尊敬しています」という表情でエリオットを見上げる。

俺は椅子に座ったままなので、エリオットが得意気に状態を少し反らすとそれだけで顔が見えなくなる。

実技もすごいんですねとか、身長も高くて羨ましいとか、手当り次第に褒めまくる。

気が立っていたエリオットだが、褒められると満更でもないのか、満足そうに頷いたりなんかしている。

「本当、アロディーンさんとシルファナーンさんがチームを組んだら、最高ですよね」

「当たり前だ。そう思うお前は正しいぞ」

「ちょっと……っ！」

ミリイの事をシルファナーンと呼び、かつ、アロディーンとチームを組めと言っているような俺の物言いに、ミリイの非難の音が響く。

アロディーンは自分に都合の悪い事は聞こえていないので、ミリイの否定に反応を返さない。

それに苦笑いをしながら、俺はミリイに口だけを動かした。

もう少し、待っている。

おだてまくる俺を苦い顔で見ていたミリイは、一瞬睨み返してきたが、小さく笑みを浮かべておいた。

その時は気づかなかったが、中々あくどい顔をしていたらしい。

口をつぐんだミリイを確認しながら、再度、エリオットに視線を戻す。

「でも、残念だなあ。いや、勿体無いかな」

思わず、と行った具合に、褒め言葉以外を口に下俺に、エリオットは訝しげな視線を向ける。

それには答えず、勝手に一人で納得している俺。

周りから見ると突然何を言い出すんだと言う話で、エリオットもそう思ったのか。

「……何が、残念で勿体無いのだ？」

と、質問をしてくる。

こういう素直な反応の人だと、クレーム対応も楽だっただろうなと、一筋縄ではいかなかったお客様を思い出していた。

「いや、アロディーンさんも凄いですけど、シルファナーンさんも凄いですよね」

「……だから、一緒にチームを組むのだろう」

「ええ、だから。アロディーンさんとシルファナーンさんが凄いいチームになるんですよ。つまり、二人だから凄って、見えちゃうんじゃないかな、と勝手に思ってしまった」

「二人だから……？」

「アロディーンさんだけでも、学習発表は凄いものが出れると思いますけど。シルファナーンさんがいたからこそ、と、見えなくもないってことですよ？ だから、勿体無いなって感じてしまいました」

俺だけがそう思うのかもかもしれませんけど。

と、最後に付け加えるだが、エリオットは何かを考えている様子

で、ミリイを見つめる。

ミリイは俺が言いたいことに気づいたのか、小さく笑みを浮かべてエリオットに視線を合わせた。

申し訳なさそうに眉を下げて。

「その点、俺は編入したばかりなので、シルファアンさんに助けをいただかないと、大した発表内容も考えられないでしょうね」

「……そうだな」

「だから、今回シルファアンさんをお願いしたんですけど……」

「ええ、それで先に受けてしまったの。アロディーンは一人でも素晴らしい学習発表ができると思っていたから」

俺の言葉に続けて、ミリイが畳み掛ける。

エリオットは悩んでいるのだろう。もしかしたら、彼もミリイに好意を抱いているのかもしれない。

ただ、そのミリイ自身にも褒められると、一人で凄い学習発表をしたら？ と考えてしまう。

好きな人には良く見られたいものである。

しばらく口元に手を当てて考えていたエリオットだったが、学習発表が今年だけではないというエレイ先生の言葉に決断したようだ。

俺の発表楽しみにしておけ。それと、次はあけておけよ。とミリイに微笑みながら言い、教室を後にした。

エリオットは別のクラスだったらしい。

方針

「助かったわ。ありがとう」

エリオットが出てすぐに、ミリィから満面の笑みでお礼を言われた。

エレイ先生もどこかほっとした顔で、こちらに視線を向けると苦笑いをしながら、小さく頭を下げて教壇に戻っていった。

いつの間にか輪のように注目していたクラスメイトも、それぞれの席に戻っていく。

俺としては問題を先送りにした感が否めないもので、喉の奥に引っかかったような気持ち悪さが残っているのだが。

今年の学習発表については、エリオットに絡まれないと分かっただけでも、嬉しいと語るミリィに、彼はどれほど嫌われているのだろうと思った。

そんな俺の気持ちが伝わったのか、ネモアもそう思っているのか、喜ぶミリィの隣でエリオットについて話してくれた。

長く続く貴族の家系の長男で、常に学年トップクラスの成績を維持し、一年前に編入してきたミリィに何かとちょっかいをかけてくる。

貴族感情の少ない学院の中であっても、オケアノス学院の建つノシルフィの貴族の中には何かと鼻に掛ける人もいて、その代表格がアロディーン家である。

後見人制度を良く思わず、地位を持たない者を見下す発言を良くするのだという。

ただし、オケアノス学院の起源がそういう感情を起こさせないように作ら得た学院のため、そういう貴族は本当にごく一部だとい

う。

「貴族としては、アロディーン家の地位が上のためか何かと文句を言われるんですよね」

「上って言っても、若干の話よ。そんなに大差はないわ。ネモアも言わせ過ぎよ。言い返せばいいのよ」

気弱なネモアの発言に、ミリイが突っ込みを入れる。

ネモア自身があまり争い事を好まない性格なので、ミリイも本気で言っている感じではないが、申し訳なさそうに眉を下げて謝っていた。

その素直さに言い過ぎたと思ったのか、言葉を詰まらせるミリイと、見ている分には中々面白い。

何にせよ、エリオットは今後も絡んでくる可能性があることは確かだった。

精神的に疲れた俺は、午後の残りを寝て過ごす事に決め、机に突っ伏した。エレイ先生に見られていた気がしたが、何も言ってこないという事は大丈夫なのだろう。

しかし、エリオットとやり取りしていた時間が思いのほか長かったのか、十分も経たない内にネモアに起こされ、昼食を食べに行くことになった。

午前中の精神疲労を残しながら、午後の学習発表会のチーム決めが始まった。

俺たちと同じで既にチーム申請を出していたものは、クラスの3分の1で、以外も大体はまとまっているようだ。

何故、別クラスのエリオットが乗り込んできていたのか、疑問に思っていたが。

学習発表会は学年単位でやるため、学年内であればチーム申請ができるようだ。

今も大会議室を借りてチーム決めが行われており、既にチームを作っている組はそれぞれのクラスで話し合いをする事になった。

基本的にはチーム内のメンバーが多いクラスで作業をすることになるみたいだが、実習室や実験室など申請を出せば借りれるらしい。今日は初回なので、どこのチームも発表内容について話し合っている。

「午前中に言ったけど、それぞれ発表したい内容を上げてください」

4つくっつけた机に集まり、中央に大きめの紙を広げると、左上に学習発表という文字を書く。

黒板とか使えればいいんだけど、わざわざ他のチームに発表内容を公表する必要もないだろうと、この形になった。

つい、ノリで議事録をネモアにお願いしたら、どうやって書くのか？ という返事が戻ってきたので、今回は俺が書くことにした。ファンが興味深そうに見ていたので、今回はお願いすることに決め、意見を募る。

「私は、今やっている魔法陣についての研究結果の発表をしたいと思っているの」

「あ、俺も。あれは学習発表会で発表すべきだぜ」

「僕も賛成です。ただ、ケースさんの許可が貰えればですけど…」

…」

ミリイから始まった言葉に、俺自身も魔法陣についての研究結果の発表だと、やりやすいなと思っていたが。

最後のファンの言葉に引っかけかりを覚える。

ネモアに視線を向けると、ちよつと不機嫌そうな顔をしている。

「確かに魔法陣についての研究結果は学習発表としては最適でしょ

うけど。ケースケさんの功績ですよ」

少し怒り気味なネモアの声に、三人は一様に苦い顔をした。

「ネモア、俺の功績って？」

何を怒っているのかいまいちわからない俺の質問に、ネモアは説明してくれた。

学力で功績を上げた者が地位を与えられる。俺が今やっている魔法陣についての研究結果は、中々の情報と言える。

グリサラーサ家の後見を受けている俺としては、その研究結果をしかるべきところで発表すれば、俺としての評価が上がる。

学習発表で発表するのは、一つの手ではあるが、チームという事で俺個人への評価が低くなる可能性がある。

ミリイ達は研究には参加しているだろうが、その研究自体は俺の物だという。

それについてはミリイ達も理解しているので、フアンの言葉にながるということだ。

「でも、実験とか意見とかそれぞれ貰っているわけだし。俺も学習発表の発表内容として考えていたし。あ、でも、後見人のグリサラーサ家としてはまずいのか？俺の評価上げた方がいいのか？」

「グリサラーサ家としてはそうかもかもしれませんが、ケースケさんが発表したいと思っているなら、俺はお手伝いするだけです」

青春

気のせいかと思っていたが、最近ネモアの様子がおかしい。学習発表の話し合いでもそうだが、俺の意見を否定する事が少なくなり、俺のやりたいことをすべて通そうとしている。

何かと世話を焼いて、必要な物は惜しみなく買いつけられてきたが、非常識な部分については否定と説明、助言をはっきり言ってくれていた。

それが今は、否定をしながらも最終的にはすべて肯定してしまうネモアに、違和感が浮かんでくる。

気づかないうちに、何かしてしまったのだろうか。

「なんだ、ケースケ。悩み事か？」

額にかいた汗をぬぐいながら、ウィズが声をかけてくる。

今は剣術の時間で、相変わらず基礎体力作りをメインにやっている俺と違い、ウィズは先生との試合をやってきたところだ。

ネモアとファンは別々の生徒と試合をやっている、ミリイは今終わった先生に挑んでいる。

一通り腕立てと腹筋背筋を終わらせた俺は、ウィズの試合を見ていたはずだが、気が付けば考え事に没頭していたらしい。

考えはじめると周りが見えなくなる癖は、どうにかしないと。

「そんなに、悩んだ顔してるか？」

「ん？ ああ、難しい顔してたぞ。どうせ、ネモアだろ？ また喧嘩か？」

「違うと思うけど、違わないかもしれない」

喧嘩をしているかと聞かれれば、俺はしていない。

ネモアとしてはしているかもしれない。

原因がわからないから胸のあたりが気持ち悪い。そもそも俺は、ネモアとこういう雰囲気になることが多いか。

前回はお互いに会話が不足していたから、それ以降はできるだけ俺も自分の中にためないようにしている。

ネモアもママに色々と言ってきていたから、最近は良好だと思っていたが。

よくよく考えると、この間のヘランドの事にしても、俺が不利や不快に思うかもしれないというものについては隠す傾向がある。

大概、そういう場合のモノは後回しにすると危険だ。

「話さないことには、どうにもな」

「ネモアはケースケに甘えてるからな」

「……甘えてるか？ 俺の方が甘えさせてもらってる気がするけど」「甘えてるって。俺もファンも、ネモアと小さい頃から仲良いけど、どれだけ困っていても自分で解決してたからな」

頼りにされてて、羨ましいぞ。と、笑いながら頭を軽く小突かれた。

ウィズとしては寂しいのだと。

喧嘩もあまりしたことがない、と、いつも何か起こる前にネモアの方から謝るのだと言われた。

拗ねて甘えるのを見たのも、俺が初めてらしい。

「ただ、解らなくもないけどな。俺もケースケといると安心できる」

満面の笑顔で言われた言葉に、思わず顔が熱くなるのがわかった。照れるなよ。と茶化しながらも、ウィズの顔も赤いことから向こうも恥ずかしかったのだろう。

無言でウィズの頭を叩いてから、ごまかすように撫でまわした。

文句を言いながらもふり払わないウイズに、自然と口元がにやけた。

青春（後書き）

本日初感想をいただきました！ありがとうございます。

そのうち番外編で別視点とか書きたいな、と思ったりしています。
今後よろしく願います。

不安

部屋は重苦しい沈黙に包まれていた。

ウイズと話していくらか気持ちが悪くなった俺は、その勢いのままネモアと話をすることにした。

いつも通り部屋に帰ってきて、何気ない日常の会話をしている中で、聞いてみた。

会話の延長線上でいけば、話しやすいかと思つての行動だったが、それが見事に裏目に出たようだ。

「何かあつたのか？」

「……何か。つて何ですか？」

「いや、最近、ネモアの様子がおかしかったから。また、ヘラントみたいな事があるのかと思つて」

「何もありません」

思つての部分を使い切らない内に否定の言葉を返すネモア。

驚いて顔を上げると、ネモアは眉を寄せてこちらを睨みつけてきていた。

ウイズは拗ねて甘えていると言つていたけど、これは怒っているとか嫌つているといった感情ではないのか？

今までネモアから向けられたことのなかつた感情に、戸惑い言葉に詰まる。

ただ、ここで引き下がると、今以上に溝が開きそうなことは予想が出来たので、いまさら質問を取り消すわけにはいかない。

睨みつけてくるネモアに視線を合わせると、できるだけ優しい声で、柔らかい表情になるように努める。

最初に会つた時も、こんな感じだったな、と頭の隅に思い描きながら。

「俺は、そんなに頼りないか？」

俺の言葉にぴくりつと肩を揺らしたネモアの瞳が揺れる。
寄せられていた眉は下がり、薄く開いた唇を何度も噛みしめていた。

その後どちらも何も言わずに、お互いを見つめるという状況が続いている。長い沈黙の中で、外の雑音だけがやけに耳についた。

どれぐらいたっただろう。

部屋に差し込む陽の光が、傾きかけていることから、30分ぐら
いはそうしていたのかもしれない。

未だに、真一文字に口を結んだままのネモアは、本当に話すつもりはないのだろうか。

ふと視界を広げると、きつく握りしめた拳が震えているのが目に入った。

「……はあ。わかった、いいよ」

これ以上粘っても仕方がないか。

夕食の時間が近いし、ネモアに話す気持ちがないのであれば、今
どれほど無言で見つめていても仕方がない。

長期戦にはなるが、また後日だな。

そう思っ頭を搔くと、するりつと視線を横に外した。

「時間も遅いし、食堂行くか」

言いながら上着を取って、部屋を出る準備をする。

今日は直接的過ぎたから今度はもつと間接的に聞き出すしかない
な。

気持ちを切り替えるために一度頭を振ると、再度ネモアを見た。

笑いかけながら声を掛けるつもりだったが、それは出来なかった。

先ほどと同じくそこに立ったままで、声も出さずにボロボロと涙を流すネモア。

口はきつく結ばれたままで、悲しみに寄せられた眉と、更にきつく握りしめられた拳。顔を真っ赤にしてただ泣いている姿に、ただ驚いた。

感情を無理やり押さえ込みながら泣くネモアに、言葉を忘れてしまった。

きつく、言い過ぎた、か。

一瞬慌てたが、こちらまで感情的になっではまずいと、小さく深呼吸するとゆっくりとネモアに近づく。

俺が少し動くだけで肩を跳ねさせるネモアに、申し訳なく思ってしまう。

すぐそばまで近づくと、頭を優しく撫でる。

泣かすほど追いつめていたなんて、24歳にもなって配慮が足りないな。と苦笑いが浮かんでくる。

何度か撫でると俯いたままだったネモアがゆっくりと顔を上げた。涙でボロボロだった。

今までこれほど泣いているネモアを見たことがなかったため、変に子供臭く見えて小さく笑いながら、持っていた上着で顔を強引に拭いていた。

「……ケースケ、さん」

「ああ、無理にしゃべらなくていいぞ。落ち着け」

「ふっ」

しゃべるとしゃくり上げそうになるネモアに笑いながら言う。

どんつと押し倒す勢いで抱きついてきたネモアは、胸に顔を埋め

ながら声を殺して泣く。くぐもった音に合わせて背中をさすつてやると、抱きつく力が強くなった。

胸のあたりが湿ってきているが、後で着替えればいいだろう。

「悪かったな。無理に聞きだそうとして。人だから言いたくないことの一つや二つある物だよな」

「……ケースケさんも、ですよね」

体を少し話すと、ネモアはこちらを見上げながら言った。

どこか苦しそうで、哀しそうに寄せられた眉に、真っ赤な鼻と目が、余計に威力を増している。

すぐに、ネモアが言っている俺の言いたくないことが何かのかわからなかった。

俺も？ と呟きながら首を傾げると、またしばらく唇を噛んだネモアは意を決したように真剣な目を向けてくる。

「俺は、ケースケさんの悲しんで苦しんでいるのに、何もできない。ケースケさんは魔法陣について色々調べているのに俺は何もできていない。だから、邪魔にならないようにしようって思ったんです」

告げられた言葉は、多分、この頃のネモアの行動の意味なのだろう。

ただ、ネモアと俺の間には認識の違いがあるみたいだ。

俺はネモアに助けられているし、逆にネモアがいなかったら何もできない。授業は受けているが、常識は良くわからない、買ひ物も何もかもネモア任せだ。

一人で生活しろ、とか言われたら、生きていけない自身がある。

「俺はネモアがいないと困るけどな」

「っ！ じゃあ、何で言うてくれないんですか！ 悲しんで苦しん

でいるって、俺が悪いって言うてくださいよ！」

ネモアの言葉に目を見開く。

確かに、最初はネモアが悪いとか思っていた時もあったが、今はそんな事考えた事もなかった。

何故そういう風にネモアが思ったのか。

そこに原因があるのだろう。

「俺、気づかない内に愚痴とか言っていたか？」

「……」

「ネモアに不満なんてないし、本当に助かっているぞ。何もできないっていうけど、魔法陣の研究だっ一緒に行っているし、それこそネモアがいなくて一人じゃ考えつかない事もある」

「……でも」

「なあ、何でそう思ったんだ？俺が、悲しくて、苦しいと思ってるって？」

顔を覗き込むと、酷く不安気な目がうろつろつと彷徨っている。

「販売権の件で城に行った日。泣いてたじゃないですか」

聞き取れるか聞き取れないかの小さな声で呟かれた言葉を、俺の頭が理解した時。

頬が燃えるように熱くなるのを感じた。

自分

皆井啓輔、今年で24歳。あと、2ヶ月で25歳になる。

地元のシステム会社に4年務めていたが、ある日の帰宅時に突然現れた光の壁から、エルコティアソフィアという世界にきている。

転移の魔法陣の誤作動で喚び出されたのだが、魔法があると言ってもゲームや小説のように簡単にはいかないようである。

アニユキスにあるオケアノス学院で学生をしながら、知識をつける事になった。

同級生の年齢で多いのは15、16歳で、体力的にも精神的にもついていくのがやっとだけど、何とか生きている。

「ケースケさん……？」

目の前で不思議そうに顔を覗き込んでくる男の子。彼が俺をこちらに喚び出してしまったネモア・グリサラサーサ、15歳。

誕生日を聞いていないから、もしかしたらもう16歳かもしれない。

実際の原因を作ったのは、ネモアの師匠なのだが会ったことはない。

相当の変わり者で、ネモア曰く、俺が責任を取るのであんな大馬鹿野郎には会わなくていいです、らしい。

総じてこちらの世界の人は体格が良く、今は俺がかろうじて見下ろせる程の身長。俺はこっちでは18歳位に見えるらしい。

「あの、大丈夫ですか？」

「あ、ああ。悪い、ちよつと現実逃避を」

俺はいまだに熱のひかない頬を軽くさすると、現実を意識を戻す。

突然、何を考えているんだ、と言われても仕方がないが、実は俺あと2ヶ月で25歳になるんだ。

ネモアに言われるまで忘れていたが、今思い出した記憶では、城に行ったあの日。

確かに俺は泣いた。

ネモアとフアンの居る馬車の中で、彼らに見られている中で、15、16歳の子供に見られている中で、泣いたんだ。

25歳にもなる大人が情けない。夢を見て泣くななんて、である。このまま忘れてしまいたいが、ネモアが悩んでいる原因がそれであるならば、話題を出さなくてはいけない。

「ネモア、気にかけてもらってこんな事言うのも悪いんだが。俺、今の今まで、泣いた事忘れてたわ」

「……は？」

俺は小さい頃からあまり夢を見なかったし、見ても覚えていなかった。

馬車で起きたあの一瞬、確かに夢の内容を覚えていたし、思い出した今は覚えている。

だけど、学院までの道のりでもう一度寝て、起きたときから今の今まで、夢を見た事すら忘れていた。

途中で一度起きて泣いた事も含めて、それはもう、綺麗さっぱりと。

言われてみればネモアの様子がおかしくなったのは、城から帰ってきてからだし。

城を出る前は変わった様子はなかった。

つまりは俺が泣いた事が原因だったんだけど、俺は自分が夢を見て泣いた事実を忘れていたわけで。

「今言われて思い出したんだ。悩ませて悪かったな」

「え？ ええ？」

理解できなかったのか、思考が追いつかなかったのか。

ネモアは瞼を何度もしたたかせ、口からは言葉にならない声を発している。

あまりのうろたえ様に思わず笑ってしまったが、それに怒るでもなく、こちらを呆然と見つめてくる。

「故郷の仕事の夢を見てな。懐かしくて泣いていたんだと思う」

課長の笑顔を思い出して、自然と顔がにやけるのがわかる。

懐かしくて、当たり前前の日常が嬉しくて、けれど、そこには俺がないという事が悲しかった。

自分自身に夢で教えられたみたいだった。

でも、今思い出すと、夢自体は俺にとっては良いものだったんだ。忘れかけていた平凡な日々を思い出して、そこに少しでも近づきたいと思えた気がしたから。

「……ケースさんって、どんな仕事されてたんですか？」

しばらく黙っていたネモアが、突然そう言葉をかけてくる。

俺は、故郷の話がしたかったのだろっ。

誰にも話さない俺に、思い出さない俺に、夢の中の俺が見せる程に。

そんな自分でも気づかなかった事に、確かに、ネモアの言うとおりに悲しんで苦しんでいたんだと思いつく。

年下に泣き言を言うのが、恥ずかしかったんだ。

相談

仕事の基本はホウレンソウだ。

報告、連絡、相談。どれにも共通して言える事だけど、後回しにしていい事なんてない。

報告は時期を逃す程言い出しにくくなるし、連絡は遅くなればなるほど致命傷になりやすいし、相談はしなければいつまでたっても解決しない。

迅速な対応と適格な判断力なんて、個人に備わっているものはたかが知れている。

といっても、出来る人間という奴はどこにでもいるだろうが、俺は自分が出来た人間だとは思っていない。

後回しにして、言い出しにくくなって、どうしようもなく勘違いするなら、気になった時に聞いてしまった方が良い。

課長の受け売りですけどね。

ネモアに夢に出てきていた、仕事の事を話した。

課長とは一回り半程歳が離れていて、飲みの席では実体験を元にした様々な仕事のいろはを教えてもらった。

可愛がられていた方だと思う。

話していてちょうど思い出した言葉だったので、一言一句言われた内容そのままとは言えないが、少し熱く語ってしまった。

何が言いたいかと言うと、お互いに色々と話しているようでも、まだ踏み込める段階には来ていない。

それが今回のような擦れ違いになったのだから、傷は浅いうちに挟りましょう……。いや違うか、聞きづらくなる前に聞いてしまおうという事にしたわけだ。

俺の場合は、ネモアの違和感に気付きながらも目をそらしたため

に、ネモア自身も言い難くなったのだという結論だ。

なんでもかんでも言えるわけではないから、ある程度の秘密は仕方がないけど。

奥歯に物が挟まったような言い方はいつまでたっても、真意が伝わらない。

ネモアはまだまだ俺に負い目を感じていて、どうしても一歩引いて構えている部分があるが、最終的に困るのは俺かもしれないだろう。と、ヘランドの件を持ち出して何とか納得してもらった。

最初の俺の対応が、ネモアに大きな罪悪感を植え付けてしまったのかもしれないと思うと、胃が痛い。

「ヘランドみたいな事は今のところないんだよな」

「ヘランドの件は、王家の立ち会いのもとマルクさんとグリサラーサ家、グラヴィスタ家の間で取り決めは終わったようです。現状、他貴族からの反感もなくおおむね順調だそうです」

マルクが王族の前で緊張している姿が浮かんだが、意外といつも通りかもしれないと思ひ直す。

貴族を追い返すぐらいだからな。

「学習発表会の方は？」

「あの時は、すみません。気が立っていて、ミリイ達の事なのでケースケさんの不利になる事は無いです。問題があるとすれば、アロディーンですね」

「ああ、あの貴族の坊ちゃんか」

エリオット・アロディーン。

長く続く貴族家系に生まれた、根っからの貴族のぼんぼんで、小さい頃からネモアに何かと突っかかってくるらしい。

理由はグリサラーサ家がアロディーン家より功績を上げている所為だという。

何とも一方的な理由のようだが、同じアニユキスの貴族でかつ権力の差があまりない事から、夜会では笑顔の応酬が長く繰り広げられてきているらしい。

学院入学時も、エリオットとネモアが同学年という事もあり目を付けられていたが、学年上位であるエリオットが一方的に嫌味を言い、ネモアが受け流す体制が続いていたそうだ。

それが崩れたのが、ミリイが編入してから。

たまたま同じクラスになったネモアとミリイは、お互いに気が合ったこともありすぐに打ち解けた。

ミリイは誰が見ても可愛くて、後数年もすれば美人に成長するだろう。

仲が良いという噂を聞きつけたエリオットがやってきて、ミリイに一目惚れ。

その場で貴族夫人にしてやってもいいぞ、と上から目線な告白。

ミリイの答えは言わずもがな、即答でお断り。

一度は落ち込んだようだが、すぐにあの残念な頭で振られた事実を照れているのだと覆い隠し、拳句の果てにネモアが唆していると妄想する始末。

俺が上手く言いくるめたが、今後、ちょっかいをかけてくる可能性は高いらしい。

功績

チーム決めから一週間。

学習発表会に割り当てられる授業時間は月に二時間だという事に、昨日気が付いた。

卒業制作みたいに週の3分の1ぐらい割り当てられるのかと思っていたので、基本的にチームメンバーでの自主活動になるとは思わなかった。

どおりで、やる人とやらない人に分かれるわけだ。

授業として先生の目があれば、そういう人も自然と減るだろうが。学習発表自体が、後見人制度のために作られたもののように。発表会は3日間かけて行われ、学院内だけでなく、様々な地方や分野から人が集まるとのこと。

そこで、良い発表をすれば、名が売れる。名が売れば、選択の幅が広がる。スカウトとかもあるみたいだ。

俺たちの学習発表の内容は、魔法陣について、で決まったが。

魔法陣についてだと、範囲が広すぎるという事で、発表内容を絞り込む事にした。

いつものように寮の自習室を借りようとしたんだけど、考える事はどこも同じで、いつもはガラガラと言って良いほど空いている自習室だった。

「え？ 五時間待ち？」

カラオケの店員のような返答をいただきました。

利用希望者一覧と書かれたシートにはずらりと並んだ名前。

この時期は自習室の利用が急激に増えるらしく、午前中から予約してやっと、夜遅くに借りれるといったことも少なくならしい。

その上、不利にならないように、利用時間がチームあたり一時間半と決められており、時間を過ぎると強制退室となる。

ネモア達は初等部の1年の時に学習発表を体験しているが、入学時点の度胸試してみたいなもののようで、自習室を使う程ではなかったようだ。

聞いた限りでは夏休みの自由研究のように感じた。

ひとまず、利用希望に名前だけ書いて、俺とネモアの部屋に集まることになった。

寮部屋は日常の生活利用としてしか使用を許可されていないので、魔法等のご法度だ。

何年か前に、自室で魔法の練習をしていた生徒がいて、危うく火事になりかけた。以降、寮の規則が厳しくなり、寮部屋で魔法を使用した場合は良くして停学、悪くて退学になる。

学習発表前の自習室の利用が増えたのは、この所為もあるみたいだ。

試験前にある程度ネタ的なものは集められているので、資料の作成次第では実際に魔法陣を書いて魔法を発動しての検証は少なくとも済むかもしれない。

月一の学習発表用の授業は、学年ですらしているらしいので、その時間は優先的に実験室や自習室が借りれるようなので、やることをまとめておけばいいだろう。

ネモアと二人ではそこそこ広いと思っていた寮部屋だったが、さすがに5人も集まると少々狭苦しい。

ウィズが自室に眠っていた折り畳み式のテーブルを持ってきてくれたので、それを部屋の中央に置いているが。

片側をベッドにくっ付けて、何とか全員が座れる。

長方形だったので、横に広い方に2人座れて、誕生日席に一人。ミリィに誕生日席に座ってもらい、ベッド側から俺とファン、ネモ

アとウイズの順番で座る。

俺がベッド側に来たのは、ベッドの上に色々と資料を置いているからだったりする。

テーブルは広いと言っても、資料を置く作業スペースが狭くなる。

黒板とかベッドからつるせたらいいんだけどな、と思いながらこの間俺が書いたものを元に、ファンに議事録をお願いした。

「既に話した通り、あまり詰め込み過ぎても内容が薄くなる可能性が高いから、重点を決めて発表した方が良さと思うんだけど、皆はどう思う?。」

俺の問いかけに、それぞれがしばらく考えた後、賛同する声がかかる。

「確かに、魔法陣と言っても、今はケーススケの思いつきを色々確かめているだけね」

「俺は、言われるままに手伝っているけど、良くわかってない部分も多いぜ」

「僕もケーススケさんに詳しく聞きたいところがあります」

言われてみて気づいたが、ミリイ達は基本的に俺の指示通りに動いていただけで、意見もこちらが求めた事に答えていただけの時が多かった。

ファンなどは、本の知識からよく意見を言う方だったが、検証結果については俺の中で納得して終わっていた部分がほとんどだったなど思い直す。

これが、ネモアの言っていた、俺の功績というところなのだろう。

焦心

チームという事で、俺の提案で発表内容について話し合う前に、全員の認識をある程度揃えるところから始める事になった。

手分けして作業をしようにも、何をやっているか理解できていなかったら、自分で行動することも、新たな考えが浮かぶこともないだろうと思っただからだ。

俺個人の研究結果としてなら、助手という位置づけでも良いかもしれないが、助手を付ける器量も度胸もない。

学習発表自体は年明けに行われるので、期間としては6ヶ月間ある。

最初に急いで決めなくても、色々知ってから内容とか話合う方が良いかもしれない。

俺が説明するための資料を作る時間として、二日もらう事にして、今日は解散となった。各自、気になることをまとめておくように、お願いする事も忘れない。

ウィズが持ってきたテーブルは、折りたたんで、壁と引き出しの間に立てかけてある。部屋で使っていなかった物なので、ここに置いてほしいと言われたためだ。

「何か手伝いましょうか？」

「んー、じゃあ、このノートの中から火属性の魔法陣が描かれているページを切り取ってくれるか？」

「切り取ってしまったって良いのですか？」

ノートを差し出して言うと、ネモアが疑問を投げかけてくる。

学院で使っているのは、少し分厚い紙の左側を金具で止められたものだ。

文字を書くのにインクが使われるためか、裏面ににじまないよう

に表面がすすべとした加工が施してある。

その加工の所為か、全体的に色が茶色掛かっているが、上質である事は確かだ。

生徒の中にはノートになっていない紙を、バラで書類ケースのよ
うなものに入れて持ち運んでいる人がいる。

あれはあれで使いやすそうなので、ひそかに憧れたりしているが、
何枚かなくしそうなので今のところ諦めている。

「この機会だから、溜まっている資料の整理もしようと思ってな」

気づいたことや疑問点が、ノートのいたるところに書いてある。

忘れっぽいので、急いではきは適当に開いてメモ程度に走り書
いているものもあるので、一度整理しないと書いた自分でも何だっ
たのか思い出せなくなりそうだ。

一枚一枚ページを確認して、必要な部分を切り取って記号を端に
書く。

疑問系ならQ、解答系ならA、良くわからないメモはW。

黙々と作業をする俺を確認すると、ネモアも隣で魔法陣の切り出
しを始めた。

色々と見返していると、精霊や魔獣について調べた内容が書かれ
ているページがあった。

きっかけはヘラントの魔道具だった。

召喚されてこの世界の常識を知れば知る程、ゲームや小説で思い
描いていた魔法の考えは異なるものだと思えるしかなかった。

だけど、その常識が違うかもしれない。そう思うと、魔法の可能
性が気になった。

世界は違うけど、物は重力にしたがって落ち、金属は熱を通す、
荷車は押すと動く。何事にも、法則はある。

地球で言うところの物理法則が、魔法エネルギーによって起こさ

れているというのであれば、それはそれで魔法エネルギーの法則と言えるだろう。

この世界の魔法に対する常識。

それが、固定概念を作り上げているのだとすれば。

「ケースケさん、終わりましたよ。一応、初級の魔法陣から順に並べておきました」

「……ありがとう、助かるよ」

「いえ、他のものも同じですか？」

「ああ、次は風属性の魔法陣を頼む」

ネモアに声を掛けられて、頭の中にあつた感情がだんだんと薄れていく。

焦るな。

心の中で唱えながら、深く息を吸い込む。

一度頭を振って、入れられたコーヒーを飲み込むと、切り抜かれた火属性の魔法陣を確認を始めた。

対峙

今日の授業を終えた俺は、珍しく一人で図書室に来ていた。

寮の部屋とか移動中に一人という事はあったが、基本的にネモアがいたし、図書室は主にファンと一緒に資料を探していた。

そのネモアとファンは家から呼び出しを受けて、午後の授業が始まる前に帰って行った。

ウィズは図書室自体が苦手だし、ミリイは買いたい物があるようで他の女の子と一緒に街に出かけた。

ミリイには誘われたが、女の子ばかりだし、俺は説明のための資料作成も残っているので断った。

その時に一緒にいた女の子達が、少し残念そうに声を上げたのは驚いた。

ウィズはいても邪魔しそうだからと、どこかに体を動かすに行くと言っていた。

最初は寮の部屋で作業をしようと思っていたが、気になった事もあったので、資料がすぐに探せる図書室にする事にした。

図書室には本を読むためのスペースがいくつか設けられている。

6人掛けぐらいのテーブルと椅子が置かれた場所と、漫画喫茶やネットカフェなどの個別に板で区切られた場所と、本棚の合間にソファードンだけ置かれた場所。

必要な本を借りてすぐに寮の部屋で読んでいる俺とファンはあまり使用した事がなかったが、調べものをするにはとても良い環境だ。集中したい人用か、一人用の個室にドアがついた場所まであり、受付で申請を出すと使用できるみたいだ。

俺はそのまま6人掛けのテーブルに向かおうとして、足を止める。

「お前は……。お前も、図書室で調べものか？」

テーブルの上に本のタワーを二本建てた、エリオットがそこにいた。

ちょうど目が疲れて上を向いたところだったのだろう。顔を上げたエリオットとぼつちり目があってしまった。

「はい。凄い量の資料ですね」

「ああ。……そういえば、確かお前はヘランダの代理人をしていたな」

「え？ あ、はい」

しばらく考えたエリオットは、思い出したように確認をしてくる。突然、ヘランダの話になったので、反応が遅れたが、エリオットは気にした様子もなく、逆に向かいの椅子を指さされた。

多分、座れと言う事なのだろう。

仕方なく椅子を引いて腰掛けると、こちらを確かめるように見てくるエリオットの視線に、居心地が悪い。

「……グリサラーサの被後見人だと思つと腹が立つな」

「それは、ちよつと、俺にはどうしようもないです」

眉を寄せたかと思つとネモアの愚痴で、若干嫌な気分になったが、何とか眉を下げるだけに留められた。

変に機嫌を損ねて、今以上に突つかかれても困るからだ。

そんな俺の態度にまたしばらく考えたエリオットは、眉間の皺を揉み解すと改めてこちらに視線を向けてきた。

怒鳴っているか、人の話を聞かないか、ちよつと変な雰囲気の時
のエリオットしか見ていなかったの、今真剣な目でこちらを見て
いる彼が不気味に見える。

「ヘランドの魔道具についてだが、最初に見つけたのはお前だと聞いている。何故、あれが魔道具だと思った」

こちらが答えるのが当然と言った態度のエリオットは、質問のはずなのに語尾は上がらない。

声から感じるのは命令で、どこまでも嫌な意味でイメージ通りの貴族だ。

グリサラーサ家への敵愾心てきがいしんと、貴族でない被後見人である俺を見下す気持ちが、一欠けらも隠しもせずに向けられる。

格下である俺に聞くことすら嫌だ、自分が態々聞いてやっているんだから答える。

目がそう訴えている。

出そうになつた溜息を何とか飲み込むと、顔に笑顔を張り付ける。

「俺が転移の魔法陣でこちらに着た事は、知っていますよね？ 前にいた場所で魔法を見た事がなかったので、魔道具がどういったものかわからなかった。と言うのが、理由ですね」

「専門店に行ったらしいじゃないか」

「はい、行きましたよ。他に魔道具を扱っている店を聞きました」
「変だな、店長は粗悪な店を聞かれたと言っていたぞ」

何故、そんな事を調べているのか。

エリオットの視線の意味が読み取れなくて、握った手の平に汗が浮かぶ。

表情だけは笑顔だが、頭の中はぐちゃぐちゃだ。

「ええ、俺は魔道具がどういったものかわからないので。一番良い物と一番悪い物を見ておこうと思ったので」

「それで、悪い物が実は良い物でした、とでも言うのか」

「そうとしか、言えないですね」

こちらを探るように見つめてくるエリオットに、俺は笑顔を向ける事しかできない。

表情を少しでも崩してはいけないような気がしていた。

ちよつと痛い貴族のお坊ちゃまだと思っていたのに、この追いつめられるような感覚はなんだろう。

積み上げられた本の題名は、魔道具や魔法陣について書かれたものばかりだった。いくつか自分で読んだ本も入っていた。

逃走

背中に嫌な汗が流れる。

俺の言葉を最後に黙ったままのエリオットは、何かを考えているような、こちらを探るような目で俺から視線を外さない。

周りでは他の生徒が行き交い話す声が出ているというのに、ここだけは静かだった。

二人しかいないと、錯覚してしまうほど、何時間とも感じた沈黙は、たった1、2分の事だった。

「本当にお前が見つけたんだな」

もう一度同じ質問をされる。

一瞬、頭を横に振ろうかと思ったが、嘘をついても得は無いように思った。

「はい。間違いないです」

「……グリサラーサの奴に言われたとかじゃないんだな」

「ネモアに……ですか？ 言われたとは何をですか？」

ネモアが何を言って、俺が見つけた事になるんだ。

疑問がそのまま口をついて出て、それを見たエリオットは、何故か一人で納得したように頷いている。

俺の疑問には答えるつもりがないようで、さっさと視線を外すと本に目を落としてしまった。

気になることはあるが、エリオットが話す気がないのであれば、俺はここにいる意味がない。

と言うより、これ以上ここにいて、先程のような状況になりたくはない。

いまだに、握ってた手のひらはしっとりと濡れている。
背中也服が張り付いているようで、気持ち悪い。

「……じゃあ、俺はこれで」

一応断りは入れてみたが、エリオットは本から顔を上げる事はなかった。

それにどこかほっとしながら、当初の目的である資料作成をすることもなく、寮の部屋へと急いで帰った。

気持ちが焦り、小走りになっていたが、今はそれを気にする余裕はなかった。

部屋に入るとドアを背に、ずるずると床に座り込んでいた。

たった、15、6歳の子供に、追い詰められた事が情けなかった。それ以上に、これから彼に探られるのかと思うと。

いつかばれてしまうのではないかと言う不安で、体が小刻みに震えているのに気付いた。

何故彼は、専門店に行っている事を知っていた？ 他に何を知られている？

暗い思考に引きずり込まれそうになった時、後頭部に強烈な衝撃が走った。

前のめりに倒れ込んだ俺は、痛みを訴える頭を抱え込み、必死で出そうになる声を押しとどめていた。

「ケースケさん？ え、すみません、大丈夫ですか？」

「……いや、悪い。俺がこんなところに座っていたからだ」

今日ほど内開きの寮部屋のドアを憎く思ったことはないだろう。
ネモアに後頭部を確認してもらうと、たんこぶが出来ていた。

水で濡らした布を渡されて、大人しくそれで頭を押さえる。冷たい感触が、痛くて少し熱を持ったそこに心地良かった。

「早かったな。用事なんだったんだ？」

「ヘランダの販売権の話でした。最近、どこかから探られているみたいで、グラヴィスタ家と一緒にその確認と対策を」

「アロディーン家が……」

「え？ 何故それを？」

ネモアの疑問に俺は図書室であつた事を話す。

異世界人だという事がばれないかと言う不安も一緒に。

黙って俺の言う話を聞いていたネモア。

「……多分、アロディーンが調べているのは魔道具の方でしょう。その中で、ケースケさんが出てきたから調べたといった形だと思います」

ネモアは、俺の事について転移の魔法陣の誤作動で喚び出された人間、という情報しかわからないはずだ。

誰にも話していないから、と力強く答えた。

見方

エリオットの件については、情報が入り次第逐一報告してもらおう事になった。

俺の不安が消えたわけではないが、今の時点では何とも判断できないので、後回しにするしかない。

何とか残っていた資料作成を終わらせると、早めに就寝した。ネモアに言われたからだ。顔色が悪いと。

「まず、注意事項。今から話す事は俺の考えであって、正解とかじゃないかもしれないって事を頭に入れておくこと」

「あれだけ実験と検証を繰り返しておいて、何でそんなに消極的なのよ？」

俺の言葉にミリィが突っ込みを入れる。

週末、学校が休みと言う事もあって、朝から説明をすることになった。

二日前に今日が土曜日だと気づいていなかった俺だが、ウィズ達は土曜日だから選んだのかと思っていたらしい。

他のチームも休みを有効活用しているようで、今日も自習室の予約は満員だった。

説明は実際に魔法を見せた方が良かったかとも思ったが、実験中に何度か見ているはずなので、口頭と資料で説明することにした。

「正解だっと思ってたら、新たな答えが出てこないだろう」

「……ケースさんの考えが間違えているという事でしょうか？」

「今の時点では俺が一番良い答えだと思っているけど、今後別の考え方が浮かぶと、そっちが一番良い答えになるかもしれない。とは思っている」

ファンの疑問に言葉を返すが、あまり納得していないのか、他も難しい顔をしている。

授業内容がコレはコウですという断定的なものが多いので、大概の生徒がそういう考え方になってしまっているのかもしれない。

何故ソウなのですか？ という疑問を求める授業はあまり体験した事がなかった。

それは初等学の授業だからそうなのであって、中等学や高等学では違うのかもしれないが、小さいうちからそういう考え方ができないと難しいと思う。

どう説明すれば納得してもらえるか。

しばらく悩んだ俺は、サイコロを作り始める。

1から6までかかれた立方体は、対になる面の合計が7になる。

即席で作ったため、形は少々いびつだが、サイコロと呼べるものが出来た。

不思議そうに作業を見ていたネモア達の目線の高さには、サイコロを差し出す。

「ミリイ、なんて書いてある？」

「1」

「ファンは？」

「2です」

「俺は、5だな」

ウイズが質問する前に答えた。

それに苦笑いしながら、それぞれの顔を見ると、さっきよりは理解しているといったところだろう。

「一方向から見える答えが必ずしも正しいとは限らない。ミリイから見れば1が正解で、ファンから見れば2、ウイズから見れば5が

正解だ。だけど、それ以外の場所は？ まだ見えてない正解があるかもしれない」

「なんとなく、解ったわ」

ミリイの言葉に、他も首を縦に振る。

まあ、すぐに考え方を変えるのは難しいだろうけど。頭の片隅にでも残っているだけで、ずいぶん違うものだと思う。

今から話す内容が、今ある魔法陣の考え方と違う可能性があるから、俺はそういう見方をしたという考え方が大事だ。

実験と検証をされていて、同じ現象を見ていたウィズ達が、俺と同じ考え方に至らなかったのは、そういうった面もあると感じた。

ヒュペリオン著の『魔力について』では、魔力について様々な仮説が立てられている。

一番印象的なものが、魔力が自然エネルギーだけで構成されているのではないかというものだ。

自然エネルギーの扱いに長けている、精霊や魔物の特殊性から来ている。

彼らには死という概念がなく、自然エネルギーとして消滅と共にエネルギーになっていくのだという考え方だ。

この仮説から派生して、精霊や魔物の使う魔力と、人などが使う魔力がまったく異なる物だという仮説もある。

人などが使っている魔力とは、生命力で魔法を使えば使うほど寿命が縮まるという考え方である。

人などには本来魔法を使う能力は備わっておらず、無理に自然エネルギーから魔力を作り出すとして体内エネルギー。生命力をその対価として支払っているのだと。

その対価の影響が魔力切れによる抵抗力の低下であり、力のある魔法使いが早死にするという噂話だったりする。

どちらも証明されてはいないが、俺は間違っていないのだろうと思っっている。

魔力とは自然エネルギーの事で、人などが魔力を発動する場合、体内エネルギーによる指示を加えているのではないかと。

魔法陣はその負荷を減らし、より正確な指示を行うための制御ではないかと。

単純な魔法ほど、こちらから与える指示も単純で済む。

難しい魔法になればなるほど、魔法陣も複雑になり、指示として使用する体内エネルギーの量も増加するのだろう。

そう考えた場合に、今ある魔法陣にはどう言った制御が設定されているのか。

実験結果から、魔法陣の特性として次のような事があげられる。

- 1つ、使用する場所によって威力が変わる。
- 1つ、魔力の量によって魔法の威力は関係ない。
- 1つ、複雑な魔法陣には繰り返し要素が含まれる。
- 1つ、魔法陣の大きさを変えると威力が変わるものがある。

使用する場所によって威力が変わるのは、自然エネルギーが魔力だからではないかと思う。

自然エネルギーは、その要素によって存在する場所や濃度が異なるのではないか。

一番わかりやすいのが地属性である土。

土のない室内で地属性である魔法陣を発動させる場合、まず土を生成しなくてはいけない。地属性の魔法陣には、土を生成して形成するという制御が描かれているのだろう。

同じように土のある場所で、地属性の魔法陣を発動した場合。既に土自体は存在するわけだから、地属性の魔法陣は形成するという制御を実行すればいいだけになる。

ただ、地面が窪んだり削れたりという事は無かったので、実際には土は生成されているが、近くに現物があるのでその複写をしているのに近いのかもしれない。

魔力の量によって魔法の威力は関係ないのは、魔法陣にそう設定されているからだろう。

魔法陣に使用される魔法陣が、普段無意識に放出されている体内エネルギーによる指示だけで発動できているのが良い証拠だと思う。

これだけエネルギーを投入してくれたら、起動しますよ。と言ったところなのだろう。

このことから、高性能な魔道具に使用されている魔法陣は、相当高度なものだと考えられる。

魔法陣は、魔法陣で記述しきれていない部分を、体内エネルギーの指示によって補っているのだろう。

つまりは、少ない量の体内エネルギーで複雑な事をさせるには、細かく順序立てた制御を描く必要がある。

使用者はただボタンを押すだけで、内部的にすべての事をしなくてはいけないのだから。

複雑な魔法陣には繰り返し要素が含まれるのは、これは先ほどの話にあった、細かく順序立てた制御の事だ。

水を回転させるにはどうすればいいか。

バケツに汲んだ水に腕を突っ込んでかき回せば、回転させられる。器があつて、一定量の力で、水を動かせばいい。バケツに汲んだ水にやる分には簡単だが、それが魔法となると話は別だ。

水を留まらせ、回転させ、より大きな効果を生むために、段々と回転を大きくする必要がある。

魔法陣の大きさを変えると威力が変わるものについては、一属性のみで単純に発生するものについて威力が変わることがある。

水属性の水を出す初級の魔法陣と、風属性の風を起こす初級の魔法陣は、それぞれ水と風の要素しか描かれていない。

逆に、火属性の火を燃やす初級の魔法陣には、火を燃やすための別な要素が存在し。地属性の土を成す初級の魔法陣は、土を生成し形成するという動作になっている。

一属性のみでただ起こす魔法陣は、魔法陣が描かれた範囲内で発動される。

ただ、どちらとも元の威力が小さいので、範囲が広がった程度

で、留まる要素もないので発生して終わりだ。

「と、言うのが俺の魔法陣についての見解」

途中何度か質問をはさみながらも、一気に説明をした俺は一仕事
終えた気分だ。

作った資料は、それぞれの特性毎に束ねられているだけで、実験
結果と俺のメモ書きがまとめてある程度だ。

本当は一度結果として纏めようかと思ったが、学習発表会でど
の内容をするのかも分からないし、その作業は皆で分担すればいい
だろうと後回しにした。

到底二日じゃまとめられなかった、というのが正直なところだが。
見渡すと皆眉間に皺を寄せて、難しい顔をしている。

「ケースが何を考えているのか、は聞けたってところね」
「理解には程遠いですね」

ミリイの言葉にファンが苦笑いしながら続ける。

ファンの場合は事前の魔法という知識が色々ありすぎて、変に混
ざってしまってわからなくなっているらしい。

「俺としては、これらの特性から魔法陣の法則を調べていきたいん
だけ」

「法則ねえ。そもそも、法則ってなんだよ？」

ウイズの疑問に、他の三人も首を傾げる。

質問されて俺も、法則とはなんだろうと悩んでいた。

俺は魔法陣について、構成する要素と組み合わせによって、効果
や威力が変わっているのだろうと考えている。

その要素と組み合わせによって、本当に効果や威力が変わるので

あれば、それは魔法陣の法則になるかもしれないが。
今の時点では、法則とは言えないのかもしれない。
つつい、科学的な法則を魔法陣に当てはめて考えていた。
それに、特性として考えている今の項目自体が、魔法陣の法則と
もいえなくはない。

「悪い、特性と法則と言う言葉自体が間違いだな」

「は？ どういうこと？」

「講義とが行って、生意気に、俺の意見は述べたけど。どれも、言
い切れる裏付けがない」

どれも、今まで俺が知っている事と合わせて、そうではないかと
思っているだけで、まだ仮説の域を超えていない。

そういった俺の言葉に、どこか納得したようにファンが呟いた

「決定打に欠けていたから、どこか違和感があったんですね」

調査

魔法陣を使用する場所による、威力の変化を確かめるため、俺たちは学院の許可を得て課外自習に出る事にした。

自習室で調べるには限度があるし、場所によって自然エネルギーの質が異なるのか、と言う事も合わせて調べたかったからだ。

最初は課外自習が出来るなんて知らなかったから、学校内にそういった場所がないか、エレイ先生に相談に行っただけだ。

学習発表内容が、地質調査をする人もいたり、薬草の分布を調べたり、精霊や魔物を調べたりする班もあるようだ。行く場所の申請さえすれば、よほど危険な場所でない限り許可が下りるらしい。

危険な場所だったとしても、確固たる理由があり教師または傭兵などが同伴であれば、許可が下りる事もあるみたいだ。

また、長期になる場合は、許可が下りている期限内であれば、各授業担当から与えられた課題を提出する事で出席扱いになるとのこと。

課外自習に行くとしたが、問題は場所だ。

当てもなく旅をするとなると、当然長期の許可は下りないし、そもそも申請の必須条件が場所なので却下される。

まずは、手分けして基本属性の自然エネルギーに特化していると思われる場所を探す事にした。

全員で図書室に行き、各地の地形や気象、伝承や神話などを重点的に探すよう指示を出す。

伝承や神話には、その地に住む精霊や魔物の話が書かれている事が多い。

自然エネルギーの扱いに長ける精霊や魔物の属性がある程度まとまっていれば、その土地はその属性が強いと考えられるからだ。

普段図書室には寄り付かないウィズに、向けた指示だったが、フ

アンとミリイが地形や気象、俺とネモアとウイズが伝承や神話について調べる事になった。

調べた内容は属性別に箇条書き程度でまとめる事になっている。

「図書室で調べものって聞いて、俺は完全なるお荷物だと思ったけど。こつこつ調べ方なら俺でも少しは役に立つな」

ウイズが『世界の童話集』というタイトルの本に目を落としながら、しみじみと呟く。

図書室に行こうといったときに、ミリイから釘を刺されていたのだ。

「もし、寝たら。 わかっているでしょうね？」

あの時のミリイは怖かった。無表情で、首を傾げながら問いかけられたウイズは、外れるんじゃないかと言うほど激しく首を縦に振っていた。

聞くところによると、難しい本とか特に専門書などの文字だけのものとかを見ると、自然と瞼が下がってくるらしいウイズ。

授業中も何度か船をこいでいるのを見ていたが、流石に他の仲間が調べているのに、寝るわけにはいかないとウイズ自身も悩んでいたみたいだ。

で、俺が渡したのは子供用の童話集。

比較的文字数が少なく、挿絵も描かれているため、サラッと読める。その上、子供用に作られているので内容がわかりやすく、難しい言い回しも出てこないので中々楽しい。

ウイズに渡した時に、子供用と言う事で苦笑いされたが。童話には、優しい精霊や、悪戯好きの魔物など、有効な情報が詰まっている。

説明を聞いて納得したウイズは、既に一冊目を読み終え、二冊目

に入っている。

ちなみに、『世界の童話集』は現在第十二回まで出版されている。

「ウイズ、読むだけじゃなくて、気になるところ書き留めておいてくれよ」

「あ、忘れてた。つい、面白くて」

「はは、ウイズらしい」

俺の言葉に慌てて先ほどノートを開くと、読み終えた本を再度開く。

いくつか気になるところがあったみたいで、ページをめくりながらノートが埋められていく。

その隣でネモアが『やってはいけない常識』を読みながら、しっかりと必要な部分をまとめている。

日常で使っている常識は、場所が変われば非常識になることがある。

それは過去から伝えられた古い考えであったり、土地柄によるものの要素が多く含まれる。

「楽しそうね」

笑っているネモアの隣の重い音を立てながら、本の束が重ねられた。

椅子に座っているネモアの頭を少し超える高さの本は、音もさることながら、その見た目で重そうなのがわかる。

一見、ミリイの腕は女の子のほっそりとしたもので、どこにそんな力があるのか疑ってしまうが。

剣術でウイズと互角にやり合うその腕は、今は服の布で遮られているが、しなやかな筋肉がついている。

また、竜人は全体的に身体能力が高く、見た目以上の力を持って

いる事が多い。

「すごい量だな」

「ある程度、絞っては来たんですけど。じっくり確認したいのだけ、持ってきました」

続いて机に先ほどの3分の1の量の本が積まれる。

運んでできているときから腕が震えていたファンは、しびれたのか手首と腕を軽く回している。

先ほどのミリイに比べると、ずいぶん少ないが、ファンには限界だろう。

俺も筋肉がついてきたからと言って、ファンと同じぐらい持てれば良い方だ。

図書室の本を制覇する勢いで読んでいるファンが厳選したぐらいだから、どれも中々の資料である事がわかる。

その後も、ミリイがウイズの子供用の本を見てからかったり、ファンと本の内容について話したり、ネモアの声で休憩をはさんだりしながら、比較的穏やかで楽しく作業が進んだ。

初旅

『ウサギとカメ』を知っているだろうか。

世界一歩みのがのろいとウサギに言われたカメが、山のふもとをゴールとし、競争をするというやつだ。

勝負は、ウサギが途中で昼寝をしまったため、追い越されてカメの勝ちとなるが。

地球と言う世界の内では、カメは確かにのろかったかもしれない。テレビの衝撃映像とかで、外国のやけに早いカメもいたけど。

「これって、カメだよな」

「ケースケさん、良く知っていますね。長距離移動にはこれが最適なんですよ」

言いながら荷物を運んでいるネモアは、岩のように大きく硬い甲羅に固定された荷台へと登っていく。

周りでは同じように甲羅に荷台を固定されたカメが休んだり、食事をしたり、走ったりしている。

もう一度言う、走っているのだ。

時速で言うところ、40キロぐらいは出ているだろう。

甲羅に固定された荷台は6人乗りで、カメの首が出ている部分に御者台？ 運転席？ が取り付けられていて、ロープがカメの口の両端から伸びている。

小型バス大の体格を除けば、カメだ。この世界の乗り物の一つで、馬車と人気を二分する亀車かめぐるまと呼ばれるらしい。

図書室での調査の結果、いくつか属性の要素が高いと思われる地を見つける事ができた。

あまり遠出は出来ないの、ノシルフィ大陸の地に限定されるが。

火属性のメウテスロ、水属性のパリアカ、風属性のエカトルタ、地属性のキシヤルナ。

メウテスロはオケアノス学院のあるアニキスの南に位置する人口が五千人程度の村で、近くにパイストス山という火山が存在する。メウテスロから西に進むと、シンフォアとの境の海沿いの街、パリアカだ。海が近いこともあるが、パリアカには入り江がある。

逆に、アニキスを北上するとエカトルタという砂漠に囲まれた国がある。エカトルタのある砂漠は、年に何度も竜巻が発生する。

最後にオケアノス学院のすぐ東にあるキシヤルナの森。古くよりある森で、森の奥には樹齢何千年とも何万年とも呼ばれる大木が生えている。

旅の計画を立てるときに、あまりにも距離があるので、2回に分けようかと言う話になった。

だが、ファンのキシヤで移動すれば、調査に2日ずつ使ったとしても、移動を含めて20日。何とか一月以内に帰ってこれるだろう。という話になった。

2回に分けた場合、1回に15日前後掛かるため、1度で回ってしまった方が良くという話になった。

エレイ先生に旅の計画と共に、1回で一ヶ月の物と2回に分けて35日の分を提出したが、彼女からもキシヤを借りるなら1度で長期契約した方が安いと言われた。

まだこの時点で俺は、汽車だと思っていたため、汽車を借りて長期契約するのだと、この世界の鉄道は凄いなとか思っていたわけだ。実際にはキシヤとは亀車で、10人未満の長距離移動にはもってこいの乗り物だと知った。

食べ物や雑食で、移動中は一定の時間にご飯を与える必要があり、ご飯抜きにすると勝手に道を外れる事もあるらしい。

村や街などは、よほど人がいない以外は、亀車を預かる拠点があるらしい。レンタカーのような物のようで。

拠点で亀車の整備や休んでいる間の世話をしてくれる。

長期契約の場合拠点での整備や世話代が格安になり、約一ヶ月であれば長期契約として契約できるようだ。

確かにお得である。

「でも、亀車なんて、誰が運転するんだ」

「俺とネモアだけ。俺、これでも亀車の操縦得意なんだよな」

「道を間違えないでくださいね」

ウイズが自慢げに体をそらすと、ファンが溜息をつきながらつぶやいた。

ファンとネモアはある試験休みに、ウイズの誘いで遠出をする事になり、今回と同様亀車で移動する事になったらしい。

当時、ネモアはまだ亀車の操縦ができず、ウイズに任していたが、気が付いたら、どこですかここ？ と言う状態になったようだ。

ウイズは地図を見ながら進んでいたはずだったが、実は地図の読み方がいまいちわかっていなかった。

一度行った事がある場所だからと、その後も感で進み、ファン達が外の違和感に気付いた時には、道を大分外れていた。

その後は交代でウイズをナビゲートしながら、何とか目的地に着いたが。無駄な移動をしたせいで、余裕をもって詰めてあった食材はすべてなくなってしまうていた。

ネモアはこの一件後、亀車の操縦資格を取った。

まずは、火属性のメウテス口を目指して、ネモアの操縦の元亀車が動きだす。

初旅（後書き）

2011/9/7 誤字修正

準備

メウテスロは鉱物の採掘者が集まる村となっている。

パイストス山の山腹より少し下の広く平に拓けた場所に、採掘者が寝泊まりするための小屋を建てた事が始まりで、その後人が増えて村となった。

パイストス山が活火山であることと、村への道があまり整備されていない事もあり、一般の人はあまり足を運ばない。

採掘者の家族がいたり、商人が直接買い付けに来る程だ。

逆に、メウテスロよりさらに下がり、パイストス山の入口とも言われる場所にあるのが、ヴァカンフと呼ばれる大きな街だ。

ヴァカンフは観光地として有名で、街のおすすめスポットから見るパイストス山は、四季によって見え方が変わるらしく、年中観光客の数が衰えない。

また、温泉が湧き出ているので、冬に近づくほど、温泉街は人が溢れるほど人気だ。

亀車でメウテスロに向かう俺たちだが、まずはヴァカンフを目指す事になる。

メウテスロに、亀車を預かる拠点が無い事と、亀車は整備されていない山道を進むことができないらしい。

ヴァカンフからメウテスロまでは、馬か馬車で行くか、徒歩で行くことになるが。

聞くところによると、乗合馬車が定期的に出ているみたいで、メウテスロに行くのには1時間もかからないようだ。ヴァカンフで宿を取り、最低限の荷物だけを持ってメウテスロに行く事になっている。

そもそも、今回の旅の荷物も出来るだけ最低限必要な物だけを持ってきている。

俺は、自分で荷物をまとめようとして、ネモアにほとんど却下された。

一ヶ月近くも旅をするんだから、何があっても困らないように、とスコップとか小道具とか食材とか……。寮の部屋にある物すべてを持っていく勢이었다。

実は俺、海外旅行してしたことなくて。初、海外が異世界ってのもどうなんだ、って話だが。

なんにせよ、物が詰め込まれて膨れ上がったカバンを4つも並べれば、ネモアの溜息が聞こえてきたのだ。

「俺がやります。ケースさんは、調査に必要な道具だけ揃えてください」

と、部屋から追い出されたわけだ。

仕方がないので、図書室から必要そうな本を借りてきたんだけど、それも却下。

本はかさばるし重い。必要なら、その場所項目だけ何かに写す。そもそも、学院の図書は外部持ち出し厳禁。だ、そうだ。

言われてから改めて考えると、調査中は本など読んでいる暇はないし、調査中に気になったことは、まとめて帰ってきてから調べれば良い事だと気づいた。

つまりは、調査結果を記入するものと、今現在不明な部分が書かれたリストがあればいいのだとやっと気づいた。

ネモアが用意し直してくれた荷物は、背負うタイプの大き目のカバン。よく、登山家とかが持っているようなやつ一つに収まっていた。

中身は、厚手の毛布一枚と着回しできる程度の服、薄手のタオル数枚、非常食、携帯応急セットなどなど。

背負うと腰の下まである大きさのカバンだが、3分の2しか入っておらず、それもきちんと袋などで小分けされている。

残りの3分の1の部分に俺の用意した、紙やペンなどを入れてもまだ余裕がある。

思わず小物を入れようとして、行く先で荷物が増え可能性があるので、余裕を持たせておいてくださいね。と、ネモアに良い笑顔で注意された。

旅の準備でそういつた事があつたわけだが。

アニユキスを出て半日。昼前に出たので、今はすっかり夜だ。

道を少し外れたところの森の入口で火を起こし、ご飯を作っています。

今回の旅のメンバーは俺、ネモア、ウイズ、ファン、ミリーの5人。

今さらになるが、男の中に女の子1人の旅つて、どうなのだろうか。

慣れた手つきで料理をするネモアと、それを手伝うミリー。若干、立場が逆のような気がしなくてもないが。

ミリーも自分が女の子だからと気にした風はなく、逆に夜の見張りはウイズかミリーのどちらかとお組む事になっている。

野生の動物とか下手をしたら盗賊とか出てくるらしい。

修学旅行とかと同じように考えて、年甲斐もなくはいでいた俺を殴り飛ばしたい、気分だ。

初日という事もあって、旅慣れない俺は亀車の荷台で寝れることになつたんだが。

風で揺れる森の木々のざわめきや、かすかに聞こえる遠吠えなどにびくびくしてしまい、中々寝付けない夜を過ごした。

枕が変わると寝れない体質では、ないはずなただけだな。

ヴァカンフ（前書き）

本日分投稿です。今回は少し長くなるように頑張ってみました。

ヴァカンプ

初めての野営から二日、大きな門が見えてきた。ヴァカンプに着いたようだ。

一日目の夜、俺は中々寝付けず夢と現実を行ったり来たりしていて、やっと寝始めたのが朝になってから。

少しして、朝食の時間になったのか、誰かに起こされたが。睡魔には勝てず、そのまま寝させてもらいました。

起きたら夕方だったのは、かなり焦った。

「慣れないと最初はそんなものよ」

そう言っつてミリイ達に、慰められたが、自分で自分が情けないというか。

その日も亀車で寝るように言われたが、無理を言っつて見張りをさせてもらった。早めに慣れたい、半日寝て過ごしたから起きていられる、と付け加えて。

ウイズと一緒に見張りをすることになり、その際、旅の心得的なものをいくつも聞くことができた。

ただ、何故、15、6歳のウイズ達がこんなに旅に慣れているのか、と疑問に思っつて聞いてみると。

「俺もミリイも実家が学院から遠いから、来るときは一人旅だったし。ファンは家の商売上外に出る事が多かったらしいぜ。ネモアは無理やり連れだされてたな」

街から一步も出ずに一生を終える人も少なくないというが、この旅は一ヶ月あるわけで。改めて気持ちを引き締めて見張りにあたった。

その夜は運良く何事もなく、朝食を食べ損ねる事もなかった。

「昼は眠たくて大変だったが。」

特に移動が遅れる事もなく、予定していた三日中にヴァカンフに付けたので、幸先は上々といった所だろう。

今はネモアとミリイが入場料を門番に払いに行っていて、ウィズは御者台にいる。俺はファンに指示されるままに、荷物の整理をしているところだ。

亀車を拠点に預ける際は、荷台の荷物はそのまま良いみたくて、貴重品と必要な物を分けているのだ。

「亀車は、入って東側で預けられるらしいわ」

「お帰りミリイ。ネモアは？」

「先に宿をとりに行ってもらったの」

そろそろ三時を回ったところ。大人数になるとそれだけ、部屋もとりにくくなるらしい。

特にヴァカンフは観光都市でもあるため、温泉などがついている宿は、予約をしないと泊まらない。

事前に予約をしないのは、何かあった場合にその日に付けられない可能性があるからだ。

ファンが亀車を預ける手続きをしている間、俺とミリイとウィズで荷物番をしている。

宿をとりに行ったネモアとは、ここで待ち合わせをするとのこと。変に探し回って人ごみに紛れてしまうことを避けるためだ。

しばらくすると手続きの終わったファンも加わり、四人でネモアを待つ。

というより、ネモアを一人で向かわせても大丈夫だったのか？
いくら旅慣れないとはいえ、すべて年下に任せている現状に、自分の能力の無さに落ち込んだ。

図書室の専門書なども読んで理解できるようにはなったが、理解

するのと行動を起こすのは別物だと痛感した。

一人、反省している間にネモアは帰ってきて、宿に荷物を置きに向かうことになった。

宿は、一階が酒場　なんてこともなく、小綺麗な受付カウンタ―が設置されていた。

雰囲気は、民宿と言うより、ビジネスホテルに近いだろうか。

部屋が六人部屋で、ミリイも同じ部屋と聞いたときは、ネモアに小声で四人部屋と一人部屋じゃダメだったのか確認したが。

二部屋借りるより大部屋を借りた方が安く、女の子を一人部屋にするとかと危険だという。

確かに、言われるとそうだ、と納得した。

ミリイ自体も気にした風もなく、ウイズ達も普段通りだ。

子供相手に意識し過ぎだな、俺が。

「メウテスロへの定期便は、朝5時が始発らしいです。メウテスロには大人数が泊まれる宿がないようなので、夜7時の最終には帰ってくる方が良いでしょうね」

「調査自体は、だからやらっても仕方ないから、予定は二日を考えている。何かあったら多少、前後するけど」

「この部屋も二日で宿泊を取っているので、延長は可能なので大丈夫です」

「じゃあ、早めに休んで始発で出るのね」

「帰りは6時頃の方が良いと思います。移動に一時間程らしいので」「そうだな、飯だけ食って寝るか」

明日の予定が決まり、夕食を食べに行く事になった。

宿に食堂もあるらしいが、折角観光地に来たんだから、外食したいというミリイの言葉に異論はなかったので、外で食べる事に。

宿の人におすすめを聞いて、朝食を4時に作って貰えるようお願い

いして、人の溢れるヴァカンフの街に繰り出した。
様々な露店が立ち並び、アニユキスでは見たこともない食材や、
お土産物屋であろう店を楽しんでいたわけだが。

「……まずい、非常にまずい」

あたりを見回すが、人、人、人。
しかも大人が多いので、人が壁のように見える。
右を見ても、左を見ても、前を見ても、後ろを見ても。ネモア達
の姿が見当たらない。

これは、完全にはぐれただろう。
雑貨屋の前を通りかかった時、不思議な形をした杖を見つけて、
思わず立ち止まってしまった。

普段使っている杖は、杖と言っても見た目木の棒なので、最初指
揮棒かと思っただぐらいにシンプルな物だ。

店に並べられていた品の中に、蔓がまきついたような棒があり、
持ち手の部分に小さな赤い石と青い石がはめ込まれていた。

まさしく、杖。

値段は三百円で、ただのおもちゃなのかもしれないが、今まで見
た事がなかったので、単純に欲しいと思ってしまった。

俺は財布など持っていないから、ネモアにお願いしようと振り返
るとそこには誰もいなかったわけだ。

どうしようかと、未だ握っている杖を見下ろしたわけだが。

「買うのかい？」

「え？ ああ、欲しいんですけど。友達とはぐれてしまって、そち
らに荷物を預けているので」

店のおばさんの声に苦笑いしながら答えると、あらまあと言った
声を上げていた。

大丈夫？ とか、お友達見つけられる？ とか聞かれながら心配されて、迷子センターに来たような気分になった。
こっち的には俺は子供だった、と思い出して、落ち込んだわけだが。

「えっと、また後できます」

そういつて杖を元の位置に戻すと、隣からスツと手が伸びてきた。あっと思っている内に台に置いた杖が取られてしまう。

「俺の、杖が……」

小さく漏れた声と共に、杖を手に取った人に顔を向けると、そこには長い銀髪の女性が手にした杖をまじまじと見ていた。

すらつと伸びた身長と、思わず目の言ってしまう胸、熱いためか七分の袖からは白い腕が伸びていて。その先にある白く細い指のついた手が、杖を持っていた。

そのスタイルの良さに見惚れたが、視線を顔に向けて言葉を失った。

白銀の髪は光を反射し輝き、瞳は翡翠色をしていた。目元を飾るまつ毛は長く上を向いていて、適度に高い鼻と、薄いのにどこか艶めいた唇が魅力的だった。

綺麗だと、ただその顔を見つめる。

「これ、欲しいの？」

「え？ あ？ は、はい」

見られている事に気付いた女性が、こちらと視線を合わせた瞬間、心臓が跳ね上がった。

やばい、煩いぐらいにどくどくと脈打っている。

女性はこちらの一般的なのだろう。俺より確実に背が高く、頭一つ分ちよつと見上げなければいけないが。

声を掛けられて、変にどもってしまい、頬が熱くなるのがわかる。それに小さく微笑んだ女性は、店のおばちゃんにお金を払うと、杖を差し出してきた。

俺は咄嗟に目の前に出された杖を受け取ってしまい、それを確認すると女性は手を離し、人ごみへと歩いていく。

「えっ！ ちょっと、これっ！」

慌てて呼び止めると、こちらを振り返った女性は口元に弧を描いて。

「あげるわ。大事にしてね」

そついいながら、小さく手を振ると、そのまま人ごみの中へと消えてしまった。

追いかけようかと思ったが、既に人の壁が出来ていて、追いつけるとは思えなかった。

お礼を言い損ねた、と気づいたが彼女の名前も知らないの、どうすることもできず。ただ、手の中にある杖を見つめる。

「ケースケさんっ！」

しばらくぼうつと杖だけを見ていた俺だったが、ネモアの声が聞こえて顔をあげる。

泣きそつな顔でネモアが走ってきていて、その後ろからは、機嫌の悪いミリイと、笑っているウィズと、ほつと顔を緩めるファンがついてきていた。

ミリイからの説教に今からおびえながらも、どんつと突撃してき

たネモアを何とか受け止める。
体格があまり変わらなくなってきているから、踏ん張るのが大変だ。

「わるい、心配かけた」

「後ろ、見たら居ないから。俺は、慌てたんですからね！」

「ケースケ、お前この歳で迷子とか」

こちらを指さしながら笑うウイズの言葉が胸の中心に深く突き刺さる。

ウイズ自体は同じ歳という意味合いでからかったのだろう。

思わず胸を押さえた俺に気付いたネモアが、一瞬不思議そうにした後、俺が落ち込んでいる理由に気付いたのか心配そうな目を向けられた。

「ごめん、その目の方で予定に情けなくなった。」

ミリイに説教を請けながら、今度ははぐれないようにしっかりついていく。

ネモアが手をつなごうと言ってきたのは、何度も何度も頭を下げて、お断りすることに成功した。

左右をミリイとネモアに挟まれたのは、俺が悪いので何も言いません。

そろそろ俺の左耳がミリイの説教で限界に近づいてきたときに、やっと目当ての店についた。

出された食事はどれも美味しく、つつい食べ過ぎながらも、まだ時間が早かったので露天の串焼きとかを食べたりして。

宿に戻った時には、目に見えるほど腹が膨れていた。

順番に風呂に入り、ベッドに横になると、一気に体が重く感じる。久しぶりの柔らかい布団に、気が付けば意識は夢の中だった。

定期便

まだ、日の昇っていない暗い空が窓の外に広がる。時間を確認すると、3時になったところだった。

3時半に起きようと思っていたが、自然と目が覚めたので、そのまま顔を洗いにいくことにする。

ネモア達はまだ寝ているが、時間はまだあるので大丈夫だろう。洗面所で顔を洗うと、窓のドアを開けて、部屋の空気を入れ替える。朝のまだ冷たい空気が体を包み込む。

先に服を着替えておこう、と荷物の置いてある部屋の隅に向かった。

そこで自分のカバンから何かの光が漏れているのが見えた。

慎重に近づきゆっくりとカバンを開けると、赤い光と青い光を放っている杖がそこにあった。

杖の先についていた二つの石が、日の光をため込んだように、ぼんやりと光っている。

恐るおそる指先で触れてみるが、特に変わった様子もなく、熱くもなかった。

しばらく見ていると、光はだんだんと弱まり、最後は元通り光らなくなってしまう。本当に、ためこんでいた光を放っていただけのように見えた。

「ん、ケースケ。早いわね」

「ミリイ。おはよう」

「おはよう、顔を洗ってくるわ。ついでに服も着替えてくるから、その間にネモア達を起こしておいて」

「わかった」

そういつて洗面所に向かうミリイを見送ると、カバンの奥に杖を片付ける。

調べるにしても、学院に帰ってからのの方が良いだろう。

ウイズとファンは、寝起きは良いみたいで一度声を掛けると、すぐにベッドから起き上がり行動を始めた。

ネモアは相変わらず、体を揺すって何とか起こすと、ぼんやりとどこかを見ている。

「ネモア、相変わらず、寝起き悪いな」

ウイズが笑いながら言うと、洗面所から出てきたミリイと替わり、ネモアを洗面所に押し込む。

顔を洗ってすっきりしたネモアが準備を整えるのを待って、皆で部屋を出た。

宿の廊下には既にほかの客が何人が起きていて、意外と早い時間から行動するのだな、と疑問に思っていた。

食堂で朝食を取ると、一度部屋に帰り荷物を持って外に出る。

自分たち以外の客もちらほら見えたが、皆、荷物はほぼ持っていないかった。どこに行くのか気になって近くにいた人に尋ねると。

朝日で有名な観光スポットがあるらしい。

ちよつと、興味が引かれたが、目的通りメウテスロ行き定期便へと乗り込んだ。

メウテスロまでの山道は、結構大変だった。

定期便が出ているぐらいなので、馬車が通れるようにはなっていないが、がたがたと激しく揺れる。

木の箱で作られた簡易の椅子に座ると、振動が尻の骨に響く。じつと座っているだけでも、固い木の感触に尻が痛い。

立っていいようかとも思ったが、揺れが激しく、つり革とかがあるわけもないので、諦めて座ったまま過ごした。

一時間後。

馬車がゆっくりと止まると、人が降り始める。

俺たち以外の人は、採掘者らしい人と、商人らしい人がほとんどで、乗車の時に乗る馬車を間違っているぞ。と指摘された。

学院の課題でメウテス口に用事があるのだと、簡単に説明すると納得してくれたが。

降りるときに多少ふらふらしていた俺をネモアが支えてくれた。

荷物を持ち直すと俺たちは、村長さんの家に向かう。調査しますよ、と報告をしておくためだ。

課外自習の際には、学院から紹介状が書かれ、街や村で何か作業をするときは、それを渡す決まりがある。

何か事故が起こった時の対処であり、むやみにもめごとを起こさないためへの予防でもある。

オケアノス学院というネームバリューがあるからこそ、出来る事でもあるが。

こちらに着いたのが6時だったので、朝が少し早いかと思ったが、村の人はほとんど活動を始めていて、村長さんにもすんなり会う事が出来た。

紹介状と事情を説明し、調査の際の注意事項などを確認する。

村からの監視がつくかと思っていたが、事細かに調査方法などを説明したためか、一日毎に報告に来てくれればいいと、とても動きやすい環境が出来た。

ついでとばかりに、村に伝わる昔話などを聞き、7時に村長さんの家を出る事になった。

メウテスロ

俺たちは山道をひたすら登っていた。

メウテスロからは、採掘場の入口に向かう道と、火山の頂上へ向かう道とが分かれている。

火山の頂上へと向かう道があるのは、定期的に火山の状態を確認しに行っているかららしい。

地震なんかがあるとすぐに火口付近に確認に行くとのこと。

道なき道を進む覚悟があつたために幾分か拍子抜けだったが、道と行っても人が良く通る場所の草が生えていなかったりという程度だ。

もともと、火口付近まで行く予定ではないので、岩肌むき出しの場所まで登りに行くわけではないが。

その一歩手前までを目指している。

パイストス山の中腹あたり。丁度、森と岩肌の境目にあたる部分では、チコと呼ばれる精霊が多く見られる。

チコは火属性の魔法を得意とする精霊で、見た目は狼のようだ。

『パイストス山の神狼』として様々な話に出てくる精霊でもあり。その昔、パイストス山で小規模な火山の噴火が起こった。

青年はパイストス山の山頂を目指していて、突然起きた大きな揺れと、火口から噴き出す真っ赤な熱を呆然と見つめるしかできなかった。

青年が危険に慌て、逃げようと思った時には、目の前に迫る炎の塊。

恐怖に体がすくみ上り、死を覚悟した青年は、突如現れた炎の様に燃える体をしたそれに目を奪われた。

青年に迫っていた炎を自らの身体で押しのけると、優雅に地上に降り立った。その姿は堂々として、こちらを見つめる紅の瞳は、青

年を射抜いていた。

その後青年を背に乗せ、山を降りたチコは何事もなかったかのように戻っていった。

そしてしばらくすると火山の噴火は収まったという。

また、大規模な火山噴火が起こる前には、人里に現れて危険を知らせた事があるなど。

そのためか、良くチコが目撃される、森と岩肌の境目にはチコの石像が建てられていて、定期的にお供え物が供えられるとは、村長さんの話だ。

ひとまず目指しているのは、そのチコの石像が建てられている場所で、森を抜けた場所になる。

チコは森を抜けた場所で良く見られているという事は、火属性が強いのは岩肌の部分と言う事になる。

否応なしに、火口が一番強いのだろうが。そんな場所で調査をするのは危険だし、万が一魔法が噴火に影響しないとも考えられない。

「……きついな」

山道を登る経験が今までなかったことと、調査のためにと詰められた最低限の荷物。それが結構重たい。

登頂するのが目的ではないので、本当に最低限だが。

それでも、カバンの半分を埋める道具と、午後に食べる食事に水分補給用の水となると、なかなかの重さになる。

こちらには登山靴なんてものはなかったので、分厚い革靴なのも原因だと思う。

ウィズやミリイは平気そうだが、インドア派の俺とネモアとフィンにはつらい。ネモアはまだましな方かもしれないが。

俺とネモアは歩きたびにふらふらしている。

「村長さんにもらった地図だと、後半時間は登らないといけないけど。ここで休憩する？」

「いや、半時間なら一気に登った方が良さだろう」

今座り込むと、次に立てない自信があったので、ミリーの言葉に返す。

ファンの方を確認すると、こちらと同じ気持ちなのか、苦笑いしながら頷いてくれた。

気合を入れ直して足を踏み出し、踏み出し、半時間を少し過ぎて、何とか木々が開けているのを見ることが出来た。

それを視界にとらえてからの俺の行動は早く、あそこまで登れば休めるとばかりに、足を進める。

「つ、いた……」

「はあ、ふう……着きました……」

荷物を降ろすと、そのまま斜面に横になる。

ごつごつとした石が背中にあたって痛い、今は起き上がれなかった。

7時に出て目的の場所に着いたのが8時半。約1時間半の道のりだ。

帰りも同じぐらいかかると考えて、下山は4時ごろの方が良いだろう。

山を登るのに思った以上に時間がかかったが、始発の定期便に乗ってきていて正解だった。一便遅らせると7時になるので、昼に着いていたかどうか微妙なところだ。

乱れた息が落ち着くのを待つて、水分補給をした後に、チコの石像を見に行った。

チコの石像は想像以上に立派なもので、揺らぐように削られた毛に、瞳には赤い宝石らしきものがはめ込まれていた。全長は両手を

広げても届かないほど大きく、立っている俺と同じぐらい高い。

青年はこの背に乗ったのか、と羨ましくなった。

チョコの好物だと教えられたキュシヤという、ナスビのような形をした桃色の果物を台座に備えるとしばらく手を合わせる。

「何してるんですか？」

「お供え物」

「いえ、その手を合わせている、やつですけど」

ネモアに言われてこちらではやらないのかと思いつながら、なんとなく、と返した。

森への入口で調査のため魔法を発動するわけにもいかないのに、俺たちは少し離れた、他より傾斜がなだらかになっているところに移動する。

崩れる心配がないかどうか周りを一通り確認すると、早速始める事にする。

方法は各、火、水、風、地の属性の初級の魔法を発動してその威力や効果を観察するといった形である。

初級の魔法陣に限定するのは、周りへの影響を考えた事と、初級の方が効果が単純で比較がしやすいといったことからだ。

各属性を一通り試すのにもちゃんと理由があり、魔法の授業をする際に属性の相性や相剋と言ったものが説明されていなかった事に関係する。

あくまで地球知識だが、火属性と水属性は相互に抑制し合うので、パイストス山では水属性の魔法の威力が下がるのではないかというところだ。

基本的に魔法は生活をより便利に役立てるために使用されているため、今の学年の授業では魔法を使つての攻撃とかを行う授業は少ない。

というより、魔法を使って攻撃するとなると、まず魔法陣を描いて魔力を込めてとしなくてはいけないため、魔法だけの実践練習と言ったものがないのかもしれない。

となると実際の戦いにおいても魔法は後方支援になるといった所だろう。

相手が火属性の魔法を使ったから、水属性で対抗する。

そういった事をするには瞬発力に掛ける為、最終的にどの属性でも威力が強い魔法が勝つという常識が出来ているのだろう。

地によって属性の威力が左右されるとなれば、同じ威力の魔法でも、属性を選択することによって優位が決まる事になる。

ここまで考えて、攻撃主体で魔法の事を考えている自分が、ゲームのし過ぎだと思ったが。過去にあったのだから、まだ、俺は見えないがこの世界に戦争がないとは限らない。

そもそも同じ人という種族しかいない地球でさえ戦争があるのだから、他種族が生きるこの場所の方がそういった事あってもおかしくないだろう。

暗くなりかけた思考に頭を振って飛ばすと、火の魔法陣を描く事に集中した。

「じゃあ、さっきの説明の通りにな。ウィズが発動して、俺たちは観察」

ウィズは魔法陣が発動できる魔力を注げる位置にいて、俺たちは少し離れた場所から観察する。

魔法を発動する位置から1メートルの場所に、木の棒が立ててあり。それが四方向。そこからさらに1メートルの位置に基準となる線を引き、観察を行う。

立てた木の棒には、等間隔に目立つ目印を付けていて、大体の大きさの基準を決めるためだ。表現の仕方が人それぞれになっても困

るので、木の棒で何番目の目盛とすることにした。

それと合わせて、木の棒の立ててある位置には、垂直に線が引いてあり、これにも等間隔で目印がつけてある。

同一の魔法を何度か発動し、高さや幅、その他効果について観察する事になる。

「ウイズ、準備できたら声を掛けてくれ。10数える内に、俺たちから待ったの聲がかからなかったら発動」

「りょーかい。んじゃ、良いか？」

ウイズの言葉に誰も声を上げなかった。

心の中で10数えたとき。

ウイズの杖の先から放たれた魔力が、中央に置かれた魔法陣に注がれる。

本来なら小さな炎があがるその魔法は、俺の予想通り、一つ上位の魔法陣で起こせる魔法と同程度の威力の炎が上がる。

大きさの差としては1.5倍程度だろうか。

事前に俺が説明していたといっても、普段と違うそれに、魔法を使ったウイズは驚きを隠せていない。

俺の正面で観察していた、ミリイも口をぽかんと開けている。

学院で場所による観察をしていた時は、本当に些細な変化だったので、これほどまでに威力が違う事に驚いているのだろうか。

ネモアとフアンの様子も確認すると、驚いているようだった。

俺はまともに観察ができていなかったであろう、ネモア達に声を掛けると、再度魔法陣を描きに行くのだった。

チコ

火属性の魔法陣に続き、水属性の魔法陣の観察を終えた。予想通り水属性の魔法陣の威力は通常の5割程度だった。

つづけて風属性の観察に入ろうとしたが、魔法陣を発動させていたウィズから休憩の声がかかる。

初級の魔法陣と言えど、すでに十回前後続けて魔法を使用していて、結構疲労がたまってきているとのこと。

ネモアと観察を替わることになったが、時間もちようどよく12時を指していたので、先にお昼を食べる事にした。

お昼は宿で用意してもらったお弁当だ。

ヴァカンフは観光都市だけあって、別料金を払えばお弁当を作ってくれる宿がほとんどだという。

ふっくらとしたパンに、甘辛いたれに付け込んだ厚切りの肉と、数種類の野菜をはさんだサンドイット。

別容器に入っている肉と野菜がドロドロに溶けるまで煮込んだ濃い味のスープは、固めのパンですくって食べる。

ポテトサラダも着いて、保温用機に入った甘めの紅茶までついている。

ポリウム満点のサンドイッチを頬張りながら、遮る物の何もない空を見上げると、そこは雲一つない青空。

「それにしても、ケースケは凄いわね」

「んー？ 何が？」

紅茶を飲みながら言うミリーの言葉に、口いっぱいサンドイッチを入れていた俺は、間の抜けた返事をする。

視線を空からミリーへと戻すと、小さく溜息をつかれた。

「そういうところ見ると、凄いかどうか考えちゃうけど」

「だから、何が凄いのさ」

「魔道具の事とか、魔法の属性の事とかだろ。俺でもケースケが凄いのわかるぜ」

呆れたように言うミリィに、からかい交じりにウィズが続ける。

凄いと、言われても俺には素直に頷くことは出来なかった。

そもそもの前提条件、常識の部分が違うのだから、ウィズ達からしたら俺は凄く考えの持ち主なのかもしれない。

でも、行き過ぎた凄さは、いずれ打たれる。

ヘランダの魔道具がいい例だ。

あれほどまでに貴族の中で問題が大きくなったのは、ヘランダの魔道具が凄すぎたからだ。

「あつ！ ケースケさんっ、あれっ！」

ぼんやりと考え込んでいると、ファンの慌てた声がかかる。

慌てているのに極力声を押さえようとしているのか、片手で口を押え、もう片方の手で俺の後方を指さしていた。

俺の後方は、森の入口がある方向で。

ゆっくりと振り返った俺は、ファンが何故慌てていたのか気づいた。

チコだ。

『パイストス山の神狼』と聞いた時から、一目見てみたいと思っていた。

青年を背に乗せられるくらい大きな狼。石像を見て、更に実際のチコを見てみたいと思っていたのだ。

チコの石像のところで、俺の供えたキュシャを口にくわえてこち

らを見ている、二つの紅の瞳。

燃えるようとは、良く表現されていると思う。

風に揺れる赤く薄く色づいた毛が、炎をまき散らしているようだ。

口に入れたパンをそのままに、じつと目に焼き付ける。

しばらくこちらを見ていたチコは、キュシヤを口にくわえたまま、山の斜面を颯爽と登って行って閉まった。

もっと、持ってきておけばよかったかもしれない。

その場で食べずに持って行ったってことは、子供とかいるのだろうか。

狼の子供だから、子犬みたいにかわいいかもしれない。

自然と口元が緩んでくるが、そこは仕方がない。あたまの中では小さいふわふわ薄桃色の綿毛が、可愛らしく丸まって固まっている映像であふれているのだから。

「すごいですね。本当に要るんですね」

「チコは火属性の精霊だろうな。火の要素が強いところに、同じような精霊がいるという記述もあるし」

残っていたパンを口に押し込むと、紅茶を一气飲みする。

チコも見れて、テンションの上がった俺は、足取り軽く風属性の魔法陣を描きに行くのだった。

雨宿り

昼食を食べ終わり、少し休憩をはさんで、引き続き観察を進めていく。

風属性の魔法陣を一つ発動し終え、この調子なら今日中に終わりそうだったのは、ほんの少し前。

「雲行きが怪しくなってきましたね」

ファンの言葉で空を見上げると、雲一つなかった快晴は、いつの間にか視界を雲が占めていた。

灰色を帯びた雲が空全体に広がり、太陽を覆い隠し、今はおぼろにしか見えない。

これは一雨来るかもしれない。

早めに雨をしのげる場所に移動しようとして声を掛けようとした時、山の上の方に霧がかかってきているのが見えた。

よくよく凝らしてみると、既に雨が降っていて距離があるために、ここからだと言ったように見えただけのようにだ。

「まずい、雨が来てる。すぐに道具を片付けて、移動だ」

俺の言葉に一齐に荷物を片付け始める。

ノート類などのあまり濡らしたくないものを奥に入れ、その上に濡れても大丈夫なものを詰めていく。

ネモアに教えられるまま、防水効果のある革素材の袋でカバンを覆うとなんとか片付けは済んだ。

しかし、雨はもうすぐそこまで来ていて、雨宿りをしようにも屋根がない。

森に急いでも結構下がらないと、雨をしのげるような木もない。

「ケースケ、こっちに洞窟があるぞ」

どうするべきか悩んでいると、近くを調べていたウィズが声を上げる。

すぐそこまで来ている雨に、考える暇はなく。

急いでその場所へと走った。

確かにウィズの言った通り、ぽっかりと空いた洞窟の入り口があり、何とかそこに全員入る。

間一髪と言うのだろうか。

ぽつぽつと音がし始めたかと思うと、次の瞬間には大きなバケツをひっくり返したかのような土砂降りの雨だ。

いくら、防水効果があるからと言っても、これでは対して意味をなさなかっただろう。

奇跡的に濡れずに済んだ俺たちは、風の勢いで入口付近に雨が入ってきていたので、洞窟の少し奥に進む。

「何とか、助かったな」

「本当、森に走っていたら間に合わなかったわね」

ミリイの言葉の通り、雨は森を既に越え、メウテス口まで到達しているかもしれない。

しばらく続きそうな雨に、近くにあったちようどいい大きさの岩に腰を下ろす。

でも、よくこんなところに、洞窟なんてあったな。

「……ケースケさん」

俺がそんな事を考えていると、ファンがどこか緊張した顔つきで声を掛けてきた。

あまり聞かれたくないのか、開いていた隣に座ると、小声で続きを話す。

「ここって、巣ではないでしょうか？」

「え？」

「奥に続く足跡が複数あるんです。もしかして、チコの住処ではないかと」

ちらりと足元に視線を向けると、確かに獣の足跡っぽいものごとくつも洞窟の奥へと続いている。

どうやら何かがある事は確かなようで。

その上、歩幅が違うものがいくつもあるため、一匹や二匹と言うわけでもないみたいだ。

昼に見かけたチコが、確かこの洞窟の方へと向かっていたため、チコの住処と言うのは間違いないかもしれない。

もし、チコの住処だとして。

「僕、前に本で読んだことがあるんですけど。チコの子育て時期って、夏から冬にかけてらしいんです」

そこまで聞いて、俺の頭の中で警笛が鳴り響く。

チコは伝承上とても良い精霊として伝えられているが。

実際は見た目狼である。

子育て中の親は神経質になるのは、人も同じだが。野生の生物で考えると、ここは彼らのテリトリーである。

そこに知らないとはいえ、入るといふ事は。

グルルウ　　ッ

洞窟内に響く、低く唸る声。

ぞわりつと背中を駆け上がる感覚に、手が震えているのがわかった。

錆びついた機械のように、ゆっくりと振り返り、暗い闇が広がる奥に目を向けた。

後退（前書き）

今回、痛い表現が入ります。苦手な方はお気を付け下さい。

後退

俺とファン以外も異変に気付いたようで、洞窟の奥を見つめる。隣で大きく震えだしたファンを自分の背中に隠すように後ろに行かせると、暗闇の中へ目を凝らす。

足音は無いが、腹の底から出すような低い唸り声と、生き物の気配が近づいてくるのがわかる。

一歩一歩、ファンを庇うように入口へと後退していたが、暗闇の中にぽつぽつと、淡い光が浮かび上がる。

二対の金色。

揺れるその光が鋭くこちらを睨みつけてきている。

段々と数を増やすそれに、隣から息を呑む音が聞こえた。本当は、悲鳴を上げたかったのかもしれない。

喉に張り付いたようなそれに、俺はじっとりと手に汗をかいているのに、背中は驚くほど冷たく感じていた。

「ウイズ、刺激するなよ」

背後でがさがたと音がしたので、振り返らずにそれだけを告げる。多分、ウイズが護身用を持ってきていたナイフを取り出そうとしていたのだろう。

どうやら、ミリイもそう、だったようで、小さく息を吐いたのを感じた。

「…………でも、どうすんだよ」

普段より高めのウイズ声は、恐怖か、緊張のため少し震えているようだった。

どう、すればいいかなんて、俺にもわからない。

ただ、見える範囲で十匹を超すチコを相手に、抵抗をすることは無意味であることだけは、警笛を休みなく鳴らす頭が訴えていた。

ここは彼らの家だ。

俺たちはただ、侵入者でしかなく。武器なんて出そうものなら、敵認定されるだろう事はわかった。

「出来るだけ、刺激しないように入口まで下がる」

「外は酷い雨だぞ」

「斜面を川のように流れているわ」

見なくてもわかる激しい雨音に、そう、なっているのだろう。

森を超えたここは、むき出しの岩と土で。下手をしたら、土砂崩れなんかも起こるかもしれない。

「ファン、ゆっくりネモア達の方へ下がれ」

「ケースケさんは？ どうするのですか？」

「俺も下がるに決まっているだろ。ただ、二人一緒に動くより、一人ずつの方が警戒されないだろう。あと」

俺はファンに小声でつぶやく。

ファンは俺の言葉に声を上げようとしたが、刺激するな、と言っ一言で何とか治める。

こちらを気にしながら、ゆっくりと下がるファン。

先ほどの伝言を聞いたのだろう、ネモアのくぐもった声が聞こえた。

もしも、襲われたら。俺を置いて逃げる。

全員で襲われたら、助けられない。ヘラントに人を呼びに行くんだ。

信じているから、助けに来いよ。

ファンは顔をしかめていたが、この状況が危ういのは、一番頭の
良い彼だからこそわかっているようで。

自分が代わりにという言葉も、俺の方が年上だろう、と押し切っ
た。

後は、一番暴走しかねないネモアを説得してくれるように頼んだ。
もちろん、襲われるつもりはない。ないが、じりじりと近づいて
くるチョコの集団は、かなり怒っている。

ファンの考え通り、子育ての真っ最中だったのだろう。
かなり気が立っているみたいだ。

そんな事を考えながら後ろに下がっていた所為か、転がっていた
石に足を取られる。

やばい。

そう思った時には既に体は後ろに傾き、頭を打たないために上体
を捻ると、派手に地面を転がった。

標高が高いため日差しが強く、紫外線対策に長袖を着ていたが。
反射的に体を庇うために腕を曲げてしまい、左腕の肘を強く打ち
つけてしまった。

かなり痛い。

大声を出して叫びたかったが、それを何とか抑えたのに。

「いづ……っ！」

「ケースケさんっ！」

突然足に走る激痛。続いて襲ってくる熱さ。

一瞬何が起こったかわからなかったが、ネモアの悲鳴のような叫
び声に、チョコが噛みついていてのだと予想を付ける。

どれほどの惨状か、次が来るかもしれないので、現状を確認する

ためそちらに目を向ける。

案の定、外れてほしかったが、そこには一匹のチコが左足に噛みついてた。

丈夫な革製のスポンに、鋭い牙が突き刺さっている。

噛みついてるチコはまだ若い年代のようで、他に比べると体格が小さかったが。それでも、普通の狼より一回りはでかい。

それに見合った牙は太く、あごの力が強いのか深く刺さっている。

「っ！ ケースケ！」

「馬鹿！ これ以上刺激するな！」

「だけどっ！」

ミリイが慌ててこちらに駆け寄ろうとした。

チコ達の視線がそちらに向かうのを感じて、大声を出す。
痛い、痛い。

額から流れる汗が止まらない。

いまだに牙が刺さったままの場所に、心臓が移動したのではないかと思うぐらい、どくどくと脈打っている。

痛くて、怖くて、耳鳴りまでしてきた。

恐怖で叫んでしまいたかったが。何度か浅い息を繰り返す。

チコは俺に噛みついてる奴以外、まだ何もしてきていない。

という事は、この若いチコ以外には、ぎりぎり敵認定されていないのではないか。

単に俺がこけたから、つい、噛みついてきただけとも考えられる。

「……大丈夫だ。何もしないでくれ」

いまだに噛みつかれた足と、地面に倒れている俺は顔をネモア達の方に向ける事は出来ないけど。

精霊と呼ばれる彼らに囲まれながら、俺は出来るだけ安心させる
ように、ネモア達に呟いた。

怪我（前書き）

今回も流血表現があります。苦手な方はお気を付け下さい。

怪我

どれぐらいたっただろうか。

雨音が小さくなっていくのが聞こえる。

相変わらず足に噛みついたチコはそのままだし、痛みを訴えているが。周りを取り囲んでいるチコ達が、唸るのをやめた。

今も警戒はしているが、どこかこちらを探るようにしている。

「すみません、勝手に入って。雨宿りしたかったんです」

言葉がわかるかは知らないが、こちらの意思を伝えてみる。

チコの表情に変化はなく、まっすぐに視線を向けられるだけで、何を考えているかなんてわからない。

視線を外すわけにもいかないので、一番近くにいた体格のいいチコと見つめ合っていたのだが。

段々と目の前が霞んできた。

ちらりつと足元に視線を落とすと、血だまりができて始めている。

どれぐらい流れているかわからないが、雨に濡れた訳でもないのに、体が寒さを感じて震えている。

貧血だろうか。

「……雨、上がったら出ていくんで。しばらく居させてください」

言いながら本格的に瞼が下がってきた。

気が付けば意識は朦朧とし、足の痛みはあまり感じない。

本能で痛みから逃げているのかも知れない。

「ネモア」

「っ、はい」
「何も、するなよ」

視界が暗く埋まる直前、一番に駆け寄ってきそつなネモアに念を押す。そして、すぐに闇に包まれた。

「……生きてる？」

目を開けて見えたのは、天国でも地獄でもなく、良くある木目の天井。

近くに人はいないみたいで、俺の言葉に返事をする声はなかった。視線を巡らせると、どこかの部屋でベッドに寝かされているみたいで、手をつきながらゆっくりと起き上がる。

瞬間、左足に走る激痛。

小さく呻きながら、再度ベッドに逆戻りした俺はしばらく痛みが引くのを待った。

「夢じゃなかったか……」

つぶやきながらかかっていた布団をめくると、包帯の撒かれた足が見えた。

少し力を入れると、痛みが来る。

感覚があることに安心しながらも、今後、動けなくなったらどうしようか、と不安が頭をよぎる。

そもそも、あの後どうなったのだろう。

洞窟から部屋に移動し、治療がされてるところを見ると、最低限、俺は無事のようにだが。つきっきりで看病していそつなネモアがここに居ないのが、気になる。

天井を見つめながら、ぼんやりとしていると、入口のドアが開く音がした。

視線をそちらに向けると、目を大きく見開いたネモアが、多分水の入った桶を手に立っていた。

「ケースケさん？」

疲れをにじませる顔に、やっぱりつきっきりで看病していたのか。とか思いながら。

俺の名前をつぶやいた後、こちらをじっと見つめるだけで動かないネモア。

どれだけ長い時間、気絶していたのだろう。

「気絶したんだな、俺。ネモア達は怪我ないか？」

聞いた俺に、くしゃりと顔をゆがめると、勢いよくこちらにかけてくる。

桶の中の水がいくらか床にこぼれたが、気にしていないようだ。

横のテーブルに乱暴に置くと、更に水がこぼれた。

そのまま覆いかぶさるように抱きしめられると、胸のあたりに顔を埋めて、ネモアは肩を震わせていた。

抱きつかれたときの振動で足が痛かったが、何とか声を出さずにネモアの頭をぼんぼんつと軽く撫でる。

落ち着くのを待って、状況を確認した。

ここはメウテス口にある診療所で、採掘作業で怪我をする人が居るためか、そこそこの治療ができる場所だった。

今は夜中で、俺が気絶してから半日が経過している。思っていたより、時間は経っていなかった。

気絶した後、俺を囲んでいたチコの群れは下がり、噛みついたま

まの一匹と大きな奴がネモア達のそばに連れてきた。

ネモアは思わず噛みついてきたチコを外そうとしたが、ミリイに止められたようだ。

栓を外すといままで以上に血が流れる。ミリイとファンで止血が行われたが、状況は良くない。

ウィズが背負って降りたとしても、一時間以上かかる道のり。最悪出血多量で、となるわけだが。

結果的には、全員チコの背に寄せられ、メウテスロに着くことができた。

幸い、噛みどころが良かったのか、後遺症が残ることはないと言者は言っていたが。何せ血が結構流れているから、いつ目覚めるかわからない。

後でミリイ達に確認すると、生死の境のような意味ではなかったみたいだが。

怪我の所為で熱も出ていて、ネモアはこの世の終わりみたいな顔をしていたらしい。

ネモアが自分で看病すると譲らなかつたため、他はヴァカンフの宿に延長と荷物の整理にいったん戻った。

もう一度寝た俺は、朝一でやってきたミリイ達にも同じように状況確認した。

医者に傷の具合を確かめてもらって、全治二週間だと聞いた。

傷自体は三日から四日すればふさがるようにだが、無理に使えばすぐに開いてしまうとのこと。

二週間分の塗り薬と飲み薬を受け取ると、ウィズ達に調査の続きをお願いし、今日は一日病院のベッドで過ごす事になった。

無理

残っていた風属性と地属性の魔法陣の調査はウィズ達で順調に進められた。

一日目のような雨も降らず、三人体勢だったため、それぞれの回数は増えたみたいだがその日の内に終わることができた。

風属性の魔法陣の効果は特に変化がなかった。

地属性の魔法陣で発動した、土の壁の大きさは変わらなかったが、強度が少しもろかったという話だ。

調査が終わったので、次の目的地に移動したいところだったが、流石に傷がふさがらない内は、無理に動かないようにと医者に言われているため、俺がいくら大丈夫だと言ってもネモアが許さなかった。

ファンは俺を犠牲にして助かってしまった、と思っているのか、俺が少しでも動くこうとすると自分の所為でと落ち込み始める。

涙を浮かべながら何度も謝ってくるファンをなんとか落ち着かせる。

そして、一息ついたと思ったらミリィのお説教だ。

足のそれも神経に関係ないところだったから良かったものの、首に噛みつかれていたら助からなかったのよ、と。

いつの間にか普段の生活まで注意されて、ぐったりとしたところに、最後。

まあ、大人しくしてろ。と言いながら、ウィズが肩を叩くものだから、苦笑いしか浮かばない。

そのウィズに背負われながら、揺れのひどい定期馬車でヴァカンフに戻ると、医者に勧められた温泉めぐりが始まった。

めぐりと言っても、傷口がふさがっているわけではないので、実

際にお湯に浸かることはしないが。

足湯に足首までを浸けたり、温泉のお湯で体をふいたりする程度だ。

温泉が切り傷に効くかどうかはわからないが、傷口周辺をこまめに洗淨、消毒しているのは悪くはない、と思っている。

「大分、ふさがってきたな」

傷口を丁寧に拭き、消毒薬と塗り薬を塗り込む作業を繰り返す。

精霊と言っても、野生動物に噛まれた事による炎症や腫れも起さず、綺麗にピンク色の新しい肌ができはじめていた。

ヴァカンフの宿に戻ってから三日も経ってしまったけど。

包帯を巻いたネモアを見ると、まだ心配そうだ。

確かに、出来たばかりの肌は薄く、指の腹で触ると柔らかいけど、しっかりとくっついている。

少し多めに見積もっていたといっても、最初の目的地から予定が遅れるとは考えていなかったの、俺個人としては焦っている。

ネモアの提案で、一度学院に帰る事も検討されたが、俺の希望でこのまま調査の旅を続ける事になった。

ネモア達に迷惑を掛けるけど、メウテス口での調査で俺の仮説が正しかったことから、このまま調査結果をまとめたかったのだ。

後は、怪我をして戻ると、次の課外自習許可が下りないかもしれないというところもある。

診察してもらった医者に、後遺症もないと言われたのだから、尚のことこのチャンスを崩したくなかった。

「予定より早く、調査が終わったので。完全にふさがるまでは……」

「完全にだと、大分かかるだろう。次のパリア力はここから近いし、迷惑だとは思うけど、移動中はじっとしているから」

気分的には、母親にお願いをしている子供の気分だ。
しばらくネモアとの見つめあいが続いた後。

そばで様子を見ていたウイズが、移動は俺が運んでやるよ。の一言で明日の朝、出発する事が決まった。

決まった後の行動は早く。

移動中の食糧と水、メウテス口の医者からさらに二週間分の傷薬と塗り薬を貰い、明日に備えて早めの就寝。

朝起きて、預けていた亀車を受け取りパリアカへと向けて出発した。

予想外だったのは、ウイズの運んでやる、という言葉の実際の状態。

俺は運ばれるわけだから、俺が持っていたカバンの荷物はミリイが持つ事になり、ウイズは自分のカバンを背中に背負う。

この時点でどこかいやな予感はしていたのだが。

傷口に障らないように、膝裏と背中に腕を入れられ、持ち上げられた姿は、良く言うお姫様抱っこだったわけで。

奇しくも、その日は俺の誕生日だったわけで。

25歳のおっさんがお姫様抱っこで運ばれる姿は、自分で想像し
たくなかった。

パリアカ

ヴァカンフを出て、一日半。

大人しく亀車の中で寝て過ごした俺は、傷が開くこともなくパリアカに到着する事ができた。

食事の準備くらい手伝おうと思っていたが、外に出る事すらネモアに禁止されて、更にファンまで止めてくるものだから、本当に寝て過ごしていた。

二十代を半分過ぎた男としては、食べては寝て、寝ては食べては完全なるメタボへの進化を遂げるルートでしかないのだが。

文句を言うわけにもいかず、いまでもすら迷惑をかけているのに、無理をして傷が開いた時には言葉にもできない。

パリアカでは水揚げされた魚が店先に並び、船での貿易もあるのか、こちらであまりみない果物とかが置いてあった。

本来なら、それらをのんびり見たいところだけど。

今の俺は、一刻も早く宿に入りたい。

完全に傷がふさがるまでは、自分で動く事を禁止されている俺は、一番体力もあるウイズに運ばれることになる。

ヴァカンフでもあったが、お姫様抱っこなのである。

確かに荷物は背負った方が楽だし、ウイズ曰く、俺は軽いからこの運び方で問題ない、と言うのはわかる。

運ばれている俺が全く不安定さを感じないのだから、本当に軽いのだろう。

でも、しかし、だけど、だ。

おっさんがお姫様抱っこ。は精神的にきつい。

こちらの人に見てみれば、俺は18歳前後に見えるので、おっさんには見えていないだろう。

運ばれている俺の足に丁寧に包帯が巻かれているので、周りが気にした風はない。

実は、結婚式ではお嫁さんをお姫様抱っこしたいとか言う俺のさやかな夢があったのだと。

俺の精神的疲労は、お嫁さんの立場が自分になってしまったことへの情けなさというか恥ずかしさと言っか。

俺はお姫様抱っこしたかったんです、されたかったんじゃないんです。

パリアカに着いてから、ウイズに肩に米俵のように担ぐ方法を提案してみたけど。俺の腹部へのダメージと、安定感が悪いことから却下されてしまった。

宿に荷物を置いて、そのまま寝てしまいたかったが。

メウテス口同様、紹介状を渡しに行かないといけないので、更に街の中を移動する。

パリアカで調査場所として有効なのは、入り江だ。

古くから人魚の居る入り江として有名らしく、恋人と訪れると別れないというジンクスもあり、デートスポットとして広く開放されている。

だから入り江に行く事自体は問題ないのだが、調査となると魔法を使うわけで、流石に一般人が居る中で魔法陣を描いて魔法を発動するわけにはいかない。

入り江のどこか一角を借りられるのが一番良いのだが。

「それなら、双子岩の奥が良いでしょう」

と、あっさり使用許可と場所を教えてもらえた。

あまりに簡単に行ってしまったので、ついつい理由を聞いてみると。パリアカの管理をしているライドさんと言っかのだが。

ライドさんはオケアノス学院の卒業生だった。

貿易や観光に興味を持ったライドさんは、パリアカを拠点としている貴族の目にとまり、後見人としてオケアノス学院を卒業。以降、パリアカの管理に努めているとのこと。

学習発表会頑張つてね。とか、怪我とか気を付けてね。とか、暖かい言葉を貰った。

その日はそのまま宿に戻り、明日に備えて寝ることに。

入り江は宿から30分程度のところにあるので、疲れをとるために昼前になる事になった。

「んー、時間が悪かったか」

少し遅めに起きて、昼前に宿を出た。

入り江に着いたのはちょうどお昼頃で、教えられた双子岩の奥はちょうど良いスペースがあった。

観光用に整備がされていないので、滅多に人は来ないが、特に危険はないとのこと。

順調に、火属性の魔法陣、水属性の魔法陣と進めていたが。

観察の条件を合わせるために、メウテスロで行った1メートルの場所に木の棒を立て、更に1メートル離れる。

直線距離にすると4メートル必要になるわけだが。

十分に余裕のあったその範囲は、日が少し傾き始めた頃に中断せざる負えなくなった。

海面が上がってきたのである。

「1時間ほどで満潮みたいです。満潮になるとあと1メートルは海面が上がるみたいです」

地元の人に確認に行っていたファンが帰ってきて、報告する。

更に、この時期は昼過ぎから海面が上昇してくるようで、事前に確認しておけば今日中に終わったのにな、と苦笑いしかでてこない。

残りを明日に回す事に決め、宿に戻ることにした。

ただ、明日の調査が終わると次のエカトルタに旅立つことが出来そうなので、ネモアとファンとミリィで買い出しに行くことになった。

ウィズは俺を運ばなくてはいけないので、一緒に宿に変える事に。

「悪いな、迷惑かけて」

「気にするなよ。ケースケ、全然重くないし」

部屋に二人になったので、流石にずっと運んでもらうのが申し訳なくて謝る。

ウィズは気を使わせないでおこうと、重くないといったのだとは思うけど。

男としてそれは、喜んでいいのか。少し複雑な気持ちになった。

「ケースケ、俺、この調査の説明もう一回してほしいんだけど」

俺の地味な落ち込みには気づかず、自分の荷物を探っていたウィズは、ノートを取り出すと近づいてくる。

ネモア達は当分帰ってこないだろうし、特に問題もないのでウィズと二人での勉強会が始まった。

ウィズは課外自習に行くきっかけとなった、俺の講義の内容をノートに書き留めていたみたいで、その中から今回の調査の部分を説明していく。

あの時は想像もできず意味が解らなかったが、今ならわかりそうな気がする。

と張り切るウィズは、楽しそうに色々と質問してくる。

もともとウィズは座学が嫌いだが、実験は結構好きな事もあったか、今回の調査は楽しいという。

俺の説明もわかりやすく、聞きやすいと褒められた。

面と向かって言われるものだから、頬が熱くなったのは、仕方がない。

勉強会はネモア達が帰ってくるまで続けられた。

買った荷物は亀車のところに預けてきたようで、思いのほか身軽だったネモア達は、部屋に入ると熱く討論しあう俺たちにびっくりしていた。

勉強嫌いのウィズが自分から勉強したいといったことに、ミリイが一番驚いていた。

満潮を避けるために朝から調査に向かった俺たちは、無事に残り終わらせた。

ライスさんに報告を終わらせると、昼ご飯を食べてから次のエカトルタに向かう。

旅は概ね、予定通りだ。

通行料

エカトルタはアニユキスを北上した砂漠地帯に存在する国である。ただし、アニユキスから北上するだけでは、エカトルタにはたどり着けない。

ナギイコタロと呼ばれる、天高い山脈が大陸の東西に走っているからだ。それが、ノシルフィ大陸を南北に分けている。

自然にできた壁は、大陸自体を3対1の割合で領土を分けている。ナギイコタロの北側は一面砂漠で、南側に緑が広がっているのだから、不思議なものである。

ではどうやってエカトルタに行くのかと言うと、長い年月をかけて掘られたトンネルがあるのである。

大陸の端の方に行くにしたがって、山脈の幅は狭くなっている。

昔は、海を渡ってこちら側に来るか、山脈を越えてやってきていたらしいが、土を掘る技術が出来てからトンネルが掘られた。

アニユキスやエカトルタができるずっと前の事らしいが。

大きい亀車が余裕で通れるぐらいのトンネルは、北側がエカトルタ、南側がアニユキスの兵がそれぞれ警備をしている。

今は平和らしいが、その辺はしっかりしているみたいだ。

ここでもオケアノス学院の紹介状を渡し、通行証を受け取る。

その際、ネモアが通行料を払っていたので、いくらか聞いてみたら、一人ジュース一本分ぐらいだった。

帰りは向こう側で払うらしく、あまり値段は変わらないとのこと。渡された通行証は金属の板のようなものに、小さく文字が刻まれている。

専用の器具で確認すると、通行日や滞在期間などが書かれているのが確認できるらしい。

「どれぐらいで向こう側に着くんだ？」
「そうですね、三時間ぐらいでしょうか」

洞窟に入っただけでしばらく、ウィズが操縦を担当しているネモアに声を掛ける。

亀車は走ればすごく早いけど、洞窟の中では速度制限があるらしく、ウィズに任せるのは危険だとネモアが交代した。

結構距離があるみたいで、一般の亀車や馬車が通る道と、定期便の通る道が用意されている。

洞窟の中はあるが、一定距離ごとに照明器具が設置されていて、さほど暗くは感じない。

洞窟に入るまでは、途中で天井が落ちてきたらどうしようとか。かなり昔に作られているものだと聞いていたので、不安で仕方がなかった。

実際、洞窟の入り口は、いかにも古そうな感じだったし、道幅が広がっているためにとっても頼りなさそうに見えた。

入ってみると中は定期的に補修が行われているみたいで、外との気温差はあるものの空気も循環されているみたいだった。

基本的に交通手段は、馬車や亀車なので、排気ガスという心配もない。

途中で何故か露店も出ていて、歩いて通行している人もいるようで、結構にぎわっていた。

聞く話によると、小さいながら休憩場もあるみたいだ。

最初はそれが物珍しくて、洞窟内を観察していたけど、今は変わって映えの無い土の壁に飽きてきてしまった。

しばらく横になっていると、ここ数日移動中は寝てばかりいたはずなのに、すぐに瞼が下がってくる。

暖かいものが体に掛けられる感触を最後に、俺は夢の中に旅立った。

通行料(後書き)

2011/9/7 誤字修正

危険

洞窟を抜ける間に熟睡してしまっていた俺は、大きな揺れで目が覚める。

驚いて飛び起きると、ウィズ達の姿はなく、荷物だけが置かれている。

まだ完全に起ききっていない頭で、状況を理解しようと、あたりを見回すと外で音が聞こえた。

食事の準備でもしに行つたのか？

そう思って窓から外をのぞくが、誰の姿も見えない。

見えるのは寝る前に見ていた洞窟の壁で、それが窓のすぐそばにあった。

壁際は歩行者のスペースだったはずだ。と違和感を感じていると、派手な音を立てながら入口が開いた。

「ケースケさんっ！」

ネモアが酷く慌てながら転がり込んできた。

続くようにファンが入ってくる。

二人とも手には剣を握っていて、服がところどころ泥で汚れてしまっている。

知り合いがいた安心感より、すぐにただ事ではない状況への恐怖心が湧きあがってくる。

「どうした？ 何があった？」

「魔物です！ エカトルタ側から侵入したみたいで、洞窟内で馬たちが混乱して」

「僕たちはまだ後ろの方だったので、直接魔物と接触はしていませんが、出口側は混乱で進む事が出来ません」

ネモアとファンの説明に、ウイズとミリイがまだ帰ってきていない事に気付く。

「ウイズとミリイは？」

「様子を見に、もしくは加勢しに行きました」

「出口側だったら、エカトルタの兵士がいるんじゃないのか！」

「わかりません。洞窟内まで来ているという事は、そういう事なのかもしれません」

ファンの言葉に小さく舌打ちをしてしまう。

確かに、ファンの言うとおりなのかもしれないが。ウイズやミリイを危険にさらすわけにはいかない。

洞窟内の混乱の中、進むことすら危険だ。

ましてや、馬車や亀車が多く通行しているのだから、それこそ潰されかねない。

状況がわからず、ウイズ達に危険が迫っている。

それだけで、外に駆け出す、十分な理由になるだろう。

思わず立ち上がった俺は、左足の痛みにも、無様に床へ倒れ込んだ。

「ケースケさん！」

「っ、忘れていた。たく、こんな時に……」

ズボンをめくって確認すると、巻かれた包帯に血はにじんでいなかった。

傷が開かなかった事に安心すると、立てかけてあった長めの棒を手にする。

松葉杖の代わりとして、棒について立ち上がると、覚束ない足取りでドアを目指す。

俺が外に出ようとしているのがわかったのか、慌ててネモアが体を支え、そのまま動けないように腕をつかんだ。

「ケースケさん！ 怪我してるんですよ！ 出て行ってどうするんですか！」

「ウイズとミリイを呼び戻しに行く。いくら二人が授業で強いからって、洞窟内は動きにくい。それに実践は、授業と違う」

「それは解ります！ でも、ケースケさんが出ていく事も危険です」
「だったらどうするんだ！ 二人を放っておくっていいのか！」

怒鳴りながらネモアの腕を外そうとする俺に、ファンが体当たりを仕掛けてくる。

胸のあたりに決まったそれは、片足で到底支えきれるものではなく、そのまま後ろに倒れ込んだ。

腰を強く打ちつけると、そのまま背中も強く打つ。

ネモアが腕にしがみつき、もう片方で杖を持っていたため、手でガードすることができず、頭までぶつけた。

一瞬、目の前が光ったように白く覆われ、痛みに呻く。

しがみつかれていない方の手で頭を押さえると、原因であるファンを睨みつけた。

「っ、お前……！」

「ケースケ！」

文句を言おうと開いた口は、ファンの怒鳴り声によって遮られる。怒っている顔なんて見た事がなかったファンの強い眼差しに、そのまま黙ってしまふ。

「落ち着け、今、ケースケが行っても足手まといになるだけだ！ 冷静に判断しろ！」

普段の敬語はなく、今にも殴り掛かりそうな勢いのファンに圧倒される。

胸に押さえつけてくる、ファンの握られた拳は、目に見えてわかるぐらい激しく震えていた。

睨みつけてくる瞳には今にもこぼれそうぐらい涙がたまっていた。

腕にしがみつくとネモアを見ると、こちらにも激しく体を震わせて、見上げてくる顔は既に泣いていた。

土で汚れた顔に、もしかして、と思う。

「追いかけたのか……」

「……はい、でも。俺たちじゃ、邪魔になるだけで先に返されました」

俺は彼らが頑張っているときに、何を一人で寝ていたんだ。

ようやく熱くなっていた頭が冷えはじめ、深く息を吸い込む。

現状を把握しなくては駄目だ。今熱くなって飛び出しても、ネモアとファンの言うとおり、邪魔になるだけだ。

叫びだしたくなる気持ちを押し込めると、頭を振る。

「詳しい状況を説明してくれ」

交戦

洞窟内に異変が起きたのは今から一時間以上も前の話らしい。

前方の進みが悪くなり、渋滞してきて最初は周りもどうかしたのか？ 程度で特に気にしていなかった。

ところがどんどん渋滞は進み、最後には一歩も進まなくなり、後続の馬車も増えてきて洞窟内がざわついてきた。

長い待ち時間に苛々を募らせる人も増えてきて、そこらじゅうで声が飛び交っていた。

その時、エカトルタ側から悲鳴が上がる。

アニユキスへ向かう側の道を凄く速さで駆ける、馬車。

ひどい蛇行を繰り返し、車体を引きずりながらの前に進んでいたらしい。

馬車の後にも、次々に前方にいたであろう集団が、洞窟内で無理な方向転換をしようとしている。

とつさにネモアは亀車を洞窟の壁際に寄せ、他とぶつかるのを防ぐ。

ただ、横を向いたまま道を塞いでしまった、馬車や亀車の所為で、前にも後ろにも動けなくなってしまった。

混乱の中、原因がわからなな今まではどうしようもないので、ウィズを筆頭に確認に向かった。

「なんで、俺を起こさなかったんだ」

「その時は混乱していて……」

「想像以上に通る場所がなくて、魔物に襲われていると分かったのも、ずいぶんと進んでからです」

エカトルタの出口に近い場所で、何人かが魔物と戦っていた。

しかし、状況は思わしくなく、押されている状態だった。ウイズとミリイが加勢に入り、そこに来てやっとネモアが俺の事を思い出したらしい。

来た道をファンと共に戻り、今である。

「魔物は？　どんなやつだったんだ？」

「砂漠地帯に生息する、カルピオです。甲殻に覆われた、大型のものが集団でできていました」

ファンの説明に、過去に見た記憶を頭の中で思い返す。

確か、見た目は蠍そっくりの奴だ。

毒針はついていなかったから、どちらかと言えば伊勢海老に近いかもしれないが、色は黒っぽく蠍のようだと思いついて見えていた。

体を覆う甲殻は成長するほど硬くなる。

砂漠を好み、雨の日は出現率が極端に少ない。

「ウイズ達と別れて何分ぐらいだ？」

「十分ちよつとです」

「加勢に行くぞ」

「僕たちじゃ足でまといにしかならないと」

「剣ならな。だけど、俺らは魔法が使えるだろ？」

俺の言葉にネモアとファンが小さく目を見開く。

魔法と言っても、ゲームのように攻撃力のある魔法陣なんて、そうそう、存在しない。基本的に、魔法は生活のために利用される。

攻撃するにしても、魔法を発動するまでに時間がかかりすぎる。

国のお抱えの魔法使いぐらいの実力がなければ、魔法でなんて考えないだろう。

だけど、サポートぐらいは出来る。

攻撃としてダメージを与えることはできないだろうが、相手の動

きを鈍くさせる事は出来るはずだ。

カルピオの甲殻は確かに硬いが、あれは水分が蒸発しているからだ。

精霊や魔物に書かれた本と、旅行記や伝承などを調べていた中で、そういった表現がされているものがあった。

本来、甲殻となっている部分は、少し分厚いめの肌で、水分が蒸発することにより密度を増している。

だから水をかけてやれば、いくらかは吸収され柔らかくなるはずである。

説明をしながら、ネモアとファンの肩を借りて目的の場所に進む。ただ、あくまでも本で得た知識により導き出した論であり、上手くいくかどうかは半分半分といった所だ。

最悪、水属性の魔法陣が聞かなかった場合は、別の属性を試すしかない。

やらないよりはましだろう、と言うのが、俺の意見である。

金属と固いものがぶつかり合う音が近づき、倒れた馬車などの影に隠れながら様子をうかがう。

他の大人たちに交じって、剣を振るうウィズとミリィの姿が確認できた。

まだ大きな怪我をしていなかった事に少しほっとして、その戦いに目を向ける。

剣で戦っている人達は、その体にはじかれてあまりうまく行っていない。数も集団と多いために苦戦している。

力のある大男が何とか斧で背中から押しつぶしていた。

ネモアとファンと手分けをして、量の水を発生させる魔法陣と、風を起こす魔法陣を描き上げる。

これはマルクさんの魔道具の応用だ。

出した水を風で押し出す。

荷台の上からやれば、上手くいけば雨が降るように広がるだろう。

「準備は良いか？」

俺の言葉にネモアとファンが頷いた。

集中した魔力を、魔法陣に向かって放つ。

「うわ？」

「なんだ？ 水？」

突然頭上から流れてきた水に、戦っていた人達が一瞬戸惑う。

それでも、変わらずカルピオの攻撃を仕掛けている。事前に言えばよかったのだが、必死に戦っている人に長い説明はできない。

威力自体も通り雨が降った程度なので、時間を優先した。

「ケースケ！」

魔法を使ったことでこちらに気付いたウイズが、声を上げる。

その剣を振り下ろしたとき、先ほどと感触が違う事に気付いたみたいだ。

再度魔法陣を描き上げて、同じように魔法を放つ。

こちらの意図に気付いたウイズが、ミリイに声を掛け、水を多く含んだカルピオに攻撃の狙いを変更する。

周りの人達にもウイズが何事かを伝え、次々に柔らかくなった甲殻のカルピオに剣を振り下ろす。

あっさりとはいかないが、先ほどよりは確実に手ごたえのある感触。

集団の襲撃に疲労を浮かべていた人達の顔に、勝機が浮かんた。

逆にカルピオは、次々に洞窟内に振る雨に、少しずつ撤退を始め

ている。

それから、数分。

濡れた地面と動かないもの以外のカルピオは洞窟から逃げ出していた。

戦いが終わった。

後処理

亀車に戻った俺たちは、床に座り込んだ。

あの時は気が付かなかったが、荷物を置いていたのに、誰も見張りをおいていなかった。洞窟内が混乱していたためか、特に被害がなかったのが良かったが。

疲れているウイズに背負われて帰ってきたため、長時間の戦闘で疲れていたウイズは限界だったようだ。

仰向けに倒れると、荒く息をついている。

ミリイも元気さはなく、座り込んで、立てた膝に額をつけていた。カルピオとの戦闘で、色々と汚れた服は外で水魔法を使って流した。

ミリイに先に入って服を着替えてもらい、他は外で着替えたため、荷台はさほど汚れていない。

「ウイズもミリイも、怪我してない？」

「軽い擦り傷や打撲程度だ。やばい怪我はない」

「私も、大丈夫。あれ以上続いたら、まずかったけど」

その返事に安心しながら、小さな傷を手当てしていく。

カルピオが洞窟から撤退したあと、エカトルタ側から兵士が入ってきた。

どうやら外でも交戦をしていたみたいで、洞窟内に中々近づけなかったらしい。

洞窟内のカルピオが逃げ出てきてから、外の群と一緒に逃げて行ったため、中に確認にこれたと。

幸い、洞窟の中にいた人に死人はいなかった。

最初の方で襲われた馬が数頭駄目だったが、他は怪我はあったが

命に別状はないらしい。

エカトルタの兵士への状況説明は、一緒に戦っていた大人たちに任せた。

こちらがまだ学生で、子供だと分かった大人たちは、快く引き受けてくれたため、俺たちは亀車にかえってきたわけだ。

俺たちの亀車自体は、周りの身動きが取れなくなっている所為が比較のおとなしくしていた。

ただ、長時間この場所にいたので、お腹がすいていたようで、ネモアがご飯をあげていた。

ウイズとミリイの手当を終わらせると、ネモアに言われて俺も左足を見せる事になった。

行きはネモアとファンの肩を借りて、帰りはウイズに運んでもらったため、それほど負荷は掛けていなかったつもりだった。

それでも、結構力が入っていたのか、傷口は開いていないものの、少し熱を持っていた。

汗もかいて包帯も汚れていたもので、塗り薬と湿布を張り替えると、別の綺麗な包帯が足にまかれる。

包帯が巻かれているだけで、ウイズやミリイの怪我より、こちらの方が酷く見えるのが不思議だ。

こんな時、魔法で治療できればと思ってしまう。

「でも、助かったわ。硬くて剣じゃ、歯が立たなくて」

「たまたま、本で見たことがあったから、今回は何とかなかったけど」

そこまで言っつて、背筋がぞつとした。

自分で口に出して思ったけど、本当に今回はたまたま結果が良かったけど、実際はどうなっていたかわからない。

カルピオが水に弱くなかったかもしれないし、ウイズやミリイが

大怪我をしていたかもしれない。

そう思ったら、段々と顔がこわばってくる。

俺の表情に気付いたのか、先ほどまでにこやかに話していたミリイが、真剣な顔をこちらに向ける。

それにそって、ウイズもこちらを見つめてくる。

「皆を危険な目に合わせた。下手をしたら大怪我じゃすまなかったかもしれない」

俺が起きていれば、突っ走らずに済んだかもしれない。

ヘラントで怪我をしなければ、今日ここを通る事もなかったかもしれない。

ネモアの言うとおりアニユキスに帰っていれば、良かったのかもしれない。

「 本当に、ごめん」

手をついて頭を下げる。床に額をつけて土下座をする。

ヘラントで怪我をした時、ネモアに言われてもアニユキスに帰らなかったのは、俺自身が知りたかったからだ。

魔法の属性の法則に、化学的な法則が当てはまるのか、証明したかった。

そうすることで、他のこともわかる気がしていた。

俺は、自分に何度も何度も嘘をついている。

帰れない、それならこの世界で生活するしかない、一人で生きていけるようになるしかない。

そう、何度も自分に言いながらも、どこかで思っている。

帰りたい、帰るための魔法が必要だ、魔法を調べれば、帰れるんじゃないか。

こちらの世界の常識では、いつまでたっても帰れない。自分で調べないと、自分でどうにかしないと。

気づけば、毎日焦っている。

一日経つごとに、元の世界が薄れていくみたいで。

後処理（後書き）

今回で、思想編は終了です。次話から、理解編になります。

お気に入りが入りが3桁に突入し、毎日見に来ていただいている方もいるようで、本当にありがとうございます。

気が付けば84話。初めての投稿なので、最初は不定期に更新するかと思っていたのが、始めて見ると、一日一話更新するのが楽しくなってきました。

読み返しながら、書き直したい衝動に駆られることも多々ありますが、もう、ここまでできたら最後まで突っ走ろうと思います。

この話は、次の理解編が最後となりますので、もうしばらく、おつきあいください。

これからもよろしくお願いします。

2011/10/8 誤字修正

エカトルタ（前書き）

とりあえず、昨日の分投稿です。
また、あとで今日の日も投稿します。

エカトルタ

エカトルタに着いたのは、洞窟での騒動から丸三日経ってからだ。った。

洞窟を出るのに半日、砂漠を進む事二日。

砂漠は洞窟を出た他の人達と一緒にだったため、野営は大人たちがやってくれて、十分休憩を取ることができた。

エカトルタは、砂嵐から身を守るためか、街自体が大きな壁に囲われていた。

壁に沿って溜まる砂山は、定期的に取り除かれているらしい。更に街の中心の高いところに、城壁と城が建てられている。

門番に通行証を見せ、壁の中に入ると、そこは砂の舞う外とは別世界だった。

高い壁に囲われているため、街に吹く風は穏やかで、ところどころに花壇や畑がある。

足元は一面石畳で舗装され、土レンガで作られた建物が軒を連ねる。

ほぼ、砂漠の中心に位置するエカトルタは、水不足と言うわけでもないようで、街の広場には噴水が設置されていた。

いたるところに井戸もあるようで、水脈が通っているのだろう。水があるから、この場所に街ができたのかもしれない。

街は活気にあふれ、商人の呼びこみの声が響く。

道端には露店が広がり、珍しい素材などが多く売られている。

砂漠を移動中は寝ていたからと言って、パリアカからの長距離移動はかなり体力を消耗していた。

洞窟での交戦は精神的疲労を募らせ、砂漠の砂でざらついた体をどうにかしたかった。

という、俺の意見にネモア達も賛成のようで、特にミリイが強く願ったため、宿に移動する。

亀車をいつものように預け、大部屋が借りられる宿に向かう。ついた宿はエカトルタで一番大きな宿だった。中に入ると既に人が何人かいて、その中に一緒に移動していた顔見知りもあった。

早速部屋を取り、ミリイから順番に部屋に着いているシャワーを浴びる事になった。

「場所の交渉は、お城の人にしないとだめなのか？」

「たぶん、アニユキスにはお城にそういった部署があるので。後で宿の人に確認してみましよう」

荷物に着いた砂を払いながら、ファンとそんな話をする。

ネモアとウイズは、小腹を満たせるものを買いに街に出ていた。

体は順番にしか流せないのので、分担することになった。次はファンが入る事になっている。

その後もたわいない話をしながら、荷物を整理しているとドアがノックされる。

ネモア達か？ と思ったが、それなら勝手に入ってくるだろうと、考え直す。

若干警戒しながらドアに近づくと、外の音に耳を傾ける。

コンコンツと二度目のノックが響いて、仕方がないのでドア越しに声を掛けることにした。

「どちら様ですか？」

「エカトルタの第三番隊長、ルスト・ブルバファです。こちらにオケアノス学院の学生さんが泊まったと聞きやってきました」

「エカトルタの兵士が何故。」

俺は更に警戒を強めながら、ドアにしっかりと鍵がかかっている

事を確認する。

「エカトルタの兵士様が何の御用でしょう？」

「洞窟でのカルピオの件で、大変なご協力をいただいたという事でお礼申し上げたく参りました」

「お礼……？」

首を傾げながらファンを振り返ると、ファン自身も小さく首を傾げる。

丁度良いタイミングでミリイが出てきたので、隊長のルストにはしばらく待ってもらおうようにお願いして、ミリイに状況を説明する。状況を理解したミリイは、危険はないはずだからと部屋に入ってもらって詳しく話を聞くことになった。

迎え入れたルストは、ルストの他に二人の兵士が着いてきていた。6人部屋を借りているため、それなりに広い室内だったが、日々鍛えられた大人が三人いるだけで、変に威圧感がある。

椅子をすすめたが、ルスト以外の二人はたつたままだ。

向かいの席にファンとミリイと三人で座ると、ルストがゆっくりと説明を始めた。

洞窟での後処理を大人と兵士に任せただったが、大人たちは俺たちの活躍をすごく強調してくれたらしい。

大人に比べて、まだ背の低い俺たちは目立っていたようだ。

ウィズとミリイの剣さばきもさることながら、カルピオを撃退するに至った、魔法での支援が更に注目を集めていたらしい。

加えてオケアノス学院の生徒と言う事を、兵士から報告を受けた王が、何か褒美を渡さなくてはという話になったようだ。

時間があれば今からでも謁見をという話だったが、ネモアとウィズも帰ってきていないし、疲れているのでと言う話をする。明日の

昼頃に迎えに来てくれる事になった。

「なんだか、大事になったな」

「そうね」

「でも、調査のお願いが出来るんじゃないですか？」

「そうだな」

しばらくして帰ってきたネモアとウイズに説明をして、褒美を聞かれたら調査の話をしようと決めて休む事にした。

謁見

疲れた体を存分に休ませるため、昨日は早めに就寝したが、全員が10時前という遅い時間に目を覚ます。

迎えの兵士はまだ来ていなかったため、一階で軽く遅めの朝食を済ませると、身支度を整える。

旅のための格好なので、正装は持っていなかったが、綺麗な服に着替える。

前日にルストには事情を説明しているので、特に問題はないだろう。

用意が終わりくつろいでいると、昨日同様、ドアがノックされた。

「ルストです。お迎えに上がりました」

それぞれ荷物を持つと、部屋に忘れ物がない事を確認して外に出た。

部屋の前にはルストと昨日と同じ兵士が二人立っているだけだったが、宿の外に出て一瞬帰りたくなかった。

人数が多いためだろうけど。

大き目の馬車が二台止まっていて、王国使用なのかかなり豪華だ。洞窟で事情を知っている宿の他の客の目、何かと集まった街の人の目、色々な目にさらされて逃げたくなかった。

仕方がないので、馬車に乗り込む事で逃げたのだが、何せ目立つ。

俺の乗った方には俺とネモアとファン。もう片方にウイズとミリイが乗った。

ルストが座り、ウイズとミリイの方には二人の兵士が乗り込んでいた。

なんだか、悪い事をして護送されている気分になるのは、俺だけ

だろうか。

向かいに座っている事でルストに視線が気になり、街を見るふりをして窓の外を眺めていたが、いささか空気が重いと感じるのはいだけなのか。

「ルストさん、他のカルピオと戦った人達も呼ばれているのですか？」

ネモアの言葉に、そういえば宿から出ていたのは俺たちだけだったなと思いつく。

褒美をと言うのであれば、彼らの方が多く倒していたのだから、彼らが残っているのではどうなのだろう。

答えが気になってルストに顔を向けると、笑顔を浮かべていた。

「いえ、他の方には報酬をお渡ししただけです」

「つまりは、俺たち以外は王様と謁見はしないということか？」

何故、俺たちだけ？

再度湧き上がった警戒心に、思わず敬語が使えていなかった。

先ほど護送とか浮かんでいたために、頭の中では悪い方向にばかり考えが行ってしまい、表情が固いものになる。

それに気づいたルストは苦笑いをする。

「オケアノス学院の生徒さんだから、と言ったところでしょうか」

「それが、何の関係があるんだよ」

「我が国にもオケアノス学院の卒業生が幾人もいます。その将来有望な生徒さんに、助けてもらったのに報酬だけ渡してというのは、というところですよ」

確かにそう、かもしれないが、将来有望かもしれないがまだ子供

だ。

嫌な方向に思考が行くのは仕方がないと思う。

突然、剣呑になった俺の態度に、隣の二人が心配そうな目を向けてくる。それを安心させるように微笑むと、不機嫌な表情を隠した。

しばらく走っていた馬車が、堀と城壁に囲まれた場所に近づいた。

城門から伸びる石造りの橋を渡ると、そのまま中に進む。

馬車から降りて城を見上げた。

この世界に来てから城と呼ばれる場所に来たのは二回目だけど、その存在感に慣れる事は無いだろう。

ルストに案内されるまま、城の中を進む。

大きな扉の両方に槍を構えた兵士がいる場所に着くと、ドアの先にはいかにもな謁見の間が広がっていた。

ここにきて、王様へのあいさつの仕方を知らないことに気付いたが、遅い。

「陛下、オケアノス学院の生徒を連れてまいりました」

ルストは床に膝を立てると、深く頭を下げながら玉座に座る人に声を掛ける。

ついてきていた二人の兵士も同じことをしている。

俺、とネモア達は立ったまま、頭を下げただけだ。

中央に移動する前に、小声でミリィから指示があったからである。

「うむ、顔を上げてくれ」

声がかかってから玉座に座る人を見る。

見ると言ってもあまりじろじろ見ると駄目な気がしたので、軽く全体を確認すると、口元に視線を合わせた。

「我がエカトルタの現国王、ルカエルだ。カルピオの件、子供の身ながら危険を顧みず戦ってくれたようで、感謝する。聞けばオケアノス学院の生徒、何かお礼をと思ったのだ。何かあるか？」

ルカエルの言葉に、しばらく考えたふりを見ると、荷物の中からオケアノス学院の紹介状を取り出す。

それをルストに渡すと、ルストは玉座の下にいた人に手渡し、その人がルカエルへと紹介状を運んだ。

何とも無駄の多い方法だと思う。

アニユキスでの場所が会議室だっただけに、この謁見の間という雰囲気慣れない。

課外自習なので時間が決まっている事と、途中でトラブルがあったため出来るだけ早く次の場所に行きたいという説明をする。

魔法を使うにしても街の外は砂漠で、あまり調査場所としては適さないこと。

出来れば、昔からあって、人の手が加えられていないところが良いなどと言う条件を提示した。

しばらくルカエルは考えた後、近くの人に何事かを支持する。

すぐに帰ってきた人の手には、5枚のプレートのようなものが乗っていた。

「エカトルタが出来る前はな、ここはオアシスだったのだ。城の奥の庭園はな、そのオアシスだと言われている」

奥の庭園は普段人が入るところではないが、それなりに広さがあるらしい。

石畳で補強もしてないので、砂漠のまま。

更には、自然と風が吹く不思議な場所でもあるため、避暑場所として使用される事が多いとの事。

渡されたプレートは城への入城許可証で、寝泊まりする部屋まで庭園近くにとつてくれるという高待遇。

思わず裏があるのでと疑ってしまっただが、他の人達みたいに報酬はやれないが、と言われた。

後、城の中を移動、庭園で調査する際は、兵士が数人着くことになる。

手放して歩かされる方が、何かあったときに困る。

部屋もできれば全員一緒が良いと言つと、そうしてもらえると助かると言われた。

宿よりかなり豪華な部屋に通され、寝る為のベッドが運びこまれる。

実際、床に布団を敷くだけでも、十分な厚みのある物なので良いのだけど。態々、運んでくれる事に文句はない。

部屋の外とバルコニーに兵士が立つらしく、気にはなるが、安全のためと思えば仕方がない。

「明日は、早朝から初めて、さつさと終わらせよう」

「賛成。時間ないからな」

「一日で終われば、アニユキスまで四日。キシアルナの森での調査も何とかなりそうですね」

「目標は、明日中にエカトルタを出発することだな」

スケジュールを組み直しながら、運び込まれた豪華な食事に舌鼓を打つ。

宿代と食事代だけでも、報酬として良いと思う。

監視

護衛兼監視として、ルストに案内された庭園は想像以上に広がった。

奥の庭園と呼ばれるぐらいだから、そんなに広くないだろうと思っていたのだけど。

中央に大きな湖があり、周りを青々した草木が囲んでいる。その周りは手の入れられていない砂漠で、庭園に入った瞬間からそよかぜが吹いている。

太陽が照っていて熱いはずなのに、湖の冷たい水で冷やされた風があたりを包み込んでいるようだ。

全員がしばらく見とれていた。

砂漠の部分で、あまり隆起していない場所に三度目となる調査場所を作成する。

ただ、砂の上に線を直接引くことや棒を立てることが良いかについては、ルストに確認を取った。

特別危険な物を使っているわけではないが、庭園の外観を損なうとか言われたら別の方法を探さなくてはいけない。

砂なので後でならせば大丈夫だとすんなり了承を得た。

少し想定外だったのが、風属性の魔法陣を使うと砂が舞い上がることだろうか。

今までもそうだったのだけど、流石、風属性が強い土地だけに初級とはいえ威力が増したそれが多大に砂を巻き上げていた。

後はオアシスの影響かもしれないが、水属性の魔法も若干威力が強い。

それに気づいてから外で行う事も検討したけど、証明の材料としては問題ないだろうということに落ち着いた。

調査中、ルストが凄く興味深げに視線を向けていたのは、今のところ気にしないでおく。

ルスト以外にも建物の方から見られている感じがした。と言うのは、ウィズとミリーの言葉だ。

残すところ地属性の魔法陣だけになった時、お昼を食べながら耳打ちされた言葉に顔がこわばったのは仕方がない。

元々監視が着く場合は、詳しい話はしない、ということを書き外し習前に決めていたので、今回、調査中にわかったことは話していない。

ただ、もくもくと魔法陣を発動し、それを記録していくという形を取っていたため、今までで一番早く進んでいる。

昼食後、一時間もしない内に調査が終わり、ルストにその有無を伝える。

すぐに次に行きたいので、今日中に出る話をする、亀車の場所まで送ってくれることになった。

てつきり、ルカエルに調査報告をしなくてはいけないかと思っていたのだが、それはなかった。

ただ、移動中にルストに説明することになり、ルカエルへは後で報告するらしい。

一国の王様だから、そうそう会えるものでもないみたいだ。

「ありがとうございます、ルストさん」

「いえ、道中お気をつけくださいね」

「はい。では、また機会があれば」

そんな話をしながら亀車に乗り込む。

丁度アニュキス側に行く商人達が居たので、ご一緒させてもらう事にした。

エカトルタの門を出て、人が豆粒ぐらいい見えてから、やっと俺は深く溜息をついた。

「大丈夫ですか？」

「ああいう、何考えているかわからない大人の相手は慣れないな」

つぶやいたのは、ルストのことだ。

宿に迎えに来たときは、面倒事を押し付けられそうなおっとりしたタイプと言う印象だった。

城から亀車まで送ってもらう馬車の中でされた質問は、誘導されているようだった。

ちよつと気を抜くとぼろりつと口を滑らしそうになるのだから、相当、相手に話をさせることに慣れていると感じた。

上司に付き合っつてついでに行った、大人の女性の居るお店を思い出した。

たまたまいった店の彼女たちは話術に長けていて、『話す』より『聞く』のが断然うまかった。

ついつい失敗談なんかを気が付けば話していたが、それに、どこか似ていた。

隊長という言葉が似合う、体格のとてもいい人だったんだけど、意外と頭脳派なのかもしれない。

「何か、二人の話は聞いている方が疲れたわ」

「確かにな。見た目にこやかに話しているのに、変な重圧があった」

下手な言質とられてもたまるか、と、意気込んだせいだろう。

顔の筋肉が笑顔で固定されたみたいだ。

「誰の目があるかもわからないから、調査に関しての話は学院に帰つてからだな。周りに人が居ないとわからないとまずい」

「……条件が厳しくなっていますね」
「念には念をだ。今さら横から成果物だけ盗られるとか、目も当てられない」

同じような結論に至るかは不明だが。

ここまでしつかり調査してきているのだから、出来るだけ、類似のものは出したくない。

つづけた俺の言葉に、ネモア達も納得していた。

ネモアは俺の秘密を黙っている実績があるし、ファンは必要以上に話さない。ミリイは頭の回転が速いし、ウイズも言わないと決めているから大丈夫だろう。

後は、資料を落とさないようにしないといけない。

学院の学習発表会という、授業の一環でこれほどする必要があるので、とふと思ったが。

ルストの執拗な質問に、変な警戒心が働く。

肝心の調査に対する結果などは、説明時も基本的に口頭にする方が良いかもしれない。となると、作成する資料は調査内容になるか。難しい顔で考えはじめていた俺は、ネモア達が夕食の準備を始めている事に気付かなかった。

役立たずだと、リーダーを外されなければいいが。

一時帰宅

アニキスに向かう洞窟では、魔物の襲撃もなく、ちょうど昼をはさんだので洞窟内の露店で食事をとることが出来た。

亀車を路肩に止めてだったので、見張りを残すために交代で行った。

アニキス行き商人達と交代で野営の番をして、何事もなく進めたことにほっとする。

商人達の中に、カルピオとの交戦時に一緒だった人もいたようで、野営中のご飯を貰えたのは素直に助かった。

商売品である新鮮な果物などは、砂漠の移動中などは特別美味しく感じた。

生物をどうやって保存しているのか気になって聞いてみると、荷物を運ぶ亀車の荷台が魔道具になっていた。

定期的に魔力を注ぐと中が一定の温度に保たれるとか。

商売人には欠かせない魔道具らしく、手持ちの資金が出来た商人は、レンタルせずに自分用に買い取るのだという。

維持費とかがかかるので、どの程度の稼ぎだったら購入するかを見極めるのが、商人としての技量だとか何とか。

亀車を預けた俺たちは、一度オケアノス学院に帰る事にした。

課外自習として申請してあるのは、残りちょうど一週間。当初の予定では、この期間は調査内容の整理に使うはずだったが、色々あったため仕方がない。

ただし、提出したスケジュールから遅れてしまっているので、エレイ先生に報告しに行かなくてはいけない。

メウテス口でのチコに噛まれた傷は、少し無理をしたために治りが遅いが、今は一人で歩く程度なら大丈夫だ。

重い荷物はウィズに持ってもらっている。

「じゃあ、俺とファンで報告に行くから、ネモアと俺たちの部屋に荷物を運んでおいてくれ」

「わかった。運ぶだけで良いのか？」

「整理とかはまた後で考えよう。とりあえず、明日今後の予定について決めるから、今日は各自疲れをとるといふ事で」

「了解、報告お願いね」

ネモア達と寮への道の途中で別れる。

今は平日の授業中のためか、廊下に生徒の姿はなく、演習場で授業の音がしていた。

職員室のドアをノックすると、授業外の先生が顔を出した。

「あれ？ 君たち授業は？」

「課外自習中です。エレイ先生に途中報告に来たのですが、いらっしやいますか？」

俺の言葉に小さく眉を上げた目の前の先生は、今まで授業を持ってもらったことのない先生だった。

すぐに表情はもとに戻ったが、一瞬ゆがんだ表情が頭に残る。

それに職員室内の他の先生方の視線が、こちらに向けられた気がする。

「あつ！ ケースケ君、ファン君！」

理由を探そうと視線を巡らせようとした時に、廊下側からエレイ先生の声が響く。

振り返ると授業が終わったのか、手に教科書を持ったエレイ先生がこちらに手を振って歩いてきていた。

話をしていた先生に一言お礼を言ってから、エレイ先生の方に向かう。

「お久しぶりです。途中経過の報告に着了ました」

「ちよつと待っていて、会議室用意するから」

そういつて職員室に入ってくエレイ先生を、ファンと見送る。

途中、先ほどの先生に止められて、一言、二言話をしたエレイ先生。

表情は見えなかったが、すぐに出てきたエレイ先生に、半ば引つ張られるようにして会議室に連れて行かれる。

何があつたのか理解できずに会議室に入ると、しっかりと鍵が掛けられ、窓にカーテンが閉められていった。

その行動の意味が解らず、ファンと二人で顔を見合わせてしまった。

「……ごめんなさいね。ばたばたしてしまつて」

座つて。と言いながら、先に椅子に座つたエレイ先生の前に二人で座ると、真剣な目がこちらを見つめていた。

それに思わず体が下がり掛けるが、おしとどまつた。

「何か、ありましたか？」

「何かあつたのは貴方たちの方でしょう」

大きく溜息を着きながら言われた言葉に、どれのことだろうと考えを巡らせる。

「洗いざらい、話してもらつたよ」

怒ったような目で見つめてくるエレイ先生に、俺は背筋がぴんつと伸びた。

よくよく考えれば、俺たちはまだ学生なのだから、至極当たり前前の話なのかもしれないが。

オケアノス学院には、各紹介状を渡した相手から先に報告が届いていたわけだ。

メウテスロでの怪我に始まり、エカトルタでの魔物との交戦。すべて学院側に報告が来ていた。

その上、当初の予定通りに帰ってこない俺たちを、学院側が心配するのは当たり前前のことで。

更には学習発表会で課外自習に行く生徒はいるにはいるが、実は初等学4年では稀だという事実。

そんな話今聞きました、学校から許可出たじゃないですか、と言う言葉は飲み込んだ。

課外自習の許可が、やけに簡単に出るなとは思っていたが。そもそも初等学4年は、課外自習をしなければいけないほどの学習発表をしないとかがどうとか。

確かに授業の内容からすると、そうかもしれないが、ないわけではないだろう。

エレイ先生に確認すると、俺たちの学年は他に5組が課外自習に出ているらしい。

ただし、その期間は一週間程度だが。

一ヶ月の長期に及ぶ俺たちの課外自習の許可が簡単に降りたのは、俺の提出した計画表がしっかりし過ぎていたからだと言われた。

仕事で良くやっていたから。

何事もなく帰ってきていたら、こんなことはなかったのだろうが。メウテスロで怪我をしたにも関わらず、そのまま次の街に行き、その上、魔物と交戦したという話が出て、学院側は情報収集に追わ

れた。

何故、教師が同伴していないのか、という話が出たのは仕方がないだろう。

調査の場所として挙げていた場所は、どこも安全で観光にも行かれる土地だったのは確かだ。

「……すみません」

俺とファンは深く頭を下げた。

その後、全員で学院長室に呼び出された。

ヘリオス学院長や学年主任など、多くの人に怒られて、ひたすら頭を下げまくった。

何とか、最後の調査場所であるキシヤルナの森に行く事の許可をとることが出来たのは、奇跡と言えるだろう。

エレイ先生と剣術担当のジル先生が同伴する事が絶対条件だが。

キシヤルナ

木漏れ日の中、自然を楽しみながら進めたのは、最初の数時間の話だった。

奥に進むにつれて地面から出ている木の根っこは太くなるし、周りを背の高い草が茂り始めてきた。

まだ昼にもなっていないはずだが、木の葉が何重にも重なって、日の光が直接地面まで届かずあたりは薄暗い。

前が見えないというわけではないので、まだ照明器具は必要ない。黙々と森の中を歩き続ける。

オケアノス学院に帰ったのが水曜日だった。

エレイ先生とジル先生が次の日も授業があつたので、キシヤルナの森に向けて出たのは木曜日の方だ。

その日の夜に森の入口に着いて、一夜。

朝早くから森に入って、ひたすら歩き続けていた。

右を見ても左を見ても、木と草しかない。たまに小動物が逃げるような音がするが、それだけだ。

キシヤルナの森では魔物は確認されていないという話だが、全員腰に剣を下げている。

ジル先生が先頭で、俺がその後ろで行く方向をナビゲートする。

森で迷ったら困るので、何度も確認した地図と方位磁石を手に入れている。

続いてネモアが居てミリイ、ファンにウイズとエレイ先生。配置はジル先生が考えてくれた。

エレイ先生は座学専門の先生だと思っていたけど、俺やファンなんかよりだいぶ腕が立つ。

担当クラスを持っている教師は、ある程度、戦闘が出来るらしい。

「その岩を左です」

「今でどれくらいだ？」

「そうですね。後、二、三時間ですね」

「そうか。いったんここで休憩をとるぞ」

目印の岩がある場所は、少し開けていた。

丁度良い大きさの石に腰を下ろすと、カバンから取り出した水筒で水分補給をする。

キシヤルナの森での目的の大木は、森の入口から半日ぐらいの距離にある。行きと帰りで1日、調査に2日、オケアノスに帰るのに1日。

課外自習の時間を使い切る形になる。

調査結果をまとめるのは、放課後に行えばいいけど、課外自習中の課題をしなくてはいけないのか。

出席扱いになる課題の提出期限が二週間と決まっているので、帰ったら速攻始めなくてはならない。

本来はそれ込みの期間で一ヶ月を取っていたのだが、何事も予定通りに行かないものだ。

その上、怒られたときに何人かの先生には、課題を覚悟するよう言われている。

ウィズにとって救いなのは、課題をチームでやって良いということころだろう。

しばらく休憩を取ってから、更に奥へと進んでいく。

より一層周りが暗くなってきた時、道の向こう側が開けていて、そこから光があふれていた。

ゆっくりと進んでいくと、現れたのは想像をはるかに超す、巨大な姿。

思わず足を止め、上を向いたまま固まってしまった。

「すごい、存在感……」
「傷つけるなよ。国の保護対象だからな」

ジル先生の言葉に、うなづく。

この大木、名前こそついていないが、アニユキスが保護しているのだ。

そのためここまでの森の道は、鬱蒼とはしていたが、調査で人がやってきたりするので、かろうじて道になっていた。

また、過去何度か学習発表の課外自習で生徒が訪れた事もある。

事前に国の機関に対して許可も取っているので、ここで調査する事は問題ない。

怒られながらも課外自習続行ができたのは、この事前準備も功を奏したのかもしれない。

調査時に使われている、簡易の小屋を軽く掃除して、昼食を取るとさっそく調査を開始する。

エカトルタ同様、ただひたすら調査を繰り返す。

エレイ先生とジル先生が興味深そうに俺たちの行動を見ているが、同じような作業を繰り返した。

着いたのが夕方に近かったため、すぐに周りが暗くなり、結果、火属性の確認しかなかった。

夜空（前書き）

遅くなりましたが、本日分、投稿します。

夜空

調査時に使われている小屋には、7人は入れないので、ミリイとエレイ先生に使ってもらうことになった。

持ってきていたテントを張ると、夕食を食べる。

料理自体は小屋に作ってあった簡易キッチンで行う。

流石に水はひかれていなかったが、火を起こすためのかまどがあったので、大鍋に野菜と肉を入れて濃いめに味付けしたスープが出た。

保存のきく固いパンをスープに浸けて食べる。

旅の途中のご飯は大体、スープとパンか、パンに肉や野菜をはさんだものだった。

今朝は学院の食堂のご飯を食べて、昼は食堂で用意してもらったサンドイッチだったため、味気なく感じる。

街とかだったら、食べに入れたんだろうけど。

「ねえ、一つ聞いてもいいかしら？」

スープとパンを食べながら、たまに談笑しながらの夕食時。何故かうつつむいたまま考え込んでいたエレイ先生が、顔を上げて問いかけてきた。

食事の準備をしていた時から、何かを考えていたようだったので、全員気になっていて、エレイ先生に視線が集まる。

夜の森は静かで、全員がエレイ先生に注目していたため、他の会話も止まっていた。

風の音だけが流れる沈黙が続いた。

聞いてもいいか？ と問いかけておいて、未だに聞くのをためらっているのか、エレイ先生の表情は暗い。

「エレイ先生？ 何か聞きたいんじゃないのか？」

沈黙に耐えられなくなったのか、同じ教師であるジル先生が声を掛ける。

ジル先生自体は、考え込んだり悩んでいる風でもなく、先ほどもウィズと剣術について話していた。

そういえば、調査の最中もエレイ先生はどこか考え込んでいる風だったな。

中々話し出さないエレイ先生に、スープを飲みながらそんな事を考えていた。

ふっと視線を上に向けると、木々の中にぼつかりと空いた空間から、2つの満月が見えた。

ロアとムアはいつみても満月だな。

そんな事を思いながら、周りに散らばる星空をしばらく見上げる。こちらの世界にも、星座とかあるのだろうか。

「あの、調査方法はどこで調べたの？」

いつの間にか決心がついたのか、エレイ先生の言葉に視線を落とす。

全員に問いかけているのかと思えば、ちょうど下げた視線が、こちらを見ていたエレイ先生の視線と一致した。

正面とうよりは、斜め右向かいに座っているため、エレイ先生が俺に視線を向けていないと合わない位置だ。

ネモア達も俺に向けた質問だと分かったのか、その答えを待っている。

どこで調べたかと聞かれても、知っていた知識から導き出したものだ。

つまりは、自分で考えたという事になるが。

厳密に言えば、地球で調べた知識の中で、今回の調査に使えるような方法を自分で考えたという事で。

どこと聞かれれば、地球なのだろう。

「調べた、と言われると困りますが。俺が考えました」

威力を数値化するために、解りやすく目盛を引く。

元から威力が強すぎる魔法陣だと、変化がわかりにくいので、調査対象は初級の魔法陣。

平均値を取るため、一つの魔法陣を2、3回は観察する。

威力が同程度で、効果が違う魔法陣を各属性毎に、なるべく多く使用する。

初級の魔法陣があまり魔力を消費しないので、できる調査方法でもある。

後は、それなりに人数が居るので、適度に交代して魔法陣を発動させていけば、魔力を回復することもでき魔力切れも起こさない。

目盛を引いて観察しているので、個人によってそう大きな違いはない。

四方向から見ているので、縦長とか横長の場合も、おおよその面積は割り出せるだろう。

調査して結果をはつきりとさせる必要があったから、専門の器具も必要なく、ある程度の広さがあれば出来る方法。

と考えて、あまり難しくない方法としてあげたのだが。

エレイ先生の反応からするに、一般的ではなかったようだ。

研究

「魔法の研究ですか」

聞くところによるとエレイ先生。

オケアノス学院で教師として雇われる前は、魔法の研究、開発に携わっていたという話だ。

基本的にオケアノス学院の各教科担当は、その分野に精通した人間が受け持つことになっている。

ジル先生は元騎士隊長で、今でも王国から顧問にと言われる実力者。

エレイ先生のいた研究機関も、中々の規模と実績を誇るところで、エレイ先生自体も相当な実力者だった。

その元研究者からしても、俺の調査方法は独特で、画期的と言えるらしい。

つづけて、一般的ではないだけで、既に他の誰かもやっている方法かもしれない。と付け加えられたが。

だったら、何をそんなに知りたかったのか、と聞いたところ。

「研究や開発をする人は、それがそのまま自分の地位につながるから。その方法が素晴らしく良いものであるほど、人には話したがらないものよ」

知識はそのまま、その人の財産なのだ。

どこまでも実力主義な国の考え方に、思わず「へえー」と呟いてしまった。

通りで、エカトルタのルストがいろいろ聞きたがるわけだ。

まあ、方法だけ見ても、何を調べているかさえ、解らなければ現

状はどうでもいいと思っている。

調査方法自体、やっている事は簡単な事だ。

俺が試していなくても、いずれ誰かが思いつく事だろう。

後見人であるグリサラーサ家には、少し悪い気もするが。はつきりと言ってしまうと、俺は地位とか権力とか興味がないし、あまり欲しいとも思わない。

ヘランドのマルクさんの件で感じた、危うさは避けられるものなら避けたい。

何かをするのに、ほどほどの地位や権力は必要かもしれないが、過度のモノは逆に危険に足を入れるような物である。

金持ちの子供は狙われるし、王様は暗殺者におびえるし、認められない独裁者は反乱を起こされる。

何事にもその人の身分や能力にふさわしい、分相応の待遇がある。枠からはみ出ると、それは上でも下でも叩かれるものだ。

「ケースケさん？」

エレイ先生にいくつも質問され、ぐったりしていた。

流石に学習発表である、調査内容については一切触れてはこなかったが、調査方法については他にも何かいい案はないのかとか大変だった。

エレイ先生の言葉をそのまま借りて、俺の財産なので話したくありません。と断れたのは、半時間以上たってからだ。

どこか諦めきれない様子だったが、彼女自体が元研究者であるためか、子供であれ無理強いする気はなかったらしい。

ただ、実際の調査風景を見ていて、興奮が収まらなかったのかなとか。

「眠たいですか？」

「いや、星を見ていた」

片づけも終わり、俺とネモアとファン。ウイズとジル先生という組み合わせでテントを使う事になった。

ウイズがジル先生と二人なのは、単に体格の問題だ。

俺たちはインドア派なので、三人でもそれほど狭くないが、体育会系の彼らは二人でも少し狭そうに感じた。

大木の近くには魔物や危険な野生動物、野党などはいないらしいが、用心のために夜の見張りを3時間交代ですることになった。

と言っても、ジル先生は熟睡するわけではないので、見張りとして起きておくのは俺たち生徒。

いつもならウイズかミリイと組むところだが、何かあった場合は大声で叫ぶことになっている。

そのため、ネモアと二人で話をしながら起きていた。

いつの間にか考えに夢中になってしまっていたみたいだ。

星がきれいに出ている事だし、ネモアしかいない。

他の寝ている人達を起こさないように、小声で話しかけながら、気になっていた星座の話の振るのだった。

課題

無事、最後の調査を終えてオケアノス学院の寮に帰ってきた。やっと安心できるベッドで寝られる。

帰ってきたのは昼を回ったところだったけど、俺とネモアは今までの睡眠をとり返すかのように、夕食も食べずに寝て過ごした。

起きたら夕焼けだったのは、流石に寝過ぎたと思う。

あまりに外が暗いから、てっきり早朝だと思ったほどだ。だんだん暗くなっていく窓の外に、今日は何日かを確認して回った。

何度か目は覚めていたはずなんだけど、記憶が曖昧だ。

「明日、学校行きたくないな」

ついつい本音が漏れたのは仕方がない。

計画通りに旅が進まなかったので、今日一日が休日になっていたのだ。

順調に進んでいれば、三日は休日になる予定だった。休日と言っても、調査内容をまとめたり、課題をやったりする時間になるのだけど。

そつえば、課題取りに行っていない。

帰り道でエレイ先生に、各担当の先生から課題を預かっているから、早めに取りに着なさいと言われていたのだ。

今日、行かなくてはいけない訳ではないから別段気にする必要はないか。

そう思って、まだ寝ているネモアを起こして、ほぼ一日ぶりのご飯を食べて、再度眠りについたのだ。

そして俺は、何故エレイ先生が早めに取りに来いと、わざわざ言ってくれていたのか、職員室に着いて知った。

職員室の一角に積まれた、3つの箱。

両手で抱えなくてはいけないほどの大きさで、更に開いた上の口からは収まりきれない物が飛び出している。

一ヶ月と言っても、初等学4年生の授業は、浅く広くなので一教科あっても2時間程度だ。

課題が出たとしても高々知れていると思っていたのは、間違いだったのか。

放課後、5人で職員室に課題を受け取りに行った俺たちは、想像を超える量に思わず固まってしまった。

「……期限って、二週間だったっけ？」

「そう、だったはずだけど」

「5人だから、この量なのかもしれないですね」

俺の言葉にミリィ、ファンが続けてくる。

5人だとしても、多過ぎはしないだろうか。

そんなことを考えながら、どう運ぼうか相談していると、続々と授業を終えた先生たちが職員室に帰ってきた。

中に、薬草学のレフィ先生がいて俺に気付くところらに近づいてきた。

初授業の時から、廊下で会うと立ち話をするほどの仲だ。

「ちゃんと、罰も上乘せしておきましたから」

良い笑顔で告げられた言葉に、俺たちは思った。

先生方、相当、怒ってたいんですね。

休日出勤をさせられて、情報収集にあたったとかは、エレイ先生から聞いた話だ。

レフィ先生の後にも何人かの先生に同じような事を言われて、解りましたと言葉を返すしかなかった。

中には、こんなに心配させたんだから、当然できますよね、と言ってくれた先生もいた。

それには素直にお礼を言いました。

放課後と休日をつるに使って、何とか二週間で課題を終わらせ、各先生に提出に行く俺たちは、凄くやつれて見えたらしい。

それを見た他の生徒が、長期の課外自習を自粛したとかいう噂が上だったが。

それは、それだろう。

作業

課外自習の課題が終了して、やっと学習発表会の資料を作成する作業を開始した。

放課後も休日も課題に明け暮れていたため、できればしばらく何もしたくなかったが。

先延ばしにするといつまでも始めないような気がしてきたので、課題提出した次の日から全員で集まって作業をする。

初めに行ったのは、調査してきた内容のまとめだ。

場所と魔法陣別に一つとし、4視点からの平均した数値を表にしていく。

その表と対になるように、縦横に一定間隔で引いたマス目に数値と線を書き、図形とする。

図形は上からのものと、横の4視点から見た状態のものを書いて、線は直線ではなく、なるべく実際に発動した魔法を絵にする。

絵は上手い下手があるので、最初に全員で試し描きをして、ウイズが一番つまかったので任せる事にした。

調査場所は、メウテス口、パリアカ、エカトルタ、キシヤルナの4力所。

魔法陣は、火属性、水属性、風属性、地属性の4つ。

各属性ごとに、効果の違う魔法陣を大体、3つから4つ。

数としては、調査場所あたり魔法陣が最大16個、全体で64個。

表と図形はサンプルとして、俺が最初に書いた。

調査時に出来るだけ統一化させるため、4視点は東西南北となるようにしてあった。

調査内容を書くノートも、位置毎に決めていたので、表に起こすのも幾分か簡単と言える。

手分けするため4視点のノート毎に、表に値を記入し、次の人に渡すという流れ作業を行ったおかげで、思ったより作業効率が良かったが。

何せ数が多い。

あまり乱雑に書くと、後々困るので丁寧に書くこととしているため、俺の手は変に力が入ってペンだこが出来ている。

他も似たようなもので、数が進むにつれて、疲れをとるためか指を鳴らしたり肩を回したりする事が多くなった。

調査資料をまとめ終わる頃、俺は視界を覆い尽くす銀世界があった。

「通りで寒いわけだ」

後一週間ほどで、今年が終わるらしい。

ただ、年末年始に何かするというのはないみたいだ。オケアノス学院も通常授業があるから、普段と変わらない。

家族でそろって年越しとかは無いのか、とネモアに聞いたら、そういうのは国のできた日という事で3月にあるらしい。

学習発表会の詳しい日程がつい昨日発表された。

2月14日。

毎年、月の中ごろにやるようで、今年は少し早めだとか。

調査資料のまとめは終わっているのですが、今は発表用に大きな紙に基本的には図をメインで書いている。

発表の方法としては、当初張り出し形式を考えていたが、エレイ先生の勧めで舞台での発表に切り替えた。

そのため図は見えやすいように大きく書き、説明のほとんどは口頭で行う事にした。

「ケースケ、出来上がったものどこに置いておくの？」

模造紙とよばれるものが、こちらの世界になかったので、ノートに使われる紙を複数くっ付けた物をミリイが持ち上げながら聞いてくる。

つなぎ目がいびつなため、下手に丸めるとはがれてしまいそうなものだ。

「そのままベッドの下にでも入れておいた方がいいな」

「そうね。前日には、講堂に運び込めるみたいだけど」

「当日自分たちで運んだ方が良いんじゃないか？ ジル先生に聞いたけど、過去に何回か発表資料が盗まれたって」

ウィズの言葉にミリイが顔をしかめる。

今は、ミリイとウィズとネモアに発表資料の作成を任せ、俺とフアンで発表内容を考えている。

何を発表するかについては、決まっているので、流れの部分を考えている。

今のところ順調に進んでいるため、1月中には発表資料が完成するので、それに沿って練習が出来るはずだ。

「ケースケさん、これなんですか？」

ネモアがこれと言って持ち上げたのは、持ち手の部分に小さな赤い石と青い石がはめ込まれた、蔓が巻きついたような棒だった。

俺的には、魔法使いの杖なのだが、指揮棒のようなシンプルな杖を使っているネモア達にとっては何かわからないといったところだろう。

すっかり忘れていたが、ネモアがカバンを片付けようとしたら底から出て来たみたいだ。

「ヴァカンフで買ったんだよ。ちょっと気になってな」

「え？ いつの間ですか？」

「いや、買ったというか貰っただな。ネモア達とはぐれたとき、気になってみていたら、女の人を買ってくれたんだ」

俺の言葉に、ネモアが眉をひそめる。

それから値段が三百円だった事とか、渡されてすぐにどこかに行ってしまった事とか、有ったことをすべて説明することになった。お菓子を貰っても着いて行かないように気を付けてくださいね。という笑顔の一言に、ミリイとウイズに爆笑された。

「それで、これは何なのですか？」

笑っていないファンが、ネモアの持ったものが気になるのか、再度質問を投げってくる。

何と言われると、はっきりとは断言できないが。

「杖、だと思っただよな」

「杖？ これが？」

俺の発言にミリイが収まった笑顔を驚きに変えて聞き返してくる。これ自体で魔法を使ったことがないのでわからないが、俺としては杖だと思っている。

何故杖だと思ったのかとファンに聞かれて、いつも使っている杖の長さと同じぐらいだし、こういう物もあるのかと思って、と咄嗟に口をついた。

これが杖なら、魔法が発動できるはずだから、と久しぶりに自習室を借りに行くことになった。

また、5時間待ちとかだとどうしようかと思ったが、他のチームも終盤に差し掛かっているのか、すいていたためすぐに借りる事が出来た。

初級の火属性の魔法陣を描くと、杖を持ってその前に立つ。いつものように杖に体内エネルギーを集中させようとして、持ち手の部分に違和感があった。

赤い石の方から青い石の方に向かって、何かが流れてくる感じだ。自分が送っている体内エネルギーとは違う、何か別のものが混ざってくるような。

違和感はあるものの、体内エネルギー自体は循環させられているようなので、それを魔法陣に向けて放出する。

ポウツ。

部屋の中心部に、大きな炎が上がった。

大きいと言っても、焚き火程度だが、元々マッチの火程度の魔法陣のはずだ。

あまりの事に驚いて後ろに下がるとそのまま尻餅を着く。慌ててネモア達の様子を確認すると、十分に距離を開けてみていたため、ミリィやネモアとかは同じように尻餅をついていたが大丈夫そうだった。

ただ驚愕に染まった顔で、こちらに視線を集中されると、目をそらしたくなる。

杖

魔法が使えたことで杖（仮）は杖であることが確定した。

効果の違う魔法陣や、他の属性の魔法陣も試してみたが、総じて威力が上がる結果となった。

すべて初級の魔法陣で確認したが、中級以上の魔法陣はどんな危険が起こるかかわからないので保留だが、威力が上がることは確かだろう。

後は、魔力として使用する体内エネルギーの量を増やしても、杖を使った威力が上がる以上にはならない。

これは、魔力の量によって魔法の威力は関係ないという、前の実験結果と同じく魔法陣の特性と考えることが出来るだろう。

では、この杖を使うことで何が魔法陣の威力を上げているのかと言ったところだ。

「何かが流れてくる感じ、ねえ？」

赤い石の方から青い石の方に向かって、何かが流れてくる感覚。それを俺以外の人を試しても感じるものなのか、ということでは、ミリイに実際に魔法を発動してもらったのだが。

俺がやった時と同じく、魔法陣の威力は上がったものの、普段使っている杖と同じで違和感はないようだ。

順番に、ウイズ、ネモア、ファンと試してもらったが、解らないと帰ってくる。

「流れ込んできて、混ざるとような感覚があるんだけどな」

首をひねりながら、再度、杖に体内エネルギーを集中させると、流れ込んできたものが体内エネルギーと混ざり合い、別のものにな

る。

集中をさせたまま、手に持った杖を観察するが、見た目上特に変わったところはない。

赤い石か青い石が光るわけでもないし、熱を持っている感じもしない。

上下左右といろんな角度から見ても、違いはないみたいだ。しばらく続けてみたが、何もかわらないので、そのまま杖への集中を解いた時。更なる違和感が、全身を駆け巡った。

今まで杖を持った手の部分で混ざり合っていた、別のものが駆け巡る。

自分の内とは違う物が移動するような感覚は、ぞわりっと全身に鳥肌が立ったような感じだ。

ただ、それ自体が悪い物ではないのか、血液の流れのように循環している。

しばらくすると、流れるときの鳥肌のような感覚はなくなったが、体の内に何か別のものが流れているのは解る。

ぞわりっと体を震わせたときに、落としてしまった杖をネモアが拾いながら、こちらを心配そうにのぞいていた。

「ケースケさん？ 大丈夫ですか？」

「もしかして、魔力切れか？」

ネモアの言葉にウイズが続けて聞いてくる。

魔力は、初級の魔法陣ばかりだったので、体内エネルギーは対して減っていない。

「大丈夫だ。さっき言っていた、流れ込んで混じったものが体に残ったみたいで」

「残った？ それって大丈夫なの？」

「嫌な感じはしないから、大丈夫だとは思っけど」

そういつて、流れるソレを感じるために意識を集中する。ソレは体内エネルギーに溶けることなく、循環している。杖から取り込まれた別のものが、体内エネルギーと混じった。

魔力？

魔法を発動させる時に魔法陣を使っているのは、その陣自体が体内エネルギーと自然エネルギーを混ぜ合わせる媒体だからである。魔法陣なしに魔法を使おうとする場合、魔力を自分の中で練り上げて、発動するための魔法陣を頭の中で正確に構成しないとイケない。

まず、練り上げるとは、どういう状態か。

魔力の元となるものは、体内エネルギーと自然エネルギーだ。

体内エネルギー自体は自らの身体の内にあるので感じる事が出来れば、いくらかは使う事が出来る。

自然エネルギーは、身体の外にあるので、まずはそれを取り込まないとイケない。

魔法陣なしに魔法を使えたらと言う、希望の元、一度資料を調べたことがあったが。

自然エネルギーを感じ、全身から取り込むという感覚がつかめず、断念した。

そもそも、自然エネルギーを感じる、と言うのが解らなかった。

体内エネルギーを意図的に循環させることでさえ、まずは体内エネルギーを感じることに時間がかかったので、自然エネルギーを感じることはそれ以上に難しいことだった。

多分、他の魔法使いも、魔力を自分の中で練り上げると言う動作が難しいのだろう。

初級の魔法陣自体の構成は簡単で、頭の中で正確に構成するというのはそれほど難しいことではないと思う。

ただ、初級の魔法陣を発動するために最低限必要な魔力を練り上げるというのが難しいのだろう。

だから魔法使いの最高峰、国家魔法士の中でも使える人は一握りと少ないのではないか。

魔法陣を使用した魔法の発動で威力が上がったのは、魔法陣自体が混ぜ合わせた魔力と、杖から取り込んだ自然エネルギーを混ぜ合わせた魔力分で威力が上がっているのではないか？

魔力の量によって魔法の威力は関係ないとう、考えだが。

厳密に言くと、魔法陣で混ぜ合わせられる体内エネルギーと自然エネルギーの量が決まっているので、それ以上の魔力にならない。

だから、発動時に使用する体内エネルギーの量を増やしても、魔法の威力はそれ以上にはならなかった。

と、いう事はだ。

今身体の内にもぐっている、別のものとは魔力だとして、これを集中させて、火属性の魔法陣を頭に思い浮かべて発動するとどうなるか。

「……ちよつと、実験するから。こつち側に集まってもらえるか？」

そういつてネモア達を自分の後ろまで下がらせると、火属性の初級の魔法陣を発動させるために、最低限必要な量の魔力を指先に集中させる。

小さく息を着くと、頭の中に陣を思い描く。

何も描かれていない部屋の中心に指を向けて、魔力を放つ。

ポツ、と音を立てて、床から少し上の部分に火が灯った。

年明けを通常授業で過ごし、学習発表の発表資料は既に完成してベッドの下に積み重なっている。

発表内容もファンと詰めの作業に入っている。

一度、寮の部屋にて通して説明をして、わかりにくい部分などを修正していく予定だ。

早めに行動していたおかげで、今は大分余裕がある。

月に二時間だった学習発表のための授業時間は、今月から五時間に増えた。

各週に一時間、金曜日の最後の時間があてられるようになり、それぞれのチームが追い込みをかけている。

最終的な俺たちのチームの発表内容は、魔法陣の属性と自然エネルギーの関連というタイトルを付けた。

一般に出回っている魔法や魔法陣関連の資料には、各属性の相性と相剋について書かれているものはなかった。

もし、既に発表されていたとしても、元研究者であったエレイ先生が知らない方面から証明しているのだから問題はない。

最悪、どこかの研究機関に取り込まれる可能性も無くはないが、それも視野に入れて、魔法陣の属性と自然エネルギーの関連にしか焦点を合わせていない。

自然エネルギーを取り込めるのであろう杖については、確認後俺が常時持ち歩いている。

あの後、同じように杖に体内エネルギーを集中させた後、魔力が体内に残った状態で集中を辞めるということをやネモア達にも試してもらった。

結果は、流れ込んで混ざるといった感覚が解らないので、体内に魔

力があるかも判断できなかった。

明言は避け、言つとおりにやってほしいとネモア達に指示をしたので、自然エネルギーを取り込めているという話はしていない。何故、話さなかったのかと聞かれると、自分でも良くわかっていない。

ただその時は、話す気にはなれなかった。

今回の調査内容も、全員が見る部分については、属性と自然エネルギーの関連しかわからないものとなっていた。

別のことに着いて、気になった点や気が付いた点は、個人のノートに日本語で書いている。

これは図書室でエリオットから探るような視線を感じたときから、続けている事だ。

資料として残すものは、どこから調べられるかわからない。

だから調査内容には必要最低限の項目しかないし、発表資料も基本的に図で、発表内容も部分的にしか文章を起こしていない。

ネモアが学習発表を決めたときに、俺の功績だと強く反対した理由がここにきて身に染みた。

そもそも、俺が魔法陣に着いているいと調べ始めたのは、帰る方法を探すためだ。

ネモア自身は俺が異世界人だと知っているし、彼の口の堅さは十分に理解しているし、一番に信頼しているとも言えるだろう。

だけど、ウイズとミリイとファンに対しては、そうではない。

ある程度、信用はしているがそれまでだ。

いまだにウイズ達に自分が異世界人だと言えないのには、そこが大きく関係している。

「ケースケ・ク・グリサラーサ」

声を掛けられた俺は、その聞き覚えのある声に手の中にじつと汗を掻くのを感じた。

発表資料の作成はほとんど終わっているので、そうそう、全員が集まる必要がなくなっていた。

ネモアとファンが家庭の用事で呼ばれたため、今日はそれぞれ自由を過ごそうという話になった。

放課後、久しぶりにやってきた図書室で、杖に着いていた石が気になった俺はそれ関連の資料の棚を見ていた。

「アロディーンさん」

振り返ったそこにいたのは、エリオットだった。

何故、声を掛けられるのか？ 内心の動揺を表に出さないように、笑顔を張り付ける。

あの日もネモアとファンは各家から呼び出しをされていた。

あの日も俺は一人で図書室にやってきていた。

偶然だと思うのに、どうしても目の前にいる年下の、自分からすれば子供だと言えるはずの男に嫌な気持ち湧きあがる。

「君は、俺を馬鹿にしているのか？」

「……何を突然？」

「グリサラーサ家という後見人を得ていると思って、油断していたが。いや、君はグリサラーサ家自体もだましているのか」

エリオットの言っている事が理解できない。

ただ見つめ返すと、脇に抱えた資料の中から、一枚の紙を取り出してこちらに差し出してきた。

ケースケ・ク・グリサラーサの国家魔法研究所資料盗難について。

資料の一番上に書かれた文面に目を疑う。

慌てて中を読み進めていくと、アニユキスの国家魔法研究所の資料庫に荒らされた形跡があったこと。

そして、いくつか盗まれた資料の研究手法と研究結果が、俺たちの調査資料に類似していること。

事態を重く見た国王が、グリサラーサ家と先の魔道具の件で関係の深くなったグラヴィスタ家に事情を聴くことになりということが書かれている。

背筋に悪寒が走った。

ネモアとファンはこの事情聴取のために呼び出されたのだ。

資料庫が荒らされた日付を見て、眉を寄せる。

ヘランドの代理人として城へ会談に向かった日なのである。

魔法研究所という文章に、ちらりと頭をかすめたのは、エレイ先生の顔だった。

連行

図書室でエリオットに一言断りだけ入れて、寮の部屋に戻ってきた。

ベッド下と机の引き出しに発表資料が入っている事を確認して、自分用にまとめたノートがあることを確認する。

何かが取られたという形跡がないことに息を着くと、ベッドに腰掛けた。

研究機関に横取りされる可能性は、あるかもしれないと思っ
たが。

俺を犯人に仕立て上げようとは思っていなかった。

こちらの世界では、功績というものが社会に大きく影響している。エレイ先生に言わせると、俺の調査方法は画期的だという。もしかしたら、その調査方法自体にも功績が発生するのかもしれない。

後はエカトルタの城での執拗な監視。

魔法が魔道具として日常に根付いている割には、魔法陣自体の開発はそれほど進んでいない。

「……なんなんだよ」

何が駄目だったのかが分からない。

魔法陣は属性で分類されているのだから、そもそも、属性によって効果が違うということは解っていたはずだ。

だったら、自然エネルギーにも属性があると考えるのが普通ではないのか？

こんなことが、国の研究機関を動かすほどのとてつもない発見だとしても言うのか。

魔法のある世界だというのに、ゲームのように派手な攻撃魔法が

あるわけでもないし、魔法陣がなければ発動しないとか不便だとは思っていた。

しかし、だ。

魔法が一般的に認知され始めたのが、100年前だと言っても、一般に認知されていなかっただけで魔法使いは常にいた。

過去行われた長き戦いの模様が書かれた古い本に、度々魔法使いは登場する。

また、精霊や魔物は何百年も前の神話にも登場する。

魔法は、この世界、エルコティアソフィアが出来たときから常にあったと考えるのが正しいだろう。

ならば、なおさら、なぜ、魔法の属性について述べるだけのものに、国の機関が関わってくるんだ。

本当に国家魔法研究所が、魔法陣の属性と自然エネルギーの関連という題で、研究をしていたのか。

出来れば、そうであってほしい。

俺が国家魔法研究所から資料を盗んだという話も、その盗んだ物が無いのだから、俺の功績として発表しなければ済むかもしれない。学習発表は別の物を発表すればいいだけの話だ。

困るのは、こちらの調査結果を根こそぎ奪い取るうとしている場合だ。

俺達で作った調査資料と発表資料を向こうが自分たちの物だと言ってしまえば、それは俺が盗んだ物になってしまう。

筆跡でわかるだろうが、別の物に写したのだと言う事も出来る。

となると、俺は泥棒で国に捕まるのか？

自分が城の地下牢屋に入れられる姿を想像してしまい、何度も頭を振る。

バンツ！

深く溜息を着きそうになったその時。

派手な音を立てて、部屋の入口のドアが開けられた。

そちらに目を向けると、騎士の制服に身を包んだ数人が、無言で部屋に入ってくる場所だった。

「ケースケ・ク・グリサラーサだな」

「……はい」

「城まで、ご同行願おう」

多分隊長だと思われる人が、言い終わるより早く左右の腕が入ってきた他の騎士によって掴まれる。

突然の事に驚き、身体を引こうとしたが、がっしりとした手でつかまれた腕が、途端に悲鳴を上げる。

抵抗する暇もなく、引きずるように部屋を連れ出される。

入れ違いに入ってきた他の騎士が、部屋の中を物色しているのを見て、牢屋の入口が開けられる幻を見た。

聴取

城に連れてこられた俺は、即座に牢屋に入れられる、ということ
はなかった。

窓と入口のドアしかない部屋に入れられて、部屋の前には二人の
騎士が立っている。

何の説明もされぬまま馬車に押し込められ、左右と前を騎士で固
められた。

無言で、正面に座った騎士の一人は、常時険しい顔で睨みつけて
こられては、何かを聞くどころか口を開けることすら戸惑われる状
態だった。

馬車が城門を抜けてしばらくして止まると、また、左右の腕をつ
かんで移動させられる。

身長差があるため、引きずられるというよりは、持ち上げられて
運ばれているといった方があっていいのかもわからない。

「ここで待て」

そういつて放り込まれた部屋の中で、何もすることもなくぼうつ
としていたのだが、あれから一時間は経っただろうか。

城まで来るのに半時間は使ったかもしれないので、この部屋に入
ってから半時間。

窓から情報が得られないかと思ってみてみたが、ここは3階のよ
うで下を人が通っても話は聞こえない。

隣の部屋らしき窓は、ちょうど部屋一つ分先にあっただが、しっか
りと閉まっているため中に人が居たとしてもわからない。

牢屋に入れられなかったのは良いが、部屋に軟禁状態である。

外の情報が得られないが、多分、寮の部屋にあった資料を運び出

したり、確認したりしているのだろう。

騎士とは荒事は得意だろうが、物を探すというのは得意なのだろうか。

寮の部屋が無残に荒らされる様が頭をよぎる。

困った方に進んでしまったわけだ。

今日で何度目かわからない溜息を着くと、深く息を吸い込む。

何もわからずにつれてこられて、混乱状態が続いていたが、部屋に一人にされたことで大分気持ち落ち着いてきた。

向こう側は俺達の資料を横取りしようとしている。

魔法陣の属性と自然エネルギーの関連という研究結果は、とても価値のある物だということだろう。

俺が一度だけ城に来た日を犯行日としているあたり、多少、強引すぎる気がするが。

それでも、押し切れると向こう側は思っているという訳だ。

国家魔法研究所と、国家が着くぐらいなのだから、国の中では地位のある機関である可能性が高い。

俺の地位と言えば、学生でグリサラーサ家の被後見人といった所だ。

実力社会のこの世界、未だ功績も何も上げていない俺は、ただの一般人で初等学に入っている子供。

そう、向こうが考えているのであれば。

思考にはまろうとした時、部屋にノックの音が響く。

返事をする前に開けられたドア。

「着いてこい」

今回は左右から持ち上げられることもなく、自分の足で歩いていくことができた。

逃げないように、前後左右に斜めに至るまで騎士で固められているが、両腕だけで体重を支えることに比べればどうということはない。

しばらく歩くと、見たことのある大きな扉が見えた。

「ケースケ・ク・グリサラーサを連れてまいりました」

前を歩いていた騎士の声が響くと、扉が中から開けられる。

一番奥に座っているのは、あの日と同じカルディナ王だ。

あの時と違うのは、こちらから見てカルディナ王の左側に、グリサラーサ家当主ダンガルとネモア、グラヴィスタ家当主ジーダンとファンが既に席に着いていることと。

揃いのローブに身を包んだ一団が、ネモア達の正面に座っていることだろう。

ネモアとファンはこちらを心配そうに見てくる。意外だったのはダンガルとジーダンも気遣わしげな視線を向けてきたことだろうか。エリオットに言われた、だますという言葉に、もしかしたら睨まれるかもしれないと思っていた。

ダンガルから見れば、俺は事故で喚び出したがために後見人とならなくてはいけなかった厄介者だろう。

ジーダンとはヘランドの一件しか会っていないから、面倒事に巻き込んで言われてもおかしくない。

そついう思いもあった。

でも向けられる視線に、自分は一人でないのだと思うと、上がりそつになる鼓動が自然と治まってきた。

騎士に促されるまま、あの日と同じようにカルディナ王の正面に立つ。

こちらに向けられたカルディナ王の瞳からは、何の感情もつかげない。ただ、こちらを見ているだけだ。

カルディナ王の右から感じる視線には気づかないふりをして、ただその目を見返す。

「ケースケ・ク・グリサラーサ。ここに呼ばれた理由は解るか？」

後ろの扉が閉められて、一息を着いたカルディナ王が言葉を発する。

俺は、小さく首を振る。

来るまでに何の説明もされていないのに、理由などわからない。

「これは、三日前に国家魔法研究所から提出された書類だ」

カルディナ王の言葉に、そばに控えていた男が数枚の書類を持ってこちらにやってくる。

手渡されたその一枚目は、図書室でエリオットに見せられたものと同じだった。

二枚目以降に書かれていたのは、盗まれた資料に書いてある調査方法が、俺のやっていたものと同じだということと、研究の題材も同じだという調査報告書。

課外自習の時のスケジュールまで載せてある。

一通り目を通して、視線を上げてカルディナ王に向き直る。

「既にグリサラーサ家とグランヴィスタ家には事情を聞いたところ、君は調査方法を自分で考えたという話だったが、間違いないか？」

「間違いありません」

「私たちの研究結果よ！」

カルディナ王の言葉に頷いた俺に、右側から声上がる。

全員の視線がそちらに向かうと、一番奥に座った少し歳の言った女性がこちらを睨みつけてきていた。

「ジーナ、今はケースケに話を聴いている」
「彼の部屋から押収した資料を確認しました。あれはまさしく、私たちが行っていた研究のものです」

ジーナと呼ばれた女性の隣に座っていた、眼鏡の男が告げる。
他の研究者であろう面々もしきりに首を縦に振っていた。

「なっ！ あれは、ケースケさんの……！」

「ネモア、止めなさい」

「っ！ 父上、でもあれはっ！」

「落ち着きなさい」

あまりの事に言い返そうとしたネモアをダンガルが止める。
ここで言い返しても意味がないので、俺は黙って待っていた。
ネモアの悲しげな視線に、小さく頷くだけで留めた。

「聞いたとおりだ。ケースケの部屋にあった資料は彼らの研究結果だと言っている。国としても国家魔法研究所の調査資料を盗んだとなると、放ってはおけなくてな」

そういったカルディナ王の言葉に、研究者の面々の顔は明るい。

「一つ、確認がありますが、よろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「まったく同じ研究をしている人が複数いたとします。その場合、功績として認められるのは、研究結果を発表した方でしょうか？
もし、そうであれば、今この場で私が研究結果を発表すれば、それは私の功績になりますよね」

「……たまたま、同じ研究だったと言いたいのか」
「ふざけるな！ 我々の研究結果を盗んでおきながら、ぬけぬけと！」

俺の言葉にカルディナ王が小さく呟き返すと、ジーナという女性が食ってかかってきた。

「では、貴女は今ここで研究結果が発表出来るんですか？」
「当然だ！ 我々の研究結果だからな！」

自信満々に頷いたジーナの言葉に、相手が単純で良かったと内心笑みを浮かべる。

仕事で培ったポーカーフフェイスで表情には出さなかったが、流石、一国の王様。カルディナ王は俺の雰囲気の違いに気付いたのだろう。

「では、今すぐに研究結果を発表してください」

俺の言葉にジーナは眉を寄せてこちらを見てくる。

ヘランドの販売権の時もそうだったが、この世界は何かと早い者勝ちという形式を取っている。

彼らが学習発表を待たずに横取りに来たのは、俺達に発表された時点でそれが俺達の功績となるからだろう。

小さい学校なら、いくらでも揉み消せるかもしれないが、オケアノス学院の学習発表会には毎年各国から王族や貴族が集まってくる。そこで発表された事をなかったことには、中々できないのだろう。だから発表される前に強硬手段に出た。

「しないのであれば、私が発表しますよ」

ジーナは俺の言葉にしばらく考えた後、部下達数人と共に準備を

すると一度部屋を退室した。

数十分経って戻ってきたジーナの手には、学習発表用にまとめられた発表資料と発表内容の書かれたメモがあった。

意気揚々とはじめられた発表は、メモに書かれた内容に沿って行われる。

最後まで読み上げたジーナは、堂々と言い放った。

「ここまでが、魔法陣の属性と自然エネルギーについての研究結果です」

「ほう」

「彼が盗んだことはこれで確定したと思います」

ジーナはにやつきながらこちらを見てくる。

カルディナ王に「ということだが？」と視線を向けられた。

ジーナは確かに魔法陣の属性と自然エネルギーについて、調査内容に基づき結果を述べた。

それは、メウテスロであれば火属性が強いか、パリアカであれば水属性が強いかかそういう言った類のものだ。

最終的な、属性と自然エネルギーについては一言も語られていない。

「では、私も同じように発表をさせていただいても？」

「する必要などないだろう？ もう、結果は見えている」

「最後の悪あがきぐらいさせてください」

カルディナ王から許可が下り、ネモアとファンを連れて先ほど発表が終わった資料を持ち出す。

地域ごとに分けられていた複数枚の資料を壁に貼り付けると、メモも持たずに前に立った。

「場所によって、各属性の威力が異なることは、先ほどジーナさんが発表してくれたのでわかっていただけていると思います。なので、割愛させていただきます」

俺の言葉に、ジーナの瞳が見開かれた。

保留

「場所によって何故、威力が異なるのかについて、調査結果から自然エネルギーにも属性が存在すると考えました」

それぞれの調査場所で、まず目を引くのは威力が上がっている属性についてだ。

メウテスロであれば火属性、パリアカであれば水属性、エカトルタであれば風属性、キシヤルナであれば地属性。

他の属性の同程度の魔法陣に比べて、とびぬけて威力が大きい。それは、何故か？

ここで、重要になってくるのが、自然エネルギーというものだ。

魔力とは、体内エネルギーと自然エネルギーから構成されている。魔法陣という媒体を使って、体内エネルギーと自然エネルギーを練り上げる事で魔力を生み出し、魔法を発動させている。

調査方法の条件として、体内エネルギーの放出量は大体同じになるように心がけていた。

また、誤差を少なくするために同じ魔法陣で複数回確認することで、平均値を取るようにした。

このことから、それぞれの土地の自然エネルギーが魔法の威力に影響を与えているであろうということがわかる。

「メウテスロにはパイストス山という火山があります。パリアカは海が近く、有名な入り江があります。エカトルタでは、年に何度も竜巻が発生し、キシヤルナの森には樹齢何千年、何万年とも言われる大木が生えています」

各土地にはそれぞれの属性と関係の深い場所や物が存在する。

自然エネルギーに、魔法と同じく属性が存在し、補助または増強の役割を果たすため威力が上がったと考えられる。

すぐに確認出来るモノとしては、初級の地属性の魔法陣だ。

土の壁を作る魔法を室内で発動するのと、土のたくさんある外で発動するのでは速さと強度が異なる。

各属性の魔法が、どこでも発動できるのは、大気中にある自然エネルギーにそれぞれの要素が多少でも含まれているからだろう。

「ここまでが、属性と自然エネルギーについてです」

「っ！ お前！ 別の資料まで……」

「ここからが、本題の魔法陣の属性と自然エネルギーの関連についてですが」

区切りのいいところで一度話を切ると、ジーナがすぐに反論しようとしてきた。

それを無視する形で、続けての発表に入る。

あくまでも自分たちの研究結果だと貫き通そうとしている、その意思の強さは凄いと思うが、ジーナ以外の研究者の表情は既に硬い。

カルディナ王の方へ視線を一度向ける。

「本題については、オケアノス学院の学習発表会で行いたいと思っているのですが」

「はっ！ 続きなどないのだろう！ やはり、こいつが盗んだのです！」

俺の言葉にジーナが笑顔で答える。

ジーナの中途半端な研究発表、顔色が変わった研究者達。

それに気づかないカルディナ王ではない。

カルディナ王はいつまでも強気の姿勢を崩さないジーナをしばらく

く見ると、彼女に気付かれないように口元を隠し、小さく溜息をついていた。

「ジーナ。彼の言っている本題に着いて、君は発表出来るのか？」

「はい！ 別の資料になりますので、準備に時間はかかりますが大丈夫です」

「……では、こうしよう。オケアノス学院の学習発表会で、二人が同じ題について発表を行う。その時、ジーナよりケースケの発表内容が劣っていたら処分を考える」

「それは、私たちにとってとても不利ではないですか？」

どう考えても、国家の研究機関に有利な気がしてならない。

そう思って口をはさんだ俺に、ジーナは鼻を鳴らした。

「今回同様、ジーナ達がまず発表し、ケースケ達が後だ」

「えっ！ それは……」

「君たちは、国家魔法研究所だろう。実力を見せつけてもらいたい」

カルディナ王の言葉に、他の研究者が思わず声を上げるが、次の言葉で黙ってしまう。

ジーナだけはまだ、余裕の表情だ。

「そして、審査は国家魔法士など魔法の専門家と、各国の王が行う。それまで、今日押収した資料は直ちに複写をした後、彼らの元に返す」

「資料をですか……？」

「ジーナ、同じ資料なのだ。それに本来君たちの研究結果なのだろう。返したとて、先行の君たちの方が有利なのは明らかだ」

「……そうですね」

しばらく考えていたジーナだったが、その言葉に納得したらしい。カルディナ王は気づいている。彼女たちが嘘をついていると。

ここにいる人間の誰もが、気づいている。

それでも、ジーナが自信满满なのは、押収した資料の中に答えが書かれていると思っっているからだろう。

今ここで、それを指摘しないのは、カルディナ王も考えるところがあるのだらう。

「処分は保留だ。当日まで同じような事が起こらないように、それぞれに監視を着ける」

客室

カルディナ王の指示で、資料の複写がすぐに始まることになった。どのような技術があるのかわからないが、百枚近くある資料は三時間もあれば作業は終わるとの話だった。

今はそれが終わるまで、城の一室に案内されて、待っている状態だ。

最初に案内された部屋のように、ドアと窓が一つしかない場所ではなく、高そうな壺や絵画などが飾られていて、広めのテーブルとソファのある部屋だった。

「すみません。」ご迷惑をお掛けして「

三人掛けのソファに俺を間に挟むように、ネモアとファンが座り、テーブルの向かい側にはダンガルとジーダンが座っていた。

子供だけでは対処も難しいだろうからと、二人も一緒に残ってくれることになったのだ。

そのおかげで、綺麗な部屋に案内されたのではないかとも思っている。

ソファに座った状態だが、深く頭を下げる俺に、向かいに座った二人が小さく息をついたのがわかった。

「顔を上げてくれるかな？」

ダンガルの言葉にゆっくりと顔を上げる。

困ったように眉を下げるダンガルと、少し怒った様子のジーダン。ダンガルとは、後見人の話をした時と、グリサラーサ家で過ごしていた時に何度か話したことがあった。

と、言っても貴族とは意外と忙しいようで、ほとんど家にいるこ

とは無かったが。

ネモアは父親に似たのか、初めて会ったときは何度も何度も謝ってくれた。今後の生活は保障すると、力強く頷いてくれた。

ジーダンとは、ヘラントの件で、顔を見ただけでまともに話したことはない。

ファンは母親に似たのだろう。

肌のいろは健康的に焼け、がっしりとした二の腕に、分厚い胸板は、どうやってもインドア派には見えない。

そのジーダンは、眉間に皺をよせこちらを睨みつけている。

「君が謝る必要はないだろ」

重低温の声が、俺の耳に届く。

てつきり文句を言われるのだと思っていたが、どうやら俺に対して怒ってるわけではないようだ。

侍女の人が淹れてくれたお茶を一気に飲み干すと、強めにテーブル置いたジーダンは深く息を着いた。

「ケースケ君、君が盗んだとは初めから思っていない。ファンから、ケースケ君のことは良く聞いているからな」

落ち着いたのか、先ほどより穏やかな声でジーダンが話始める。

職業柄、今回のことについてはいくつも情報を集めてくれていたらしい。

盗難があったとされる日から、大方半年もたってから報告書が上がってきている時点で不自然だった。

ファンから研究をしているという話は聞いていて、どう考えても向こう側が横取りしようとしているのは目に見えていた。

ただ、下手に権力のある国家の機関であるため、決定的な証拠がない限り対処のしようがなかったらしい。

「私も、ケース君が優秀なのはネモアに聞いていたからね。国王に文句を言ってやったよ」

柔らかい口調でそういったダンガルに、隣に座っていたジードンが軽く目を見開いた。

そんなことしたのか。と、驚いている様子だ。

俺の隣でネモアが、当然ですと言った形で頷いているのを見て、正真正銘の親子だと思った。

カルディナ王も、今回のことには色々と思うところがあるらしい。それでも、はっきりとできないのは、確固たる証拠がなかったためだ。

俺が盗んでいないという証拠も、俺が盗んだという証拠も。

そして、どういった訳か初めは内々で終わらせようとしていたことだったのだが、いつの間にか外部に今回の件が漏れてしまった。

一度広がってしまうと、なかったことにもできず、どうにかして白黒をはっきりつけなくてはいけなくなってしまった。

ただ、その方法が浮かばないまま、国家魔法研究所側が今回の聴取と言う形で強硬手段に出たらしい。

騎士が寮の部屋に突然入ってきたのも、説明がないまま強制的に連行されたのも、国家魔法研究所側の指示だったというのだ。

準備が整いましたから始めましょう。と。

大した説明もなく、前日から状況把握のために城に上がってきていたグリサラーサ家とグランヴィスタ家を席に着け。

いつ用意したのか、正式な書類でカルディナ王を席に着かせた。

「なんだか、国家魔法研究所だけの問題でもないようですね」

「ああ、役人が絡んでいる可能性はあるだろうな」

「どこにでも、悪知恵だけ働く者はいますからね」

カルディナ王も、今回の件で悪い膿が出せればと思っているのだらう。

学習発表会まで一ヶ月と少し。

調査資料と俺が説明した属性と自然エネルギーについて。あとは、日本語のメモ。

これらから、彼らが俺と同じ考えに行きつく可能性も無いとは言い切れない。

他にインパクトのある発表内容も、追加する必要がある。

やるからには、とことん、やってやるうじやないか。

疑心

日が傾き始めた頃、複写された資料を手にオケアノス学院の寮に帰ってくる事ができた。

原本はカルディナ王が管理し、国家魔法研究所にも同じく複写された資料が渡された。

渡された資料をその場で差異がないか確認する。

記憶にある資料や、いつかいたかわからないメモ書きまであった時点で、いくらか覚悟はしていたが。

「……まずは、片付けだな」

寮の部屋の中は、泥棒に入られたように荒れていた。

引き出しや箱はすべて開けられ、棚に並べてあった本は床に散乱し、枕や布団のカバーは取り払われている。

探すのは良いが、元に戻して行ってほしかった。

資料の束を部屋の隅に置くと、足元に散乱している物を拾い集めながら進む。

足の踏み場もない。

大雑把に物を固め、何とかベッドまでの足場を確保すると、寢床の整備に取り掛かった。

夜は近い。今から片付けをしていたら、寝る時間が無くなってしまふ。

明日も授業があるのだ、寝ないで過ごせるほど俺は若くない。

ネモアと二人でもくもくと寝る場所を整えていると、部屋のドアがノックされた。

「友人と言われる方が来ています」

そう声を掛けてきたのは、カルディナ王が指示した監視役の騎士の一人だ。

一番隊、カルディナ王の手足とも呼ばれる隊らしく、部屋の前に二人と窓の外に二人がついている。

精鋭部隊と呼ばれる彼らは、国王命令でしか動かせない。

国家魔法研究所の方にも同じ隊から四人の騎士が監視役として付いている。

常に見張られることになるとは言え、それは国家魔法研究所の方も同じで、更には身の危険まで感じるこの状況では逆にありがたい。

ドアを開けると、困惑したウイズ達が廊下の向かいの壁まで下がって立っていた。

両端に立っている騎士達は、ウイズ達を警戒している。

「ああ、友人です。学習発表会のチームのメンバーでもあるので」

「わかりました」

「ウイズ達、説明するから、部屋に入ってくれ」

騎士を気にしながら俺の後についてきたウイズ達は、部屋の状態を見て固まった。

座るところもないので、ベッドのふちにウイズとミリイとファンの三人に座ってもらい、俺とネモアは救出した椅子に座った。

状況を知らないウイズとミリイに、簡単な経緯と学習発表会かで保留になったこと、監視役が付くことを説明する。

二人は眉を寄せ、不満そうな顔をしている。

「事件があつたとされる日より前に、ケースケは研究を始めていたじゃない」

「それを証明する証拠がないのですよ」

ミリーの文句にファンが苦笑いをしながら答えた。

「でも、エレイ先生がなあ」

「繋がりがありそうな人で俺たちの研究を知っている人ということだから、断定するのは避けたいんだけどな」

「可能性としてあるので、警戒するのは当然です」

俺の言葉をネモアは、注意してくださいと続けた。

エレイ先生に隙を見せるつもりはない。

授業中に作業をするつもりは全くないし、彼女に何を聞かれても言うつもりもない。

監視役の騎士の人にも、彼女を注意してほしいと、明日実際に見たときにでもお願いするつもりはある。

「予備として、いくつか発表内容を増やす。内容については俺が考える。発表資料については学習発表会の前日に作成する。徹夜になるかもしれないけど、手伝ってくれ」

俺の言葉にそれぞれ了解の返事が返ってくる。

これ以上、人のモノに手を出させない。

接触

朝、状況報告のため、騎士に連れられて学院長室に来ていた。いつもより早い時間に起きて、移動したが、登校する生徒は少なからずいた。

騎士二人を連れての移動が、注目的だったのは言うまでもない。オケアノス学院は、生徒の自主性を重んじている学校のため、たとえ貴族などの位が高い者が通っていたとしても、護衛や従者が着く事は無い。

護衛や従者が生徒として入学することはあるが、明らかに騎士の格好をした人がいると目立つ。

普段、まったくと言って良いほど目立たず、ネモア達以外には気づかれていないんじゃないかと言うぐらい注目されることもない学生生活だった。

それが、動物園のパンダよろしく、誰もかれもが注目してくるため、移動だけで心が疲弊しきっていた。

関係者と言う事で、一緒に来ていたネモアとファンも、疲れた顔をしていた。

特にネモアは、朝が弱いこともあり、ぶしつけな視線に苛々している様子だ。

ソファに座り、早速出された紅茶を飲んだ。

ヘリオス学院長は、向かいに座り、俺たちのその様子をしばらく眺めていた。

俺達が紅茶を飲んで気持ちが悪落ちてきたのを確認し、ゆっくりと口を開く。

「すまないな。こちらの管理体制不備であった」

ヘリオス学院長の言葉に、思わず目を見開く。
それは、学院の教師の中に情報を漏らした人がいる。と、言っているようなものだったからだ。
これ、と言った証拠がないから、今の状況になっているのだが。
そう思ったのが、顔に出ていたのかヘリオス学院長は、申し訳なさそうに眉を寄せる。

「証拠はこちらでも掴めておらんよ。だが、状況を見ればわかることだ」

深く頭を下げたヘリオス学院長は、その後、今後について説明をしてきた。

カルディナ王の方から、正式な書類として騎士の事の通達はきている。

教師たちにも、騎士が着くことは伝えてあるので、授業中に教室内にいる事も問題ないらしい。

ただ、目立つことは必須なので、課題にしてはどうかという話が上がっているとのこと。

人が少ない中の移動だけで、あれだけ目立っていたのだから、できればそうしたいが。

気になるのは、噂の方だ。

今回の件は、既に外部に漏れてしまっている。

エリオットが知っていた時点で、ある程度の貴族たちには知れ渡っていると考えて良いだろう。

昨日は大量の騎士が寮の俺たちの部屋に来ていたのを、寮に居た人は見ていただろうし。連行されている姿も見られていた。

そんな俺たちが次の日から授業に出ていなかったら、良からぬ噂が立つことは目に見えていた。

「授業には参加します。課題ではわからない部分もありますし」
「……そうか」

俺の言葉に、ヘリオス学院長は目を細めて頷いた。

教師の中にも今回の件を知っている者は結構いるが、できるだけ騒ぎ立てるなどは言っているらしい。

そもそもが、各分野の専門家が多かつたため、噂話は好きではない者がほとんどの様だった。

「困ったことがあつたらすぐにいいなさい」という言葉を貰い、授業に出る為教室に移動することになった。

騎士達の姿に、登校途中の生徒が足を止める。

気にしないように廊下を歩き、教室のドアを開けると、中にいたクラスメイトの視線が一齐にこちらを振り返った。

入る前はざわざわしていたのに、水を打ったような静けさが広がっていた。

「ケースケ、朝から大変だな」

「ウイズ……、あんたね」

この微妙な空気の中、大声で話しかけてきたのはウイズだった。

隣でミリイが頭を抱えている。

その、ウイズの一言で、クラスメイトの緊張は解け段々と元に戻っていった。

騎士達は、教室の後ろに立って俺たちの周りを警戒している。

ウイズとミリイに今朝の事を伝えていると、前のドアが開いた。

「はい、席について。授業始めるわよ」

入ってきたエレイ先生は、教室を見渡すと後ろの騎士の姿と、俺を目に止めた。

「ケース君。昨日の寮の事で、話があるから来てもらえる？」

エレイ先生の言葉に、教室内がかすかにざわつく。

教壇では、心配そうに眉を下げるエレイ先生の姿があった。

「わかりました」

微笑み返しながら頷いた俺に、教室内のざわめきは少し治まった。

確信

あれは、元カノと別れて少し経った週末の事だった。

まだまだ元カノが忘れられず、仕事でのミスも続き、心配した友達が気分転換に遊びに誘い出してくれた。

ボーリング行って、カラオケ行って、小腹がすいたからと近くの店に入った。

二十歳過ぎた男二人が、休日に良くあるファーストフード店で向かい合って食事だ。

何故か、無性に笑えて来て、意味もなく笑っていた気がする。

お酒を飲んだわけでもないのに、俺は笑いながら、元カノとの別れ話を語っていた。

些細なすれ違い。社会人になってからはお互い忙しく、デートも一ヶ月に一度あるかないか。

元々、メールや電話がマメでなかった俺は、仕事に疲れて帰ると元カノと話す気力もなかった。

段々仕事にも慣れて、久しぶりのデートで、元カノは言った。

他に好きな人が出来たと、その人にプロポーズされている。受ける気にいると。

俺は何も言えなかった。

大好きだった。と、そういつて涙する元カノに、幸せになれよ。と言っていた。

ズボンのポケットに入った、来月の元カノの誕生石が嵌められた指輪があったけど、最後まで渡せなかった。

後から、人づてに、出来ちゃった婚だと聞いた。

放課後、俺はエレイ先生と共に会議室に来ていた。

当然、騎士とネモアとファンも一緒だ。
会議室に入った時、そのことにエレイ先生が、眉を寄せたのを見ていた。

「昨日は大変だったのよね？ 無理に授業に出なくてもいいのよ？」

心配そうに眉を下げるエレイ先生の顔。

本当に生徒を心配しています、と、一心に伝えてくる、少し潤んだ瞳。

その顔が、別れを切り出した元カノの表情と重なって見えた。

授業中もその後も、エレイ先生の発言からクラスメイトの視線は増えていた。

暗に何かあったのだ、と思わせるエレイ先生の言葉が問題だった。寮に居なくて昨日の事を知らなかった人も、情報を集めだし、噂が噂を呼び、盗難の話も流れていたようだ。

学習発表会の事が伝えられていないため、盗難の話が印象に残る。騎士は逃がさないための監視だとか。

「学院長にも提案されたのですが、課題より実際の授業を受けたいので」

「でも、学習発表は如何するの？ 授業に出ている暇なんて、ないんじゃないの？」

俺は、自然と笑みを浮かべてしまっていた。

あからさまな発言に、エレイ先生がこちらを明らかに子供扱いしているのがわかったからだ。

誰が、漏らしたとか、こちらが気づいていないとでも、思っているのか。

それとも気づいているから、授業に出にくくするための朝の発言

なのか。

「ご心配いただいて、ありがとうございます」

浮かべてしまった笑顔の意味に、エレイ先生が気づく前に、言葉を付け加える。

「でも、大丈夫です。学習発表の資料は既に来上がっているので昨日中に？」

「いえ、既に作っていたものです。昨日持ち帰りました」

持ち帰れたという言葉に、エレイ先生の表情がかすかに動く。

安心したように微笑んだ彼女は、何かあればすぐに相談してね。いつもの優しい笑顔を浮かべていた。

俺も笑顔を返し、会議室を後にする。

終始無言で寮の部屋に入った俺は、溜めいていた息を吐き出す。

同じように息を吐いて、肩の力を抜いているネモアとファンが隣に並んでいる。

ネモアとファンには、会議室で何を言われてもできるだけ表情を変えずに、黙っている事をお願いしていた。

エレイ先生が、探りを入れてくることは予想していたが、こつもあからさまだとは思わなかった。

こちらが子供だからと、油断しているのかもしれないが、ネモアやファンもエレイ先生の違和感には気づいている。

多分、そのまま、国家魔法研究所の方へ伝えるのだろう。

ジーナにしてもエレイ先生にしても、どこからその自信が生まれてくるのか。

騎士の人にエレイ先生には注意してもらおうように伝えた。神妙な

顔で頷いた彼らに、お願いしますと頭を下げる。

呼び出されたため、あまり進まなかった片付けは明日に回した。

日常

二週間かけて、何とか部屋を元通りにすることができた。

散乱した物をまとめるだけなら、三日もあればできていたが、この際だからと大掃除をすることにしたら、いつの間にか二週間経っていた。

不要な物を部屋から運び出している時は、夜逃げか？ とか、聞こえた気がしなくもないが。

すつきりとした部屋に、気分を変える為、董色のラグが新調された。

毛足の長い手触りの良い物で、横になって頬ずりするのが楽しい。

この二週間、俺達のチームは思い思いに過ごしている。

ファンは図書室へ行き、ウィズは剣術の練習、ミリイはスイーツの食べ歩きに出かけ、ネモアは俺と買い物へ行ったり。

金曜日の学習発表用の授業時間も、本を読んだり、課題を仕上げたり、ただ話をしたり。

他のチームも発表資料や内容がまとまっているところは同じような状態なので、特に文句を言われる事は無い。

大声を出したりとかしてまだ終わっていないチームの迷惑にさえならなければ、自由時間だ。

「ケース君」

今日は片づけも終わったし、気になっていた杖の石について探してみようと図書室に向かう途中。

廊下を走る音と共に聞こえた、エレイ先生の声に振り返る。

その顔は、焦りを隠し切れておらず、少し歪んだ笑顔を浮かべていた。

「何かありましたか？」

「学習発表会の資料は、どうしたの？ 最近集まっていけないみたいだけど。もしかして、何かあったの？」

こういったやり取りは、今回が初めてではない。

一週間が経ったあたりから、俺を頻繁に呼び出したり、呼び止めるようになった。

そのたびに同じ返答を返す。

「発表資料は出来ていますから、特に集まる必要はないんです」

一字一句違わない言葉に、エレイ先生の顔が更に歪む。

呼び止められたのは、下校途中の生徒がいる廊下の真ん中で、俺の横には騎士がいる。少し離れたところに、ネモアとファンもいる。教職員としてのエレイ先生は、はがれそうになる仮面を、息を吐いてかぶり直すと、こちらに笑顔を向けてくる。

「一度、私に資料を見せてくれないかしら？」

「学習発表の資料は、チームで厳重保管ですよね？」

「ええ、でも、何かと、大変でしょう？ できているなら、私が当日までしっかり預かるわよ？」

エレイ先生の言葉に、隣に立っていた騎士の身体がピクリつと揺れる。

日に日に、追い詰められているのか、言動がおかしくなってきたいるのに、彼女は気づいているのだろうか。

「先生に、ご迷惑を掛けるわけにはいきませんし」

「あら、私なら大丈夫よ」

「それに、資料なら複写を取っているので、既に同じ物はあります」

ニコリと微笑みながら返した俺に、ついに、エレイ先生の笑顔が崩れた。

常に笑顔で若干天然が入っていきそうな緩い雰囲気、今は少しも窺う事が出来ない。

噛みしめられた唇と、充血しそうな程力の込められた鋭く尖った目、こちらに伸ばされた腕は俺の首を掴もうとしていた。

しかし、その腕は届くことはなく、間に割り込んだ騎士の姿に、止められる。

ハツと顔を上げたエレイ先生は、騎士からの視線と下校中の生徒達の視線に気づくと、慌てて笑顔を浮かべる。

「そ、そう。それなら、大丈夫ね。頑張ってね」

そういつて走っていく、エレイ先生。

俺は嘘を言っていない。

発表資料は出来ているし、発表内容も複写された資料の中にある。それが、こちらの言語でないと言っただけだ。

「すみません。助かりました」

「いえ、仕事ですから。……護衛を強化するぞ」

庇ってくれた騎士にお礼を言うと、もう一人に向かって声がかかる。

少し、追い詰めすぎたか。

騎士たちの言葉に、挑発はするものじゃないな、と思うのだった。

窮迫

引き出しを開けたまま、俺はしばらく中を見つめていた。変わりなく揃えられた資料を見て、小さく溜息を吐く。

「……よほど、切羽詰まっているんだな」

聞こえないほど小さな声で呟いた俺に、ネモアは首を傾げている。俺は寮の資料が入った引き出しに、簡単な細工をいていた。

一番奥まで閉めて、爪の先が引つかかるぐらい隙間を開ける。部屋を出る前にその細工をして、帰ってきたときに確認する。ただ、それだけのことだが、今、引き出しは奥までしつかりと閉められている。

中身の位置は少しも動いていないし、多少動いていても気づかないが。

自分の指先で確認しているそれは、気づいた。

護衛として騎士達から身の安全は確保されているため、今のところ特に問題はない。

追加の発表内容も俺の頭の中ではある程度まとめられてあるし、逆にこの様子だと追加分はなくても大丈夫だろう。

ただ、部屋に侵入しているという事は、俺たちがいない時間帯、授業を受けている時間帯となる。

エレイ先生にそういった実働は無理だろうし、ここは誰かを雇ったと考えるのが妥当だ。

物取り、だけならまだいいが、それ以上がないとも言いきれない。

「ネモア、図書室行くぞ」

最近借りた本を手に、部屋から出る事を選択した。

誰かが入った形跡のある部屋で、その誰が出て行ったかもわからない部屋に、長居をするつもりは全くない。

質問ではなく、断定の俺の言葉に、ネモアは訝しげだったが、静かに見つめる俺に最低限必要な物だけ持って外に出た。

騎士を引き連れながら図書室に向かうと、人の多い場所を選んで座ると、手に持っていた本を広げた。

ネモアも隣に座り、同じように本を読み始める。

「何か……、有ったんですか？」

ただ事ではないと感じ取ったネモアが、周りを気にしながら、本で口元を隠して聞いてきた。

俺も変わらず本を読みながら、考えるように口元に手を当てると、小声で返す。

「部屋に誰かが入った形跡があった」

俺の言葉に、ネモアの表情がこわばる。

すぐに元に戻していたが、心の中は穏やかではないだろうことは、確かだ。

騎士は寮の部屋の中までは入ってこない。

誰かがいるかもしれない寮の部屋に居るよりは、外で騎士や他の生徒の目に触れるところの方が安全である。

ファンやウィズ、ミリイのところも調べられているかもしれないが、彼らの部屋には複製すらおいていない。

「何か、手を考えないと危険だ」

部屋を探して目当ての物が見つからなかった。

とすると、誰かが肌身離さず持っていると考えたろう。
誰かが持っているという事は、その誰かをどうにかしないといけ
ない。

こちらに、牙を向けられるのは、そう遅くはない。

早々に手を打たないといけない。

しばらく考えた俺は、学院長室に向かった。

学習発表会が一週間後に迫っていた。

徹夜

学習発表会前日、ヘリオス学院長と寮の管理人のタルタさんに、ウィズ達を部屋に泊める許可を得る。

ウィズ達は同じ男なので問題ないが、ミリイが一人女ということがあり、一応話を通しておいたのだ。

ヘリオス学院長にお願いしたことが上手く行ったのか、あれ以降、侵入された形跡はなかった。

エレイ先生に絡まれることもなくなったので、多分、大丈夫だ。

上手くいっているとすると、追加の発表資料は作成しなくても良
いはずだけど。

過信は良くないのと、一カ所に集まっていた方が安全なので、
当初の予定通り、発表資料の作成ということが集まってもらった。

今は、複写された資料を、新しく書き直している。

前回の資料では、それぞれの数値の表とそれを、それを基にした
図を同じ用紙に書いていたため、全体を合わせたときにスペースを
広く使っていた。

できるだけ、完成形を他の人にわかり辛くするための対処だった
が、発表を聞いてもらう人にもわかり辛くなっている。

そのため、魔法陣の属性と自然エネルギーの関連についての部分
の資料を、新たに追加することにした。

自習室で行っていた、魔法陣の調査の資料を基準値とし、それぞ
れの場所の数値をパーセント化した、単純なものだ。

それがあるだけでも、ずいぶんとわかりやすさが違う。

「ケースケさん、予備の方の資料はどうするんですか？」

「資料は良いよ。今あるので、代用が出来るから」

「だったら、もうすぐ終わるわよ。あとは、ウィズが書いているも

ので最後だから」
「終わったぞ」

徹夜する必要がないことも、泊まる必要がないこともわかっていたが。

前回の資料作成で慣れていたので、作業を初めて一時間半で必要な物が揃っていた。

発表資料が完成した後は、用心のためにも部屋から出ない予定だったので、ご飯もお風呂もすべて済ませた後だ。

「……とりあえず、この部屋の中で各自自由時間と言っことで」

部屋から出ない理由は話しており、ウィズ達も賛成しているので問題ないが。

窓の外は星が出始めたばかりだ。

寝るのには、少し早い。

それに、本来二人部屋のところに5人が入っているので、自由と言ってもできる事は限られている。

俺やファンは本が読めれば基本的に大丈夫だけだ。

運動好きなウィズや、女子が好みそうな物がなかったためミリィは、暇そうだ。

ネモアはお茶を入れたり、お菓子を出したりしている。

呼び寄せた本人として、本を読んでいるのも気が引けて、何か暇をつぶせそうなものと、部屋を見渡す。

室内で出来ることと言えば、ボードゲームやカードゲームが考え付くけど。

そういえば、こちらに来てから、そういった娯楽を見たことがないな、と思った。

見たことがないということは、存在しない、可能性があるわけで。

ネモアがお茶を入れに行くのを手伝いながら、こそつと聞いてみた。

「どうやら、チェスのようなものはこちらの世界にもあるみたいだ。ただし、ルールが難しく、子供の遊びと言うよりは、大人の嗜みと言ったところだろうか。」

「カードゲームに関しては、トランプとかは無いようだ。神経衰弱のような、絵合わせをするものはあるらしい。」

「それも、小さい子のおもちゃのようで、カードと言うよりは口に入らない大き目の木の板に絵が描かれているもので。」

「慣れてくると、裏の木目でどれがどれか解るから、大きくなると自然と飽きてくること。」

「丁度資料を作っていたから、紙は残っているし、トランプを作ることにした。」

「厚紙とかがあればよかったのだが、残念ながらないので、若干薄いが、裏が見える事は無い。」

「1から10までの数値と、模様を表に描き込み、ピエロの絵を2枚描く。」

「ジャックやクイーン、キングも作るうかと思っただが、ピエロで絵心が壊滅的だったので、今回は42枚で行うことにする。」

「しばらくして出来上がったそれを、すべて裏を向けて机の上で混ぜた。」

「絵合わせでも、するの？」

「まあ、似たようなモノだ」

「そういつて混ぜたカードを集めると、ルールを説明しながら全員に配る。」

「5人いるので、一人頭8枚か9枚いきわたると、手持ちの中から」

揃っているものを出していく。

模様は四種類。

黒く塗りつぶしたクラブとスピードと、塗りつぶしていないダイヤとハート。

小学校の自然学校から、社員旅行まで。

移動中や夜に何度となくやっていた、同位の札を2枚ずつペアにして、手札を減らしていく単純なゲーム。

ババ抜きが始まった。

しかし、簡単で単純なゲームだったために、異様な盛り上がりを見せ。

ババ抜きが徹夜の原因になったのは、予想外だった。

再会

周りを、いつもより多い騎士に囲まれて、袋二つにまとめた資料を手に移動する。

寝起きの悪いネモアは、顔を洗った後もぼうつとしていた。

最初こそ、俺の勝ちが続いていたババ抜きだったが、相手の顔色を窺ったり、フェイントを掛けたりと単純で、意外と奥が深いそれに、回を重ねるごとに勝敗がばらけてきた。

ただの絵合わせに、かなり真剣になっていた。

動物的感が働き始めたウイズの独壇場になる頃には、日が昇り始めていた記憶がある。

寝ないで発表に挑む勇氣はなく、会場の準備などで、発表自体が午後からという幸運に、とりあえず眠りについたが。

この時期で日が昇り始める時間と言うと、6時は回っている事になるわけで。

発表の前にはご飯も食べないといけないし、会場に資料も運ばなくてはいけない。

それに、カルディナ王の話だと、審査のために各国の王と国家魔法士が召集されている。

遅刻など許されるはずもなく、向こうが早く集まれば、開始時間が早まる可能性もある。

偉い人が集まるのだ、無駄な時間は少ない方が良い。
となると、最低でも10時には部屋を出ないといけない。

部屋のドアを激しく叩く音でも目が覚めなかった俺たちは、部屋に飛び込んできた騎士の人達の手で起こしてもらいました。

本気で心配している騎士の人達に、遊んでいて寝不足になりましたとは、言えず。

騎士の人達も、資料の作成で疲れているのだろう、と思ってくれていたので、黙っておくことにした。

医者 of 検診を進めてくる騎士の人達に、俺は心を痛めながら、発表を理由に丁寧にお断りしました。

ただの、遊び過ぎの寝不足なので、本当に申し訳なかったです。

野菜と肉をはさんだパンを食べた後に、会場へと向かっていたのだが。

起きてすぐに食べたためか、緊張のせいか、お腹の調子がおかしくなってきた。

丁度トイレの隣を通りかかったので、ネモア達と騎士の人達に断って、寄らせてもらう事にする。

「あ……」

そうつぶやいたのは無意識だった。

トイレには、さらりつと揺れる長い銀髪の女性が先に入っていた。俺の声に振り返った女性から、翡翠色の瞳がこちらに向けられる。断じて言うが、間違つて女子トイレに入ったわけではない。こちらの世界のトイレは、男女兼用なんだ。

だから、別段女性がここにいるのはおかしいことではないのだが。彼女が見覚えのあった人だったため、思わず、声を上げてしまっていた。

「どうかしたの？ 使っていないから、どうぞ？」

そう言つて、個室へのドアを指さす女性は、どうやらこちらの事は覚えていないらしい。

身だしなみを整えに来たのか、鏡の前にはポーチの中身が出されている。

「あの、覚えていないかもしれませんが。これ、ありがとうございます」

これ、と言って出したのは、肌身離さず持ち歩いていたあの魔法の杖だ。

女性はしばらく見つめた後、思い出したのか、ああ、と声を漏らす。

「ヴァカンフで、会ったのよね。ここの学生だったのね」

「はい。あ、今だったらお金返せるので……」

「良いわ。それぐらい。大事にしてくれているみたいだし、あげるっていったのよ」

微笑みながら続ける女性に、俺は、あまりしつこく言っても失礼かと、もう一度お礼を言って魔法の杖をしまった。

お腹の調子が本格的にまずかったので、個室に入ることにしたが、女性が、気になって、気が付けば聞いていた。

「俺、ケースケって言います。貴女のお名前を聞いても良いですか？」

支度を終えて、フードをかぶり出て行こうとしていた彼女は、足を止めると。

ゆっくりと振り返り、ヴァカンフのように、口元に弧を描いた。

「ユリアよ。また、機会があったら、会えるわ」

それだけ言ったユリアは、振り返ることなく、行ってしまった。頬が熱い気がして、心臓が五月蠅い気がしたが、限界に近かった

俺はそれを深く考える間もなく、個室に駆け込んだのだった。

不問

会場となる講堂には、元々控室のような場所が用意されている。

発表が始まれば、俺達も会場に用意された部屋に移動するが、準備が整っていないため、舞台の近くに用意されたそこに騎士の人達と入る。

国家魔法研究所の一行も既についているらしく、別室で待っているらしい。

資料の運び忘れがないか、最終確認だけをして、思い思いに過ごしていた。

と、言っても、流石に緊張しているのか、ウィズは落ち着きなく部屋をうろつろしているし、ミリイは座っているものの足が小刻みに動いている。

ファンは本を広げてはいるものの、先ほどからページも進んでいない。

ネモアのお茶のお替りは三杯目に突入した。

かくいう俺も、緊張はしているが、大人数相手のプレゼンとかは何度か経験しているのと。

ネモア達が目に見えるほど緊張をしているので、逆に俺だけは落ち着いていないといけない気になっている。

実際に発表をするのはすべて俺なわけで、最悪、俺だけ舞台上がればいいわけだ。

話をする順番を頭の中で再度確認していると、部屋のドアが二回ノックされた。

「準備が整いましたので、会場に移動をお願いします」

入ってきたのは城仕えの人だ。

今回の発表は、準備から進行まですべてカルディナ王が手配した者で構成されている。

更には、本来であれば発表は講堂を解放して行うが、今回に限り、外部からは誰も入れないように講堂の周りを相当数の騎士達が警備している。

各国のお偉いさんが、オケアノス学院の学習発表に足を運ぶことはあったが、その中でもトップ、王族がこれほどまでに集まることは早々あるものではない。

俺の予想では断つたり、子供や大臣なんかには任せる人が多いのでは、と思っていたのだ。

国家魔法研究所とオケアノス学院の学生が戦う、と言うのに思いのほか関心が高いのか、各国の王、もしくは王族が態々足を運んでいるらしい。

この情報を聞いたのは、控室についてから、ヘリオス学院長が教えてくれた事だ。

言葉遣いとかは、発表だから気にする必要はない、と言いたかったようだが。

その事実の所為で、ネモア達の緊張はピークに達していた。

すぐ隣にある会場に移動するだけで、壁に頭をぶつけ、何も無いところで転び、表情が無い。

「……大丈夫か？」

思わず聞いてしまった俺に、無言で頷いたり、手を上げたりとかろっじて返答があった。

講堂の舞台袖に案内された俺たちは、未だに資料を手に持ったまままだ。

袋二つしかないし、今から盗られでもしたら、それこそ笑えないので、両腕で抱えている。

舞台上上がるのだから、と騎士の人があずかるつかと声を掛けてきたが、聞いた話だと舞台上上がった後はそのまま用意された席に座るらしい。

取りに戻るのも面倒なので、許可を貰って持ったまま上がることになった。

どうやら国家魔法研究所の方も、すぐに発表を始める為、資料を舞台に持って出るみたいなので、違和感はないようだし。

カルディナ王の説明を舞台袖で聞きながら、向かい側で同じように出番を待つ人影が目に入った。

ジーナだ。

睨みつけてくるその瞳に、こちらの様子も見えているのだろう。舞台裏は光が入りにくいが、舞台にあふれる照明が舞台袖に届いている。

ジーナのそばにいる研究者達は、あふれんばかりの資料を両手に抱えている。対してすっきりと治まった袋二つの俺達。

その奥に良く見知った顔を見つけて、思わず苦笑いを浮かべてしまった。

それを見ていたジーナは、勝ち誇ったような笑みを浮かべたが、気にすることではなかった。

体裁を考えるならば、表面上はこちらの側にいる方が良いのではないのだろうか。

研究者の影に隠れるように、こちらの様子を伺うエレイ先生の姿に小さく一つ溜息を吐いた。

舞台の照明が落とされて、一瞬、暗闇に包まれる。

スポットライトのように照らされた光が、ジーナを照らしている。堂々と進みでる彼女の姿を見ながら、自分たちの順番が来るのを

予測し、資料の入った袋を抱え直した。

「まずは、国家魔法研究所側から」

経緯と簡単な紹介が行われて、進行役の人の言葉で、俺たちは舞台を降りる。

舞台のすぐそばに用意されていた椅子に腰かけると、周りが幕でおおわれていた。

降りるまでに講堂を埋め尽くす人と、ほぼ中央に用意された豪華なスペースに騎士に囲まれた一角を見ていた。

集められた専門家である魔法使いたちは、一様にローブを身に纏っていた。

魔法使いや国家魔法士の正装は、ローブなのだろう。

ぼんやりとそんな事を考えながら、ジーナの発表が進められていく様子を見ていた。

前回城で話していた内容から始まったが、俺が説明した部分は、そっくりそのまま使われていた。

あまりのお粗末さに怒りを通り越して、呆れる事しかできないが。ネモアやファンは、前回の説明を聞いていただけに、眉間に皺が寄っている。

知らないミリィやウィズでさえ、自分たちが作った資料がそのまま使われているのに、良い顔をしていなかった。

「ここまでが、属性と自然エネルギーについてです」

そんなところまで、合わせなくても良いだろう。

思わず、心中で呟きながら、壇上にいたジーナがこちらに視線を寄せたのに気付いた。

ネモア達の表情を見たのだろう、その口元には嬉しそうな笑みが

浮かんでいる。

俺はジーナと視線を合わさないように、次に張られた資料へと目を向ける。

「ここからが、本題の魔法陣の属性と自然エネルギーの関連についてですが。まずは、こちらの資料をご覧ください」

舞台の端から端までを覆い尽くす資料に、俺は自然と眉を下げる。ここまでとは。

それは一瞬の事で、すぐに表情を戻した俺だったが、ジーナは気づいたようだ。

勝ち誇った笑みとでも言うのだろうか、子供だと明らかに馬鹿にしているように、感じたのは俺の気の所為であってほしい。

資料に描かれていたのは、ノシルフィ大陸だった。

先に紹介したメウテスロ、パリアカ、エカトルタ、キシヤルナの場所から広がるように色が付けられている。

「この資料は、我々の調査結果より、自然エネルギーの属性別に強さを色分けした物です。ノシルフィ大陸の先に説明した場所が一番濃く、そこより広がっている事がお分かり頂けますでしょう」

そして、オケアノス学院のあるアニユキスを指で示した。

資料上、そこはすべての色が交わっている場所になっている。

「何故、オケアノス学院がアニユキスに建てられたか不思議ではございませんか？」

ジーナの言葉に会場にかすかだがざわめく。

「そして、エルコティアソフィア中から魔法使いの卵が集まる程に有名になったのか」

アニユキス国の第14第カフォス王が創設者だからだろう。

そう、思った人が何人いただろうか。

カフォス王と、初代理事長であるヒュペリオンらの努力の賜物だ。そう、気づいた人が何人いただろうか。

流石、国家魔法研究所の研究者と言った所か。

こういった発表にはなれているのだろう。

それは、城に呼び出されたあの時に、初めて見たはずの資料で見事に発表して見せた姿からでもわかった。

ジーナの話は、人を引き込む。

ジーナ自身が自信満々に語るの、気持ち彼女に引きずられるのだ。

「それは、一重にこのアニユキスがすべての属性の自然エネルギーをバランス良く保っている場所だからです。魔法陣は魔力で発動します。魔法陣には属性があります。更に、自然エネルギーにも属性があり、それは魔法陣の属性と深く関連しています。自然エネルギーの属性が偏ると、覚えられる魔法も偏ります。アニユキスは魔法を使う環境が整っている、その理由は解らなかったが、先人はオケアノス学院を立てるときに肌で感じていたのでしょう」

一瞬静まる会場。

ジーナが壇上で深く頭を下げた。

惜しみない拍手が送られる。

俺としては、中途半端としか思えない発表内容。

でも、何故、この研究を始めたか、という説明にはなっている。

結果を先に述べて、後に研究の起こりを述べている。

見方によつては、資料自体は結論の部分しかなかったために、それが正しかったように思える。

ただそれは、研究結果だけ、を、資料に起こしていた、からだ。

何故、彼女らは気づかなかつたのだろう。

わざわざ、俺の言葉まで使って、ここからが、本題の　と、
言っておきながら。

研究の動機を説明しただけで、発表が完成したとでも思ったのか、
冷静な判断が出来ないほど追いつめられていたのか。

不間（後書き）

お久しぶりです、楽しみに待っていてくれた方々、本当にありがとうございます。

思いがけず、時間が取れたので制作欲求を満たすべく更新いたしました。

もうしばらく忙しい状況が続きそうですが、時間を見つけて書ける時間は取れそうなので、一日一話とはいきませんが、更新しようと思います。

よろしく願います。

発表

胸を張って壇上から降りていくジーナ。

その顔には笑みがあふれている。

エレイ先生がその一団の中にいたのは、そういう、ことだろう。

国家魔法研究所の資料が運ばれる。舞台上の片付けと確認作業が終わると、係の人の指示で壇上に上がる。

舞台袖では可哀そうな程、緊張して普段と違っていたネモア達だったが。

よほど、盗んだ資料で、それを悪びれもせず、堂々と自分たちの物だと主張している彼女らに腹を立てているのだろう。

文句を言いたい気持ちや何とか抑え、苛立ちを表に出さないように黙々と準備を進めている。

怒りのためか、緊張がどこかに飛んで行ったのは良かったが。若干、愛想が悪かった。

「じゃ、確認した順番で」

「資料の方は、私たちに任せなさい」

「ケースケさんは、発表に集中してくれて大丈夫です」

しっかりと頷くネモア達に、俺も一つ頷き返した。

小さく息を吸い込むと、それをゆっくりと吐き出す。

準備が整った事を係の人に伝えると、俺は観客へと向き直った。

視界の右端に映る集団に、一瞬だけ視線を向けた。

余裕の笑みを浮かべるジーナに、俺は耐え切れず笑みをこぼしていた。

多分、彼女の予想と違ったのだろう。

怒りや焦りと言った感情を表面に出さず、逆に笑顔を向ける俺に、ジーナの眉が少し寄せられた。

すぐに視線を外したから、その後の表情は解らないが。

「今回、発表を担当させていただきます。ケース・ク・グリサラーサです。よろしくお願いします。発表内容が重なる部分があるかもしれませんが、どうぞ、最後までお付き合いください」

深く腰を折ると、ネモアに視線で指示を出す。

一枚目の資料を張る、国家魔法研究所が提示した資料と同じものだ。

一瞬、観客がざわめくが、気にせず始めた俺の説明に、すぐに口が閉じられた。

しかし、その内容が先ほどと同じ物だと気づくと、更にざわめきが起こった。それに気づかぬふりをして、発表を進める。

前回城でやったように、重なる部分は省略しても問題ないとは思ったが。

自分たちで作った資料だ、発表は完成形でやりたい。

大方会場の反応は予想通りだったので、次々に説明を進めていく。

元々、どちらかの正当性を判断するために行われている発表だ。

しばらくはざわめいていた会場だったが、よどみなく進められていく発表に、段々と静かになっていく。

「ここまでは、属性と自然エネルギーについてです」

言葉遣いの違いはあるが、内容自体は全く同じ発表。

資料の張られる順番も同じとなれば、観客は逆に面白みを感じているようだった。

内容に差異は無いか、資料に差異は無いか。
まるで、間違い探しを楽しむように、発表に集中しているように感じた。

「ここからが、本題の魔法陣の属性と自然エネルギーの関連についてです」

一度、言葉を切った俺は、ネモア達を振り返る。
取り出されたのは今までの資料よりは大きいのが、国家魔法研究所の資料に比べるとずいぶん小さい物。

広げられたそれに、ノシルフィ大陸が描かれている　なんて、
ことはなく。

数値の表と、図が書かれた物がそこにあつた。

最初の比でないほど、会場のざわめきが大きくなる。
ここまで、まったく同じだった。

まったく同じ調査結果から、別の資料が出てきた。
ざわめく観客の端で、それ以上に驚いている集団。

国家魔法研究所の研究者達の顔色は悪く、エレイ先生の顔には驚愕が浮かび、ジーナの表情は真っ赤に染まっていた。

「これは、調査結果の魔法陣の属性と自然エネルギーの属性を表に
まとめたものです」

しばらく待つて話始めた俺の声に、会場は一瞬で静かになった。

表にまとめた数値は、各属性を調査場所の平均値を合計して魔法陣の数で割った数値を、同じくオケアノス学院内で調査した平均値で割った数値だ。

オケアノス学院を1として、何割程度増減しているのかの数値に

した。

こうすることで、調査場所毎にどの属性の自然エネルギーが強いかがわかりやすくなっている。

例えば、メウテスロであれば、オケアノス学院内と比べて火属性の魔法陣の効果が約2倍に増えている。逆に水属性の魔法陣の効果は5割近く減少している。

調査場所毎に増加の割合が一番多い属性を、主となる自然エネルギーとする。

それぞれ、1.5倍から2倍近く効果が上がっているのが、メウテスロの火属性、パリアカの水属性、エカトルタの風属性、キシヤルナの地属性だ。

魔法陣の属性を行項目とし、主となる自然エネルギーの属性を列項目とする。

火属性、水属性、風属性、地属性の順に上から下と左から右への一覧にまとめた。

丁度、同じ属性の重なり合う部分の数値が高くなっている。

「ここで注目していただきたいのが、交差する数値の低くなる属性についてです」

そういつて示したのが、魔法陣の火属性と自然エネルギーの水属性、魔法陣の水属性と自然エネルギーの火属性だ。

共に効果はオケアノス学院内の半分だ。

この事から、自然エネルギーの属性は魔法陣の属性に対して、正にも負にもなる事がわかる。

自然エネルギーの火属性で、魔法陣の風属性の効果が変わらないのに対して、魔法陣の地属性の効果が若干下がっている。

自然エネルギーの水属性では、魔法陣の風属性の効果が若干上が

り、地属性の効果は変わらない。

これにより、自然エネルギーの属性は、属性毎に正に作用する属性と負に作用する属性が違ふ事がわかる。

「今回の調査結果により、属性には相互に促進する状態と、相互に抑制し合う状態があると考えました。そして、資料の図がその関連を表したものです」

12時の部分を風とし、時計回りに、水、地、火、と円で囲んだ文字が描いてある。

上下の風と地を繋ぐように縦に線が伸び、火と水を繋ぐように横に線が伸びる。

風から火へと矢印が引かれ、反時計回りに、火から地へ、地から水へ、水から風へ、と矢印が回る。

十字に走る線が相剋を表し、外を繋ぐ矢印が相生を表す。

「授業で、地属性の魔法陣を発動した時に、土の壁に使われている土はどこから出てきたのかと疑問に思いました。土の無い室内と土のある外で同じ魔法陣を発動させた時に、その効果に少しの違いが感じられました。それが、今回の調査のきっかけです」

日常生活で火は水をかけて消える。火に風を送るとより激しく燃える。火が土に簡単に燃え移らない。

魔法とはいえ、やっている事は、火を起こし、水を出し、風を生み、土を作っているだけだ。

そこに違いはないはずだ。

「今回の相生と相剋のように、魔法は自然に起こっている現象と深く関連していると思います。そういった視線から、魔法について見て考えていきたいです。以上です」

俺の言葉で、壇上にいたネモア達と一緒に頭を下げる。しっかり、5秒数えた後に顔を上げる。

先ほどのジーナの発表の時のように、拍手が送られることはなかった。

ただ、誰も話さず、静かだった。

そういえば、どうやって結果を決めるか、聞いていなかった。

両者の発表が終わったのだから、これから何らかの方法で、判断が下されるのだろうが、このあとどうするのかを聞いていなかった。聞き漏らした、わけではない。単に、説明がなかったただけだ。

結果が出るまで、壇上にいるわけではないだろう。

そう思い、係の人を目で探していた時だった。

「……っ、あれは、我々の研究成果です！」

壇上の近くから、何度も聞きなれた台詞が発せられる。

誰が言ったかなんて、見なくてもわかった。

それまで、音を失ったかのように静かだった空間に、石を投げ込んだかのように小さなざわめきが波紋のように広がる。

その半分ほどは、何を言い出すんだ、と言う声が多かったが。

残りの半分ほどは、また、盗んだのか？ と、顔をしかめたくなくなるような声も聞こえた。

「何を言っているのよ！ 自分たちのだというのだったら、何故発表しなかったのよ！」

理不尽な言動に抑えきれなくなったのか、ミリィがジーナを睨みつけながら叫ぶ。

普段は可愛らしい表情だが、今は眉が吊り上げられ、細められた目からは鋭い瞳孔がのぞいている。

あまりに鋭く強い視線に、ジーナが一瞬たじろぐが、相手が子供だと思い直したのか、睨み返してきた。

「盗まれたからよ！ 発表する資料を盗んだ本人たちが何を言うかと思えば、大事な資料が無ければ、発表もできないでしょう」
「なっ！ あなたねえ、これは私たちが昨日……」
「確かに、子供の考える発表内容としては出来過ぎているな」

ミリイが反論をしようとした時、低く通る声が会場に響く。声のした方へ、会場内の人々の視線が集まる。俺も、その方向へと目を向けた。

中央の少し奥、騎士達に囲まれる集団の中。
エカトルタの謁見の間で、一度会ったつきりだが。

あの時も、今ぐらいの距離が離れていた。立ち位置的には逆であるうが。そばに控える見知った騎士の姿もあり、声を出したのはエカトルタのルカエル王で間違いがないだろう。

そのルカエル王の言葉で、ざわめきの中に、やはりそうなのか、と言う声が増えていく。

更にミリイが前に出ようとしていたが、俺はそれを手で制す。
その俺の行動に、ミリイは俺を睨みつけてきたが、小さく首を振ると、納得はしていないようだが押さえていた。

「ジーナだったな。お主は、先に発表した資料も、彼らが発表した資料もすべて国家魔法研究所から盗まれた物だというのだな」

「はい。間違いありません」

「そうか。となると、彼らは罰せられる事となるのか」

「当然の事と思います。国家の魔法研究所の資料を盗んだのですか

ら

ジーナは、ルカエル王の言葉に揚々と答える。

「ふむ」と頷いたルカエル王の姿に、明るい笑顔を浮かべるジーナ。

俺達の発表が始まってから、顔色の悪かった、国家魔法研究所の研究員たちの表情も鮮やかだった。

「我は、君たちを招待した記憶はないのだがな」

突然のルカエル王の言葉に、ジーナの顔には疑問が浮かんでいた。ジーナだけではない、壇上から見える限り、何人もがルカエル王の言葉の意味が解らずに、頭に疑問符を思い浮かべているように見えた。

終決

「国家魔法研究所の諸君、提出された調査報告書。我らも読ませてもらったぞ」

そついいながらルカエル王は、そばに控えていたルストに指示をだす。

頷いたルストは、懐から書類を取り出すと、ゆつくりと読み上げ始めた。

「ケース・ク・グリサラーサの国家魔法研究所資料盗難について
8月某日、研究所内にて資料の紛失が発生した」

当初、事故が事件かわからなかったため、極秘に捜査が行われた。対象の資料がごく一部のジーナをはじめ、国家魔法研究所の中核が携わっていた最重要機密であった事もこの一因である。

同年、11月、メウテスロで資料と酷似した調査を行う者がいる事がわかった。

その後、パリアカ、エカトルタ、キシヤルナと、資料の調査結果になぞったかのような行動がとられる。

さらに、ケース・ク・グリサラーサはこの時調査方法について、自らが考えた事と周知させようとしていた。

これは調査をしたという事実を作る目的があったと思われる。

俺が城で見せられた二枚に渡る資料には、それ以外の事も書かれていたが、ルストが話したのは『資料が盗まれた』と判断した理由の部分。

状況証拠だけだが、国家魔法研究所と言う地位と権力が、影響を与えていた。

相手は学生で子供。

さらには、転移の魔法陣による誤作動で呼び出された、どこの誰ともはつきりしない者。

後見を得てオケアノス学院に通ってはいるが、今回の資料について発表すれば、一気に地位と権力を手に入れる事が出来る。

もしくは、その後見を申し出たグリサラーサ家の指示である可能性もある。

そういう内容の事が、伺える文章もいくつか書かれていた。

既に内容を知っている俺とネモア、ファンは良いが。初めて調査報告書の内容を知ったミリイとウイズの表情は、酷く歪められていた。

俺達からすれば、作り話もいいところだ。

すべて後付で、良くそこまで想像を膨らませられた事だろうと。

「これに、間違いはないのだろうか？」

ルストが内容を読み終えた後、一呼吸おいてルカエル王が言葉を発する。

その視線はジーナに向けられていて、会場の他の者の視線もジーナに向けられていた。

発表の時と全く同じ数の視線のはずだったが、ジーナの肩が小さく震えていた。

「間違いありません」

それでも、堂々と答えるジーナは、ルカエル王をまっすぐに見返す。

ジーナ自身も、先ほどのルカエル王の一見、意味の解らない眩きに、不安を感じている様子だったが。

今までの態度を崩さないのは、彼女なりのプライドなのか。それとも、本当は、気づいていないのか。

国家魔法研究所の研究員達は、そんなジーナの後ろで小さくなっている。

再度、「ふむ」とわざとらしく頷いたルカエル王。

同じ言葉なのに、ジーナの顔色は優れない。

「では、君達はいつ我が国で調査を行ったのだ？」

調査場所にはエカトルタが入っている。

自国内なら調査のために魔法を使用しても問題ないかもしれないが、他国となればいくらか国家魔法研究所の権力があつたとしてもそう簡単な事ではない。

それこそ、黙って魔法を使った調査なんてしたら、国交問題に係わる可能性だつて否定できないだろう。

極秘の調査を極秘で行いました、など、この場で言えば駄目な事はジーナ自身もわかつたようだ。

言葉を返せないでいるジーナに、ルカエル王とその他の視線が刺さる。

堂々としていたジーナの顔から、焦りの色が滲みはじめていた。

「それは……」

「それは、前回のエカトルタ国との魔法論議の時でございます」

ジーナが何かを返そうか口を噛みしめていた時、別の場所から声が聞こえた。

講堂の壁側、ちょうどジーナ達の後ろに設けられた席に座っていた一人の男性が、立ち上がった。

そこには机が並べられていて、いくつか資料が乗せられている。

「突然の事、失礼いたしました。私、国家魔法研究所の運用を任されております、ヒュートス・アロディーンでございます」

深く腰を折って頭を下げるヒュートス。

その顔は、エリオット・アロディーンと瓜二つだった。

思わず目を見開いて二度見してしまった俺は、その後もヒュートスの顔をまじまじと見つめてしまった。

ヒュートスはそんな俺に気付くと、一瞬だけ強く睨みつけてきていた。

それが、俺に対してだったのか、すぐ近くにいたネモアに対してだったのかはわからないが。

本当に一瞬の事で、まばたきの間にはにこやかにほほ笑みをルカエル王に向ける姿があった。

「魔法論議とは、今年4月に行ったものか」

「そうでございます。その際、周辺の魔物の調査と、魔法陣の使用を許可いただきましたよね」

「確かにな。我はそれに許可を出した」

「その際に、極秘で進めていた今回の調査を行わせて頂きました」

笑顔で対応するヒュートスに、向けられるルカエル王の視線は熱を帯びていなかった。

冷やかか、という訳でもないが。

ルカエル王が言葉を返さず、ただ、ヒュートスをその瞳に映しているだけの時間がしばらく過ぎた。

人当たりの良い、と思われる笑顔を浮かべていたヒュートスの顔には、未だにその表情が保たれている。

しかし、無言でただ視線を交わしている状況からすると、感情を出さないルカエル王とヒュートスの笑顔は異様と言えるだろう。

どちらも一歩も引かない視線の交戦は、ルカエル王が口元に弧を描いた事で終わりを告げる。

緩い三日月形に歪められた口元とは対照的に、相変わらずな瞳との温度差が激しかった。

するりつとヒュートスから目を外すと、ルカエル王は、発表の時の堂々とした様子がすっかり鳴りを潜めてしまったジーナへと向ける。ジーナはルカエル王と目があつた瞬間に、遠目でもわかる程全身を震わせた。

こちらからはちょうど後ろを向いているために、その表情は解らないが、そばにいた他の研究員が思わず駆け寄るほど、よろしくないことは解った。

「ジーナ、彼が言うとおり砂漠で調査をしたのか」

「……はい」

「おかしなことを言う。君は、その調査方法を知っているのだろうか？ あの日、許可した場所は酷い砂嵐だったというのに」

「……それは……」

「砂嵐だからなんだというのですか、我が国の研究者達は優秀ですので」

返事を返せないでいるジーナの代わりに、ヒュートスが再度声を上げる。

会場内の空気は、今回の件で悪いのは誰か、既にわかっている。

ジーナ自身も、資料とエレイ先生の情報からだろう、調査方法を知っているがために、言葉を返せないでいた。

そんな雰囲気を読めないのか、敢えて読まないのか。

ヒュートスは声高に自分たちの正当性を主張するのだ。

ヒュートスが何か言葉を口にすればするほど、ルカエル王の瞳も表情も熱をなくしていく。

聞かれてもいないのに、自国の国家魔法研究所の素晴らしさと、自分の手腕をつらつらと語るヒュートスは夢中になっているのかそれに気付かない。

関係の無い自分の領地の話にまで及んだ頃に、隣に座っていた別の男がヒュートスの袖を叩いた。

それを鬱陶しそうに反応したヒュートスだったが、ルカエル王に見られている事に気付くと、慌てて笑顔を張り付ける。

「我が国の研究者達の優秀さをわかっていただけただけでしょうか？」

「ああ、その優秀な研究者を貴方が一人で取りまとめ、貴方の指示で動いているのだらう？」

「そうです、そうです！ 私は、それはもう頑張りましたよ」

「つまりは、貴方にすべての権利と責任があると」

「はい、そうです。いやあ、解っていただけで嬉しいですよ」

本当に嬉しそうに笑顔を浮かべながら返すヒュートスは、よほど鈍感なのか。

「ジーナ、並びに国家魔法研究所の研究者達よ。彼の言葉に嘘偽りはないな」

向けられた視線に、大きく震えたジーナと研究者達だったが、言われた言葉の意味を理解すると小さくざわめきだした。

すぐに返事をしないジーナ達に、ヒュートスの視線が刺さった。

言葉の違和感に気付けないヒュートスには、自分の名声しか頭に無いようだった。

「……間違いありません。全て、ヒュートス様の指示に従って行動しております」

そう、答えたのはジーナではなかった。

ジーナと共にいた研究員の中で、一番歳のいった初老と思われる男がその言葉を発する。

初老の男の言葉に、ルカエル王は頷くと更に続ける。

「では、今回のケース・ク・グリサラーサの研究資料を盗む指示を出したのも、このヒュートス・アロディーンで間違いないな」
「なっ！」

ルカエル王の言葉に、ヒュートスの表情が驚き見開かれる。

誰かの長いため息が吐かれた音がした。

それからあとは早かった。

ジーナ達研究者達が俺の資料を盗んだ事を認めた。

証拠がないと無謀にも反論するヒュートスに、国家魔法研究所は今回行われた調査場所と同様の調査をしたことはないという。

なおも、そんな言葉は証拠ではないというヒュートスに、ジーナが今回の調査方法とそのために必要な条件を述べる。

計測器などない世界、目視で確認するため砂漠の砂嵐の中では不可能だ。

となると、エカトルタでは壁に守られた街中で行う必要があるが、そんな許可は出されていない。

別の方法で行った、とヒュートスの言い訳に、ならば証拠として同じように調査をして見せる、とルカエル王が言い放つ。

ぐうの音もでないヒュートスには、ジーナの言葉通り、当然、罰せられる事となった。

ジーナ達、国家魔法研究所の研究者も、数年の無償労働が言い渡

され、研究費も大幅に削減される事が決まった。
エレイ先生も、国家魔法研究所からの証言で、今回の件に加担していた事が証明され、解雇される事が決まった。
余談だが、ヒュートスは今回の件を調べると言う名目で行われた家宅捜索で、巧妙に隠してあったはずの横領の証拠などが見つかってしまったらしい。

「すまなかつたな」

結果の報告をと、呼ばれた城で、カルディナ王が口を開いた。
頭こそ下げていないが、王族が軽々しく謝罪を述べるのか、と先入観を持っていた俺は少し驚いてしまった。

一緒に呼び出されていたミリイは、鋭い瞳で睨みつけている。
それを慌ててウイズとファンが止めていた。

ネモアは笑顔でカルディナ王を見つめていたが、その目は笑っていないかった。

俺はその様子を見て、小さく溜息を吐くと、カルディナ王に向き直る。

「本当は、最初から証拠は在ったのですよね？」

「ああ、エカトルタのルカエル王から証書が届いていたからな。今回の件は表に出たが、国家魔法研究所の盗難は何も今に始まったことではない」

「それも、アロディーン家が指示していたというのですか？」

「奴が国家魔法研究所を私利私欲に使っていたのは確かだ。しかし、確固たる証拠がない。現行犯でなければ、どうにもならなかった」

下手に地位のある貴族に突然、家宅捜索などできない。まずは、証拠を出せ、と言われる。

証拠を突きつけようにも、本人立会いの下に見つけないと意味がない。

でっち上げだと言われれば、それまでだからだそうだ。

もし、発表会で俺たちが失敗していたとしても、同じ結果になっていたらしい。

そのために、他国の王ルカエルを審査員とするために、各国の王を集めたのだという。

何とも迷惑な話だったが、お詫びにと、国に保管されている秘蔵書の閲覧許可を貰う事が出来た。

学習発表会は、国家魔法研究所との件で開始が一日遅れたが、その後特に大きな問題もなく予定通り三日で無事終了した。

外部の見学者の数は過去最高だったらしい。

開会式の中でヘリオス学院長が国家魔法研究所との事情を説明した時に多少のざわめきはあったが、混乱とまではいかなかった。

学習発表の方法については、資料を配ったり展示したりしているチームと、発表をするチームの割合が6対4ぐらいだった。

発表の見学は任意となっている。

開始時間とチームの発表内容が書かれたプログラムが配られており、チームによって見学する人の数が増減する。

当然、俺たちのチームも発表を行ったが、噂や事前の説明もあり、他のチームより明らかに見学する人の数が多かった。

初等学から高等学の約千五百人が余裕で入る会場だったが、立ち見する人ですし詰め状態となっていた。

それでも外部の見学者を優先して、オケアノス学院の学生に入場規制をしたというのだから、更に多かつたのだろう。

そして、カルディナ王から結果と報告のために城へ呼ばれたのが、昨日の事だ。

学習発表会が終わって一週間と少しが経っていた。

「ケース君」

帰る準備をしているところに、誰かに声を掛けられる。

またか。

浮かんでしまった気持ちと共に、小さく溜息が漏れていた。

振り返った先には、笑みを浮かべる一人の男子生徒。
初等学4年生の教室の中では、一人頭が飛びぬけていた。

「初めまして、俺はヴァンダン家の長男で」

こういった人が一日に二、三回訪れる。

大体が名のある貴族の御子息や御令嬢で、たまに商家の人、たまのたまに王族の人。

ほとんどが後見人の申し出で、養子縁組や婚姻の申し出なんてものもあった。

オケアノス学院内は、在校生以外の立ち入りには申請が必要になるので、こうやって学生が声を掛けてくる事が多い。

手紙や申請を出して使者を送ってくる場合も全くないというわけではないが。

「どうだ？ ヴァンダン家の力は、君にとって有益だと思わないか？」

「お気持ちは大変ありがたいのですが、申し訳ありませんがお断りさせていただきます」

「……グリサラーサ家がいるからか？」

厄介な人だったみたいだ。

声を掛けてくる人の中には、すんなりと引いてくれる人や諦めきれずに後日条件を話し合おうと言う人など様々だ。

その中で厄介なのが、脅迫をしてくる人だ。

後見人であるグリサラーサ家を引き合いに出したり、俺自身の命が危ないとほめかしたりと、こちらを追いこんでくる。

小さく溜息を吐くと、懐に入れていた一枚の紙を取り出す。

それを目の前の男子生徒が読めるように差し出すと、男子生徒は

それを見た後に渋い顔をした。

紙には卒業後に国家魔法士としての称号を受け取る事が書かれている。

国家魔法士は国に仕える魔法使いの事で、有事の時に国のために働かないといけないが、地位や権力は個人で貴族の中でも最高となる。

そのため、貴族が後見人となることは出来ず、たとえ後見人として育てていたとしても、国家魔法士となった時点でその功績は個人の物となる。

更に文面には、現在学生であるために保留としているだけで、学生の内に得た功績は国家魔法士となった際に移行する事とするなど。俺にとっては好条件すぎる事、後見人にとっては支援だけしてまったく功績が手に入らないという悪条件が書かれている。

「そういう事なら、仕方ないね」

苦い笑みを浮かべながら去っていく男子生徒に手を振りながら見送る。

教室から男子生徒が出て行くのを確認した後、ネモアがこちらに近づいてきた。

「すごい効果ですね」

「ああ、助かったよ」

先ほどの書類は昨日、カルディナ王に会った際に用意してもらったものだ。

学習発表会後の貴族達からのお誘いが激しくなってきたいて、先ほどの様に身の危険を感じ始めていた。

報告の後にカルディナ王、ダンガル、ネモアと俺で集まって対策を考えた結果、この形で落ち着いた。

国家魔法士になった場合は書類に書かれている通り、グリサラ―サ家に功績は与えられないこととなるのだが。

そもそもが、転移の魔法陣の誤作動による被害者であることは事実のため、この書類に対する違和感はない。

公に言いまわるつもりはないが、先ほどのような断り方をしていれば、いずれ噂として広がることだろう。

書類作成前の返答保留になっていた人達にも、同じような理由のためと、昨日の内に文書で返信している。

最終的に国家魔法士になるかどうかについては、オケアノス学院を卒業するまでに再度話し合う事になっている。

今が初等学4年なので、中等学と高等学を合わせて、七年間の猶予がある事となる。

寮の部屋に戻り不要な荷物を置くと、俺とネモアは早速出かける準備をする。

国で保管されている秘蔵書の中には一般には知られていない伝承や魔法の事が書かれた物がいくつも存在する。

それらは絶版になった物であったり、今は存在しない国や街の事であったりするため厳重に保管されているが、国家機密と言っわけではない。

手に入らない、貴重な、という意味合いから秘蔵書とされている。オケアノス学院の図書室にも、一般には出回っていない本が数多くあるのだが、折角許可を貰ったのだからと行くことにしたのだ。城に泊まる事も出来るようなので、ちょうど明日は休日という事もあり、ありがたく活用する。

途中でファンと合流すると、グリサラ―サ家の準備してくれた馬車で城へと向かう。

城門にいた騎士の人に説明と許可証を見せると、先に部屋へと案内された。不要な荷物を置くと、すぐに秘蔵書のある場所へと移動

する。

滅多に使われないのか、部屋の入口には鍵が掛けられていた。管理を任されているのは、白髪が混じるエルフのセルズさんだった。

長命種であるエルフの中でもかなりの高齢で、自分の目で歴史を見てきた生き証人と呼ばれているようだ。

わからないことがあればセルズさんに聞いてほしいと言われた。

秘蔵書のある部屋は、人の通る幅だけかろうじてあけられていて、床から天井まで本がびっしりと詰まった本棚が並べられていた。

古い紙の匂いが部屋全体を包み込んでいた。

定期的に掃除がされているのか、埃臭さはないが、窓は風通し用の小さい物があるだけで、室内は薄暗い。

天井付近に並べられた本は、梯子を上って取るようになっていた。

「転移の魔法陣についてのう」

自分で探そうかと考えていたが、想像以上の数に早々に諦めた。セルズさんに聞いてみると、迷いなく棚に歩いて行って、本を手に戻ってくる。

最初に渡されたのは転移の魔法陣の描き方というタイトルの本、次に渡されたのがタイトルの無い資料の束、最後に新聞記事のような物があった。

「こっちは、転移の魔法陣を研究しつつた男の資料じゃ。そっちは、最初の誤作動での報告書じゃな」

そういつて、資料の束、記事の順に指を示すセルズさん。

聞く話によるとセルズさんはこの部屋の本の内容に誰よりも詳しく

いらしい。

元々本を読むのが好きで、この仕事を請ける事にしたが、歳には勝てず今は読む量が減ってきているとか。

それでも、ここへ新たに追加される本には目を通し、立派に管理者としての仕事をこなしている。

今は後継者を探しているとか。

セルズさんから渡された本を持って読書スペースに用意された椅子とテーブルに向かう。

ネモアには過去の伝承を調べてもらっている。

言い伝えでもおとぎ話でも良いから、他の世界から来た人がいないかどうか。

オケアノス学院の図書室には転移の魔法陣について書かれた資料がほとんどなかった。

図書室と呼ばれているだけあって、本として出版されている物がメインとしてあったためだろう。

だが、セルズさんに渡された資料を受け取りながら、俺は不自然に跳ねる心音を押さえるのに必死だった。

そうでもないかと、変な叫び声を上げそうだった。

転移の魔法陣に限定した魔法陣の描き方の本や、研究資料など。

オケアノス学院の図書室では見つけられなかった物が、この場所にあった事で、高まる気持ち。

少しの手掛かりを見落とさないように。

俺はゆっくりと文章を読み進めていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7734t/>

啓輔の場合は

2011年10月10日00時06分発行